

岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第38冊

鹿田遺跡 16

— 第20次調査B・D地点 —

(岡山大学病院中央診療棟新営に伴う発掘調査)

2022年

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

序

岡山大学津島キャンパスには津島岡大遺跡、鹿田キャンパスには鹿田遺跡、三朝地区には福呂遺跡があります。その中でも鹿田遺跡は撰関家の荘園である鹿田庄に比定される遺跡で全国的に知られています。鹿田遺跡は1983年度に発掘調査が始まり、調査が始まって40年の節目を迎えようとしています。

本報告書は、本学大学病院中央診療棟新営にともなう鹿田遺跡第20次調査B・D地点の調査報告となります。本調査では既存建物の基礎によって壊された部分があったものの、弥生時代後期～古墳時代初頭に属する井戸・土坑・溝、中世前半の井戸・土坑・溝が検出され、さらにそれらの遺構に伴う土器等の遺物が出土しました。また、中世後半～江戸時代の屋敷地の存在が初めて確認されました。鹿田遺跡では弥生時代中期後葉以降、江戸時代まで、断続的に集落が営まれてきました。本調査はその具体的な移り変わりの一面を見せてくれたと言えます。本調査の成果と出土資料は、大学病院中央診療棟という多くの人が訪れる場所からの発見であり、病院を訪れる方々や鹿田キャンパス周辺の住民から多くの関心が寄せられることでしょう。本報告書を基にして研究成果の活用に向けて参りたいと存じます。

本報告書に作成に当たり、学内外の多くの方々から多大なご協力をいただきました。疫禍で移動や出勤もままならない中で、ご協力をいただきました皆様には心よりお礼申し上げます。疫禍の中で作成した調査報告書は、将来それ自体疫禍という苦難を顧みる歴史資料となりましょう。また、発掘調査時にご協力いただいた関係者の方々にもあらためてお礼申し上げます。

なお、埋蔵文化財調査研究センターは2022年4月に、岡山大学文明動態学研究所と統合します。今後は、同研究所の文化遺産マネジメント部門が本学の埋蔵文化財の調査・研究・活用を担って行くこととなります。埋蔵文化財調査研究センターが保管している図面・写真・出土遺物は文化遺産マネジメント部門が引き継ぎ、かつ未報告の調査についても同部門が整理し報告書を刊行してまいります。文明動態学研究所統合後も、本学の埋蔵文化財調査に引き続きご協力を賜りますようお願い申し上げます。

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

センター長	袖山禎之
副センター長	清家章

目 次

第1章 歴史的・地理的環境	1
第1節 遺跡の位置と周辺遺跡	1
第2節 鹿田遺跡	3
1. 構内座標の設定	3
2. 遺跡の概要	3
第2章 調査に至る経緯と概要	10
第1節 調査に至る経緯	10
1. 調査に至る経緯	10
2. 調査の体制	10
3. 調査経過	11
第2節 調査の概要	13
第3章 調査の記録	15
第1節 調査地点と層序	15
1. 調査地点	15
2. 層序	16
第2節 弥生時代～古墳時代初頭の遺構・遺物	19
1. 井戸	20
2. 土坑	20
3. 溝	21
4. 落ち	22
第3節 中世前半の遺構・遺物	24
1. 建物・ピット群	25
2. 井戸	29
3. 土坑	50
4. 溝	54
第4節 中世後半～近世の遺構・遺物	68
1. 井戸	69
2. 土坑	84
3. 溝	91
第5節 包含層ほかの出土遺物	100
第4章 自然科学的分析	103
1. 鹿田遺跡第20次調査出土木製品類の樹種同定	能城修一 103
2. 鹿田遺跡第20次調査出土種子同定	岩崎志保・沖陽子 112
3. 鹿田遺跡第20次調査出土漆製品分析	(株)吉田生物研究所 119
4. 鹿田遺跡第20次調査出土動物遺存体の分析	富岡直人 122
5. 放射性炭素年代測定	パレオ・ラボAMS年代測定グループ 124

図版

挿図目次

第1章～第3章		図36 井戸12	46
図1 周辺遺跡分布図	2	図37 井戸12出土遺物	47
図2 発掘調査地点と構内座標	4	図38 井戸13・出土遺物	49
図3 調査開始状況	11	図39 井戸14・出土遺物	50
図4 検出遺構全体図	13	図40 土坑2・出土遺物	51
図5 調査地点位置図	15	図41 土坑3	52
図6 土層断面の位置と調査区の呼称	16	図42 土坑3・出土遺物	53
図7 土層柱状図	17	図43 土坑4	54
図8 弥生～古墳時代の遺構全体図	19	図44 土坑5・出土遺物	54
図9 井戸1	20	図45 溝10・11断面	55
図10 土坑1	20	図46 溝10出土遺物	55
図11 溝1～3断面	21	図47 溝11出土遺物	56
図12 溝4～7断面	21	図48 溝12断面・出土遺物	57
図13 溝8断面	22	図49 溝13断面・出土遺物	58
図14 溝9断面	22	図50 溝14断面	58
図15 落ち断面・出土遺物	23	図51 溝15断面・出土遺物(1)	59
図16 古代末～中世前半の遺構全体図	24	図52 溝15出土遺物(2)	60
図17 ピット群検出状況	25	図53 溝16断面	60
図18 掘立柱建物1	26	図54 溝16出土遺物	61
図19 ピット出土遺物	27	図55 溝17断面	61
図20 井戸2・出土遺物	29	図56 溝18断面	62
図21 井戸3	29	図57 溝18遺物出土状況	63
図22 井戸3出土遺物	30	図58 溝18出土遺物(1)	64
図23 井戸4	30	図59 溝18出土遺物(2)	65
図24 井戸4出土遺物	31	図60 溝18出土遺物(3)	66
図25 井戸5・出土遺物(1)	32	図61 溝18出土遺物(4)	67
図26 井戸5出土遺物(2)	33	図62 溝19断面	67
図27 井戸6・出土遺物(1)	35	図63 溝20断面	67
図28 井戸6出土遺物(2)	36	図64 中世後半～近世出土遺構全体図	68
図29 井戸7・遺物出土状況	38	図65 井戸15	69
図30 井戸7井戸枠・出土遺物(1)	39	図66 井戸15出土遺物(1)	70
図31 井戸7出土遺物(2)	40	図67 井戸15出土遺物(2)	71
図32 井戸8・出土遺物	41	図68 井戸16	72
図33 井戸9・出土遺物	42	図69 井戸16出土遺物(1)	73
図34 井戸10・出土遺物	43	図70 井戸16出土遺物(2)	74
図35 井戸11・出土遺物	45	図71 井戸17	75

図72	井戸17出土遺物	76	図104	溝22断面	96
図73	井戸18	76	図105	溝22出土遺物	97
図74	井戸18出土遺物	77	図106	溝23断面・出土遺物	98
図75	井戸19	77	図107	溝24断面・出土遺物	99
図76	井戸20・出土遺物	78	図108	溝25断面・出土遺物	100
図77	井戸21	79	図109	包含層出土遺物	101
図78	井戸22・出土遺物(1)	79	第4章		
図79	井戸22出土遺物(2)	80	1		
図80	井戸23・出土遺物	81	図1	鹿田遺跡第20次調査出土木製品類の 顕微鏡写真(1)	106
図81	井戸24	82	図2	鹿田遺跡第20次調査出土木製品類の 顕微鏡写真(2)	107
図82	井戸24出土遺物	83	図3	鹿田遺跡第20次調査出土木製品類の 顕微鏡写真(3)	108
図83	井戸25・出土遺物	84	2		
図84	土坑6・出土遺物	84	図1	出土種子写真1～60	116
図85	土坑7・出土遺物	85	図2	出土種子写真61～120	117
図86	土坑8	85	図3	出土種子写真121～164	118
図87	土坑9	86	3		
図88	土坑10・出土遺物	86	図1	断面写真	119
図89	土坑11	87	図2	W50内面写真	121
図90	土坑12・出土遺物	87	図3	W50外面写真	121
図91	土坑13	88	図4	W50内面の塗膜断面	121
図92	土坑14	88	図5	W50外面の塗膜断面	121
図93	土坑15	89	4		
図94	土坑16	89	図1	No.1角製品	122
図95	土坑17	89	図2	No.7ヒト頭蓋骨破片(焼骨)	123
図96	土坑18	90	5		
図97	土坑19	90	図1	送付試料	124
図98	土坑20・出土遺物	90	図2	測定試料	124
図99	溝21断面	92	図3	暦年較正結果	125
図100	溝21出土遺物(1)	93			
図101	溝21出土遺物(2)	94			
図102	溝21出土遺物(3)	95			
図103	溝21出土遺物(4)	96			

表 目 次

第3章		2			
表1	掘立柱建物1構成柱穴一覧	26	表1	種子出土遺構と同定個体数	112
表2	遺物掲載ピット一覧	28	表2	用途別種子一覧	112
第4章		3			
1		3			
表1	鹿田遺跡第20次調査で 出土した木製品類の樹種	105	表1	調査資料	120
表2	鹿田遺跡第20次調査出土木製品類一覧	109	表2	断面観察結果表	120

4	
表1	鹿田遺跡第20次調査出土動物遺存体一覧 123
5	
表1	測定試料および処理料 124
表2	放射性炭素年代測定および暦年較正の結果 124

卷末	
表3	遺構一覧表 128
表4	磔同定一覧表 129
表5	オルソ図版掲載木器一覧

図版目次

カラー図版1	水滴 (T23)	図版25	井戸18
カラー図版2	水滴 (T23) 詳細	図版26	井戸20
図版1	弥生・古墳時代遺構全景	図版27	井戸21
図版2	中世～近世遺構全景	図版28	井戸22
図版3	井戸1・土坑1・溝1・3	図版29	井戸23
図版4	溝4～8・落ち	図版30	井戸24
図版5	井戸2・3・4	図版31	井戸25
図版6	井戸5	図版32	土坑6～9
図版7	井戸6	図版33	土坑10～13
図版8	井戸7	図版34	土坑14～17
図版9	井戸7 井戸枠出土状況	図版35	土坑18～20
図版10	井戸8	図版36	溝21
図版11	井戸9	図版37	溝22
図版12	井戸10	図版38	溝23・24
図版13	井戸11	図版39	溝25
図版14	井戸12	図版40	中世前半の溝出土遺物
図版15	井戸13	図版41	中世前半の土器(1)
図版16	井戸14	図版42	中世前半の土器(2)
図版17	土坑2・3	図版43	備前焼
図版18	土坑4・5	図版44	中世後半以降の土器・陶磁器
図版19	溝10・11	図版45	瓦(1)
図版20	溝12～16	図版46	瓦(2)・土製品・金属器
図版21	溝18・19	図版47	石器・磔
図版22	井戸15	図版48	石臼・礎石・鹿角
図版23	井戸16	図版49	木製品(1) 曲物・板材・漆椀ほか
図版24	井戸17	図版50	木製品(2) 井戸枠材

オルソ図版目次

オルソ図版1	井戸7南側板(1)	オルソ図版4	井戸7北側板
オルソ図版2	井戸7南側板(2)	オルソ図版5	井戸7西側板・棧木・支木
オルソ図版3	井戸7東側板		

例言

1. 本書は岡山大学埋蔵文化財調査研究センターが、岡山大学病院中央診療棟新営に伴って実施した鹿田遺跡第20次調査B地点・D地点の発掘調査報告書である。調査地点は岡山市北区鹿田町2丁目5番1号に所在する。発掘調査期間は2009年9月～2010年3月、および2011年2月～3月で、調査面積は2497㎡である。
2. 発掘調査および報告書作成は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会の指導のもとに行われた。委員・幹事諸氏に感謝申し上げます。
3. 本書作成にあたっては、以下の諸氏に教示・協力いただいた。記して感謝申し上げます。
石材同定：鈴木茂之（岡山大学学術研究院自然科学学域）、木材樹種同定：能城修一（明治大学黒曜石研究センター）、国産陶磁器の同定：乗岡実（丸亀市教育委員会）、軟質施釉陶器の同定：尾野善裕（京都国立博物館）、種子同定：沖陽子（岡山県立大学）、獣骨・鹿角の同定：富岡直人（岡山理科大学）、須恵器の胎土分析：白石純（岡山理科大学）、石器所見：扇崎由（岡山市教育委員会）
4. 発掘調査時の遺構実測・写真撮影は、池田晋・岩崎志保・野崎貴博・山口雄治・山本悦世が行った。
5. 報告書作成にあたっての主な担当は以下の通りである。
【遺物】<実測・観察表>有賀紅美・山本 <浄書>有賀・小野素子 <実測補助>西本尚美
<写真撮影>山口・野崎 <木製品sfm撮影>大橋紗恵子・木下洋子
【遺構】<下図作成>岩崎 <浄書>岩崎・小野
遺物の全体整理は岩崎、遺構の時期比定は岩崎・山本が担当した。
6. 本書の執筆分担は目次に示した。
7. 本書の編集は清家章副センター長の指導のもと、岩崎が担当した。
8. 発掘調査の概要は「岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2009」・「岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2010」に一部報告しているが、本書をもって正式なものとする。
9. 本書で使用した地形図は、建設省国土地理院発行の1/25000の地形図「岡山北部」と「岡山南部」(平成6年発行)を合成して使用したものである。
10. 本書に掲載した記録・出土遺物はすべて本センターで管理している。

凡例

1. 本書で用いる高度値は海拔標高であり、方位は国土座標V座標系（世界測地系）の座標北である。
2. 遺物番号は遺構別に付し、土製品にはT、石器はS、木製品はW、金属器はM、鹿角にはBを付して通し番号とする。
3. 遺物に関するデータは観察表にまとめている。観察表の表記基準は以下の通りである。
 - ①法量値は、数値の差が口径・底径で2mm以下、器高では1mm以下の場合は平均値を示すが、同数値以上の差がある場合は「×」「～」を付してその数値幅を示す。
 - ②残存状況については、計測部の残存度を示し、その割合が1/6以下の場合は「-」を記した。
 - ③色調は「新版標準土色帖」（富士工業株式会社）の表記に基づく。
4. 土層注記では鉄分をFe、マンガンをMnと表記した。
5. 巻末図版の遺物番号は、本文中の遺物番号に一致する。
6. オルソ図はデジタルカメラRICOH GR2およびMetashapeを使用したSfmにより作成した。

第1章 歴史的・地理的環境

第1節 遺跡の位置と周辺遺跡

鹿田遺跡は、岡山市街地の南部に位置する岡山大学鹿田地区（岡山市北区鹿田町2丁目5番1号）のほぼ全域にわたって広がる縄文時代～近世の複合遺跡である。同遺跡は、岡山県中央部を走る旭川が形成した岡山平野の南端部にあたる、河口近くの三角州上に立地している。現在の旭川は本遺跡の東方約1kmを児島湾に向けて南流しているが、かつては、岡山市街地の北東から南西にかけて幾筋かの河道となって網流していたと考えられる。現在、鹿田遺跡は海岸線から北に約7.5kmの距離を有すが、中世以前には、遺跡の南側近くに海の影響が及んでいたことが想定される。

本遺跡周辺における人間の活動痕跡は旧石器時代にまでさかのぼる。旭川を挟んで対岸の操山山塊ではナイフ形石器が採集されている⁽¹⁾。縄文時代では、本遺跡が所在する岡山平野北端を区切る半田山丘陵南端に位置する朝寝鼻貝塚で前期の生活痕跡が確認されている⁽²⁾。こうした人間活動が本格化するのには縄文時代後期前葉以降である。明確な遺構を伴う代表的な遺跡を挙げると、後期前葉～同中葉の堅穴住居や貯蔵穴群などが残る津島岡大遺跡⁽³⁾、後期中葉の貯蔵穴群などが調査された百間川沢田遺跡⁽⁴⁾がある。いずれも丘陵付近に限定された地域であるが、これらの集落は一時的な中断を挟みながらも弥生時代前期に向けて継続する。

弥生時代前期では津島岡大遺跡⁽⁵⁾、津島遺跡⁽⁶⁾、北方遺跡群⁽⁷⁾や百間川沢田遺跡・原尾島遺跡⁽⁸⁾において、水田遺構が調査されている。弥生早期とされる津島江道遺跡⁽⁹⁾の水田時期についての評価は確定していないが、水稻農耕の情報が岡山平野地域にかなり早い段階にもたらされ、受容されていたことは確実であろう⁽¹⁰⁾。

集落は、前期前半には津島遺跡に限定的に確認されるが、その後、南方遺跡⁽¹¹⁾、雄町遺跡⁽¹²⁾、百間川沢田遺跡、同原尾島遺跡⁽¹³⁾などが出現する。さらに遺跡数が増加していくのは中期以降である。中期～後期の沖積作用の進行に伴う微高地形成と連動するように新たな集落が展開する。その結果、旭川西岸域における遺跡の分布は、半田山と京山丘陵のもとに広がる北群と、臨海性の高い南群に二分される。前者では、前期末葉～中期前葉の代表的な集落である南方遺跡から、絵図遺跡⁽¹⁴⁾、上伊福九坪遺跡⁽¹⁵⁾・上伊福遺跡⁽¹⁶⁾へと集落域は拡大しつつ移動し、後期には津島遺跡や伊福定国前遺跡⁽¹⁷⁾などを含めた広い範囲に中核的集落が形成される。後者では、中期後葉に鹿田遺跡⁽¹⁸⁾、後期には天瀬遺跡⁽¹⁹⁾が加わった遺跡群のまとまりを認めることができる。旭川の東岸では雄町遺跡などのように前期から継続的に後期に至る遺跡が多い特徴が指摘されるが、その平野南端に位置する百間川遺跡群では、中期に同兼基・今谷遺跡⁽²⁰⁾、後期に同原尾島遺跡へと中心が移動する。

旭川下流域における墳墓は、弥生時代末～古墳時代前期には、平野部周囲の丘陵あるいは山塊上に弥生墳丘墓や前方後円（方）墳が数多く築かれ、複数の首長系列の存在を示唆する。鹿田遺跡が立地する旭川河口付近の古墳時代の首長系列としては、遺跡を見下ろす操山山塊の尾根上に位置する操山109号墳・網浜茶臼山古墳⁽²¹⁾の系列が該当する⁽²²⁾。造墓活動は古墳時代前期後半に最盛期を迎え、神宮寺山古墳⁽²³⁾、金蔵山古墳⁽²⁴⁾、湊茶臼山古墳⁽²⁵⁾という全長150m級の前方後円墳を生み出す。それらを最後に、前方後円墳の築造は急速に衰退するが、古墳時代後期に入ると周囲の山塊に中小の横穴式石室墳が群集して築かれるようになる。

古墳時代前期の集落は、百間川遺跡群や津島遺跡一帯に認められるように、弥生時代後期からの状況が、遺跡・遺構数の増加傾向を伴いつつ踏襲される。しかし、中期以降には規模の縮小傾向が一部の地域で指摘される。特に、旭川西岸では前述の南群に顕著に認められる。鹿田遺跡のように古墳時代前期まで安定した生活拠点であった集落の衰退には、古墳にみる首長系列の消長と軌を一にする状況をみてとれる。

古代国家完成期の政治状況を反映する国府や寺院関連遺跡については、旭川東岸における発掘調査成果から、



- | | | | |
|---------------------------|----------------------------|------------------------------|---------------------------|
| 1. 鹿田遺跡 (弥生～近世) | 31. 朝寝鼻貝塚 (縄文前～後期) | 60. 正野田古墳群 (古墳後期) | 88. 中井・南三反田遺跡・古墳群 (弥生～室町) |
| 2. 富原大池奥山遺跡 (不明) | 32. 津島岡大遺跡 (縄文中期～近世) | 61. 関西高校裏山古墳群 | 89. 雄町遺跡 (弥生～古墳) |
| 3. 荒神廃寺 (飛鳥～平安) | 33. 津島新野遺跡 (弥生) | 62. 若宮古墳 (古墳後期) | 90. 乙多見遺跡 (弥生) |
| 4. 上の段窯跡 (奈良) | 34. 津島江道遺跡 (縄文～近世) | 63. 乞食古墳 (古墳後期) | 91. 関遺跡 (弥生) |
| 5. 矢望城廃寺 (奈良) | 35. 北方長田遺跡 (弥生～近世) | 64. 貝塚 (不明) | 92. 赤田東遺跡・関遺跡 (弥生～室町) |
| 6. 佐良池古墳群 (古墳後期) | 36. 神宮寺山古墳 (古墳前期) | 65. 高柳城跡 (室町?) | 93. 幡多廃寺 (飛鳥～平安) |
| 7. 掃鉢池古墳群 (古墳後期) | 37. 津島遺跡 (弥生～近世) | 66. 岡山城跡 (室町～近世) | 94. 赤田西遺跡 (弥生～室町) |
| 8. 奥池古墳群 (古墳後期) | 38. 北方上沼遺跡他 (弥生～近世) | 67. 大供本町遺跡 (古代～近世) | 95. 原尾島遺跡 (弥生～室町) |
| 9. ダイミ山古墳 (古墳中期?) | 39. 北方下沼遺跡 (弥生～室町) | 68. 大供東浦遺跡 (弥生～室町?) | 96. 中島城跡 (室町) |
| 10. 蜂矢城 (室町) | 40. 北方横田遺跡 (弥生～室町) | 69. 鹿田本町遺跡 (板称) | 97. 百間川遺跡群 (縄文～近世) |
| 11. 坊主山遺跡 (古墳～室町) | 41. 北方中溝遺跡 (弥生～室町) | 70. 鹿田遺跡 (県立岡山病院) 遺跡 (平安～鎌倉) | 98. 百間川原尾島遺跡 (縄文中期末～近世) |
| 12. 中橋津古墳群 (古墳後期) | 42. 北方地藏遺跡 (弥生～近世) | 71. 散布地 (旧名: 大供遺跡) (弥生) | 99. 百間川沢田遺跡 (縄文中期～近世) |
| 13. 貝塚 (不明) | 43. 北方藪ノ内遺跡 (弥生～近世) | 72. 大供中道遺跡 (弥生～室町) | 100. 操山219号遺跡 (旧石器) |
| 14. 若宮八幡裏古墳 (古墳) | 44. 広瀬遺跡 (弥生) | 73. 散布地 (弥生他) | 101. 金蔵山古墳 (古墳中期) |
| 15. 東橋津貝塚 (不明) | 45. 南方遺跡他 (弥生～近世) | 74. 天瀬遺跡 (弥生～近世) | 102. 妙禪寺城跡 (戦国) |
| 16. 東橋津1号・2号墳 (古墳後期) | 46. 絵図遺跡 (弥生～平安) | 75. 新道遺跡 (奈良～近世) | 103. 操山古墳群 (古墳後期) |
| 17. 首部 (白山神社) 首塚 (鎌倉～室町?) | 47. 上伊福遺跡 (弥生・古墳) | 76. 二日市遺跡 (弥生～近世) | 104. 操山103号墳 (古墳前期) |
| 18. 鳥山城 (笹ヶ追城) 跡 (室町) | 48. 上伊福遺跡・伊福定国前遺跡 (弥生～近世) | 77. 唐人塚古墳 (古墳後期) | 105. 網浜廃寺 (飛鳥～平安) |
| 19. 七つ塚墳墓・古墳群 (弥生～古墳) | 49. 上伊福西遺跡・尾針神社南遺跡 (弥生～平安) | 78. 賞田廃寺 (飛鳥～室町) | 106. 網浜茶臼山古墳 (古墳前期) |
| 20. 都月坂墳墓・古墳群 (弥生～古墳) | 50. 上伊福西遺跡・尾針神社南遺跡 (弥生～平安) | 79. 賞田廃寺窯跡 (奈良) | 107. 操山109号墳 (古墳前期) |
| 21. 半田山城 (戦国) | 51. 津倉古墳 (古墳前期) | 80. 浄土寺 (奈良～室町) | 108. 操山202号遺跡 (平安～奈良) |
| 22. 津島福居遺跡 (古墳～室町) | 52. 妙林寺遺跡 (弥生) | 81. 湯迫古墳群 (古墳前期) | 109. 貝塚 (鎌倉～室町?) |
| 23. お塚 (様) 古墳 (古墳中期) | 53. 石井廃寺 (奈良?～室町) | 82. 備前国府関遺跡 | 110. 湊茶臼山古墳 (古墳前期) |
| 24. 津島東遺跡 (縄文～室町) | 54. 青陵古墳 (古墳前期) | 83. 北口遺跡 (弥生～室町) | 111. 湊荒神遺跡 (奈良～室町) |
| 25. 津島3丁目第1地点 (弥生・古墳) | 55. 十二本木塚古墳 | 84. 備前国庁跡 (奈良～平安) | 112. 大塚山経塚 (鎌倉～室町) |
| 26. 一本松古墳 (古墳中期) | 56. 富山城跡 (室町～江戸) | 85. 備前国府推定地 (南国長) 遺跡 (弥生～鎌倉) | |
| 27. 不動堂古墳 | 57. 矢坂山西古墳群 (古墳後期) | 86. 南古市場遺跡 (奈良～平安) | |
| 28. 宿古墳群 (古墳前期・後期) | 58. 矢坂山山頂遺跡 (弥生) | 87. ハガ (高島小) 遺跡 (奈良～室町) | |
| 29. 妙見山城跡 (戦国) | 59. 矢坂山東古墳群 (古墳後期) | | |
| 30. 釜田遺跡 (弥生他) | | | |

図1 周辺遺跡分布図 (縮尺1/50,000、1/3,750,000)

備前国府の関連官衙と考えられるハガ遺跡²⁶、創建期が飛鳥時代にさかのぼり平城宮式瓦も出土した賞田廃寺²⁷、総柱建物や道路あるいは「上三宅」や「市」が書かれた墨書土器・「官」の刻印須恵器などが出土した百間川米田遺跡²⁸などがあげられる。また、旭川河口付近では、平城宮式瓦が確認されている網浜廃寺²⁹が知られる。その対岸では8世紀の火葬遺構などが報告された新道遺跡³⁰、その西500mに8世紀後半の井戸から絵馬が出土した鹿田遺跡³¹が続く。こうした状況の背景にみえてくる旭川河口を介した人びとの交流が、本遺跡との関わりの深い鹿田庄成立の重要な要因となったと想定できる。

平安～鎌倉時代には、鹿田遺跡の周辺は、地割り方向を手がかりにした歴史地理の研究³²や発掘調査成果から摂関家殿下渡領の一つである鹿田庄の故地に比定されている。鹿田遺跡の詳細は後述するが、同地域を構成する新道遺跡では12世紀後半頃の井戸から「□□御庄久延弁」と書かれた木簡が出土し、また、南東600mの旭川河口岸に位置する二日市遺跡でも井戸などが確認されている³³。旭川東岸では、百間川遺跡群³⁴において該期の集落遺跡が知られている。こうした状況は、鎌倉時代における溝の大形化などにみる集落景観の変化を経て室町時代にも概ね継続する。

以後戦国時代にかけても鹿田遺跡では大形の溝に囲まれた屋敷地の存在が認められるが、該期の集落の状況がわかる遺跡は少ない。旭川東岸の中島遺跡³⁵、東岡山遺跡³⁶で、中世後半～近世の井戸、溝等が確認されている。

江戸時代には、岡山城や城下町の整備に伴う集落の再編、あるいはその後の海浜部での大規模な干拓によって、鹿田遺跡の状況は大きく変化する。海岸線は南へと後退し、鹿田遺跡周辺は一部を残して、屋敷地から耕地が広がる農村地帯へと変貌を遂げる。その後、1921（大正10）年に、岡山大学医学部および同附属病院の前身である岡山医学専門学校や岡山県立病院が建設された。これに伴って、遺跡は厚さ0.6～1mの造成土に覆われた。現在、都市開発の進行によって遺跡周辺は市街地となっている。

第2節 鹿田遺跡

1. 構内座標の設定

本センターでは、岡山大学鹿田地区構内において、周囲の市街地および構内建物の主軸に合わせた構内座標を設置して調査あるいは記録を行っている（図2）。この構内座標は2002年度までは日本測地系による国土座標第V座標系に基づいて、南北・東西軸座標値（ $X = -149,800\text{m}$ 、 $Y = -37,400\text{m}$ ）を原点とし、南北軸を $N - 15^\circ - E$ に振ったものを使用していた。その後、2002年4月1日に改正された測量法の施行に伴い、2003年度以降に刊行する報告書では世界測地系へ変更することとした³⁷。その結果、構内座標の原点は、 $X = -149,456.3718\text{m}$ 、 $Y = -37,646.7700\text{m}$ の数値にあたることとなった。

構内では座標原点から一辺5mの正方形の区割りを設定し、原点を通る東西ラインをAA、それより南へ5mごとの東西ラインをAB、AC…AZ、BA、BB…のごとく附番し、また原点を通る南北ラインを00、それより西へ5mごとの南北ラインを01、02、03…と附番する。これらのラインによって掲載される5m四方の区画名は、その東北コーナーで交わる2方向のライン名を組み合わせ、AA00区、AB01区…と呼称する。

2. 遺跡の概要

鹿田遺跡では、2021年度までに29次にわたる発掘調査が行われている。その成果から概略をまとめよう。

【地形環境】

本遺跡の立地環境は、前述したように旭川河口付近に形成された砂州状地形にあり、臨海性の高い集落遺跡と評価される。ただし、弥生時代後期～古墳時代初頭では、第9次・第11次調査³⁸、第14次調査³⁹において水田域



- | | | |
|---------------------|--------------------------|-------------------------|
| 1 第1次調査：外来診療棟 | 11 第11次調査：病棟 | 21 第21次調査：外来診療棟周辺他環境整備 |
| 2 第2次調査：NMR-CT室 | 12 第12次調査：エネルギーセンター | 22 第22次調査：地域医療総合支援センター |
| 3 第3次調査：医療短期大学部【校舎】 | 13 第13次調査：総合教育研究棟 | 23 第23次調査：JFホール |
| 4 第4次調査：医療短期大学部【配管】 | 14 第14次調査：病棟 | 24 第24次調査：医歯薬融合棟 |
| 5 第5次調査：管理棟 | 15 第15次調査：総合教育研究棟【外溝】 | 25 第25次調査：中央診療棟（Ⅱ期） |
| 6 第6次調査：アイソトープセンター | 16 第16次調査：立体駐車場エレベーター | 26 第26次調査：動物実験施設 |
| 7 第7次調査：基礎研究棟 | 17 第17次調査：基礎研究棟 | 27 第27次調査：自家発電設備 |
| 8 第8次調査：RI治療室 | 18 第18次調査：中央診療棟 | 28 第28次調査：アメニティモール |
| 9 第9次調査：病棟 | 19 第19次調査：渡り廊下 | 29 第29次調査：先端医療・臨床検査センター |
| 10 第10次調査：共同溝関連 | 20 第20次調査：中央診療棟関連（本調査地点） | |

※建物名称は調査次の呼称による。

※AA00は、日本測地系によるX=-149,800,000m、Y=-37,400,000mの交点を原点として設定したものである。
2003年から世界測地系による座標に移行したため、現在の表記となっている。

図2 発掘調査地点と構内座標（縮尺1/3,000）

が、居住域（第1次・第2次調査¹⁸）の南側に確認されたことから、海岸線までは一定の距離があったことが想定される。

ここで、本地点に集落が形成される弥生時代中期後葉以前の状況を整理しておこう。最も古い時期の遺物は、第1次調査で確認された縄文時代中期末～後期前葉の土器片である。続いて、弥生時代早期・前期の土器片があげられる¹⁸。数はそれぞれ1点程度できわめて少量である点は、該期の間活動が希薄であったことを示すとともに、各時期において多少なりとも陸地が存在していたことも示唆している。近年実施されたボーリング調査成果では、縄文海進によって縄文早期には海面下となった鹿田遺跡の環境は、同前期～後期中葉には砂堤状の陸域となり、その後（同後期末）の海域環境を経て、弥生前期頃に、再度陸域へと変化していたことが指摘されている⁴⁰。出土遺物の時期と概ね整合的である。鹿田遺跡が河口付近に形成された高まりのなかの一つに立地していたことを示す。

また地形面での大きな変化が弥生時代中期中頃～後期初めに起きたことがわかってきた。同時期に急速な土砂の堆積が微高地を形成したことが第23次調査⁴¹で確認され、また、中期中頃に河道が多量の土砂によって埋没している様子が第12次調査⁴²等で見つかっている。こうした沖積作用の進行が、本地点における微高地形成に大きな影響を与えたことは、その後の集落形成からも窺うことができる。

旭川西岸部のなかで、弥生時代中期後葉～古墳時代初頭における本地点周辺の地形は、北側に広がる遺跡分布域とは切り離され、海に突き出したような状態が復元される。

こうした状況は、本調査地点の北側に位置する調査地点の成果からも追認される。第16次調査⁴³、第21次調査⁴⁴、第23次調査では、最も安定した微高地である第1次調査地点の北側に、深い谷地形あるいは河道が長期にわたって存在したことを示す。同地域が日常的に利用されるのは平安時代後期～鎌倉時代初頭以降である。本遺跡から北500mの大供中道遺跡⁴⁵では、鎌倉時代（13世紀）の耕作地の報告があり、整合性をもつ結果を示す。一方、第1次調査地点の南側では、平安時代前半までは、第1次調査・第2次調査¹⁸・第5次調査⁴⁶地点付近はその南側と1m程度の比高差を有しているが、平安時代後期には屋敷地の広がりから、岡山大学鹿田キャンパスの敷地全体に安定した土地環境が成立したことが窺える。

【集落】

本遺跡において集落が営まれた時期は、弥生時代中期後葉・後期前葉～古墳時代初頭、飛鳥時代、奈良時代後期～平安時代前期、平安時代後期～江戸時代である。それぞれの間に多少の中断を挟むが、弥生時代中期後葉に集落が成立した後、江戸時代末まで連綿と集落が営まれていたといえそうである。

弥生時代中期後葉～古墳時代初頭：中期後葉における居住域は、現状では、第1次調査地点（現在の岡山大学病院外来診療棟）に限定される。東西50～60m・南北50m程度の比較的小規模な範囲に居住域が想定される。その範囲は後期には、南側の第5次調査地点、南東側の第2次・第18次調査地点⁴⁷、東側の第19次⁴⁸・第22次調査⁴⁹地点へと広がり、東西220m・南北100mの範囲を占める。また、その居住域の南側には水田域を形成する（第9次・第11次・第14次調査地点）。古墳時代初頭には、これらの居住域の中の東側（第22次調査地点）で遺構は姿を消し、西～南側の周縁部に新たな広がりを見せる。西側の第7次調査⁵⁰・第17次調査⁵¹地点では堅穴住居や井戸が形成される。一方、第12次・第13次⁵²・第18次～第20次調査⁵³各地点では土器溜まりの形成が顕著に認められる。

居住域における遺構の構成は、堅穴住居・掘立柱建物・井戸・土坑・土器棺・土器溜まりが中心的構造物をなす。集落は堅穴住居3～5棟前後で構成された可能性が高い。こうした遺構群には、後期後半以降に様々な変化が生じる。後期末～古墳時代初頭には、柱穴を有さない小規模な住居や井戸の嘉数が増加する。一方、土坑はその数を大幅に減じ、それに入れ替わるように土器溜まりが増加する。出土遺物の構成にも、甕の増加などに新たな動きが認められる。後期後葉以降における社会変化の一端を示す動きとして評価できそうである。また、土坑には製塩土器や炭化物を多量に含むもののほかに、第17次調査地点の炉や焼土集中域といった遺構の状況は、集

落内における手工業生産の実態を探る手がかりとなっている⁵⁴。

また、本遺跡では海との関連を窺わせる製塩土器や土錘・石錘が多く出土するほか、弥生後期には四国地域との関係を示す甕（第1次調査）、古墳時代には畿内地域・山陰地域・阿波地域などからの搬入土器の存在が目される（第12次・第24次調査）。このように本遺跡は旭川西岸における集落の中で、臨海の集落として一定の役割を持つ場所であったと考えられる。

古代（飛鳥時代）：古墳時代前期に集落は姿を消すが、7世紀前半期には、第1次・第2次調査地点に小規模な集落が出現する。その広がり、近年の調査から、同地点の西側（第23次調査地点）にも認められている。またキャンパスの南端、第12次調査地点で該期の溝が確認され、当時の土地利用について少ないながらもキャンパス全体に広がっていることが確認された。その後、一時期の中断を経た後、奈良時代後半～平安時代前半の居住域に引き継がれる。

古代（奈良時代後半～平安時代前半）：第1次・第2次・第5次調査地点を中心に、庇付き掘立柱建物を含む建物群や大形の削り抜き井戸枠を備えた井戸で構成される居住域が形成される。8世紀後半～10世紀初めの時期であるが、そうした遺構の分布範囲は限定的である。一方、同域から約250m南に位置する第4次調査⁵⁴地点では、東西方向に流路をとる河道や橋脚、杭による護岸が確認されている。径30cm前後の大形杭列は、堅固な基礎構造を持つ橋の存在を示しており、人通りの多い交通の要所に構築されていたと判断される。これは、鹿田遺跡が水陸交通の要所として機能していたことも端的に示す。

遺物では、木簡・墨書土器・硯などの文字関連資料のほか、黒色土器・丹塗り土器・緑釉の唾壺や石帯など特徴的な遺物が注目される。硯には蹄脚硯が含まれる。また第24次調査地点では、井戸から2枚の絵馬が重なって出土した。本時代に属する5基の井戸では、削り抜きの井戸枠が設置され、横櫛・刀子・曲物・斎串・モモがセット関係をもって出土する。以上の遺構や遺物の状況は、本遺跡が何らかの管理地的な役目を有し、都とのつながりの強い集落であったことを窺わせる。

中世前半（平安時代後半～鎌倉時代）：10世紀～11世紀初めには、集落は岡山大学鹿田キャンパスから姿を消す。一方、本キャンパスの西側に位置する鹿田遺跡（岡山県精神科医療センター）に、同時期の遺構が形成される⁵⁵。本敷地で集落が再開するのは11世紀代であり、両地点での集落の移動が予想される。新たに形成された11～12世紀の集落構造は以前とは全く異なる村落景観が出現する。現在に残る地割り方向（北が15°東に傾斜：以下「鹿田条里」と記す）に沿った溝で敷地全体が区切られており、1町を単位とした碁盤の目状の地割りに合わせて屋敷地が配されている。その地割りは12世紀後葉～13世紀初頭に再編され、新たに形成された大形の区画溝は屋敷地を閉鎖的な空間へと変化させる⁵⁶。

出土遺物では、輸入陶磁器・石鍋・砥石あるいは瓦器・東播系のすり鉢などが、遠隔地あるいは近隣地域から持ち込まれており、傀儡回しの到来を予想させる鎌倉時代末頃の猿形木製品（第7次調査）と合わせて、人や物資の盛んな流通を裏付ける遺物として注目される。こうした遺物から、海運・水運の結節点に形成された流通拠点としての役割を担う集落の一端が垣間見える。また、瓦や呪符木簡、銅鏡（第6次調査⁵⁶）からは、宗教施設の存在も浮かび上がる。その他に、第25次調査⁵³地点では烏帽子を被った状態で埋葬された墓などから、名主層の存在も想定される。

中世後半～近世（室町時代～江戸時代）：鎌倉時代後葉（13世紀末～14世紀前葉）には、次の時代に向けて屋敷地の再編が行われる。一部の溝は廃絶し、区画溝は主要な溝に集約される。その結果、溝で区画された屋敷地の面積は拡大する場合が多い。また集落の配置は、第1次調査地点を中心とする北側域から、第9次・第11次・第14次・第25次・第20次・第18次調査地点付近に東西方向に並ぶ傾向を強める。

第20次・第18次調査地点では、井戸・土坑が江戸時代後期まで確認されており、この地点では屋敷地が継続していることがうかがえる。本地点（第20次調査B地点）の井戸からは、京焼の猿形水滴（17世紀初）のほかにも、

肥前磁器の水滴（18世紀代）が確認されるなど、武家好み・文人好みの品が注目される。また、18次調査B地点では幕末期の船着き場があった可能性が高い。こうした遺構・遺物から大庄屋の存在を想定できよう。

この一角を除くと本遺跡の多くの調査地点では、中世後半以降耕作地へと変化する。遺構は畦畔や溝、その脇に並ぶ野壺である。

【藤原摂関家殿下渡り領「鹿田庄」の成立との関係】

本遺跡は「鹿田庄」比定地として評価されている。同庄の成立時期については不明な点もあるが、「興福寺縁起」によれば、弘仁4（817）年に興福寺南円堂で行われた法華会の料米72石を「鹿田地子」で充てたとされており⁸⁹、平安時代初期には興福寺と強い関係を有す藤原摂関家の影響が当地に及んでいたことは十分に予想される。同時期の建物や井戸は、第1次・第2次・第5次発掘調査地点で確認された建物群や大形井戸のみであったが、集落の西端に位置する第24次調査地点で、さらに同時期の井戸が確認された。前述したようにその内部から、2枚の絵馬が重なって出土している。これらの遺構・遺物は鹿田庄成立期前後における本遺跡の性格を考えるうえで重要な手がかりになろう。

本章は下記既報告の文章をもとに加筆および一部改変したものである。

高田貫太2007「第1章 歴史的・地理的環境」『鹿田遺跡5』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第23冊

註

- (1) 鎌木義昌 1962「第一編 原始時代」『岡山市史（古代編）』
- (2) 富岡直人 1998『朝寝鼻貝塚発掘調査概報』加計学園埋蔵文化財調査室発掘調査報告書2
- (3) a 山本悦世編 1992『津島岡大遺跡3』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第5冊
b 阿部芳郎編 1994『津島岡大遺跡4』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第7冊
c 岩崎志保編 2005『津島岡大遺跡16』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第21冊
- (4) a 二宮治夫編 1985『百間川沢田遺跡2 百間川長谷遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告59
b 平井 勝編 1993『百間川沢田遺跡3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告84
- (5) 山本悦世編 2004『津島岡大遺跡14』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第19冊
- (6) a 津島遺跡調査団 1969『昭和44年岡山県津島遺跡調査概報』
b 岡山県教育委員会 1970『岡山県津島遺跡調査概報』
c 島崎 東ほか 1999『津島遺跡1』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告137
d 平井 勝 2000『津島遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告151
e 島崎 東ほか 2003『津島遺跡4』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告173
f 岡本泰典ほか 2004『津島遺跡5』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告181
g 島崎 東ほか 2005『津島遺跡6』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告190
- (7) a 岡田 博編 1998『北方下沼遺跡 北方横田遺跡 北方中溝遺跡 北方地蔵遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告126
b 高田恭一郎編 2000『北方地蔵遺跡2 北方藪ノ内遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告149
- (8) a 宇垣匡雅編 1999『百間川原尾島遺跡3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告88
b 平井 勝編 1995『百間川原尾島遺跡4』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告97
- (9) a 高畑知功 1988「津島江道遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』18
b 草原孝典 1999「津島江道（岡北中）遺跡」『岡山市埋蔵文化財調査の概要 1997（平成9）年度』
- (10) a 柳瀬昭彦 1988「中溝遺跡」『日本における稲作農耕の起源と展開－資料集－』日本考古学協会静岡大会実行委員会
b 柳瀬昭彦 1988「南方釜田遺跡」『日本における稲作農耕の起源と展開－資料集－』日本考古学協会静岡大会実行委員会
- (11) a 岡山市遺跡調査団 1971『南方遺跡発掘調査概報』
b 岡山市遺跡調査団 1981『南方（国立病院）遺跡発掘調査概報』
c 柳瀬昭彦・岡本寛久 1981『南方遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告40
d 安川 満編 2016『南方遺跡』岡山市教育委員会
e 乗岡 実・高橋伸二 2021『南方（国体開発）発掘調査報告』岡山市教育委員会
- (12) a 高橋 護・正岡睦夫ほか 1972「雄町遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』1
b 草原孝典 2017『雄町遺跡』岡山市教育委員会
- (13) a 江見正巳ほか 1980『旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査Ⅰ』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告39
b 正岡睦夫編 1984『百間川原尾島遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告56

- c 柳瀬昭彦編 1996『百間川原尾島遺跡5』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告106
- d 高田恭一郎編 2008『百間川原尾島遺跡7 百間川二の荒手遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告215
- (14) 内藤善史編 1996『絵図遺跡 南方遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告110
- (15) a 中野雅美 1984「上伊福（ノートルダム清心女子大学構内）遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』14
- b 中野雅美・根木 修 1986「上伊福九坪遺跡」『岡山県史 考古資料』
- (16) a 扇崎 由 2015『上伊福（済生会）遺跡1』岡山市教育委員会
- b 扇崎 由 2016『上伊福（済生会）遺跡2』岡山市教育委員会
- c 扇崎 由 2017『上伊福（済生会）遺跡3』岡山市教育委員会
- d 扇崎 由 2018『上伊福（済生会）遺跡4』岡山市教育委員会
- e 扇崎 由 2021『上伊福（済生会）遺跡5』岡山市教育委員会
- (17) a 杉山一雄編 1998『伊福定国前遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告125
- b 金田善敬編 2005『伊福定国前遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告188
- c 亀山行雄編 2010『伊福定国前遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告224
- (18) 吉留秀敏・山本悦世編 1988『鹿田遺跡1』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第3冊
- (19) a 出宮徳尚 1986「天瀬遺跡」『岡山県史』考古資料
- b 杉山一雄ほか 2001『天瀬遺跡・岡山城外堀跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告154
- (20) 高畑知功 1982『百間川兼基遺跡1・百間川今谷遺跡1』岡山県埋蔵文化財調査報告51
- (21) 宇垣匡雅 1990「網浜茶白山古墳・操山109号墳の測量調査－吉備の前期古墳Ⅲ－」『古代吉備』第12集
- (22) 松木武彦 1993「岡山平野における弥生～古墳時代の地域集団」『鹿田遺跡3』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第6冊
- (23) 神谷正義・安川 満 2007『神宮寺山古墳 網浜茶白山古墳』
- (24) a 西谷真治・鎌木義昌 1959『金蔵山古墳』岡山市教育委員会
- b 宇垣匡雅 2008『金蔵山古墳』岡山市教育委員会
- c 安川 満・寒川史也 2019『金蔵山古墳』岡山市教育委員会
- (25) a 近藤義郎 1986「湊茶白山古墳」『岡山県史』考古資料編
- b 安川 満 2013『湊茶白山古墳』岡山市教育委員会
- (26) 草原孝典 2004『ハガ遺跡』岡山市教育委員会
- (27) 高橋伸二 2005『史跡賞田廃寺跡』岡山市教育委員会
- (28) 岡山県教育委員会 1982『百間川当麻遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告52
- (29) 中野雅美 1977「吉備における平城宮式瓦について」『川入・上東』岡山県埋蔵文化財報告16
- (30) 草原孝典 2002『新道遺跡』岡山市教育委員会
- (31) 南健太郎 2018『鹿田遺跡11』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第33冊
- (32) a 山本悦世 2007「中世の集落構造と推移－鹿田遺跡の場合－」『鹿田遺跡5』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第23冊
- b 山本悦世 2015「鹿田遺跡の土地区画と岡山平野の条里関連遺構」『条里制・古代都市研究』30 条里制・古代都市研究会
- (33) 出宮徳尚 1985「岡山県二日市遺跡」『日本考古学年報』3
- (34) 柳瀬昭彦編 1996『百間川原尾島遺跡5』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告106 ほか
- (35) 河田健司・岡本芳明 2011『中島遺跡』岡山市教育委員会
- (36) 草原孝典 2007『東岡山遺跡』岡山市教育委員会
- (37) 光本 順 2004「日本測地系から世界測地系への移行に伴う構内座標の変更について」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2002』
- (38) 山本悦世 2017『鹿田遺跡10』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第32冊
- (39) 岩崎志保 2014『鹿田遺跡8』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第29冊
- (40) 山本悦世ほか 2019「岡山平野における環境復元へのアプローチ」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2017』
- (41) 南健太郎 2016『鹿田遺跡9』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第31冊
- (42) 野崎貴博 2021『鹿田遺跡15』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第37冊
- (43) 高田貫太 2006「鹿田遺跡第16次調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2004』
- (44) 光本 順 2012「鹿田遺跡第21次調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2010』
- (45) 河田健司 2000『大供中道遺跡発掘調査概報』岡山市教育委員会
- (46) 松木武彦・山本悦世 1993『鹿田遺跡3』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第6冊
- (47) a 山本悦世 2008「鹿田遺跡第18次調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2007』
- b 光本 順 2013「鹿田遺跡第18次調査B/C地点」『鹿田遺跡7』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第28冊
- (48) 野崎貴博 2010「鹿田遺跡第19次調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2008』
- (49) 岩崎志保 2012「鹿田遺跡第22次調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2011』
- (50) 山本悦世 2007『鹿田遺跡5』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第23冊
- (51) 山本悦世 2020『鹿田遺跡14』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第36冊
- (52) 光本 順 2010『鹿田遺跡6』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第26冊

- 53 a 山本悦世 2011「鹿田遺跡第20次発掘調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2009』
- b 山口雄治 2018『鹿田遺跡12』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第34冊
- 54 山本悦世 1990『鹿田遺跡2』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第4冊
- 55 河合 忍 2007「総括」『鹿田遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告210
- 56 松木武彦・山本悦世 1997『鹿田遺跡4』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第11冊
- 57 鈴木景二 2002「備前国鹿田庄・荒野史料と絵図」『新道遺跡』岡山市教育委員会

第2章 調査に至る経緯と概要

第1節 調査に至る経緯

1. 調査に至る経緯

2007年度に岡山大学病院中央診療棟の改築工事が計画され、発掘調査の予定敷地内にある病棟や厨房棟を撤去することとなった。病院機能を継続したまま同建物類の解体並びに建設工事を進めるため、調査対象範囲を2つの工期に分けて発掘調査を実施することとした。I期工事分は2007年度（2007年9月～2008年3月）に第18次調査として実施した。建設予定地の北東部872㎡が対象である。2009年度にはII期工事分の調査が開始された。既存建物の解体や諸施設の付け替えを経て、第20次調査として、A地点（632㎡）、B地点（2,482㎡）、2010年度にはC地点（276㎡）、D地点（15㎡）と順次発掘調査を実施した。さらに2013年度には前述の第20次調査A地点の南北において、2,545㎡を対象に第25次調査を実施した。2014年8月までに、中央診療棟関連の発掘調査はすべて終了した。総面積は6,822㎡を測る。

これらの調査地点については、複数地点をまとめ、3冊にわけて報告することとした。まずII期工事の西側3,177㎡を対象とした第20次調査A地点および第25次調査地点の成果を『鹿田遺跡12』として2017年度に刊行した。次いで、II期工事東側の2,497㎡にあたる第20次調査B地点・D地点の成果を、本書において報告する。最後に刊行するI期工事分1,148㎡を対象とした第18次調査A地点・第20次調査C地点については、整理作業が進行中である。

本書で報告する第20次調査B地点は表土掘削を2009年9月から開始し、調査員4名が担当して2010年3月までの予定とした。同D地点は表土掘削を2011年2月に開始し、調査員1名が担当して同年3月までの調査予定とした。

2. 調査の体制

調査主体	岡山大学 学長	千葉 喬三	【第20次調査B地点】
調査担当	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター	調査研究員：教授 山本 悦世（調査主任）	
	センター長 北尾 善信	助教 岩崎 志保	
	副センター長 新納 泉	助教 池田 晋	
		助教 野崎 貴博	
		【第20次調査D地点】	
		調査研究員：助教 岩崎 志保（調査主任）	

運営委員会

<委員>第20次調査B地点・D地点調査年度（2009・2010年度）

北尾 善信	財務・施設担当理事（センター長）	沖 陽子	大学院環境学研究科教授
新納 泉	大学院社会文化科学研究科教授 （副センター長）		（調査研究専門委員）
久野 修義	大学院社会文化科学研究科教授	山本 悦世	埋蔵文化財調査研究センター教授 （調査研究室長）
柴田 次夫	大学院自然科学研究科教授	山下 隆幸	施設企画部長
大塚 愛二	大学院医歯薬学総合研究科教授		

報告書刊行年度（2021年度）

袖山 禎之 財務・施設担当理事（センター長）
 清家 章 学術研究院社会文化科学学域（文）教授
 （副センター長）
 松本 直子 文明動態学研究所教授
 今津 勝紀 文明動態学研究所教授
 大橋 俊孝 学術研究院医歯薬学学域（医）教授

加藤 鎌司 学術研究院環境生命科学学域（農）教授
 野坂 俊夫 学術研究院自然科学学域（理）准教授
 岩崎 志保 埋蔵文化財調査研究センター准教授
 （調査研究室長）
 岩永 仁 施設企画部長

3. 調査経過

【第20次調査B地点】

表土掘削 2009年6月より調査対象地の既存建物の解体工事が進められ、同年9月7日から調査員1名が立会い、表土掘削を開始した。本地点では北半に旧厨房棟、南半に旧病棟建物があったことから、大形基礎の存在が広く予想され、その大形基礎の撤去を避けた結果、調査区南半には43塊のコンクリート基礎が並ぶこととなった（図

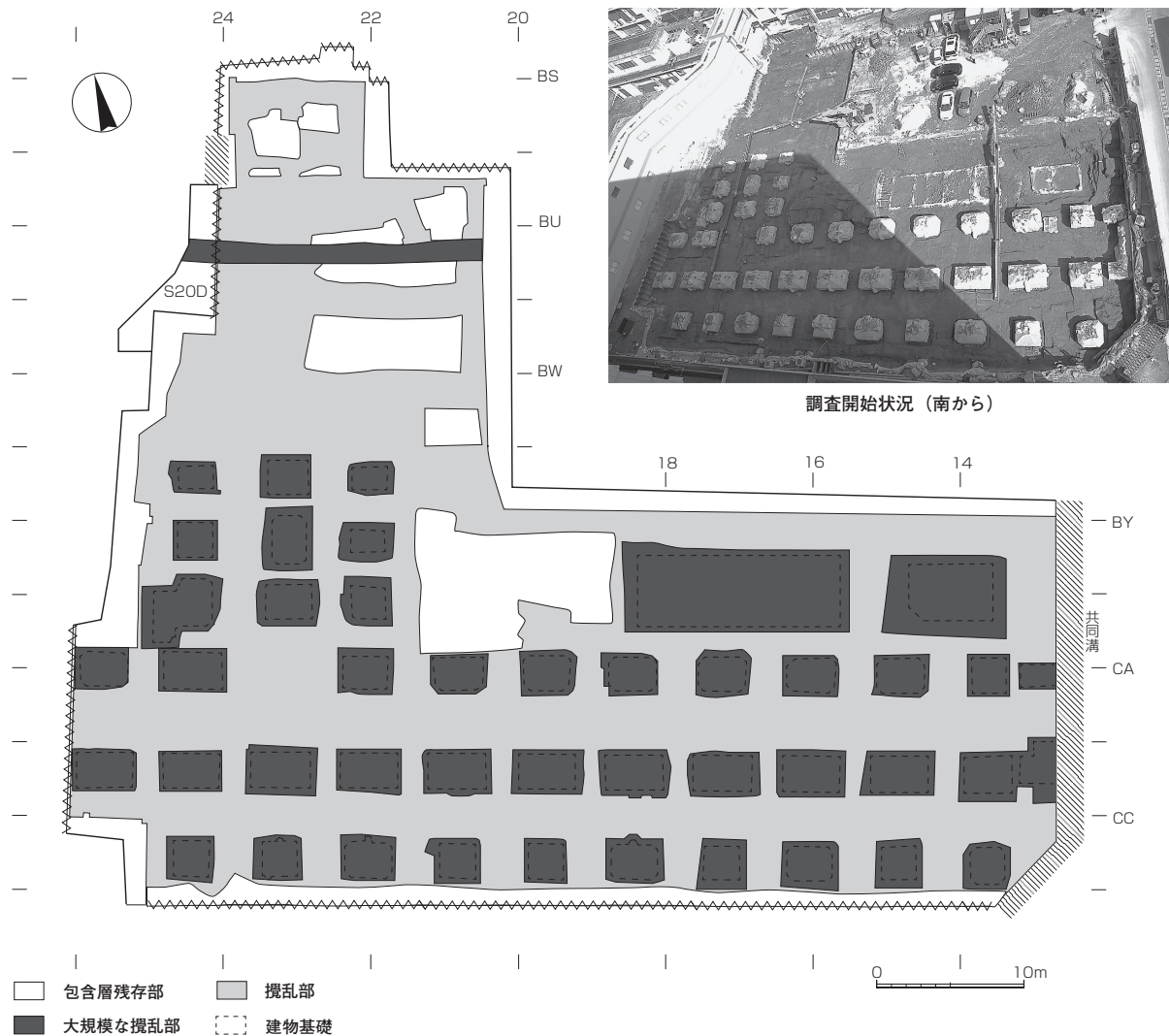


図3 調査開始状況（縮尺1/500）

3)。その破壊の度合いは予想を遥かに超えるものであり、基礎の規模の大きさ、密度の高さ、それに加え、基礎部のみならず建物敷地全体を基礎下面まで掘削するという建設工事時点での工法の違いから、調査区南半部の破壊は広範囲かつ調査終了面以下まで及ぶものであることが判明した。さらに東側では、大形の浄化槽設置に伴う大規模な破壊も加わり、こうした破壊が及ぶ状況下では、包含層は全く残っておらず、破壊部下面で確認された数基の井戸と大溝を残して、全ての遺構は消失していた。

包含層の残存度が高いのは、旧建物敷地外にあたる、調査区南端の幅約1mの範囲、および中央部や北側に島状に残る高まり部のみであった。またBXライン以北では、基礎部はすべて撤去することができ、破壊深度も多少浅いことから、弥生時代対応の土層は残されることとなった。

表土掘削は10月13日に終了した。

発掘調査 発掘調査は2009年10月15日から開始した。調査にあたっては、対象地域を形状に合わせて南北に大きく分け、さらに南部分を東西に二分し、北区・東区・西区の3区に分けて、遺物の取り上げや記録に対応した。

まず広範囲に広がる攪乱部分の清掃を行った。その多くは基盤層におよぶ破壊であったため、作業過程において多くの井戸・溝を検出することとなった。発掘調査開始状況の写真撮影後、近世土層から順次各時期の調査に入るのが通常の手順であったが、攪乱底部で検出された遺構の保存が懸念されたうえ、遺構の時期確定が困難な状態であったため、時期の異なる遺構の調査も同時に進めざるを得ないと判断し、作業を進めた。

包含層が比較的厚く残る部分では、戦国期～近世に埋没した溝・土坑等の調査を終え、鎌倉時代、平安時代後期の土層へと掘り進めた。遺構の密集地での時期の判断は難しく、複数の時期の遺構を同一面で確認するという状況となった。残存度の高い北区を中心に柱穴群・井戸・溝を、攪乱が顕著な東区・西区では掘削深度の深い井戸や大形の溝を順次調査し、平安時代後期～近世の全景を撮影した。

弥生時代後期～古墳時代初頭段階の面まで掘り進むと、高低差のあった調査区はほぼ平坦となり、特に北半部では、破壊の影響は姿を消した。調査区北半の北東部で地形の落ち部分に遺物が集中して出土することを確認したほか、溝を検出した。南半部でも井戸・溝などが検出された。それらの調査を2月19日に終え、同22日に補足の記録を採取し、発掘調査を終了した。

その後、調査区内に残る基礎43か所の撤去に伴う調査を3月1日から開始し、調査員1名が対応した。基礎の下面を調査する作業の中で、溝・土坑の重複関係等を確認し、3月8日に作業を終了した。なお工事の都合から、調査区北西部に狭小な面積の未調査部分（後述D地点）が残ることとなり次年度に対応することとなった。

平安時代後半～戦国時代の調査が終了した段階で、1月23日に現地説明会を実施し、160名の見学者を得た。

【第20次調査D地点】

前述のように2009年度に実施したB地点の調査範囲のうち工事の都合上未調査であった北西部15㎡について、2011年2月18日に造成土の除去を実施した。

発掘調査は同2月21日から開始し、調査員1名が対応した。包含層の残りは良く、近世面で土坑・溝を確認した後、中世面で土坑・溝・ピットを検出した。次いで弥生時代後期～古墳時代初頭頃の面まで掘り下げ、3月2日にすべての調査を終了した。

第2節 調査の概要

本調査においては、弥生時代後期～古墳時代初頭、中世前半、中世後半～近世の遺構が確認された（図4）。

弥生時代後期～古墳時代初頭：<7>～<10>層が本時期に対応する。井戸・土坑・溝を検出した。調査区中央部では井戸1基、土坑1基と、北東～南西に走行する溝、並びに調査区南端を北西～南東へ走行する溝群を確認した。これらの溝群は、南側の第9次・11次・14次調査地点で確認されている弥生時代後期～古墳時代初頭の耕作域に関連する溝群と考えられる。また北区北東部では北東へ向けて下がる地形の落ちが確認され、埋没後その肩部には溝（溝9）が検出された。この落ちは、北東側の第18次調査地点中央に延びる微高地の縁辺を巡るものにあたる。落ちには遺物が比較的多く出土し、斜面堆積の遺物として報告するが、本調査地点全体としては遺構・遺物とも希薄な状況と言える。

中世前半：井戸13基、土坑4基、溝11条を検出した。時期毎に概観する。

11世紀前半～12世紀前半：11世紀代～12世紀初頭に井戸2・3、11世紀後葉～前葉に井戸4・5、12世紀初頭～

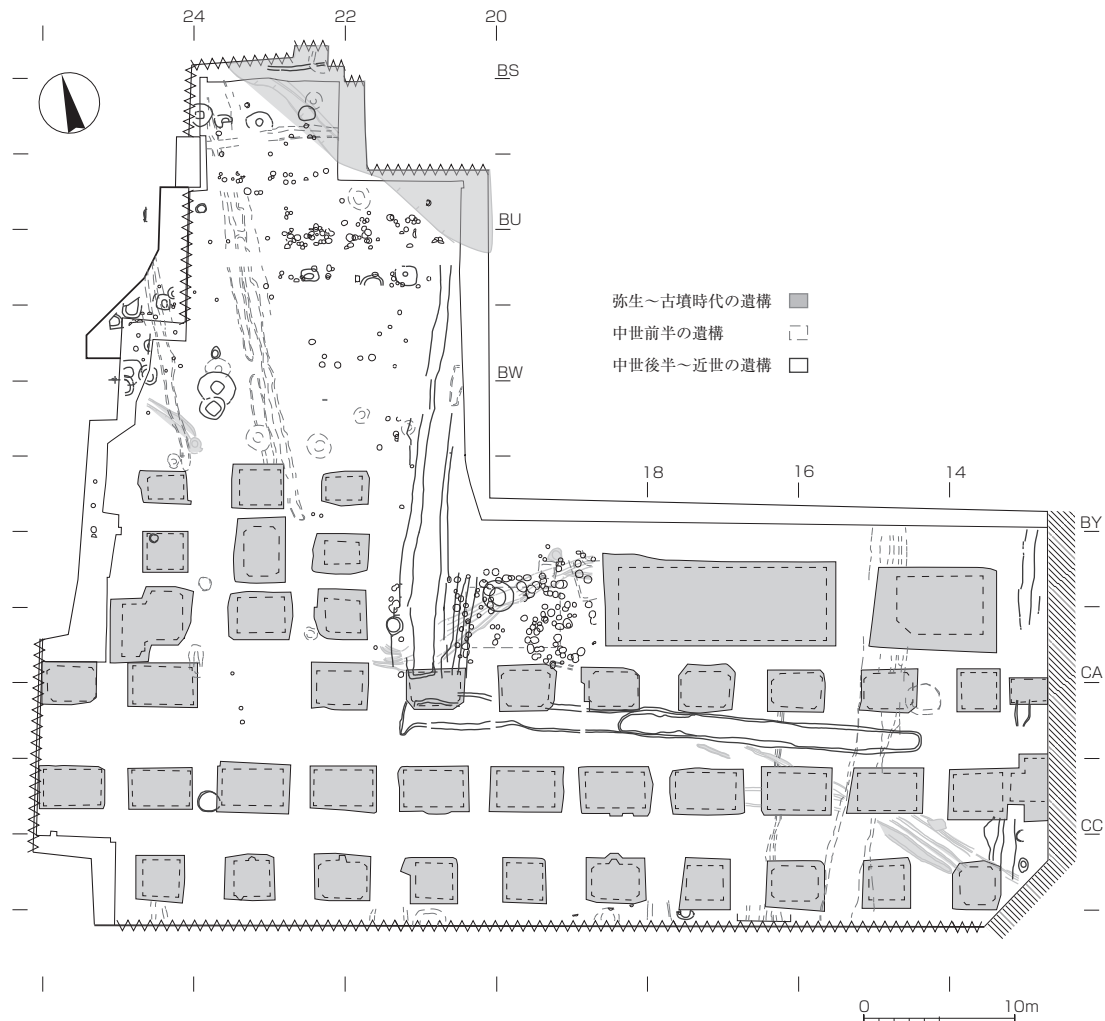


図4 検出遺構全体図（縮尺1/500）

前葉に井戸6・7が認められる。これらの井戸に対応する時期の溝は、溝10～13である。溝10・11は鹿田条里に沿わない、正方位の南北方向に主軸をとる溝で12世紀前半に埋没している。この溝の掘削時期は確定できないものの周辺の遺構の状況から11世紀中頃あたりに求められる。

12世紀中葉～後葉：12世紀中葉～後葉の井戸8・9が認められる。対応する溝は溝14・14aで12世紀後半～末に埋まっている。溝14・14aは鹿田条里に沿う南北方向の溝で区画溝である。

13世紀初頭～中葉：13世紀初頭～前葉の井戸10、同前葉～中葉の井戸11が認められ、対応する溝は溝15・16である。溝15は13世紀前半、溝16は13世紀前葉に埋まる。溝15は12世紀の溝10・11に並行する正方位の南北方向の溝である。溝16は東西方向の溝で、溝15とセットで屋敷地を区画するものと考えられる。

13世紀後半～後葉：13世紀後半の井戸12、同後半～後葉の井戸13、同後葉の井戸14の3基が認められる。対応する溝は溝17・18・20である。いずれも埋没時期は13世紀末～14世紀初頭に求められる。このうち溝18は南北方向の大型溝であり、主要な区画溝の一つである。

鹿田遺跡では10世紀～11世紀初めに集落が認められない空白期が指摘される。本調査地点では、その空白期の後、11世紀前半～14世紀初頭まで各期に2～3基の井戸の存在が確認されている。掘建柱建物1棟を含む、多数のピット群も検出されており、少しずつ地点を変えながら2ないし3つの屋敷が営まれていたことが窺える。

中世後半～近世：井戸11基、土坑15基、溝5条を検出した。

中世後半～近世においても、溝で区画された屋敷地が、調査区内において確認されるが、特に調査区北部に偏在する傾向にある。15世紀後半～16世紀の井戸3基について、17世紀前葉～18世紀代の井戸3基が認められ、もっとも新しい時期の井戸としては19世紀初めの井戸1基が確認されている。周辺の既調査地点では、17世紀中頃以降は屋敷地は継続せず、耕作地として利用されるようになるが、本地点では異なる様相が見られ、15世紀後半～19世紀初頭まで、屋敷地が継続する。これら屋敷地を区画する溝（溝21～24）は、鹿田条里に沿い、1辺40mほどの方形を呈している。溝はいずれも14世紀中頃に掘削された可能性があり、埋没時期は19世紀初頭に求められる。

その溝が埋まった後、桶の据えられた野壺1基が確認される。このことから19世紀半ば以降は本調査地点一帯も耕作地へと変わったことがうかがえる。

第3章 調査の記録

第1節 調査地点と層序

1. 調査地点

本調査地点は岡山大学鹿田地区の中央部に位置しており、鹿田地区構内座標ではBR～BX・20～25およびBX～CD・13～26区に位置する（図5）。発掘調査以前には、旧病棟と関連建物が存在していた。

本調査地点の周囲には、北側に岡大病院中央診療棟、南側に病棟が建つ。後者の建設時に第9・11・14次調査（調査年度（以下同）：1998年度～2003年度）を実施している。さらに本地点の北東部に隣接して、第18次調査（2008年度）および第20次調査C地点（2009年度）、さらに西側では第20次調査A地点（2009年度）および第25次調査（2013年度）を実施している。

以上のように本調査地点は、東・南・西側の三方を既調査地点に囲まれており、このうち南・西側の発掘調査成果は既に刊行されている。それらの成果も併せて検討すべき位置を占めており、本報告後に残る第18次調査地点も含めると、鹿田遺跡の中央部の広範囲について、状況をより明確にすることが期待できる。

参考文献 第9・11次調査：山本悦世編2017『鹿田遺跡10』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第32冊
 第14次調査：岩崎志保編2014『鹿田遺跡8』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第29冊
 第20・25次調査：山口雄治編2018『鹿田遺跡12』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第34冊

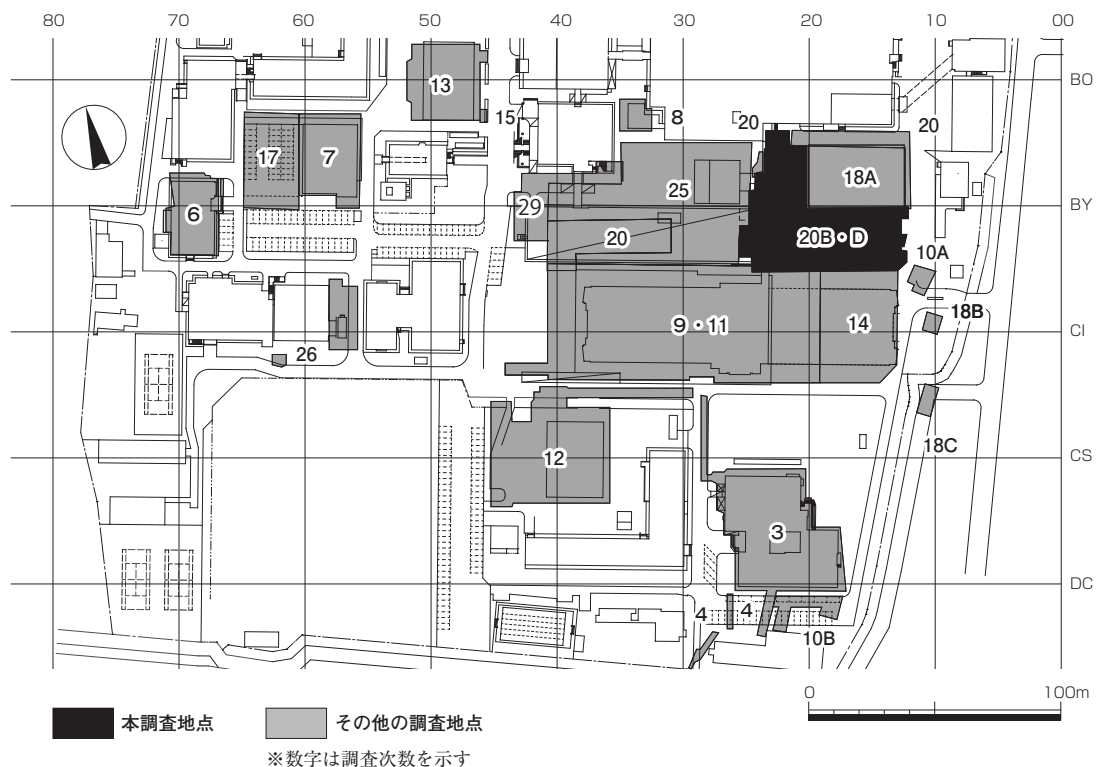


図5 調査地点位置図（縮尺1/3000）

2. 層序

本調査地点の南側大部分は旧病棟の基礎工事により大きく破壊を受けており、さらなる破壊を最小限に留めるために大形のコンクリート基礎を残したまま、調査を実施した。そのため、特に南半では南壁のみでしか、連続した土層観察は難しい状況にあった。基本土層については、調査区の北壁・東壁・南壁の観察および、周囲の既調査地点の様相も援用して記述する。記述の際には、図6に示したように、BXライン以北を「北区」、BXライン以南を17ラインを境に東西に分け、「東区」・「西区」とする。

<1層>1922(大正11)年に現在の岡山大学キャンパスに移転した岡山医科大学の建設工事に伴う造成土～現代に至る堆積土である。真砂土を基調に大小の礫を含む。上面は標高2.4m前後を測る。

<2層>砂を多く含む灰色土層である。調査区北壁・南壁の一部で確認されるのみである。上面の標高は北区で1.9m、東区で1.7m程度である。既往の調査成果から近代の耕作土と考えられる。残存部が限られており、出土遺物はごくわずかである。

<3層>明灰白色を基調とする砂質土である。上面は北壁で標高1.8～1.88m、西区北東部で標高1.7m、南壁で1.6～1.65mを測り、南に向けて低くなる様子が認められる。特に北区中央部の上面レベルが高いこと、また中世後半～近世の集落遺構が北区に集中することから、本層は中世末以降近世にかけての集落造成土と考えられる。北から南への傾斜は、近代以降の耕作面の段差によるものの可能性があるが、大規模な攪乱により、連続した土層で確認することはできなかった。

出土遺物はコンテナ1箱程度が認められ、中世～近世の土器・陶磁器・瓦が見られる。中世の遺物が大半を占め、小片～細片がほとんどである。

<4層>青緑色を帯びた暗灰色土あるいは砂質土である。上面は北壁で標高1.7～1.75m、北区中央部では標高1.6m、南壁で標高1.5m前後を測る。本層は検出遺構の時期等から中世後半までに堆積した土層と考えられ、<3層>同様、集落造成の際の堆積土であろう。一方、西区南壁および東区北壁では上面の標高1.4～1.5mと低い。

<3>・<4>層段階には北区が高く、周囲が低い地形を成していたことが予想される。

出土遺物はコンテナ2箱と多く、上述の<3層>と比して大きめの破片が多く含まれる。中世前半～後半の土器・備前焼等が認められる。鍋、竈片が目立つほか、土師質土器碗には14世紀中頃のものが認められる。

<5層>淡灰褐色粘質土あるいは砂質土で、南端では砂質が強まる。北区北西角から南東にかけての一角が最も上面標高が高く、1.55～1.6mを測る高まりを成している。ここから西側、南側に向けて、地形は緩やかに傾斜し、北区西壁では標高1.5m、西区南壁では標高1.4mの広がり認められる。一方、北区北東部では標高1.25mおよび東区北東端で標高1.2mまで下がっている。

出土遺物はコンテナ1箱程度で、13世紀末～14世紀代の遺物が多く含まれ、大半は小片である。<4層>段階にも認められる集落整備に伴う造成土と考えられる。<4層>・<5層>の状況から中世前半および後半に度重なる造成が行われたことが窺える。

<6層>暗黄褐色～暗茶褐色砂質土で調査区南端では砂質を帯びる。鉄分の沈着が顕著に認められる。<5層>

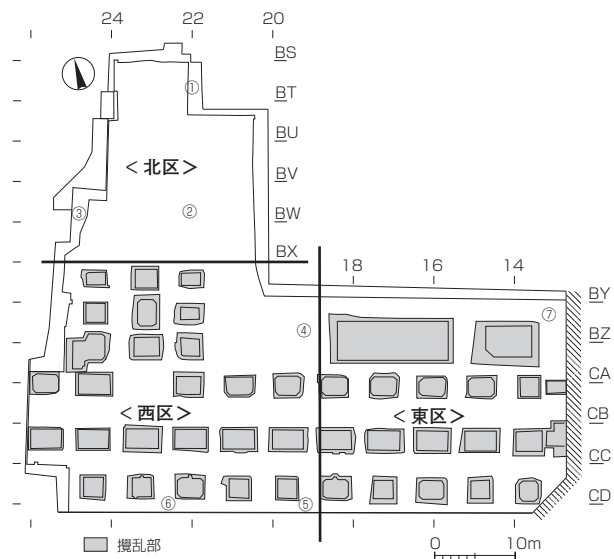


図6 土層断面の位置と調査区の呼称

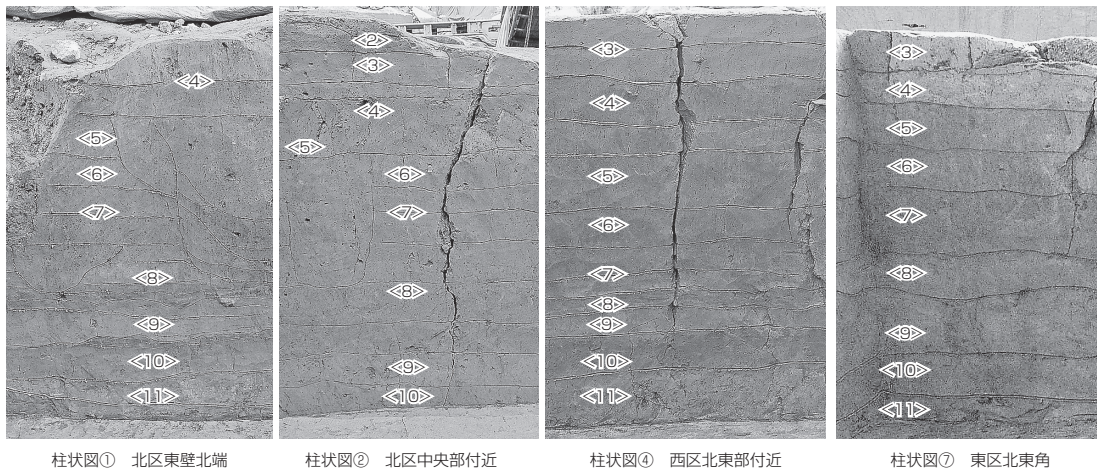
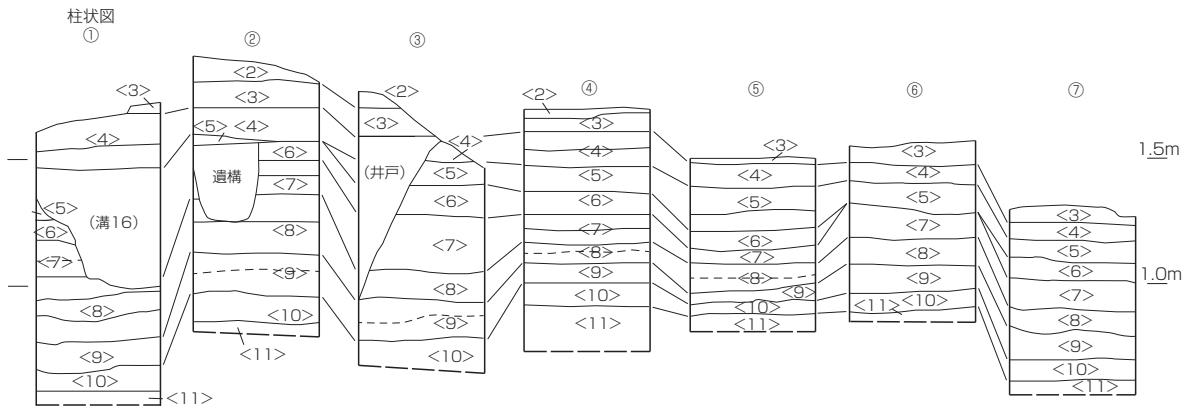


図7 土層柱状図 (縮尺1/30)

と同様に北区中央付近の一帯の上面レベルが高く、標高1.55mを測る。この一帯を頂点に南・西方向に緩やかに傾斜しており、西区・東区の大半は標高1.3~1.4mの数値を示し、南端では標高1.2~1.3mと下がる。一方、北区北東角では標高1.18m前後、東区北東端では標高1.1mを測る。<6層>は11世紀以前に形成されたと考えられ、11世紀代からこの地に集落が営まれた際の生活面と判断される。

出土遺物はコンテナ1 / 2箱程度である。古墳時代以前の遺物は見られず、11世紀代の土師器・須恵器が主体である。

<7層>黄灰褐色~暗灰褐色砂質土である。北区中央部付近が標高1.45~1.5mを測る高まりを呈している。この高まりの西側および西区南壁では上面の標高1.3m前後を測り、緩やかな傾斜面が広がる。一方、北部北東端では標高1.2m、東区北東端では1.0mと低く、この地形の状況は<6層>と共通する。

出土遺物はコンテナ1箱程度で、古墳時代初頭が主体でまれに11・12世紀代の土器が認められる。

<8層>暗茶灰褐色砂質土で、一部で粘性が強い部分も見られる。北区中央部付近が北西-南東方向の帯状に高まりをなし、上面の標高は1.3~1.35mを測る。その周囲には標高1.1~1.2mを測る広がり認められる。一方、北部北東端においては、北東へ下がる落ちが確認され、最深部で標高0.9mを測る。<8層>は砂質が主体であるが、暗褐色粘質土層と互層状に細分できる箇所もあり、低い地形において特に幾度も堆積と植物の繁茂が繰り返された様相が窺える。出土遺物はコンテナ1 / 2箱程度が認められ、弥生時代後期の遺物が主体である。

調査の記録

<9層>淡黄灰色を呈する砂質土で鉄分が沈着する。北区～西区では標高0.95～1.1m前後と高く、北区北東端と東区北東部で0.8m前後である。<8層>と同じく北部北東に落ちが確認される。出土遺物は少なく、ポリ袋2袋程が認められる。

<10層>黒灰色を呈する粘質土である。この段階にも<8層>と同様に北区北東部に落ちが確認される。地形状況は<8層>と共通しており、北区中央部付近～西区では標高0.95～1.0m前後、北区西壁で標高0.8mを測る。北区北東端と東区北東部では低く0.7mである。出土遺物はコンテナ1／2箱が認められた。弥生時代後期前葉～中葉の土器を含み、本層の形成時期を示しているものと考えられる。

<11層>黄灰色粘質土で、弥生時代の基盤層にあたる。遺物は出土していない。上面の標高は0.6～0.9mを測る。

第2節 弥生時代～古墳時代初頭の遺構・遺物

本時期に属する遺構には井戸1基、土坑1基、溝9条が挙げられる(図8、図版1)。検出面では<10層>上面で土坑1基、溝2条、<8層>上面で井戸1基、溝8条を確認している。<10層>～<8層>の段階には、調査地点北区の北西～南東にかけて带状に高まり、そこから西側、南側へ緩やかに下がっていく地形をなしている。また、この高まりの北東側は北東に向けて下がる斜面を呈しており、ここを「落ち」として報告する。「落ち」の東側にあたる、第18次調査地点内では調査区北辺中央から半円形に伸びる微高地から南方向および南西方向へと緩やかに傾斜する地形が確認されている⁽¹⁾。本調査地点の「落ち」と併せると、微高地を巡るように落ちが形成されていると考えられる。

遺構のうち、井戸1基は北区南端に、土坑1基は西区北東部に位置する。溝は北東-南西方向のもの(溝1・3)と、北西-南東方向のもの(溝2・4-9)とが認められる。本調査地点で確認された溝群は、上述のような地形の傾斜に沿って走行している。また北側で確認された溝9は「落ち」の肩部にあたる。

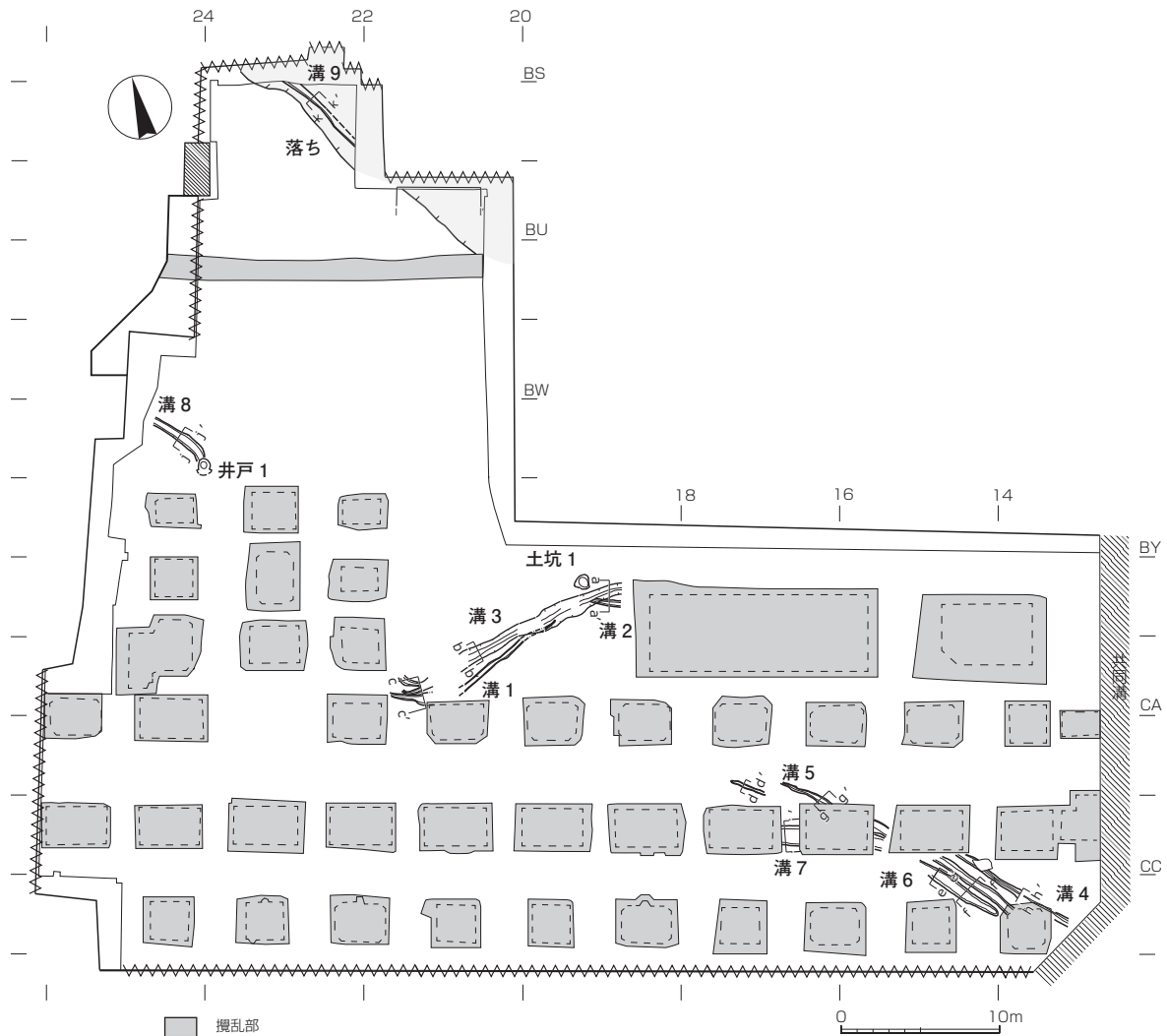


図8 弥生～古墳時代の遺構全体図(縮尺1/500)

調査の記録

落ちには<10層>～<8層>段階に土器が流れ込んでおり、これらをまとめて報告する（図15）。

本節で述べる遺構が、既報告地点と同一遺構である場合はその旨を明記することとする。

註

(1) 山本悦世 2008「鹿田遺跡第18次調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 紀要2007』

1. 井戸

井戸1（図9、図版1）

調査区北区、BW21区に位置する。検出面は1.15mで<8層>に対応する。上面で南北0.96m×東西0.9m、底面で径0.35mの円形を呈する。底面の標高は0.2mを測り、検出面からの深さ0.95mが残る。

埋土は11層を確認した。さらに土質等から1群（1層）、2群（2～4層）、3群（5～9層）、4群（10・11層）の4群にまとめた。1群は淡橙灰褐色砂質土層1層である。2群は灰色を基調とする粘質土で埋め戻し土と考えられる。3群のうち5～7層は炭を多く含み、5～9層を通して暗灰～黒灰色を呈する。4群は灰色粘土を基調とする、使用時の堆積土と考えられる。こうした堆積状況から、3群の段階に火の使用が窺われ、廃絶時の祭祀が想定される。

出土遺物はごくわずかに弥生土器片2点が確認された。本遺構の時期は、検出面から古墳時代初頭に比定される。本時期の生活域は、本調査地点より北100mの第1次調査地点一帯に広がる。また本調査地点南半以南の既調査地点においては水田域の広がり確認されている。本遺構は生活圏とは離れた地点に位置しており、祭祀あるいは耕作用の機能が想定される。

2. 土坑

土坑1（図10、図版1）

西区北東、BZ19区に位置する。検出面は標高1.0mで<10層>に対応する。上面では1.0×0.9m、底面では0.55×0.6mの楕円形を呈する。底面の標高は0.7m、検出面からの深さは0.3mを測る。

埋土は3層に分けた。暗灰～灰色の粘質土である。出土遺物は見られなかった。本遺構の時期は検出面から弥生時代後期と考えられる。

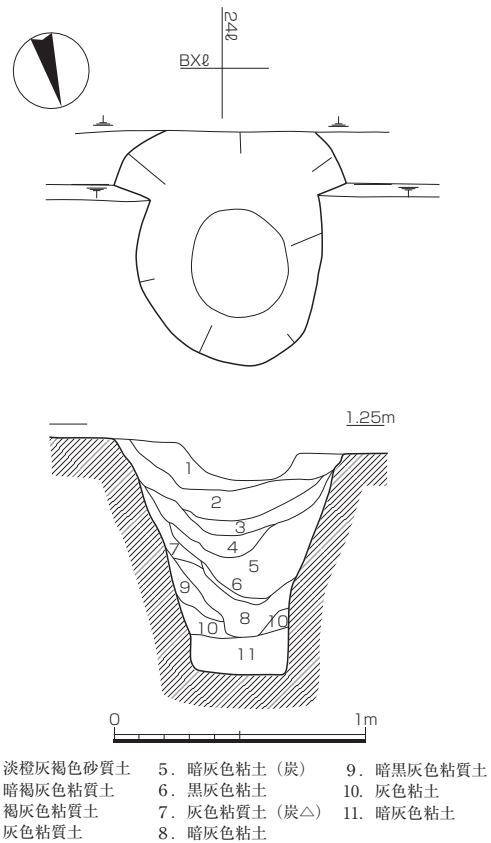


図9 井戸1（縮尺1/30）

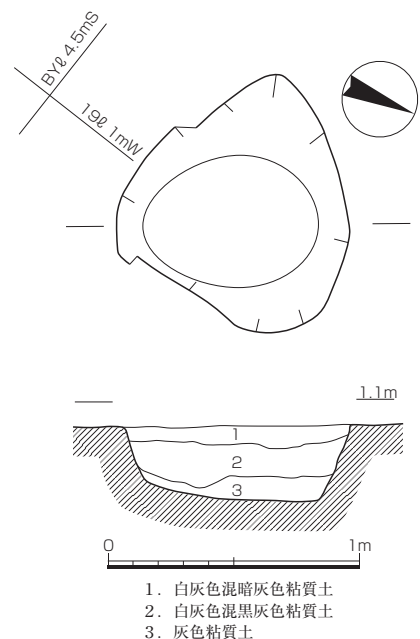


図10 土坑1（縮尺1/30）

3. 溝

溝1～3 (図11、図版1)

西区北東、BY・BZ18～19区で3条の溝を確認した。北東～南西方向に走行する溝群である。溝1・2は<10層>で、溝3は<8層>上面で検出した。いずれの溝も出土遺物は無置物あるいは極めて希薄である。時期は、検出面から古墳時代初頭頃の可能性が考えられる。

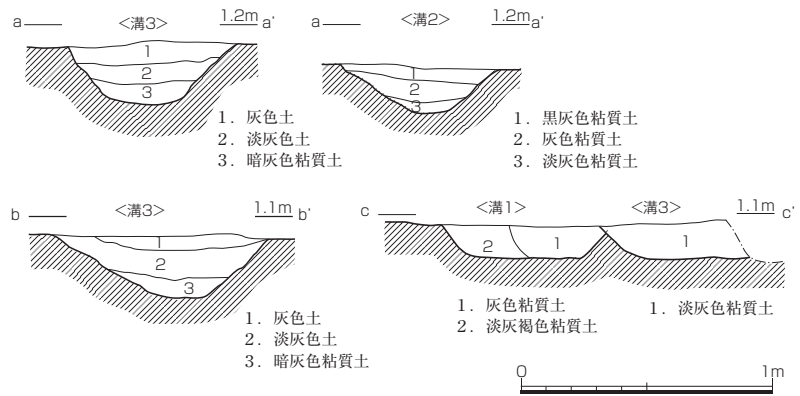


図11 溝1～3断面 (縮尺1/30)

溝1：BZライン～CAライン間で

長さ6mを確認した。北東側は溝3が重複しているため、確認できない。検出できたのは幅0.5～0.8m、深さ0.2mである。検出面は<8層>で、標高1.05～1.1m、底面のレベルは北東で0.83m、南西で0.87mを測る。

埋土は灰色～暗褐色を呈する粘質土である。出土遺物はみられなかった。

溝2：BY19区で、南東～北西方向に約2mを確認した。幅0.8m、深さ0.18mを測る。西端は溝3に切られ、以西では確認できなかった。検出面の標高は1.05m、底面は0.85mを測る。埋土は灰色土～暗灰色粘質土の3層を確認した。遺物は出土していない。

溝3：19ライン～22ライン間で北東～南西方向に約6mを確認した。溝1の北側に沿っている。幅0.6～0.9m、深さ0.1～0.3mを測る。検出面の標高は1.05～1.1m、底面の標高は0.9mを測る。埋土は灰色土～暗灰色粘質土の3層に分けた。遺物は古墳時代初頭の土師器鍋等が出土した。

溝4～7 (図12、図版4)

東区で検出した4条の溝である。南東～北西方向を主軸とする。いずれも遺物は出土していない。<8層>上面で検出したことから古墳時代初頭と考えられる。

溝4：13～15ライン間で、南東～北西方向に長さ10mを確認した。幅0.6m、深さ0.2～0.3mが残る。検出面の標高は0.6m、底面の標高は南東端で0.3mを測る。埋土は淡黄灰色粘土～暗灰色粘土の3層に分けた。

溝5：溝4の南に沿うように走行する。13～17ライン間で、南東～北西方向に長さ18mを検出した。また西区でわずかに同方向の溝を

検出しており、同一遺構の可能性はある。幅0.1～1.0m、深さ0.18mを測る。北西に向かうにつれ浅くなる。検出面の標高は0.7m、底面の標高は0.55～0.7mである。

溝6：溝5の南に沿うように、14～18ライン間で長さ7mを検出した。残りの良い南東端

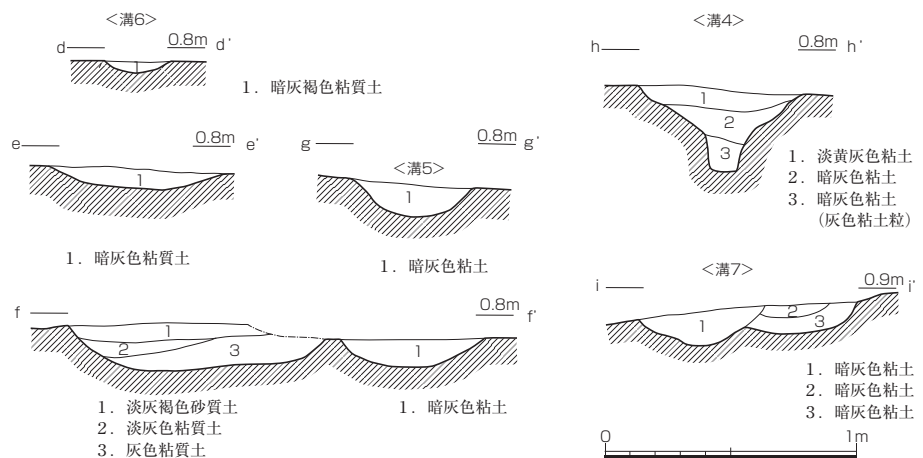


図12 溝4～7断面 (縮尺1/30)

で幅0.55m、深さ0.1mを測る。検出面の標高0.7m、底面の標高0.55～0.6mを測る。

溝7：16～17ライン間で東西方向に、長さ1mを検出した。上述の溝4～6とは走行方向が異なるが、埋土の特徴は一致しており、同時期の遺構として報告する。検出面の標高0.78～0.85m、底面の標高0.7mを測る。幅0.9m、深さ0.15mを検出した。埋土は暗灰色粘土を主体に3層に分けた。埋土の状況から1層と2・3層とで流路が変わった可能性があり、前述の溝4～6のいずれかにあたるとも考えられるが、検出部分が一部であるため断定は難しい。

溝8 (図13、図版4)

調査区北部、BW24区で検出した。南東-北西方向に、長さ4mを確認した。

幅1.0m、深さ0.11mを測る。＜8層＞で検出した。検出面の標高0.95～1.0m、底面の標高0.92mである。埋土は暗灰色粘質土1層を確認した。遺物は出土していない。

本溝は、走行方向から、前述の溝4～6に合致する可能性が考えられる。また西に隣接する第25次調査地点で「溝6 a」として報告された遺構と同一であろう。既往の成果も併せて、溝8は円形高まりの周囲を巡る溝であり、機能としては耕作域の排水が考えられる。

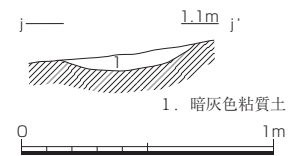


図13 溝8断面
(縮尺1/30)

溝9 (図14)

調査区北部北東、BS22区で検出した。同地点には、後述する落ちが形成されており、本溝は落ちが概ね埋まった後に、その肩部を走行するように形成されている。南東-北西方向を主軸とし、長さ3m程を検出した。幅0.3～0.4m、深さ0.1mを測る。検出面の標高1.05m、底面の標高0.9mである。遺物は出土していない。古墳時代初頭以降と考えられる。

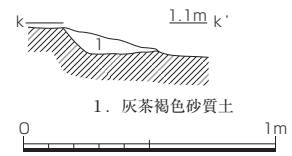


図14 溝9断面
(縮尺1/30)

4. 落ち

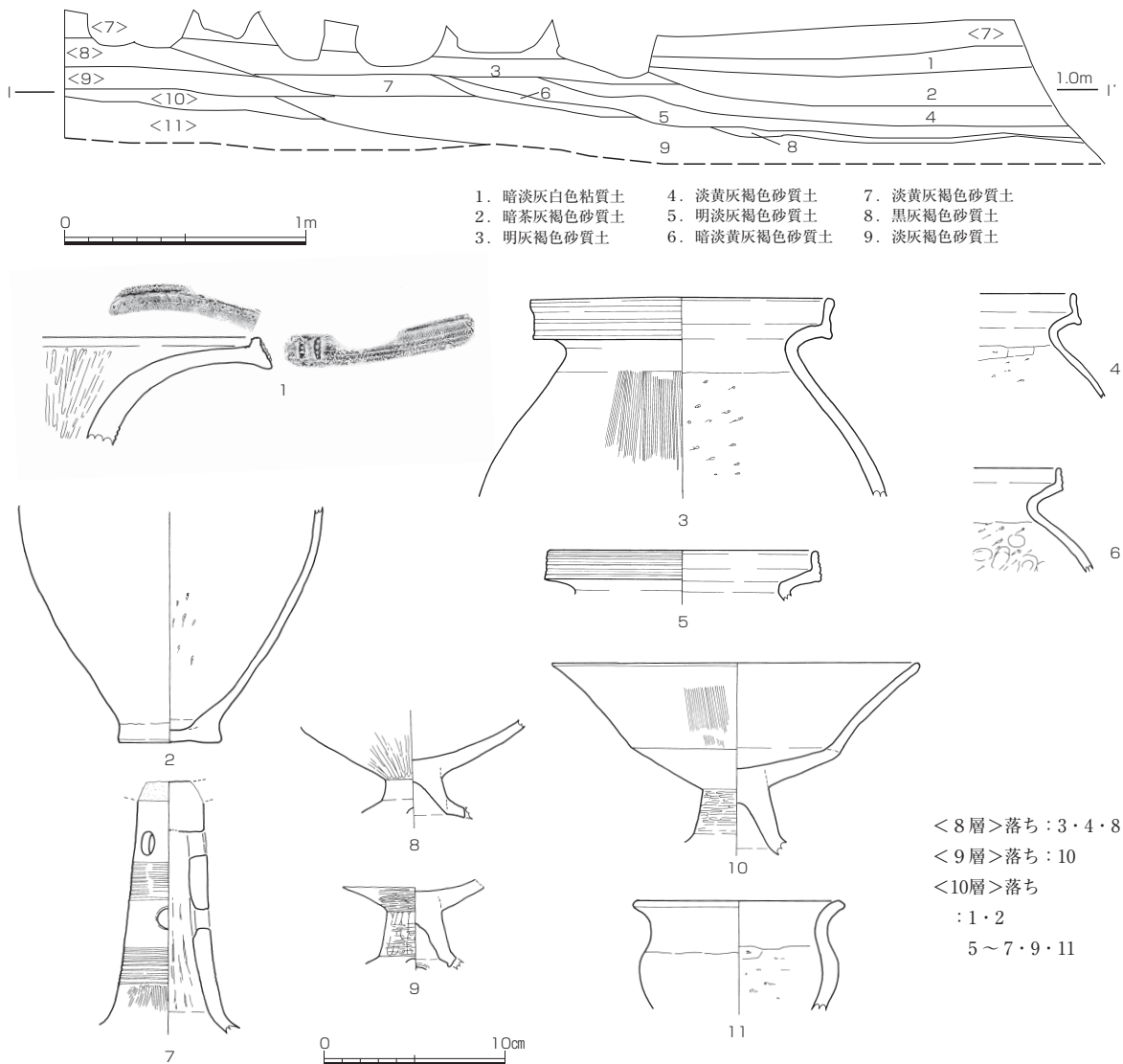
調査区北区の北東部に、北東角に向けて緩やかに傾斜する落ちが形成されている。図15に示したように、＜10層＞～＜8層＞の堆積時に対応する時期の落ち斜面を、次々に砂質土層が覆っており、＜7層＞段階までに平坦化していった状況と考えられる。後述するように出土遺物には時期幅があり、また先後関係を層位的に明確にはできない。

落ち (図15、図版4)

落ち肩部の標高は0.99～1.03mを測り、北東に向かって傾斜する。本調査地点内の最深部の底面標高は0.7～0.8mである。この落ちの埋土は9層に分けたが、暗灰色砂質土、(8・9層)、黄灰色砂質土(6・7層)、灰褐色砂質土(2～5層)というように砂の堆積が続き、土器が比較的多く出土している。低地へと砂が繰り返して堆積するような環境下であったことが窺われる。

出土遺物には弥生時代中期末から弥生時代後期末、さらに古墳時代初頭のもものが若干含まれている。土層観察から8・9層は＜10層＞段階の斜面堆積、1～7層が＜8層＞段階の斜面堆積と判断される。調査時には＜8層＞・＜9層＞・＜10層＞の落ちを分けて取り上げを行い、遺物総量はコンテナ(28¹/₂箱)2箱、内訳は＜10層＞落ち1箱、＜8層＞落ち1箱、＜9層＞はポリ袋2袋であった。

＜10層＞では弥生時代中期末～後期末頃の土器(図15-1・2・5～7・9・11)、＜9層＞では弥生時代後期末～古墳時代初頭(同-10)、＜8層＞では弥生時代後期中葉～後葉(同図-3・4～8)の土器があげられる。



番号	器種	口径 cm	底径: cm	器高 cm	残存 -: 1/6以下	特徴	色調	胎土
1	弥生土器 壺	-	-	-	-	内:放射状篋ミガキ、外:ハケメ後篋ミガキ(縦位)、口:上端面と内面下端に円形竹管文(径3mm)が密に巡り、外面には4条の沈線上に2つの棒状浮文(長さ1.4cm・幅4mmで小さな押圧が縦に4か所)が幅1.8cm間隔で貼り付く。2つの浮文位置を外して、鋸歯文(幅1.8cm、内部を各5条の沈線が格子状に埋める)が巡る。	浅黄 2.5Y7/4	0.5~1mm砂
2	弥生土器 甕	-	5.65	-	底1/1	磨減顕著、内:篋ケズリ、内外被熱痕(内面黒色化・外面橙色化)、黒斑	(内)灰(外)浅黄橙 N6/、10YR8/3	0.5~1mm砂多
3	弥生土器 甕	16.8	-	-	口1/5	体部内:篋ケズリ、体部外:縦ハケメ、口:幅広の凹線2条、磨減顕著、口縁歪み	橙~明赤褐 5YR6~5/6	1~2mm砂礫多 赤色粒
4	弥生土器 甕	-	-	-	-	体部内:篋ケズリ、口:凹線状篋描沈線2条、磨減顕著	橙~鈍黄橙 7.5YR6/6、10YR7/3	0.5~1mm砂多 赤色粒
5	弥生土器 甕	15	-	-	口1/4	口:篋描沈線6条(深淺あり)、磨減顕著、全面被熱(煤・変色)	鈍褐 7.5YR5/3	0.5~1mm砂
6	弥生土器 甕	-	-	-	-	体部内:篋ケズリ後押圧、体部外:縦ハケメ、口:篋描沈線4条、外:煤付着	鈍黄橙 10YR6/3	1mm前後砂
7	弥生土器 高杯	-	-	-	-	磨減顕著、外:裾部周辺はハケメ残存、内:絞り目、円孔(径約1.4cm)2段で各3か所、沈線文帯(幅約2cmに約9条の沈線)2段が予想される。	灰白~淡黄 2.5Y8/2~3	1mm前後砂多
8	弥生土器 高杯	-	-	-	-	磨減顕著、杯外:篋ミガキ(放射状)、脚内:ナデ、円孔4か所	浅黄橙~鈍黄橙 10YR8~7/4	0.5~1mm砂
9	弥生土器 高杯	-	-	-	-	磨減、外:篋ミガキ(横位)、円孔4か所	橙(断面)灰白 5YR6/6、10YR8/2	きめ細かい 均一
10	弥生土器 高杯	20×20.5	-	-	口1/1	磨減顕著、脚柱外:篋ミガキ(横位)、杯部に黒斑、杯内:一部剥離(2次被熱痕?)	橙 5YR7/6・8	きめ細かい
11	弥生土器 鉢	10.7	-	-	口1/4	磨減、口:強い横ナデ、内:篋ケズリ	灰白~黄灰 2.5YR8/1、2.5YR6~5/1	1mm前後砂

図15 落ち断面・出土遺物(縮尺1/30・1/4)

第3節 中世前半の遺構・遺物

本時期に属する遺構は井戸13基、土坑4基、溝10条、ピット群である(図16)。<6層>が検出面となる。ピット群については、<5層>・<4層>検出のものと分離が難しく、本節で一括して掲載する。

11世紀代~12世紀初頭に井戸2・3、11世紀後葉~前葉に井戸4・5、12世紀初頭~前葉に井戸6・7が認められる。これらの井戸に対応する時期の溝は、溝10~13である。溝10・11は鹿田条里に沿わない、正方位の南北方向に軸をとる溝で12世紀前半に埋没している。この溝の掘削時期は確定できないものの周辺の遺構の状況から11世紀中頃あたりに求められる。次いで12世紀中葉~後葉の井戸8・9が認められる。対応する溝は溝14・14aで12世紀後半~末に埋まっている。溝14・14aは鹿田条里に沿う南北方向の区画溝である。

13世紀代には、13世紀初頭~前葉の井戸10、同前葉~中葉の井戸11が認められ、対応する溝は溝15・16である。溝15は13世紀前半、溝16は13世紀前葉に埋まる。溝15は12世紀の溝10・11に並行する正方位の南北方向の溝である。並行する形態の特徴から、道の存在が窺われる。一方、溝16は東西方向の溝で、溝15と同時期であり、組み合わせさせて屋敷地を区画するものと考えられる。次いで13世紀後半の井戸12、同後半~後葉の井戸13、同後葉の井戸14の3基が認められる。対応する溝は溝17・18・20である。いずれも埋没時期は13世紀末~14世紀初頭に求められる。このうち溝18は南北方向の大型溝であり、主要な区画溝の一つである。

ピット群は北部中央付近と、西部北東部に集中している(図17)。ピットの時期の確定は難しく、掘立柱建物は1棟を抽出できたのみである(図18)。

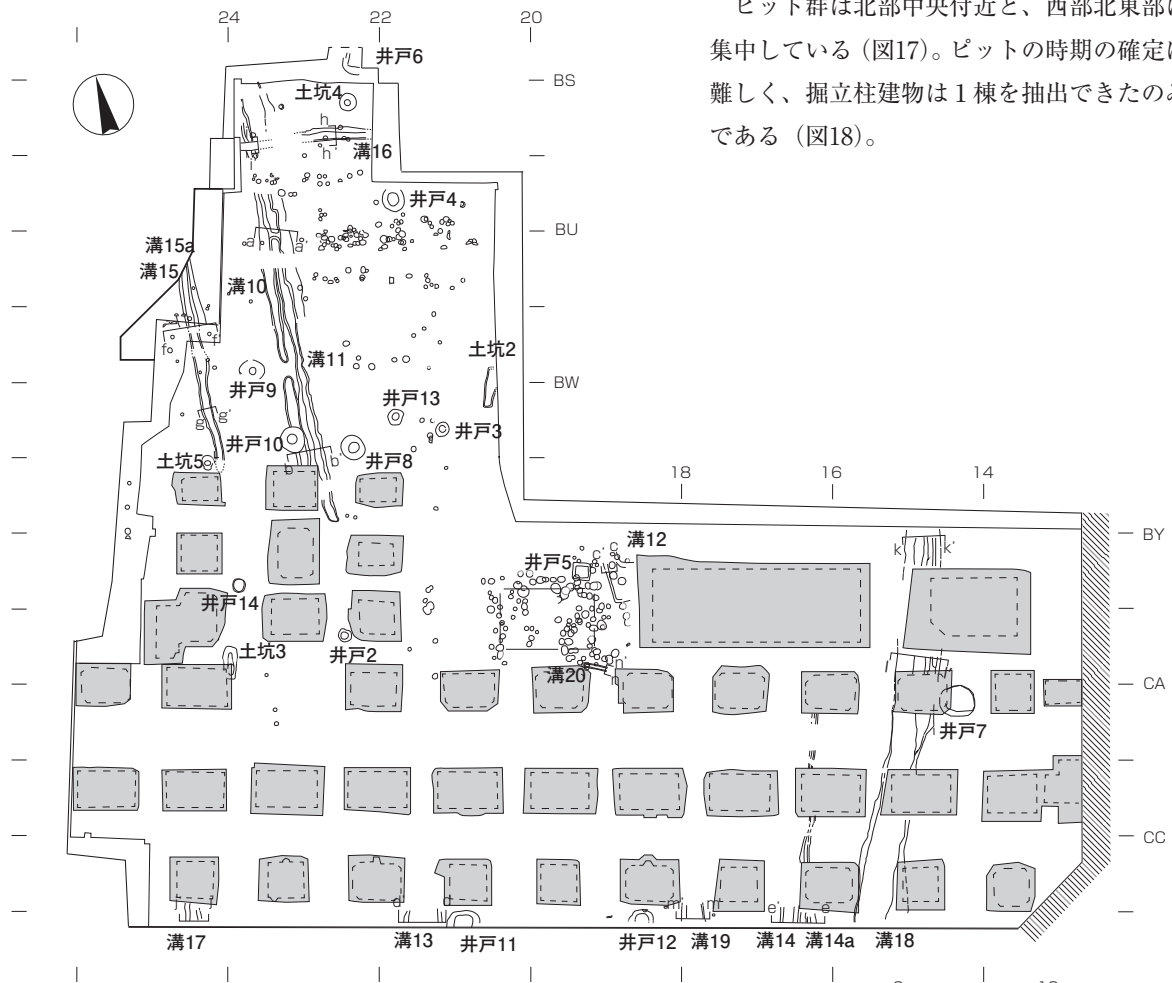


図16 古代末~中世前半の遺構全体図(縮尺1/500)

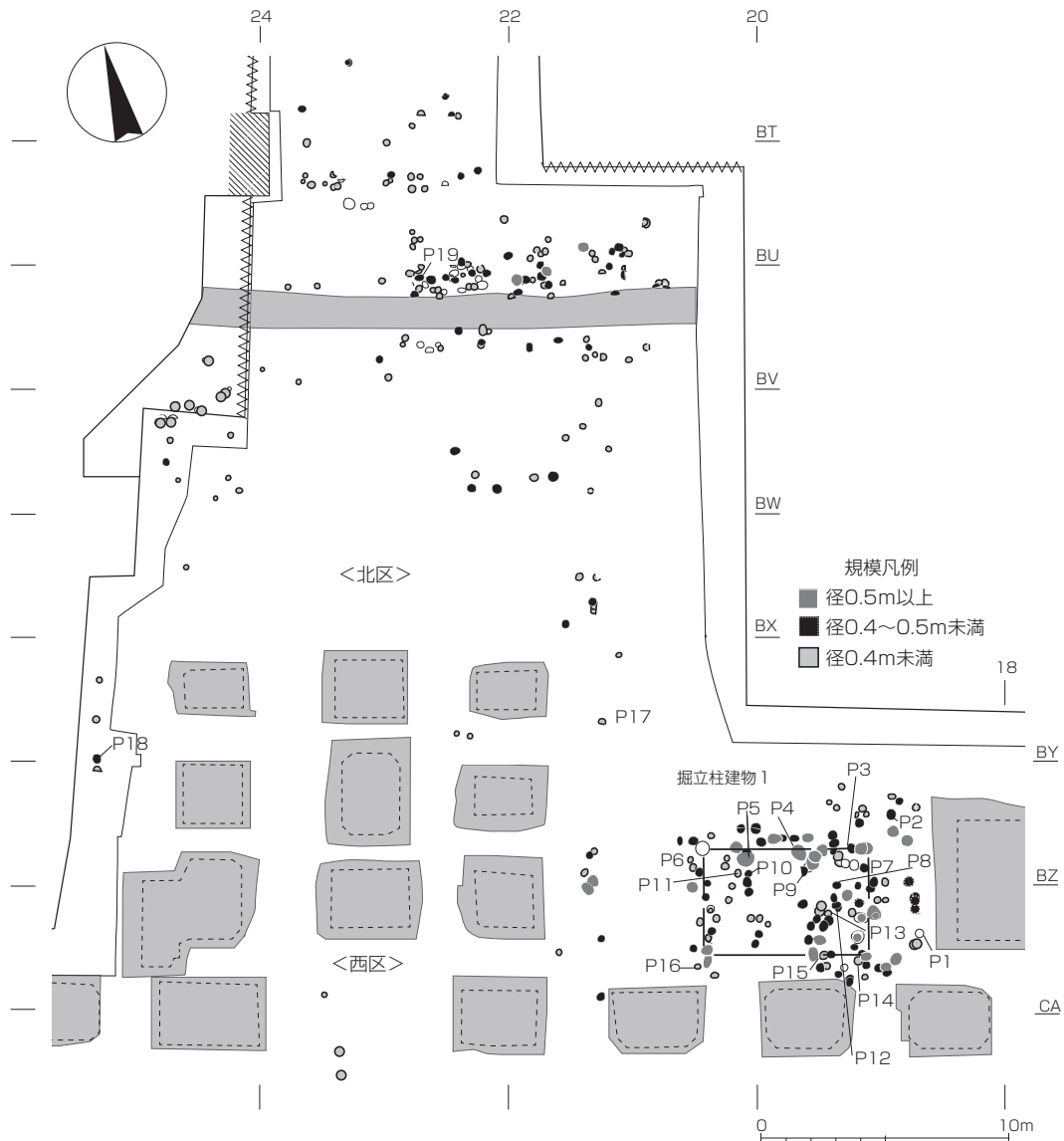


図17 ピット群検出状況（縮尺1/300）

1. 建物・ピット群

ピットの検出状況を図17に示した。ピットは北区BVライン以北と、西区のなかでも北東のBY・BZ18・19区の2か所に集中する。この状況は攪乱の度合いが影響してはいるが、検出されたピットの規模を概観すると西区に径0.5m以上の大形柱穴が多く認められ、遺物の状況では西区に中世前半期のものが多い傾向を捉えることができる。また、北区のピット群には遺物が出土するピットは少なく、時期の判断は難しいが、中世後半～近世のものが含まれることを指摘できる。また<10層>で検出したピットで、かつ弥生時代の遺物のみを出土するものが3基（図17-P2）認められ、これらについては弥生時代後期頃に比定される。西区では後述する掘立柱建物1を抽出した。

掘立柱建物1（図18、表1）

西区、BY・BZ19・20区で確認した。P1～P8により構成される。検出レベルは標高1.1～1.3mで<6層>に対応する。他遺構との関係は、本建物のP1の北西に井戸5、P4～P6の南側に井戸20が位置する。本建物は

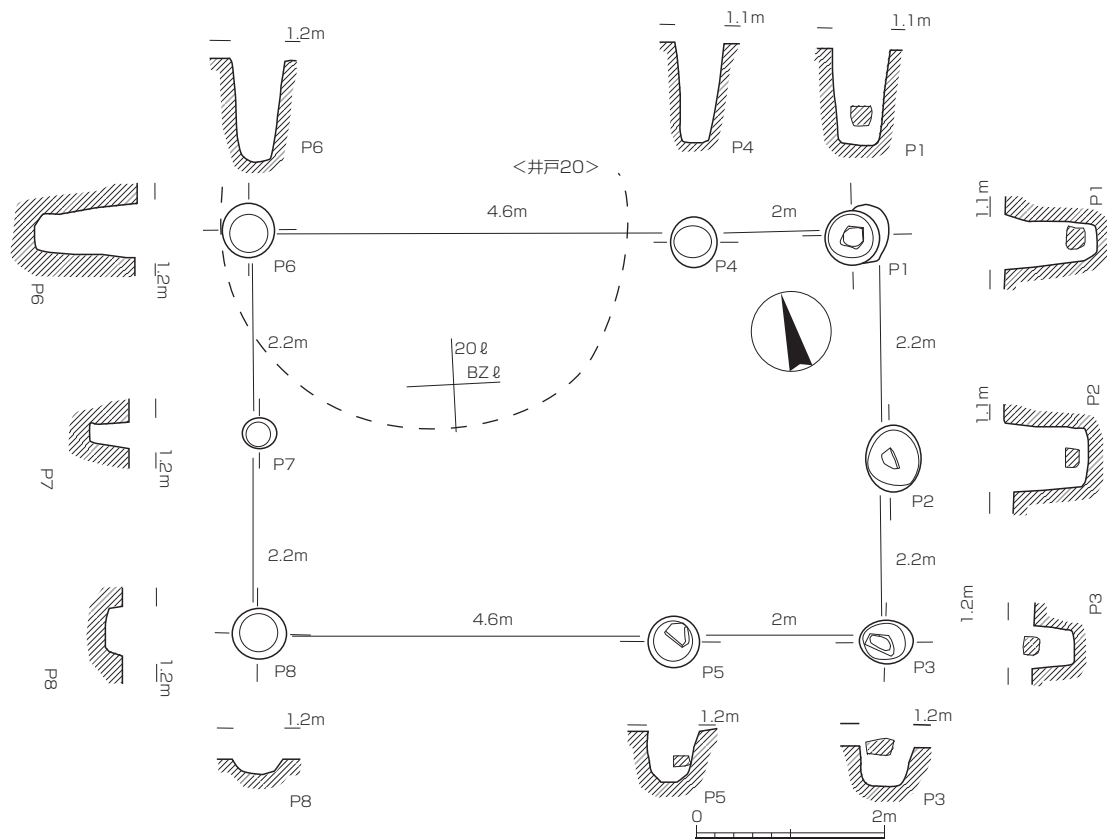
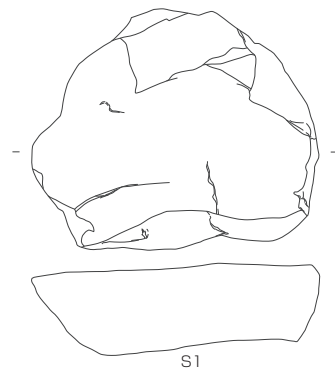


図18 掘立柱建物1 (縮尺1/80・1/6)

表1 掘立柱建物1 構成柱穴一覧

番号	上面高 (m)	下面高 (m)	径 (m)	深さ (m)	礎石
P1	1.31	0.83	0.52×0.5	0.48	○
P2	1.32	0.89	0.62×0.64	0.43	○
P3	1.16	0.95	0.58×0.36	0.2	○
P4	1.32	0.79	0.54×0.4	0.53	
P5	1.28	0.99	0.44×0.62	0.29	S1
P6	1.2	0.68	0.56×0.54	0.52	
P7	1.26	0.95	0.32	0.31	
P8	1.11	1.05	0.5×0.44	0.06	

番号	器種	残存長: cm	残存幅: cm	残存厚: cm	重量: g	残存	石材	特徴
S1	礎石	19.2	22.5	8.5	4880	完存	砂岩ホルンフェルス	上下面平坦



東西方向に長軸を有し、E-20°-Sを示す。

柱穴の規模は直径0.32~0.6m、深さは0.06~0.53mを測る(表1)。本建物の構造はP1・4・6が建物北辺を、それに直交するP1・2・3が東辺、P6・7・8が西辺を構成する。東辺から約2m西にP4・5が位置し、北辺ではP1・4間が2m、P4・6間が4.6mを測る。東辺ではP1・2間、P2・3間がそれぞれ2.2mを測る。以上の状況から、本建物は東西6.6~6.8m、南北4.4mの規模を有する3間×2間の建物と理解される。柱穴間の距離は2.0~2.2mの数値を示し、近似した値である。北辺・南辺ともに、東から4.6mあたりの柱穴は確認されていない。井戸20ほかによる破壊も想定されるため、本来の有無は判然としない。

遺物はP6を除きいずれも少量の土器小片が出土した。中世前半の土師器碗・皿等の小片である。8基の柱穴中4基で礎石が認められた。うちP5出土の1点を図示した(図18-S1)。

本建物の時期は、遺構の位置関係から、井戸5の埋没以後で井戸20以前であり、出土遺物も併せて、中世前半の12世紀後半～13世紀代と考えられる。

ピット群 (図17・19、表2)

ピットの分布状況は前述したように、中世前半のピット群が西区北東部に、中世後半以降のピット群は北区に分布がまとまると考えられる。遺物を掲載したピットの規模を表2にまとめた。11世紀後半～14世紀前半、および16世紀代の遺物が見られる。建物として抽出できたのは前述の一棟に留まったが、井戸と併せて屋敷地の配置を検討する一助となる。

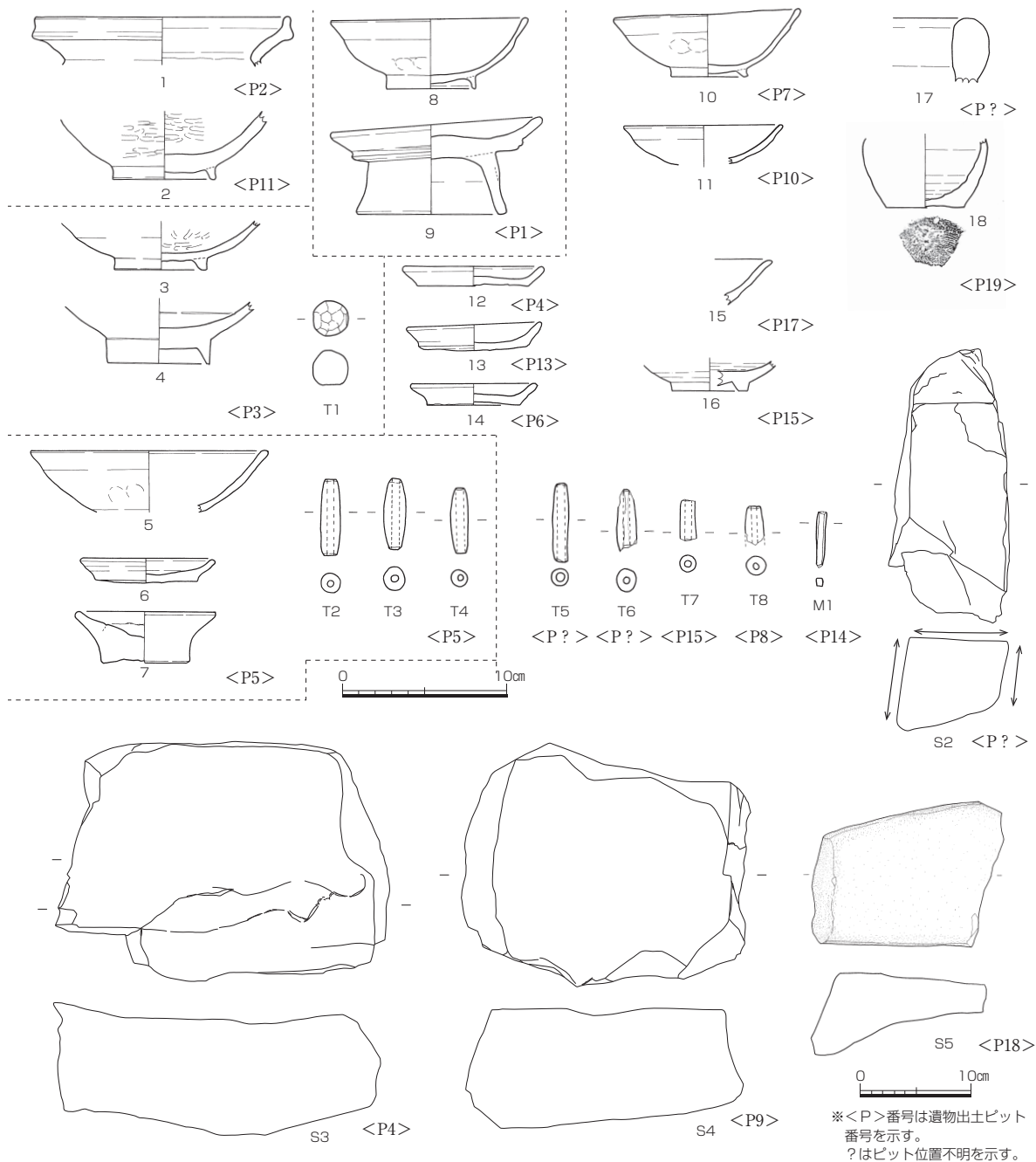


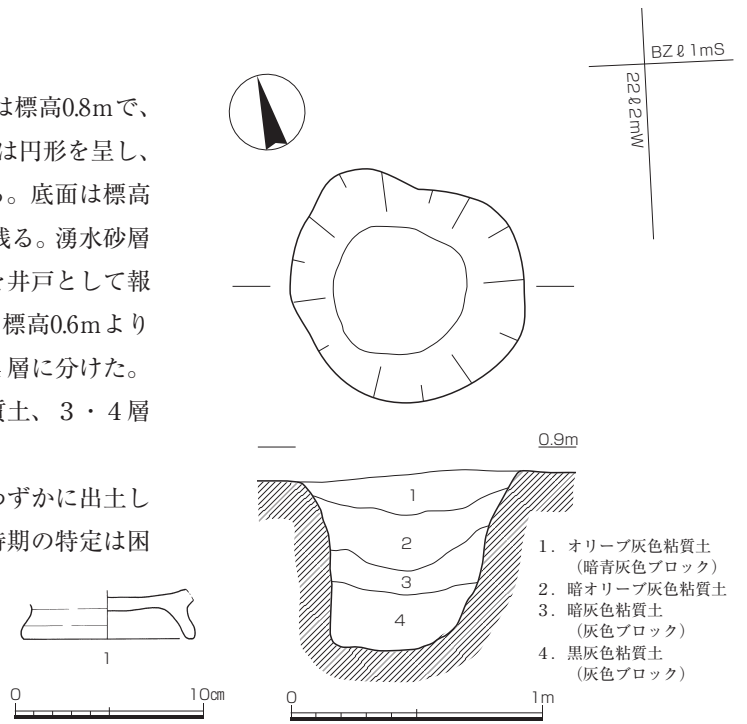
図19 ピット出土遺物 (縮尺1/4・1/6)

2. 井戸

井戸2 (図20、図版5)

西区中央、BZ22区に位置する。検出面は標高0.8mで、<8層>上面まで破壊されている。平面形は円形を呈し、上面では径0.9m、底面では径0.55mを測る。底面は標高0.1mに位置し、検出面から深さ0.7mが残る。湧水砂層には達していないが、形状から、本遺構を井戸として報告する。残存部分の断面形は筒状をなし、標高0.6mより上位はやや広がりがある。埋土は4層に分けた。1・2層はオリブ灰色を主体とする粘質土、3・4層は暗灰色の粘質土である。

出土遺物は土師器碗片、須恵器小片がわずかに出土した。遺物はわずかで摩滅も顕著である。時期の特定は困難であるが吉備系土師器碗が含まれていない点から11世紀前半の可能性がある。



番号	器種	口径: cm	底径 高台径: cm	器高: cm	残存 -: 1/6以下	特徴	色調	胎土
1	土師器 碗	—	92	—	高台1/2	磨滅	鈍(赤)橙 5YR6/3~4	0.5~1mm砂多

図20 井戸2・出土遺物 (縮尺1/30・1/4)

井戸3 (図21、図版5)

北区南東、BW21区に位置する。検出面の標高1.58mを測り<6層>に対応する。上面で1.05×0.9mの東西に長い楕円形を呈する。底面の標高は-0.1mで、検出面からの深さ1.7mを測る。底面から0.6m程上位、標高0.45~0.5m地点で、断面形状に決りがみとめられる。使用時における水面ラインがこのあたりにあったことを示す。

埋土は24層に分けた。上層(1~11層)、中層(12~20層)、下層(21~24層)に大別した。下層は灰褐色系の粘質土で、ブロックは含まない。中層・上層は廃絶時の埋土と考えられる。上層のうち6層は炭化物を比較的多く含むが炭層をなすようなものではない。

遺物はポリ袋(12号)3袋、50片程が出土した。土師器碗・皿・鍋・竈片、

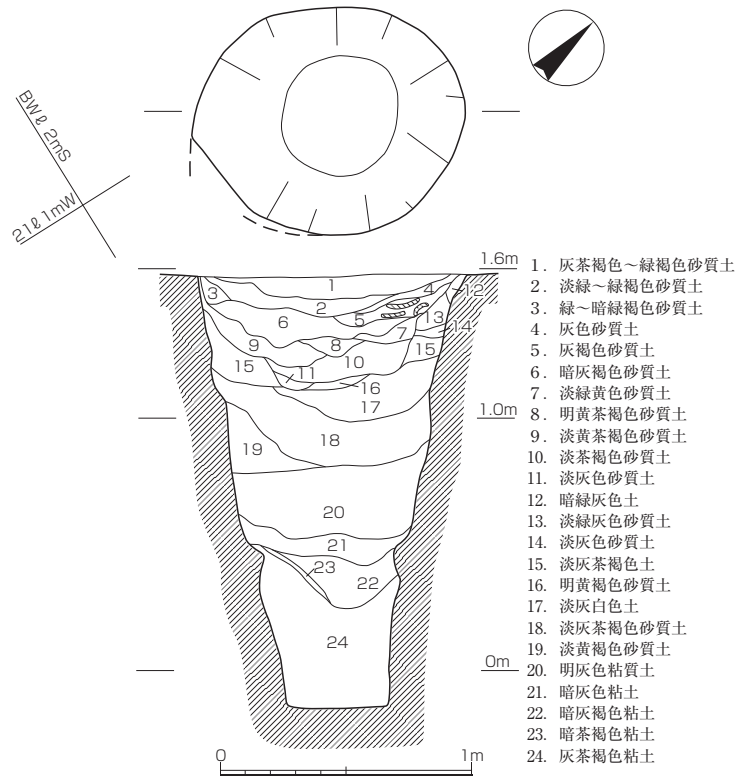
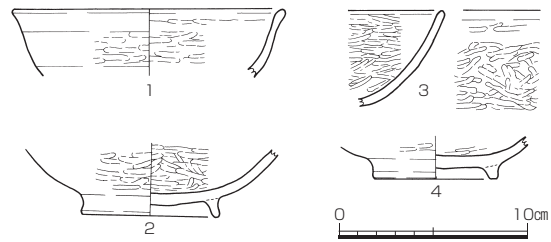


図21 井戸3 (縮尺1/30)

瓦器碗口縁片が含まれる。図22-3は和泉型瓦器碗である。

本遺構の時期は出土遺物から11世紀後半～12世紀初頭と考えられる。



番号	器種	口径: cm	底径 高台径: cm	器高: cm	残存 - : 1/6以下	特徴	色調	胎土
1	土師器 碗	14.4?	-	-	-	1と2は同一個体の可能性が高い。内外: 窺ミガキ密、平滑な仕上げ上がり、底外: 丁寧なナデ・押圧、煤付着内面に多、残存率低いため口径値は不安定(口径15~16cm、器高6cmの値もあり)	(内)黄灰~黒褐(外)灰白 2.5Y6/1、2.5Y3/2 2.5Y8/1~2	1mm砂僅少
2	瓦器 碗	-	7.2×7.5	-	高台1/1	内外: 窺ミガキ密、和泉型	灰白~灰 5Y7/1、N4/	1mm砂僅少
3	瓦器 碗	-	-	-	-	内外: 窺ミガキ密、和泉型	灰白~灰 5Y7/1、N4/	1mm砂僅少
4	黒色土器? 碗	-	6.75	-	高台3/4	内外: 窺ミガキ僅少、内面全体に煤がタール状に付着(「内黒」の可能性有)	(内)黒(外)灰白 N2/、2.5Y8/1	1mm砂少

図22 井戸3出土遺物(縮尺1/4)

井戸4(図23・24、図版5)

北区北部、BT21区に位置する。溝10の東7mの地点である。検出面の標高1.02~1.05mで<6層>に対応する。

上面で径1.55mの円形、下面では0.6×0.9mの南北に長い楕円形を呈する。底面のレベルは標高-0.5m、検出面からの深さ1.65mを測る。

断面形は底面から0.6~0.7mの高さまでは筒状に立ち上がり、標高0.5mより上位は広がるY字形をなしている。

埋土は25層に分けた。1群(1~6層)、2群(7~15層)、3群(16~22層)、4群(23~25層)の4群に大別して記す。4群は暗褐色を呈する粘土である。3群は17~22層が廃絶時の埋め戻し土を示し、標高0.7m程度まで埋めた段階で、多量の炭化物や

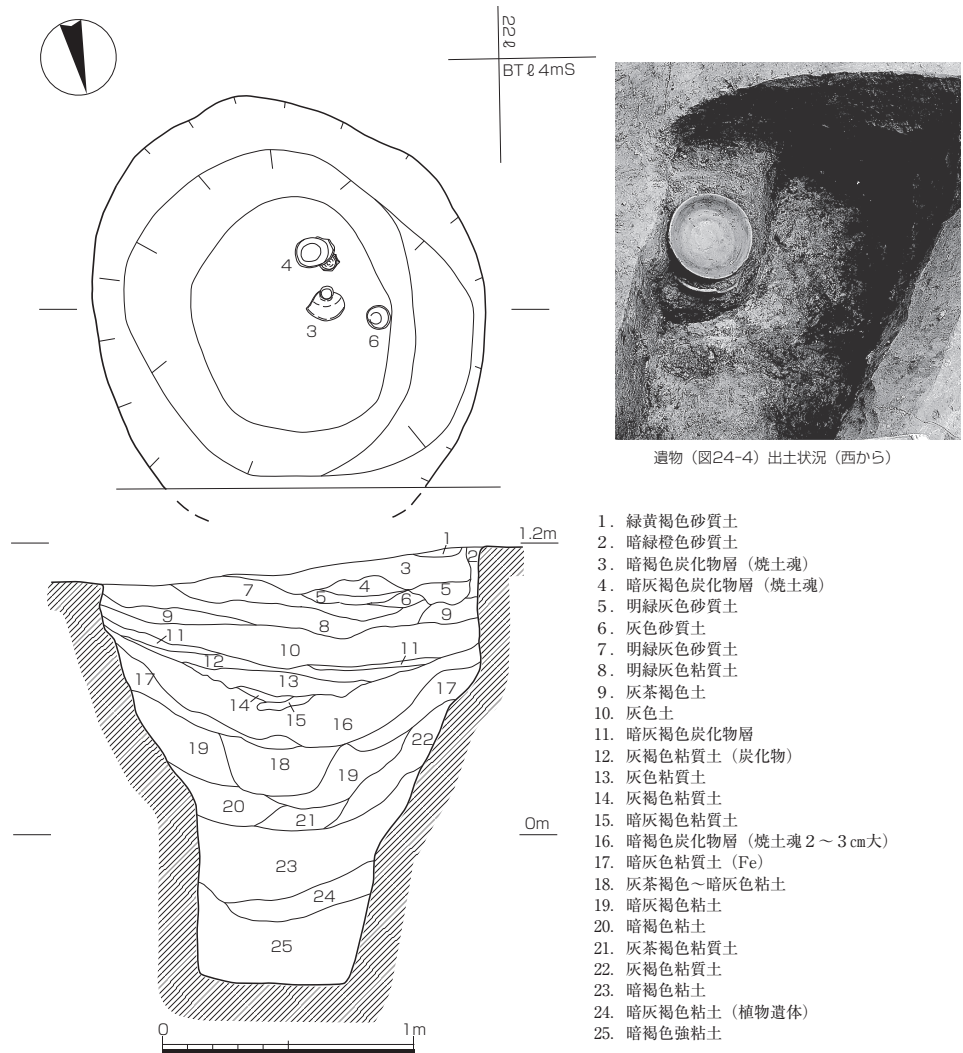


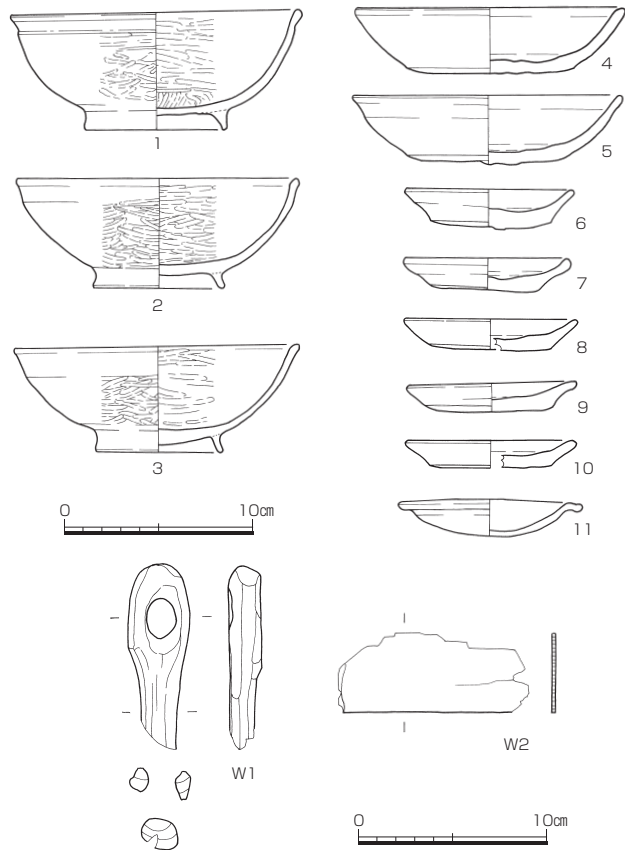
図23 井戸4(縮尺1/30)

焼土塊を含む16層の堆積が認められる。この段階で火の使用を伴う祭祀行為が想定される。さらに2群も埋め土層と考えられ、灰色系の粘土層（13～15層、8～10層）と、炭化物混入層（11・12層）が互層状に堆積する。1群は焼土・炭化物を多く含み、この段階にも火の使用が窺われる。

出土遺物はコンテナ（28 $\frac{1}{2}$ 箱）で1／2箱分が出土した。土師器杯（図24-4）は、1群3層中、同図3・6は3群16層中でそれぞれ炭化物層からの出土である。そのほか中世前半の土師器椀・杯・皿・鍋片、白磁碗小片、木器等が確認された。

本遺構では16層の土壌を持ち帰り種子の抽出・同定を行った（第4章第2節参照）。本遺構では16科27種の種子が確認されている。栽培植物や畑地雑草が主体であり、イネ・コムギ・ナルコビエ等のイネ科、スゲ・ホタルイ等のカヤツリグサ科のほかツルマメ等が含まれる。

本遺構の時期は、出土遺物から11世紀後葉～12世紀前葉に比定される。



番号	器種	口径：cm	底径 高台径：cm	器高：cm	残存 -：1/6以下	特徴	色調	胎土
1	土師器 椀	15.4	7.45	6.1～6.4	口～体部1/3 高台1/1	内外：篋ミガキ密・暗色化、底外：押圧、高台：幅広粘土帯・横ナデ・被熱（表面劣化）、口：強い横ナデ	灰白 10YR8/2、2.5Y8/1	1～2mm砂礫
2	土師器 椀	15	6.6×7	5.85	口1/2 高台1/1	内外：篋ミガキ密（外面は6分割の可能性）・煤（重焼の影響？）、底外：ナデ・丸み、3に類似	灰白 2.5Y8/2	1～3mm砂礫多
3	土師器 椀	15.3	6.65	5.5～5.7	口2/3 高台1/1	内外：篋ミガキ密、口：煤付着・端部は被熱（表面劣化+暗色化・重焼の影響？）、底外：ナデ・丸み、2に類似	灰白 2.5Y8/1	1～2mm砂礫多
4	土師器 杯	14.4	8.5	3.6	完存	回転ナデ、体部内：工具使用のナデ、底外：篋キリ+板目痕	淡赤橙～灰褐 2.5YR7/4、5YR6/2	1mm砂多 赤色粒・雲母多
5	土師器 杯	14.3	7.8	3.3～3.5	口1/4 底1/3	回転ナデ、底外：板目痕、底内：仕上げナデ・押圧、煤付着、被熱で橙色化	鈍黄橙（底）灰黄褐 10YR7/3、10YR6/2	1mm以下砂
6	土師器 皿	8.95	6.5	2.1	ほぼ完存	回転ナデ、底内：仕上げナデ、底外：篋キリ+板目痕、厚手、シャープな仕上げ、硬質感	橙 5YR7/6	きめ細かい
7	土師器 皿	8.95	5.7	1.6～1.8	口5/6 底1/1	回転ナデ、底内：仕上げナデ、底外：篋キリ、磨滅	灰白、一部橙 2.5Y8/2、5YR7/6	1～2mm砂礫多 赤色粒少
8	土師器 皿	9.1	6.7	1.6	2/3	回転ナデ、底内：仕上げナデ、底外：篋キリ+板目痕不明瞭、口内：一部煤付着	明橙灰～鈍橙 7.5YR7/2～3	きめ細かい 赤色粒少
9	土師器 皿	9	6.4×6.8	1.4～1.7	口1/2 底3/4	回転ナデ、底内：仕上げナデ、底外：篋キリ+板目痕、磨滅	灰白～鈍黄橙 10YR7/1～3	1mm砂少、赤色粒 きめ細かい
10	土師器 皿	9	6.6	1.4	1/3	回転ナデ、底内：仕上げナデ、底外：篋キリ、シャープで硬質感、6にやや類似	鈍橙 7.5YR6/4	きめ細かい
11	土師器 皿	9.7	—	2	ほぼ完存	ナデ、底部：押圧・丸底、全体磨滅・歪み、手の字口縁、京都系	灰白 10YR8/2	きめ細かい 赤色粒少

番号	器種	残存長 (cm)	残存幅 (cm)	厚 (cm)	樹種	木取り	特徴
W1	柄?	9.8	3.2	1.7	—	—	下側欠損
W2	曲物 側板	10.1	4.2	0.2	コナラ属クスギ節	柁目	両端欠損

図24 井戸4出土遺物

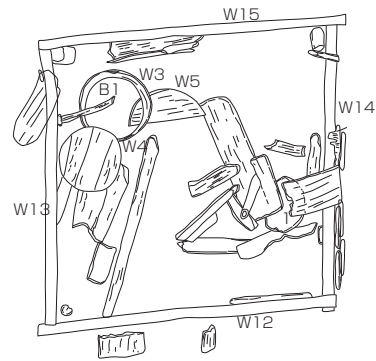
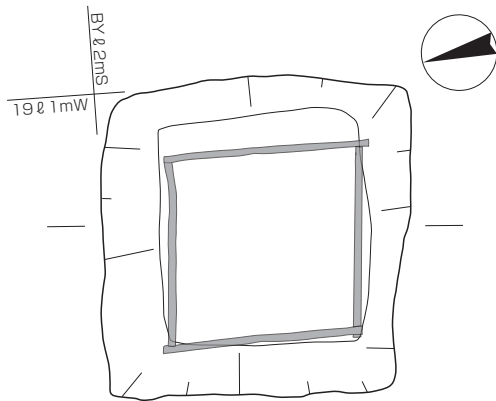
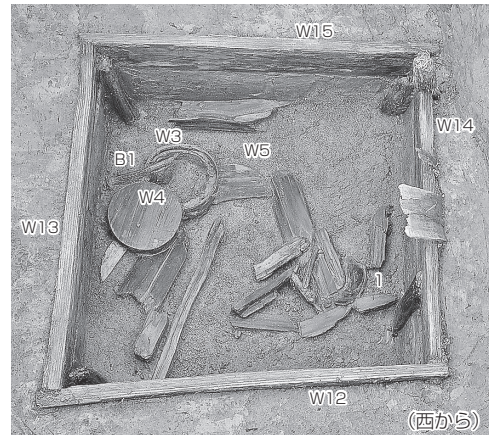
井戸5（図25～27、図版6）

西区北東、BY19区に位置する。検出面の標高は1.4mを測り＜6層＞に対応する。上面で一辺1.2mの方形を呈し、底面では0.95m角の方形をなす。底部に0.8m角の方形枠を設置する方形縦板組の井戸である。底面の標高は-0.05m、検出面からの深さ1.45mを測る。

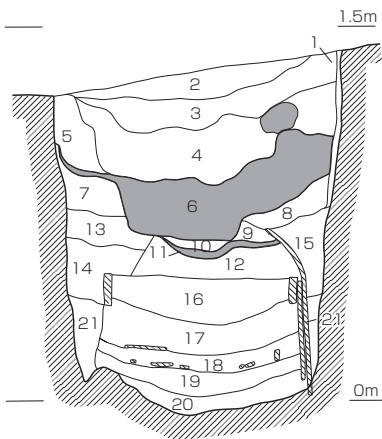
調査の記録

埋土は21層に分けた。1層は杵材の痕跡と考えられる灰色粘質土である。本井戸の南辺以外では確認されていないため、他辺の杵材は抜き取られたと考えられる。2・3層は青灰色を基調とし、灰色土ブロックを混入する。埋め土と考えられる。6層の炭層を主体とする4～6層では火の使用が窺われる。これらの層は40cmを超える厚みをもって堆積している。7・8層の灰色粘質土を挟み、下層の9～12層および16～18層は、方形井戸枠内の埋め土である。13～15層は枠外の埋め土にあたる。

井戸の断面で確認される21層は掘り方の裏込め土にあたる。13～15層、および7・8層もその可能性がある。井戸枠内の20層は砂を含み、使用時の堆積土と考えられ、廃絶に際し19層上面に土器・木製品などを置き、その後12・16～17層が堆積する。少なくとも、9



井戸枠内出土状況 (s=1/20)



1. 灰色土 (杵の痕跡か)
2. 青灰色土 (暗灰色粘土ブロック)
3. 明青灰色土 (灰色粘土ブロック)
4. 黒色混淡灰色土 (炭・灰・焼土)
5. 淡褐色土 (明灰色砂)
6. 淡黒色砂質土 (炭・灰・焼土)
7. 淡オリーブ灰色土
8. 淡オリーブ灰色土 (焼土)
9. 黒色混淡灰色土 (炭・灰・焼土)
10. 淡灰色土 (焼土)
11. 淡黒色砂質土 (炭・灰・焼土)
13. 灰色粘質土
14. 青灰色混灰色粘質土
15. 灰色粘質土
16. 暗オリーブ灰色粘質土
17. 暗灰色粘質土
18. 黒灰色粘質土 (植物遺体)
19. 灰色砂
20. 砂混じり紫灰色粘質土 (植物遺体)
21. 紫灰色粘質土



番号	器種	口径: cm	底径 高台径: cm	器高: cm	残存 - : 1/6以下	特徴	色調	胎土
1	土師器 椀	15.2	7	5.8~6.1	□3/4 高台1/1	内外: 窺ミガキ密、底外: ナデ・平坦、高台端部は被熱で細かく破損、厚手、器厚は均一で端正な形状、内外煤付着(特に外面に厚くて調整不鮮明)	黄灰 2.5Y6/1	1mm砂
2	土師器 皿	9.2	6.8	1.8	□- 底1/4	回転ナデ、底内: 押圧、底外: 窺キリ(ロクロ回転左)、厚手	鈍橙 7.5YR7/4	0.5~1mm砂多
3	土師器 皿	9	6.5	1.8	1/4	回転ナデ、底外: 窺キリ	(淡)黄灰 2.5Y7/2	きめ細かい 赤色粒少

図25 井戸5・出土遺物(1) (縮尺1/30・1/4)

～11層および6層の段階に火を使用する行為が窺われる。

井戸枠材としては椀木の4本と側板7枚が原位置で検出された。椀木の上面レベルは標高0.5mを測る。椀木の内側の北東角と北西角には角材を打ち込み固定している。側板は南辺西半に内に4枚、外側に3枚が残っていた。側板の幅は0.13～0.15m、高さは最大0.7mが残る。椀木より上位は、埋土の重みにより内側に傾いて検出された。側板にはいずれもスギを用いている。

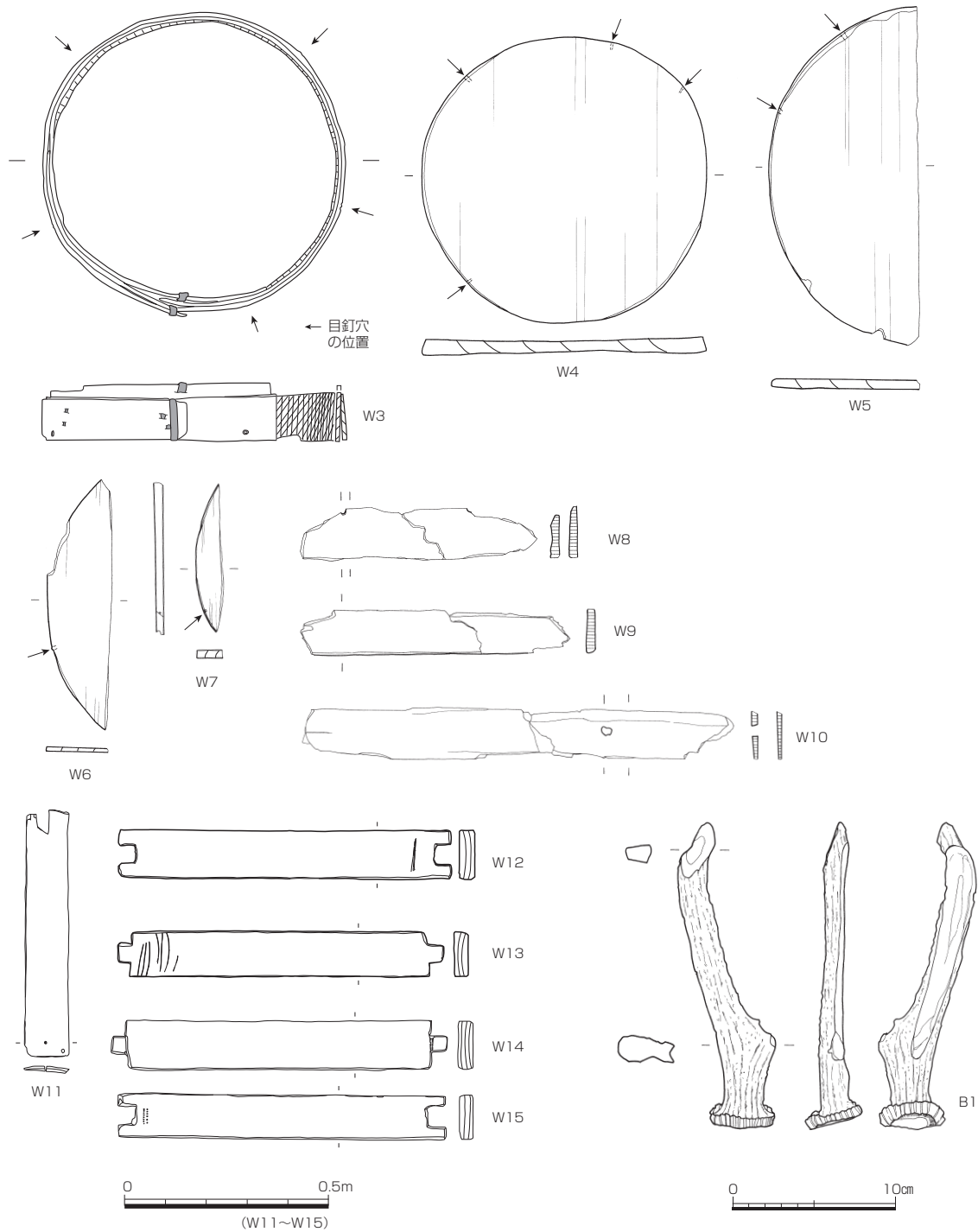


図26 井戸5出土遺物(2) (縮尺1/4・1/6)

図26観察表

番号	器種	残存長(cm)	残存幅(cm)	厚 (cm)	樹種	木取り	特徴
W3	曲物 籬	18.5	18.5	0.6-1.5	-	榎目	側板は2枚、内側を1重に綴じ、最大3枚重なる部分あり、内外の側板をそれぞれ皮綴、皮綴じは3か所、下側に目釘穴5か所、縦・斜め方向のケビキ
W4	曲物 蓋	17.5	17.14	1	-	榎目	目釘穴側縁に4か所、表裏面平滑
W5	曲物 底板	20.7	9.1	0.7	-	榎目	目釘穴側縁に3か所、そのうち釘1か所残存
W6	曲物 底板	15.4	3.8	0.3	-	榎目	目釘側縁に1か所
W7	曲物 底板	9.2	1.6	0.5	-	榎目	目釘側縁に1か所
W8	曲物 側板	3.2	14.4	0.5	スギ	榎目	表裏面平滑、目釘穴2か所
W9	曲物 側板	2.7	16.4	0.6	モミ属	榎目	表裏面平滑
W10	曲物 側板	3.2	26.4	0.4	モミ属	榎目	目釘穴1か所残存
W11	板材	60.7	10.9	1.6	スギ	-	下端中央に目釘穴1か所
W12	井戸枠・棧木(平ほぞ凹形)	83.8	12	3.8	-	板目	両木口に平ほぞ造り出し、一部のこぎり痕、東側に位置
W13	井戸枠・棧木(平ほぞ凸形)	80.1	11	3.5	-	板目	両木口に平ほぞ造り出し、一部のこぎり痕、南側に位置
W14	井戸枠・棧木(平ほぞ凸形)	82.5	11.8	3.7	-	板目	両木口に平ほぞ造り出し、一部のこぎり痕、北側に位置
W15	井戸枠・棧木(平ほぞ凹形)	80.7	10.8	3.2	-	板目	両木口に平ほぞ造り出し、一部のこぎり痕、西側に位置
番号	器種	長さ:cm	幅:cm	厚さ:cm	特徴		
B1	鹿角	18.7	3.5	3.5	刃物で表面を人為的に剥離・切離(3か所)		

出土遺物は19層上面(18層中)から多く検出した。図25-1の土師器椀、図26-W3・W4・W5等から複数の曲物がこの面に置かれたものと考えられる。W3は曲物の蓋であり、その上に鹿角製品(同-B1)が置かれる。B1は二ホンジカの角を加工した製品であるが、どのように使用されたものか特定はできていない。W4~W7は曲物底板、W10~12は曲物側板である。このほかにも側板の破片が出土した。この面出土の木材樹種にはスギ・モミ属・スダジイ等複数の種類が見られる。

本井戸の埋土のうち井戸枠内の16~18層及び炭層である6層の土壌を持ち帰り、種子の抽出・選別を実施した(第4章第2節参照)。本遺構からは215個体の種子を抽出し、38科103種を同定した。イネ・オオムギ・コムギ等のイネ科、ナズナ・スカシタゴボウ等のアブラナ科、ヒョウタン・雑草メロン等ウリ科などの食用植物、栽培植物のほか、田畑雑草などが多く確認されている。

本遺構の時期は出土遺物から11世紀後葉~12世紀前葉に比定される。前述の掘立柱建物1が上位に重複している。井戸枠を据えた井戸は後述する井戸6・7とあわせて3基認められた。井戸6は本井戸から北に35m、井戸7は本井戸から東へ30mにある。

井戸6(図27・28、図版7)

調査区北区北端、BR22区に位置する。検出面の標高1.0m、底面の標高-0.8mを測る。検出面からの深さ1.8mを測る。本遺構の北側・東側は調査区外となり確認できていない。また本遺構の上部に溝23が東西方向に走行している。

本遺構の上面は隅丸方形の北辺・東辺が失われ、東西1.3m、南北1.4mのいびつな方形を呈している。また本遺構には井戸枠が設置されており、本来は保存状況が良かったものと考えられるが、本調査のための矢板の打ち込みに伴い、井戸枠の東辺を中心に大きく破損している。棧木についてははろうじて原位置に近いところで記録を行い、側板については南辺・西辺の枠材を取り上げることができた。下面の規模は、残る井戸枠の形状から一辺0.7~0.8mの方形をなすものと考えられる。断面形は底面から標高0.7mまでは筒状をなし、それより上位が開く形状をなしている。

埋土は13層に分けた。1~9層は井戸枠内の堆積土、10・11層は掘り方埋土、12・13層は木材痕跡と考えられる。枠内埋土中、9層は暗青灰色粗砂層で湧水層に達している。6~8層は灰色~暗灰色粘質土、1~5層はブロックを多く含む埋め土と考えられる。

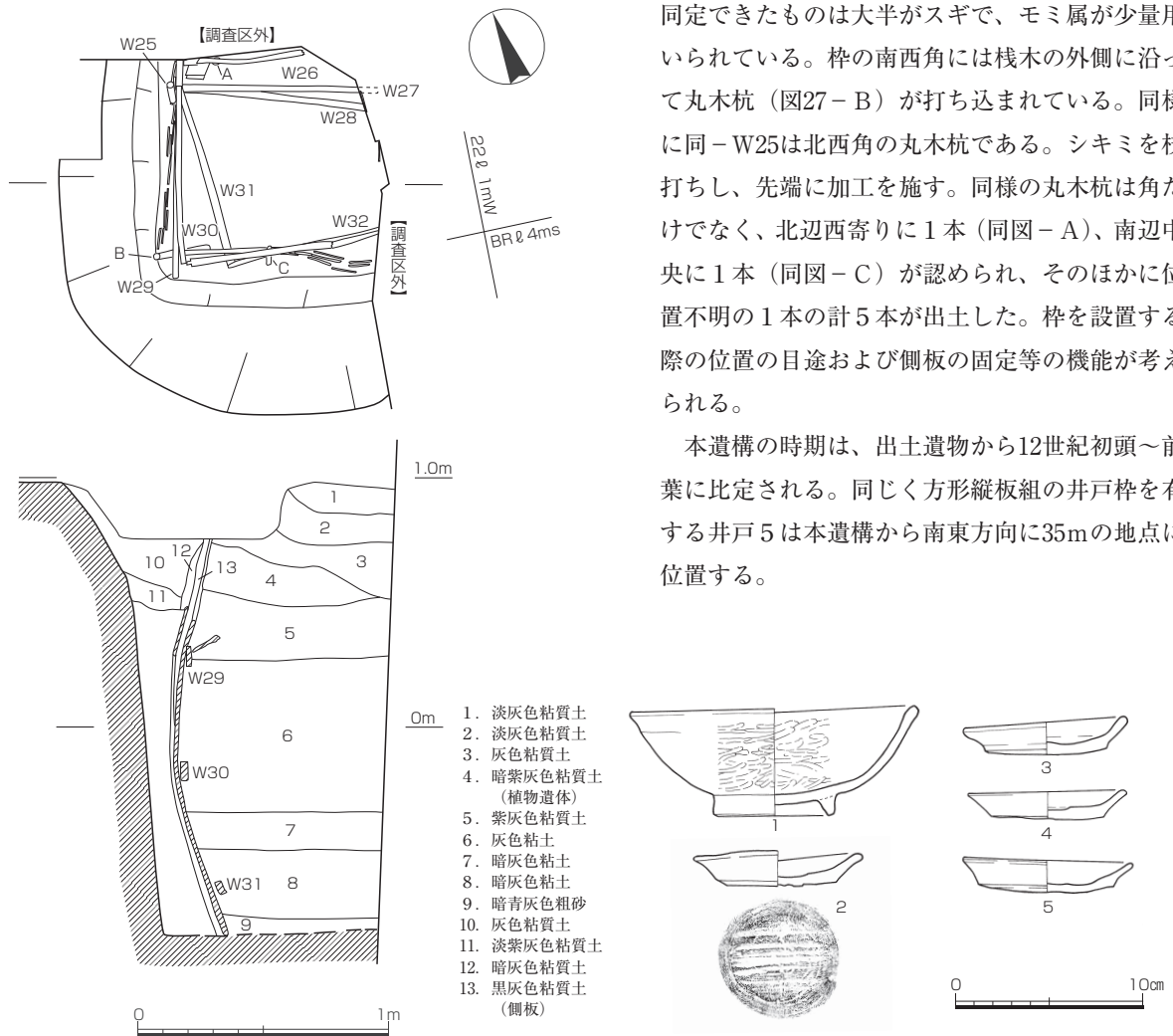
出土遺物はコンテナ(28^{リットル}/箱)1箱である。本遺構は、前述の弥生時代~古墳時代初頭の落ちを切っており、本遺構の調査中に落ちの遺物を多数取り上げた。ここでは明らかに落ち由来の遺物は除外し、報告する。中世前半の土師器椀・杯・皿類はポリ袋(12号)4袋が出土した。図27-1の土師質土器椀、4の皿は5層上面付近に

正位置で、同図2・3の皿は6層中から出土した。

井戸枠の構造は、方形縦板組であり、上・中・下三段の栈木により側板を固定するものである。栈木は8点を掲載した(図28-W26~33)。そのうち7本は位置がわかり、上段の北栈木(W26)は凸木、西栈木(W29)は凹木、中段の北栈木(W27)は凸木、西栈木(W30)は凹木、下段の北栈木(W28)・南栈木(W32)は凹木、西栈木(W31)は凸木である。以上の7本は長さ0.88~0.91mと揃うが、W33とした凹栈木は長さ1.11mを測り、組み合わせない。他の遺構からの転用の可能性が考えられる。側板は幅9~11cmで長さ1.12~1.5mが残る。検出時には中段・下段の栈木は位置がずれており、栈木と側板の固定がされていたかの確認はできなかった。西辺・南辺の

側板は2重あるいは3重に設置されており、樹種同定できたものは大半がスギで、モミ属が少量用いられている。枠の南西角には栈木の外側に沿って丸木杭(図27-B)が打ち込まれている。同様に同-W25は北西角の丸木杭である。シキミを枝打ちし、先端に加工を施す。同様の丸木杭は角だけでなく、北辺西寄りに1本(同図-A)、南辺中央に1本(同図-C)が認められ、そのほかに位置不明の1本の計5本が出土した。枠を設置する際の位置の目途および側板の固定等の機能が考えられる。

本遺構の時期は、出土遺物から12世紀初頭~前葉に比定される。同じく方形縦板組の井戸枠を有する井戸5は本遺構から南東方向に35mの地点に位置する。



番号	器種	口径: cm	底径 高台径: cm	器高: cm	残存 -: 1/6以下	特徴	色調	胎土
1	土師器 碗	15.3	6.5	5.5~5.9	完存	内外: 窺ミガキ(やや幅広)、底外: ナデ・丸み、高台端部平坦、内面上部被熱(表面劣化)、厚手	(内)灰白~浅黄(外)灰白 2.5Y8/1~2, 2.5Y7/3	1~3mm砂礫
2	土師器 皿	9	6.4	1.7	完存	回転ナデ、底内: 仕上げナデ、底外: 窺キリ(ロクロ回転左)+板目痕、口縁一部に煤、重ね焼きの影響で内外色調が異なる。	(内)鈍黄橙(外)鈍橙 10YR7/4, 7.5YR6/4	きめ細かい、赤色粒少
3	土師器 皿	8.8	6.6	1.4~2	完存	回転ナデ、底内: 仕上げナデ、底外: 窺キリ(ロクロ回転左)	鈍橙 7.5YR7/3~4	0.5mm以下砂多 4mm礫
4	土師器 皿	8.2×8.5	6	1.55	完存	回転ナデ、底内: 仕上げナデ、底外: 窺キリ(ロクロ回転左)	浅黄 2.5Y7/3~4	0.5mm以下砂多 4mm礫
5	土師器 皿	9.1	7.3	1.6~1.9	1/2	回転ナデ、底内: 仕上げナデ、底外: 窺キリ+板目痕、薄手でやや深い形状	灰白 2.5Y8/2	1mm砂多、3mm礫

図27 井戸6・出土遺物(1) (縮尺1/30・1/4)

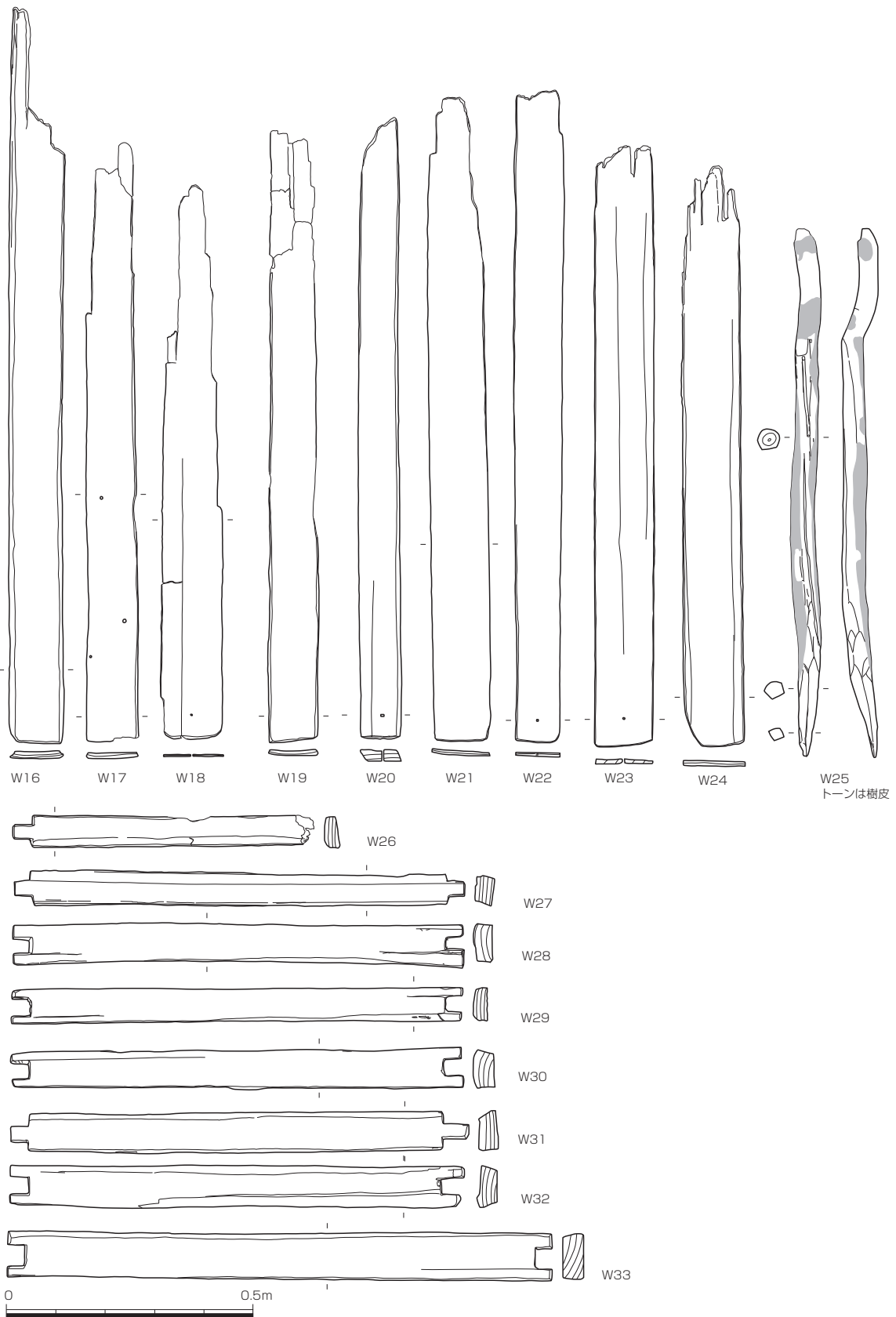


図28 井戸6出土遺物(2) (縮尺1/12)

図28観察表

番号	器種	残存長 (cm)	残存幅 (cm)	厚 (cm)	樹種	木取り	特徴
W16	板材	149.5	11.2	1.5	スギ	板目	割り割き製材、上端欠損、南側に位置
W17	板材	121.3	10.5	1.2	モミ属	板目	割り割き製材、上端欠損、南側に位置
W18	板材	112.5	12.6	0.5	スギ	板目	割り割き製材、下端に目釘穴1カ所、上端欠損、南側に位置
W19	板材	124.2	10	1	スギ	板目	割り割き製材、上端欠損、西側に位置
W20	板材	127.2	8.7	2.3	スギ	板目	割り割き製材、下端に目釘穴1カ所、上端欠損、西側に位置
W21	板材	130.6	11.6	1	スギ	板目	割り割き製材、上端欠損、西側に位置
W22	板材	132.3	8.9	0.8	スギ	板目	割り割き製材、下端に目釘穴1カ所、上端欠損、西側に位置
W23	板材	121.8	9.5	1	スギ	板目	割り割き製材、下端に目釘穴1カ所、上端欠損、西側に位置
W24	板材	117.8	12.5	1	スギ	板目	割り割き製材、上端欠損、西側に位置
W25	杭	107	4.5	4	シキミ	-	先端を手斧で加工
W26	井戸枠・棧木 (平ほぞ凸形)	56.2	6.2	3.1	スギ	板目	両木口に平ほぞ造り出し、一部のこぎり痕、北側に位置
W27	井戸枠・棧木 (平ほぞ凸形)	91.5	7.1	4	-	板目	両木口に平ほぞ造り出し、一部のこぎり痕、北側に位置
W28	井戸枠・棧木 (平ほぞ凹形)	91.5	7.7	3.8	スギ	板目	両木口に平ほぞ造り出し、一部のこぎり痕、北側に位置
W29	井戸枠・棧木 (平ほぞ凹形)	91.8	6.8	2.9	-	板目	両木口に平ほぞ造り出し、一部のこぎり痕、西側に位置
W30	井戸枠・棧木 (平ほぞ凹形)	91.9	7.7	4.1	-	板目	両木口に平ほぞ造り出し、一部のこぎり痕、西側に位置
W31	井戸枠・棧木 (平ほぞ凹形)	88	8.1	4	-	板目	両木口に平ほぞ造り出し、一部のこぎり痕、西側に位置
W32	井戸枠・棧木 (平ほぞ凹形)	92.3	8.4	4	-	板目	両木口に平ほぞ造り出し、一部のこぎり痕、南側に位置
W33	井戸枠・棧木 (平ほぞ凹形)	110.4	9.2	4.2	-	板目	両木口に平ほぞ造り出し、一部のこぎり痕、南側に位置

井戸7 (図28・29、図版8・9、オルソ図1～5)

東区東部、CA14区に位置する。本遺構の北西角はコンクリート基礎により破壊されており、上面も標高0.65mまで破壊されている。検出面の標高0.65m、底面の標高-0.6m、検出面からの深さ1.15mを測る。掘り方は東西2.4m、南北2.25mの八角形に近い不整な方形を呈する。掘り方内に方形縦板組の井戸枠を設置する。その規模は一辺1.1mで高さ1.1～1.2mが残る。

枠内の埋土は10層、掘り方の埋土を9層に分けた。枠内埋土のうち10層は使用時の堆積層である。6・7層中にあたるレベルである-0.1～0m付近で、0.4×0.6mに木の皮状のものが認められ、その上下に土師質土器椀 (図30-1・2)、皿 (同図-5)、曲物 (図31-W34・35)、被熱礫等の遺物がまとまって出土した。1～5層は暗緑灰色～暗灰褐色を呈する粘質土層で、埋め土と考えられる。掘り方埋土は、1～5層を1群、6～9層を2群と分けた。掘り方はその形状と埋土の特徴を併せ、少なくとも1度の改修が行われていると考えられる。1群の埋土が改修時の埋土であり、平面的には本遺構西半に堆積が認められる。

遺物は比較的少なく、ポリ袋 (12号) で4袋が出土した。井戸枠内で土師器椀 (図30-1・2)・杯 (同-3)・皿・脚台皿 (同-5) が出土した。掘り方からは土師器皿1点のほか、土器小片がわずかに数点出土した。

井戸枠の構造をみてみよう。本遺構は標高0.65～0.7mまで後世の破壊が及んでいるが、それ以下に高さ1.2mの井戸枠が比較的良好に残っていた。井戸枠の側面は、一辺に15～37枚の板材を二重・三重に並べて構成されている (巻末オルソ図版1～5、表5参照)。調査時に取り上げ、樹種の同定ができた側板材は87枚、うち76枚がスギ、残り11枚がコウヤマキである。この樹種の状況から本来スギを用いて設置し、補修にコウヤマキを使用したことが窺われる。南側面は四重に側板を重ねており (オルソ図版1)、内側から1列目に8枚 (1～8)、2列目7枚 (9～17)、3列目10枚 (18～27)、4列目に5枚 (28～32) を確認した。南側面の側板は幅7.7～20cmの板材を用い、平均幅は10.6cm、長さは0.72～1.36mを測る。東側面は二重の側板で構成され、内側から1列目に5枚 (36～40)、2列目に7枚 (41～47)、2列目の隙間を埋めるように3列目に3枚 (48～50) が確認される。東側面の側板幅は8.6～25cm、平均値は20.7cm、長さは0.7～1.36mを測る。北側面は二重で構成される。1列目は7枚 (51～57)、2列目は8枚 (59～64) を連ねる。板材幅は9.5～24.5cm、平均幅は19.8cm、長さは0.67～1.19mを測る。西側面は1列目4枚 (67～70) と2列目3枚 (71～73) は内側にずれ落ちた状況で確認された。3列目の3枚 (75～77) は原位置で確認した。西側面の側板幅は7.8～25.8cmと、幅広のものが多く、平均値は19cm、長さは0.7～1.25mを測る。使用された板材のサイズでは南側面が10cm前後の狭い材であるのに対し、他の三面では幅20cm前後の材である点が異なる。コウヤマキの補充が多く見られるのも南側面であり、掘り方での改修の痕跡が南西側で確認されることと対応するものと考えられる。以上のように並べた側板を内側から二段の棧木で固定している。棧木は

標高0m付近に下段、標高0.4m付近に上段を組み、上下の栈木の間を支える材（以下、支木と称する）を渡している。支木は栈木の両端に組み合わせて嵌め込むものと考えられる。4つの角に上下2本、計8本が設置されるのが本来の姿であろう。上段と下段の栈木の間にはめる支木（83~85）の上端・下端とも、栈木と側板の隙間に差し込むように薄く加工される。下段の栈木と底面との間にはめる支木の下端は先端を尖らせる加工を施したものの（83・85）と平坦なもの（84）の両方が見られる。後述するように、西側面の崩落により他の側面にもその影響が及んでいる。北側面の栈木上段は西側が下がるが4本の支木はほぼ原位置で確認できた。南側面の栈木は上段・下段とも、西側が下がって検出され、支木は東側は現位置で上下2本、西側は上段の1本のみが確認できた。下段の支木は西側面の崩落とともに失われた可能性が高い。また東側面では角とは別個に上段の支木が1本確認された。

栈木の組み合わせ部分はほぞ穴により固定し、支木に嵌め込むにも釘等はいない工法である。側板の材のいずれにも釘穴は認められない。検出時には、西側面の栈木が上下ともなく、側板が前列4枚・後列4枚とも大きく内側にずれ込んでいた。西側面の南西角、北西角の数枚の側板はそれぞれ原位置を保っていると判断した。西

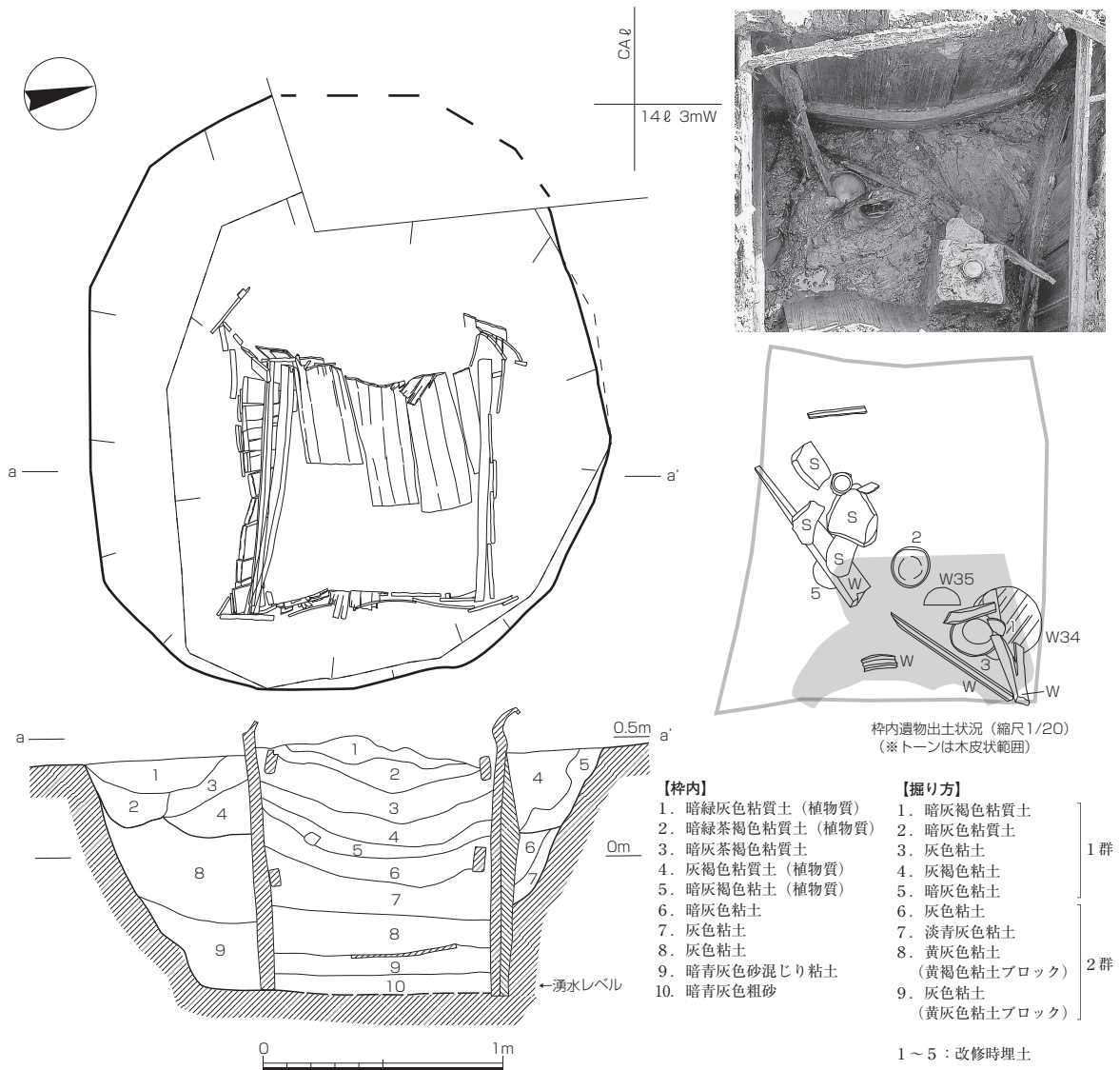
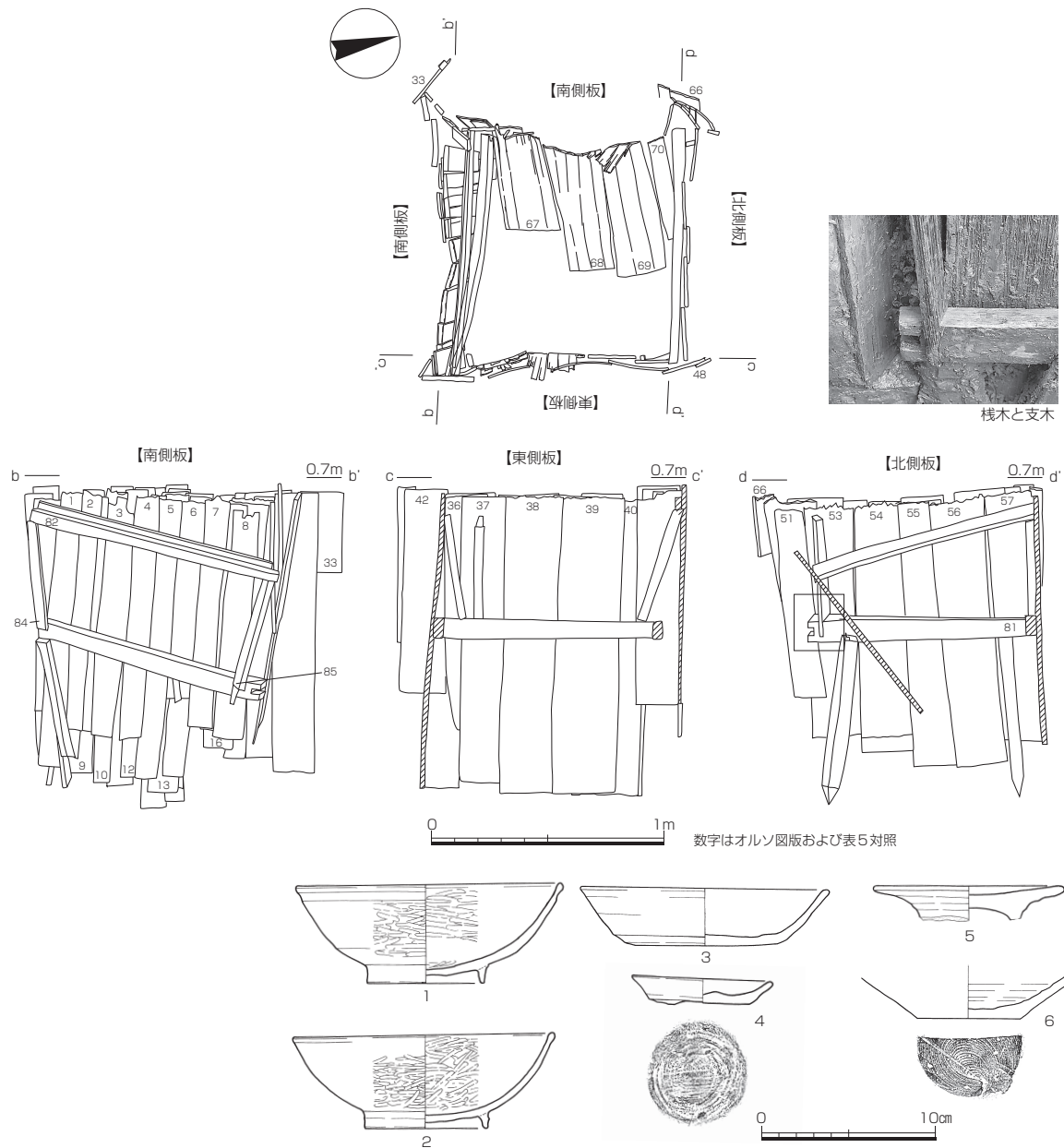
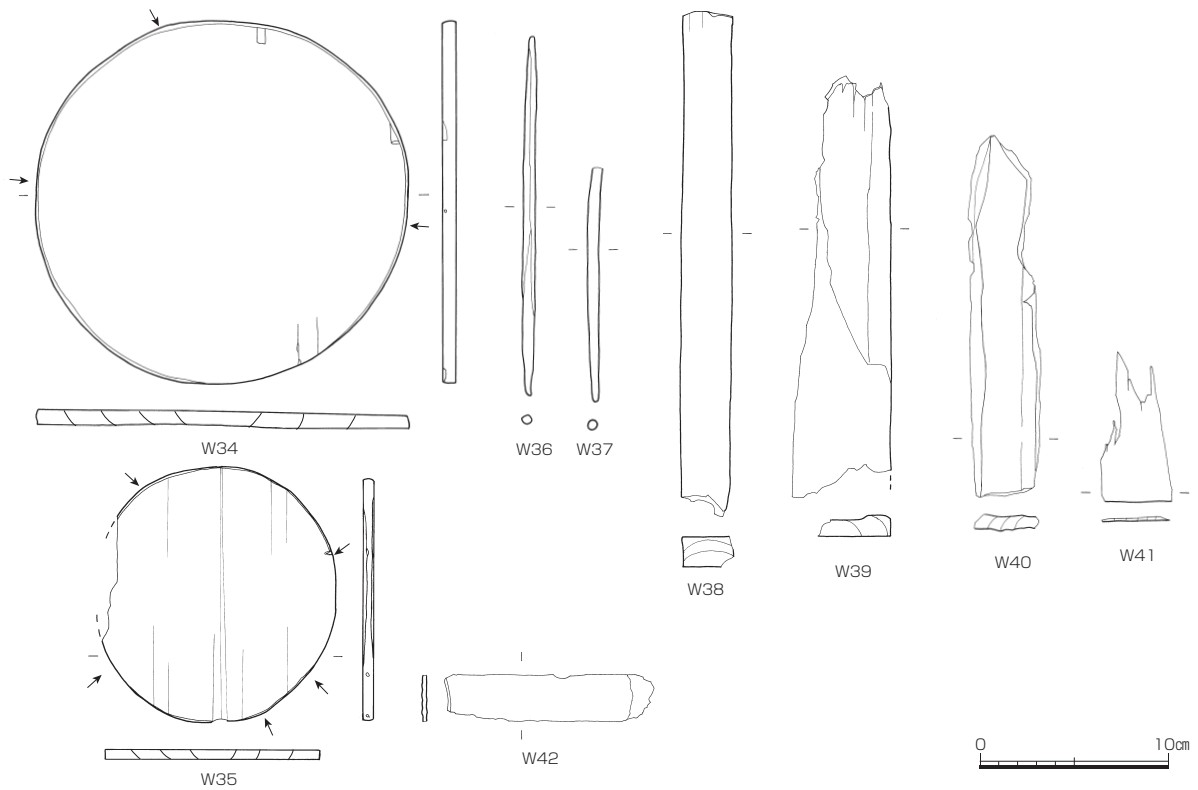


図29 井戸7・遺物出土状況（縮尺1/30・1/20）



番号	器種	口径: cm	底径 高台径: cm	器高: cm	残存 - : 1/6以下	特徴	色調	胎土
1	土師器 碗	15.1×15.4	6.9	5.6~5.8	口3/4 底1/1	内外: ミガキ密(幅広)、内面下半ミガキ消失(使用痕?)、口: 強い横ナデ、底外: 押圧、高台: 貼付けの横ナデ(幅広)、口内: 被熱(煤+表面劣化)、外: 油煙痕、角ばった体部形態、厚手、器厚不均一、やや雑な仕上がり	灰白~灰黄 2.5Y8/1、2.5Y7/2	1mm礫
2	土師器 碗	14.6×15.1	7.1	5.3~5.5	完存	内外: ミガキ密、体~底外: 押圧、高台: 貼り付けの横ナデ(幅広)、底内: 重焼痕、外: 煤、器厚均一、端正な仕上がり、丸みを帯びる形状、口縁部横ナデは弱い。	灰白、一部鈍黄橙 5Y8/1~2、10YR7/4	1~2mm砂礫
3	土師器 杯	14.9	9.1	3.2	口1/4、底1/1	回転ナデ、底内: 仕上げナデ、底外: 窺キリ(ロクロ回転左)+板目痕	鈍黄橙 10YR7/3	1mm砂、赤色粒少
4	土師器 皿	8.1	5.7	1.3~1.7	完存	回転ナデ、底内: 仕上げナデ、底外: 窺キリ(ロクロ回転左)+板目痕	(灰)白、一部橙 5Y8/1、7.5YR7/6	1mm砂
5	土師器 脚台付皿	11	-	-	1/4	回転ナデ、脚部破断面部は2次加工か?、断面被熱(橙色化)、全体の1/4は黒斑状(暗灰色N3/)	灰白 2.5Y8/1~2	1mm以下砂少 きめ細かい
6	須恵器 碗	-	5.9	-	1/2	回転ナデ、脚部破断面部は2次加工か?、断面被熱(橙色化)、全体の1/5は黒斑状(黒色)	(灰)白(一部)灰 N8/、N4/	0.5~1mm砂僅少 きめ細かい

図30 井戸7井戸枠・出土遺物(1) (縮尺1/30・1/4)



番号	器種	残存長 (cm)	残存幅 (cm)	厚 (cm)	樹種	木取り	特徴
W34	曲物 底板	14	14.5	0.7	-	板目	目釘穴3カ所残存、表裏面平滑
W35	曲物 底板	13.5	12.5	0.3	-	-	目釘穴5カ所残存、表裏面平滑
W36	箸	19	0.7	0.5	-	-	両端を加工
W37	箸	22.4	0.6	0.5	-	-	先端を加工、上端欠損
W38	くさび	26.7	2.7	1.6	-	-	表裏面平滑、下端欠損
W39	板材	19.2	3.9	0.9	-	-	表裏面平滑、井戸枠片?
W40	板材	8	3.7	0.2	-	-	表裏面平滑、井戸枠片?
W41	板材	22.3	5.2	1.1	スギ	-	表裏面平滑、井戸枠片?
W42	曲物 側板	11	1.4	0.2	-	柱目	表裏面平滑

図31 井戸7出土遺物(2) (縮尺1/4)

側面の西側はコンクリート基礎が構築されており、その際の影響も考えたが、検出時の状況からは、井戸が開いている段階に西側面が崩落したことが想定される。井戸枠の角の外側には、側板とは異なる形状の板が打ち込まれる（オルソ図-33・65・66・79・80）。設置時の目印あるいは何らかの祭祀的な行為を示す可能性がある。

井戸枠内の土壌を持ち帰り、種子の抽出・同定を行った（第4章第2節参照）。本遺構では38個体を抽出し、18科25種の植物種子を確認した。雑草メロン（ウリ科）・オオバコ（オオバコ科）のほか、アゼナルコスゲ・コゴメガヤツリ（カヤツリグサ科）等の田畑雑草が含まれる。

本遺構の時期は12世紀前半に比定される。方形縦板組の井戸は井戸5～7の3基が11世紀後半～12世紀前半に確認された。本遺構は井戸5の東30mほどに位置する。

井戸8 (図32・33、図版10)

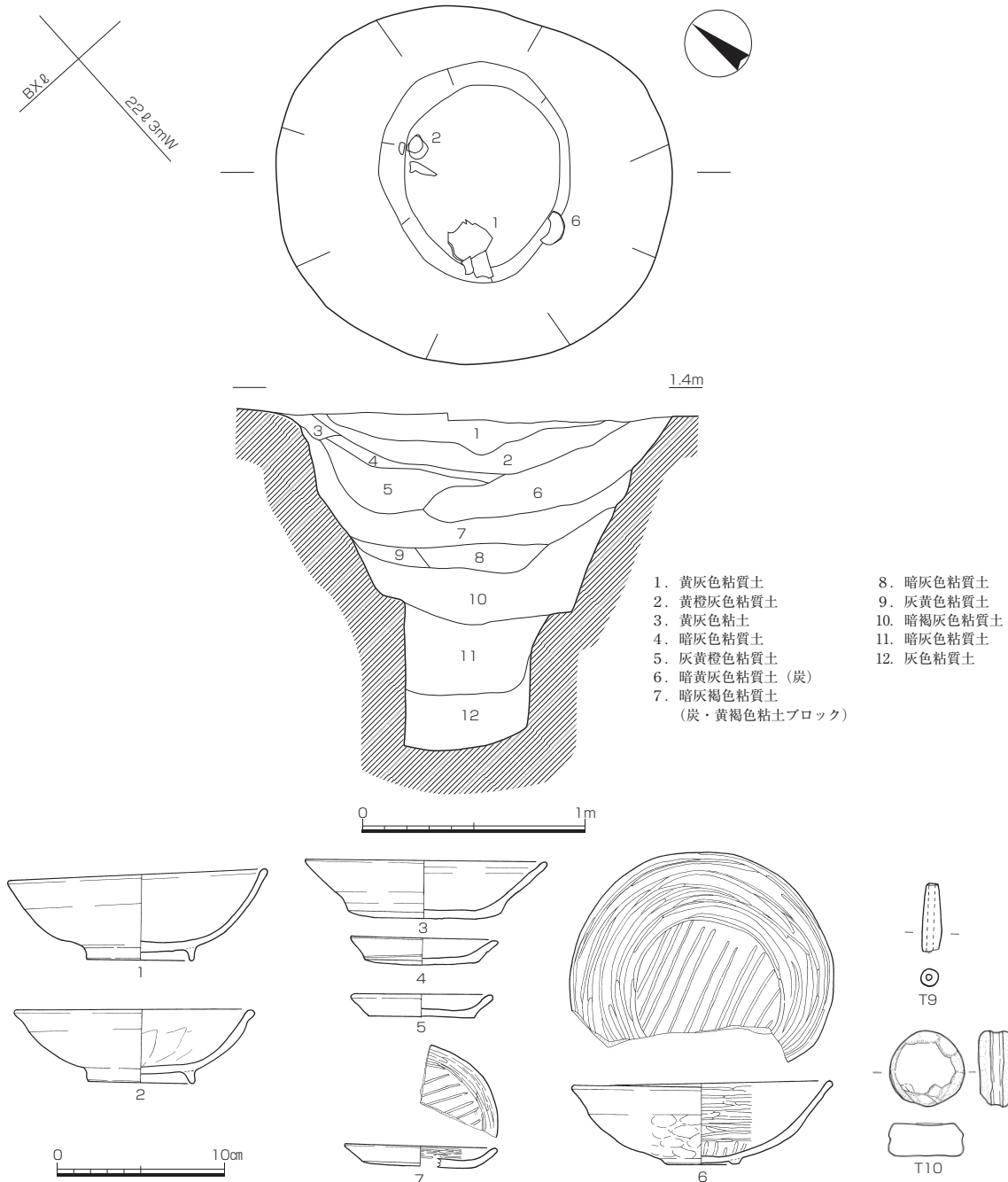
北区南端、BW22区に位置する。検出面の標高1.25m、底面の標高-0.25mを測り、検出面からの深さは1.5mに及ぶ。上面で1.75×1.6mの楕円形、下面では径0.6mの円形を呈する。断面形は底面から標高0.4m付近まで、筒状に立ち上がり、ここで段を設けて、上位に向かって広がるY字状をなしている。

埋土は12層に分層した。下層の10～12層は暗灰色系の粘質土、9層以上には灰色粘土や黄褐色粘土のブロックを混入する粘質土が連続的に堆積する。このうち6・7層には炭化物が多く含まれる。

遺物は中世前半の土器を中心にコンテナ（28 $\frac{1}{2}$ 箱）で1／2箱が出土した。土師器碗（図32-1）・瓦器碗（同

- 6) は最下層12層で出土した。また同図- 2の土師器碗は10層下面で出土した。いずれも正位置に置かれたものであろう。

本遺構の時期は12世紀中葉～後葉に比定される。



番号	器種	口径: cm	底径 高台径: cm	器高: cm	残存 - : 1/6以下	特徴	色調	胎土
1	土師器 碗	15.7	6.4	4.6~5.5	□2/3 高台3/4	丁寧なナデ仕上げ、底外: 亀裂	灰白 2.5Y8/1~2	1~2mm砂礫
2	土師器 碗	14.4	6.2×6.6	4.1~4.5	□1/2 高台1/1	丁寧なナデ仕上げ、内: ナデ・工具痕、全体に歪み	灰白~淡黄 2.5Y8/1~4	1mm砂
3	土師器 杯	14.5	9.1	3.45	□5/6 底1/1	回転ナデ、底内: 仕上げナデ、底外: 窻キリ+板目痕	鈍橙~鈍黄橙 7.5YR7/3、10YR7/2~3	0.5~1mm砂多 赤色粒

図32 井戸8・出土遺物 (縮尺1/30・1/4)

図32観察表続き

番号	器種	口径: cm	底径 高台径: cm	器高: cm	残存 -: 1/6以下	特徴	色調	胎土
4	土師器 皿	8.8	6.8	1.4~1.6	2/3	回転ナデ、底外: 窺キリ(ロクロ回転左)+板目痕、全体磨減	鈍橙 7.5YR7/3	0.5mm砂、赤色粒
5	土師器 皿	8.4	6.3	1.35	口1/2 高台3/4	回転ナデ、底内: 仕上げナデ、底外: 窺キリ(ロクロ回転左)+板目痕	鈍黄橙 10YR7/2	1mm砂少、赤色粒
6	瓦器 椀	15.6	4.5	4.4~5.0	口1/2 高台1/1	体部内: 窺ミガキ密・底部に暗文(平行)、体部外: 押圧、底外: ナデ、高台端部未調整(置き台痕跡)	(内)灰(外)暗灰 4/、3/	1mm砂少
7	瓦器 皿	9.2	7	1.2	1/4	内: 窺ミガキ密・底面に暗文(平行)、外: ナデ	黒 N5~4/	0.5mm砂

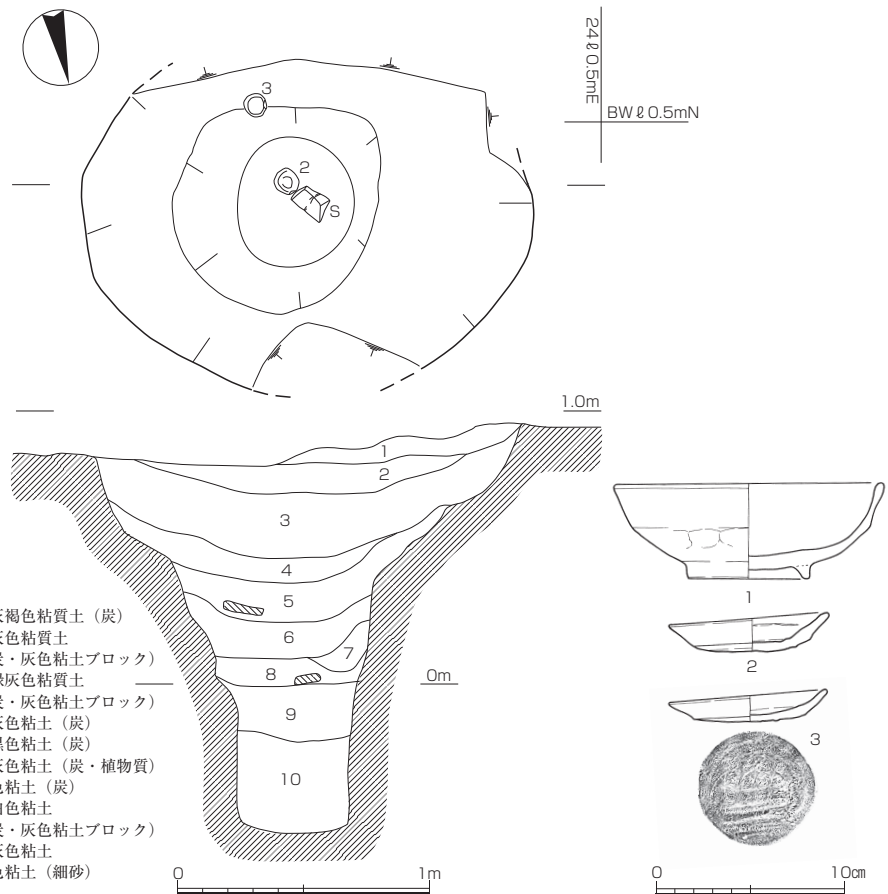
番号	器種	長: cm (残存値)	幅: cm (残存値)	厚: cm (残存値)	重量: g	残存	特徴	色調	胎土
T9	土師器 土鍾	3.1	1.1	1.1	5.8	一部欠	磨滅、ナデ、穿孔: 直径0.4×0.3cm	灰白 10YR8/2	きめ細かい
T10	土師器 土鍾	4.5	4.5	2	40.3	ほぼ完存	ナデ、側面に0.5~0.6cmの溝が巡る。	鈍橙 5YR・7.5YR7/4	きめ細かい 赤色粒

井戸9 (図33、図版11)

北区南部、BV23区に位置する。南端を井戸17、北端を井戸25に切られる。検出面の標高1.0m、底面の標高-0.6mで、検出面からの深さ1.6mを測る。上面は東西1.8m×南北1.5m程の楕円形を、底面では径0.5mの円形を呈する。断面形は底面から標高0.4m付近までは筒状に立ち上がり、それより上位は大きく広がるY字形をなしている。標高0m付近で壁面に抉りが観察される。使用時の水位を示す。埋土は10層に分けた。4~7層には炭化物・植物遺体が混入する。1~3層は灰色粘土ブロックを多く含む。遺物はポリ袋(12号)で10袋が出土した。中世前半の土師器椀・皿のほか鍋・竈片が含まれる。また礫12点が出土している。角礫1点が底面付近から、その他は3層より上位で出土し、最後に上部を埋めたものである。

土師器皿(図33-2)は9層中、同図-3は5層中で出土した。

本遺構の時期は中世前半、12世紀中葉~後葉に比定される。



1. 暗灰褐色粘質土(炭)
2. 暗灰色粘質土
(炭・灰色粘土ブロック)
3. 暗緑灰色粘質土
(炭・灰色粘土ブロック)
4. 暗灰色粘土(炭)
5. 灰黒色粘土(炭)
6. 暗灰色粘土(炭・植物質)
7. 灰色粘土(炭)
8. 灰白色粘土
(炭・灰色粘土ブロック)
9. 暗灰色粘土
10. 灰色粘土(細砂)

番号	器種	口径: cm	底径 高台径: cm	器高: cm	残存 -: 1/6以下	特徴	色調	胎土
1	土師器 椀	14.3×14.7	6.55	4.9~5.1	口3/4 高台1/1	内: 丁寧なナデ・工具痕(底部に放射状)、外: 押圧、底外: ナデ・亀裂、器厚不均一	灰白 2.5Y8/1	1~4mm砂礫多
2	土師器 皿	8.5×8.9	6.1×6.8	1.4~2.1	口2/3 底1/1	回転ナデ、底内: 仕上げナデ、底外: 窺キリ+板目痕、磨減、器高最低箇所の口縁~底部内外に煤附着(全体の1/5程度)	鈍橙~橙 7.5YR6/4~6	0.5mm砂多 赤色粒多
3	土師器 皿	8.6	6	1~1.8	口4/5 底1/1	回転ナデ、底内: 強いナデ、底外: 窺キリ+板目痕、底内外に補修痕残存、口外: 一部に煤、シャープな仕上げ	鈍黄橙 10YR6/3	1mm砂少 赤色粒少

図33 井戸9・出土遺物(縮尺1/30・1/4)

井戸10 (図34、図版12)

北区南端、BW23区に位置する。検出面の標高1.1m、底面の標高-0.45mを測る。上面は径1.7mの円形、底面は径0.7mの円形を呈する。断面形は底面から標高0.3mまで筒状をなし、それより上位が緩やかに開くY字形をなす。

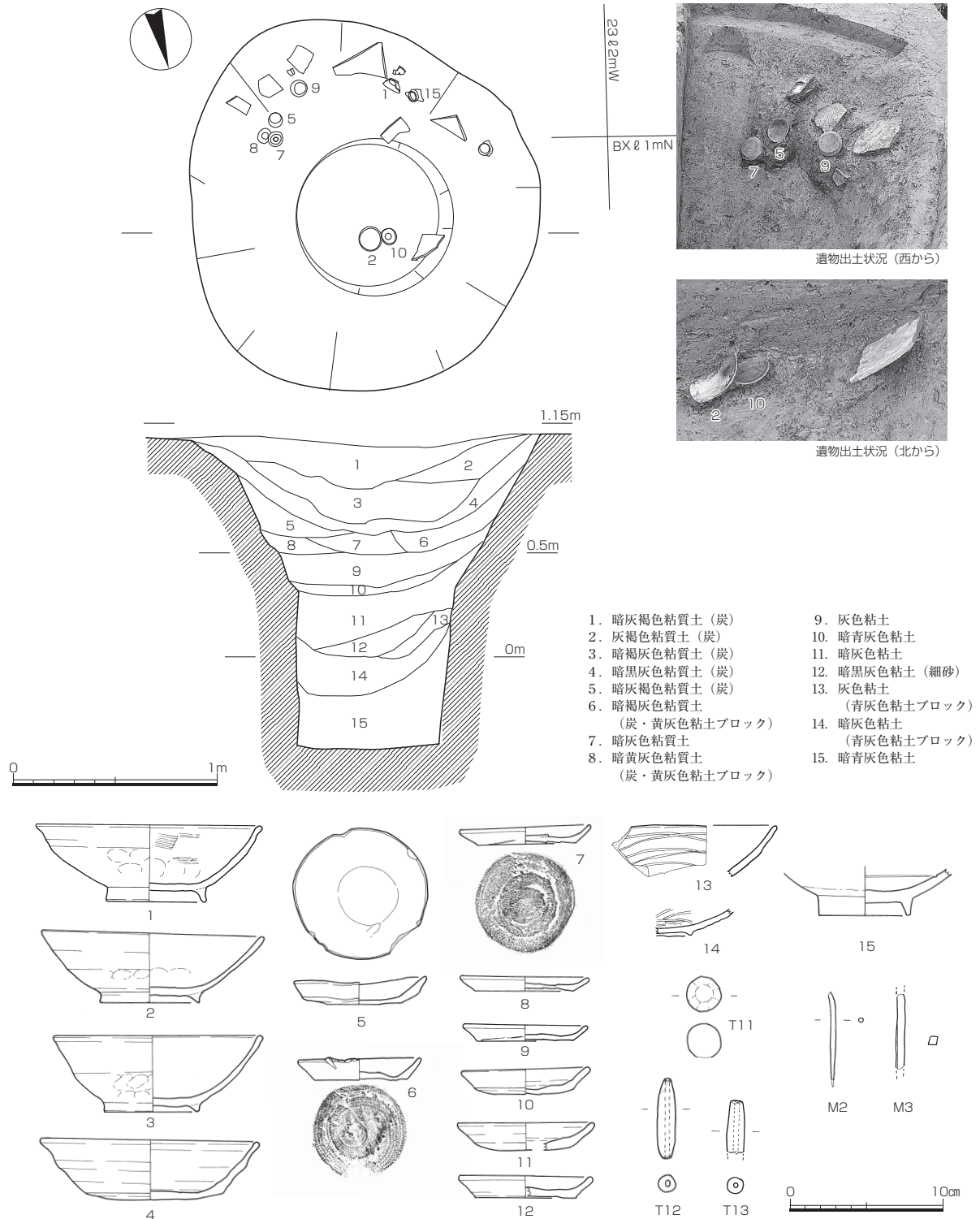


図34 井戸10・出土遺物 (縮尺1/30・1/4)

図34観察表

番号	器種	口径：cm	底径 高台径：cm	器高：cm	残存 -：1/6以下	特徴	色調	胎土
1	土師器 椀	14.3~14.7	6.6	4.6~5	ほぼ完存	口：幅広い横ナデ、体部内：押圧・ナデ(工具痕顕著)、外：押圧	灰白 2.5Y8/1	1~2mm砂礫
2	土師器 椀	14.6	6.4	4.3~4.8	ほぼ完存	口：幅広い横ナデ、体部内外：押圧、底外：ナデ+軽い押圧、高台：断面三角形	(明)灰白 2.5Y8/1	1mm砂
3	土師器 椀	13.6	6.2~6.5	5	口2/3 高台1/1	口：幅広い横ナデ、体部外：押圧顕著、底外：軽い押圧、高台：断面三角形	(明)灰白 2.5Y8/1	1mm砂
4	土師器 杯	14.3	9	3.8~4.1	口1/4 底1/2	回転ナデ、底内：仕上げナデ(粘土押圧)、底外：窶キリ後ナデ、9と類似	鈍黄橙 10YR6/2	きめ細かい
5	土師器 皿	8.5	7.6	1.3~1.8	ほぼ完存	回転ナデ、底内：仕上げナデ(円弧状)：一部に窪み・煤付着少、底外：窶キリ(ロクロ回転左)、口縁に対角線上に小窪み3か所残存(幅0.4~1cm)	鈍黄橙 10YR6/3	0.3mm以下砂多 赤色粒
6	土師器 皿	8.1	6.1	1.3~1.5	口3/4 底1/1	回転ナデ、底内：仕上げナデ：一部に窪み、窪み付近の口縁に油煙?の広がり+刻み目数か所、底外：窶キリ(粗いハケメ状痕・ロクロ回転左)、薄手	鈍橙~鈍黄橙 7.5YR7/3、10YR7/3	1mm砂
7	土師器 皿	8.6	6.5	1~1.3	完存	回転ナデ、底内：中央に粘土の押しつけ(仕上げナデ状)、底外：窶キリ(ロクロ回転左)+板目痕(細かいハケメ状)、薄手で低平な器形、8・9と類似	灰黄褐 10YR6/2	きめ細かい 赤色粒
8	土師器 皿	8.4	6.4	0.95	完存	回転ナデ、底内：中央に仕上げナデ、底外：窶キリ(ロクロ回転左)+板目痕、薄手で低平な器形、7・9と類似	褐灰 10YR6/1	きめ細かい 赤色粒
9	土師器 皿	8.25	6.5	1.05	完存	回転ナデ、底内：中央に焼成時の亀裂、底外：窶キリ(ロクロ回転左)+板目痕、口縁部周辺に油煙痕跡顕著、薄手で低平な器形、4・7・8と類似	鈍黄橙~褐灰 10YR7/3、10YR6/1	きめ細かい 赤色粒少
10	土師器 皿	8.4	6.5	1.4~1.8	ほぼ完存	回転ナデ、底外：窶キリ+ナデ・丸み、小粘土塊(幅約1cm)が口縁部付近に付着、磨滅顕著、11と類似	灰白 10YR7/1~2	きめ細かい 赤色粒多
11	土師器 皿	9	6.3	1.8	1/3	回転ナデ、底外：窶キリ痕・丸み、磨滅顕著、10と類似	鈍橙 7.5YR7/3	きめ細かい 赤色粒多
12	土師器 皿	8.8	6.6	1.45	1/2	回転ナデ、底外：窶キリ(ロクロ回転左)、在地的形状	明褐灰~鈍黄橙 7.5YR7/2、10YR7/2	砂礫僅少
13	瓦器 椀	-	-	-	-	内：ナデ・ミガキ疎、外：押圧、口：横ナデ	暗灰~黒(胎土)灰白 3~2/、8/	きめ細かい
14	瓦器 椀	-	-	-	-	内：ナデ・ミガキ疎、外：押圧、高台：横ナデ	暗灰~黒(胎土)灰白 3~2/、10YR8/1	きめ細かい
15	白磁 碗	-	6	-	高台1/1	回転ナデ、削り出し高台、全体に施釉	灰白 5Y7/2	1mm砂、緻密

番号	器種	長：cm (残存値)	幅：cm (残存値)	厚：cm (残存値)	重量：g	残存	特徴	色調	胎土
T11	土玉	2.2	2.2	2.2	11.2	一部欠	ナデ、面を残す	鈍黄橙 10YR7/2	きめ細かい
T12	土錘	6.2	1.1	1.1	7.5	完存	磨滅顕著、被熱変色	鈍橙 2.5YR6/4	きめ細かい
T13	土錘	(3.4)	0.8~1.2	0.9~1	5	下半欠損	ナデ	鈍橙 5YR7/3	きめ細かい

番号	器種	長：cm (残存値)	幅：cm (残存値)	厚さ：cm	重量：g	残存	特徴
M2	鉄釘	(5.9)	0.3	0.3	2.6	一部	断面：矩形、両端欠損
M3	鉄釘	(4.9)	0.5	0.5	3.5	一部	断面：矩形、両端欠損

埋土は15層に分けた。9~15層は灰色粘土を主体とし、ブロックを多く混入する埋め戻し土、5~8層も灰褐色土を主体とし炭化物・ブロックを混入する埋め戻し土と考えられる。4層は炭を主体とする。4層下面にあたるレベルで土師器椀・皿等の遺物がまとまって出土した。

遺物はコンテナ(28ℓ/箱)で1箱が出土した。中世前半の土師器椀・杯・皿・鍋のほか、瓦器椀、白磁碗、須恵質鍋片を含む。前述したように、完形の土師器椀・皿が4層(炭層)下面付近で認められ、標高0.9m近くまで埋めた段階で火を使用する祭祀に伴い土器類が置かれたものと考えられる。

本遺構の土壌を持ち帰り種子の抽出・同定を行った(第4章第2節参照)。54個体を抽出し、22科36種の植物種子を同定した。アワ・イネ・コムギ(いずれもイネ科)・ササゲ(マメ科)等の栽培植物のほか、ホタルイ(カヤツリグサ科)、スイバ(タデ科)等の田畑雑草が確認される。

本遺構の時期は13世紀初頭~前葉と比定される。

井戸11(図35、図版13)

西区南端、CD20・21区に位置する。本遺構の南半は調査区外にあり、南に隣接する第11次調査地点で井戸4として既に報告している。検出面の標高1.2m、底面の標高-0.3mを測る。本遺構は上面で径2.1~2.2mの隅丸方形、底面では径1.3mの隅丸方形を呈しており、本調査区内では北側の半分を確認した。断面形は底面から標高0.3mまで筒状をなし、それより上位がY字状に広がる。標高0.25m付近の断面形状に抉れが認められる。使用時の水位が示される。埋土は17層に分けた。埋土の詳細については既往報告を参照されたい。標高0.3~0.7m付近に堆積する5・8・9層は炭層であり、遺物も炭層付近に多く確認された。

遺物はコンテナ(28ℓ/箱)で1/3箱である。土師器椀・皿・鍋、竈片、須恵質こね鉢が認められる。

本遺構の時期は13世紀前半に比定される。

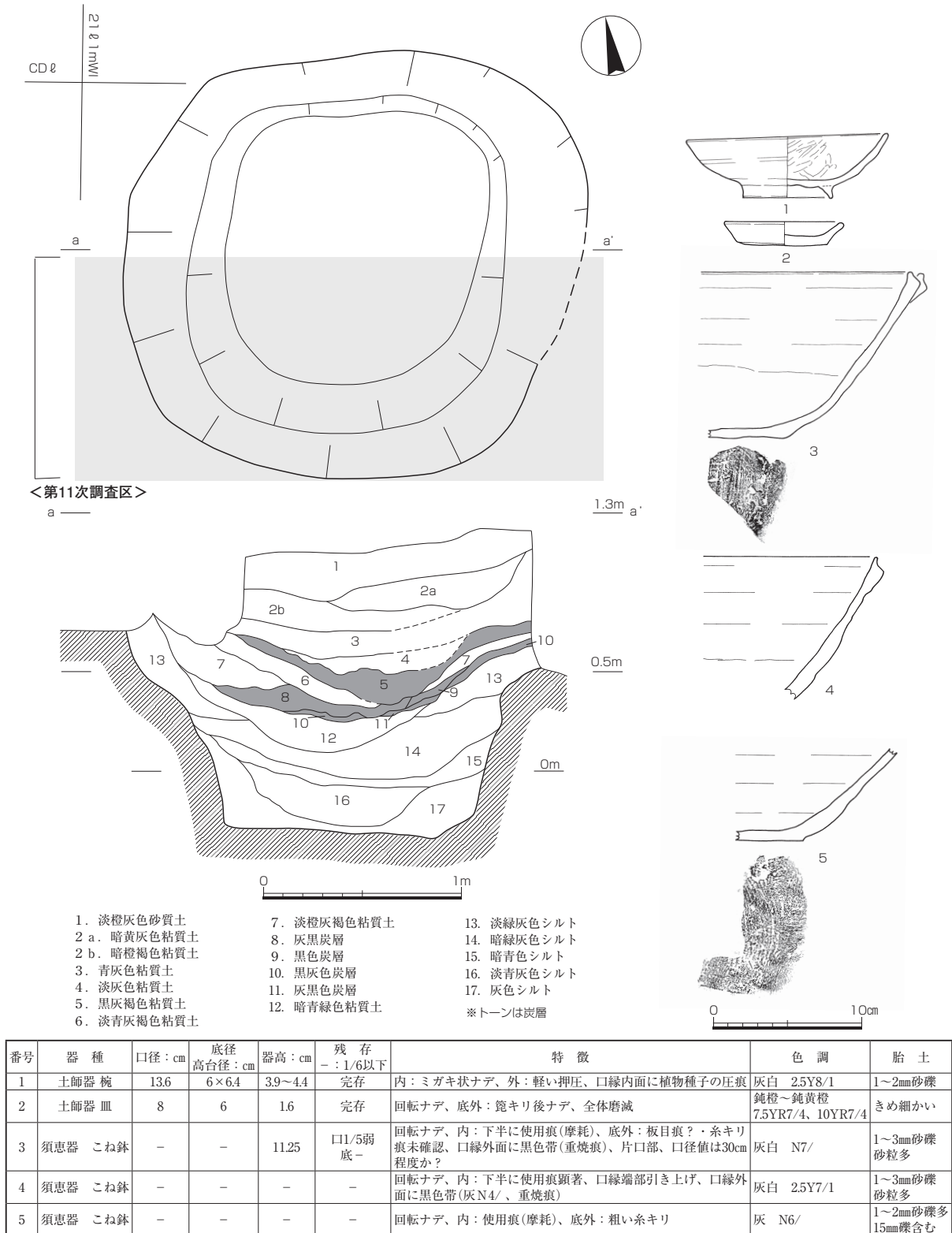


図35 井戸11・出土遺物 (縮尺1/30・1/4)

井戸12 (図36・37、図版14)

東区南端、CD18区に位置する。検出面の標高1.35m、底面の標高-0.2mを測る。本遺構の南半は調査区外にあ

たり、確認されていない。上面は径1.7mの隅丸方形、下面は径0.9m前後の円形を呈するものと考えられ、本調査ではその北半部分を確認した。断面形は底面から標高0.6m付近まで筒状に立ち上がり、そこから上位は緩やかに開く。底面は湧水砂層に達しており、標高-0.1m付近は水の影響を受け括れている。

埋土は23層に分けた。1群（1・2層）、2群（3～14層）、3群（15～20層）、4群（21～23層）の4群にまとめられる。いずれも埋め戻し土であり、3群にはブロックを多く混入する。2群は炭・焼土・灰が互層となって堆積する1群である。

遺物はコンテナ（28 $\frac{1}{2}$ 箱）1箱が出土した。多数の土師器碗が完形で出土した。土師器皿は碗に比べ少なく、その他に少数の竈・鍋の小片、須恵器甕、丸瓦が見られた。また2～3cm大の焼土塊36点が出土しており、例えば建物の土壁の破片とも考えられる。遺物は底面付近で出土したものを「最下層」、3群の下面にあたる21層上面付近で出土したものを「下層」として図36に示した。このほかに標高1m前後の炭層にとまって出土したものを「上層」遺物とした（最下層：図36-1、2、4、7、9、16、18、27、29、30 下層：5、6、10、12、13、19、21、23、24、26、28 上層：8、15、17、20）。最下層・下層の土器群にも同図2・6・9・10・16・19・27・28には煤の付着や被熱が顕著に認められる。

本遺構の時期は13世紀後半に比定される。

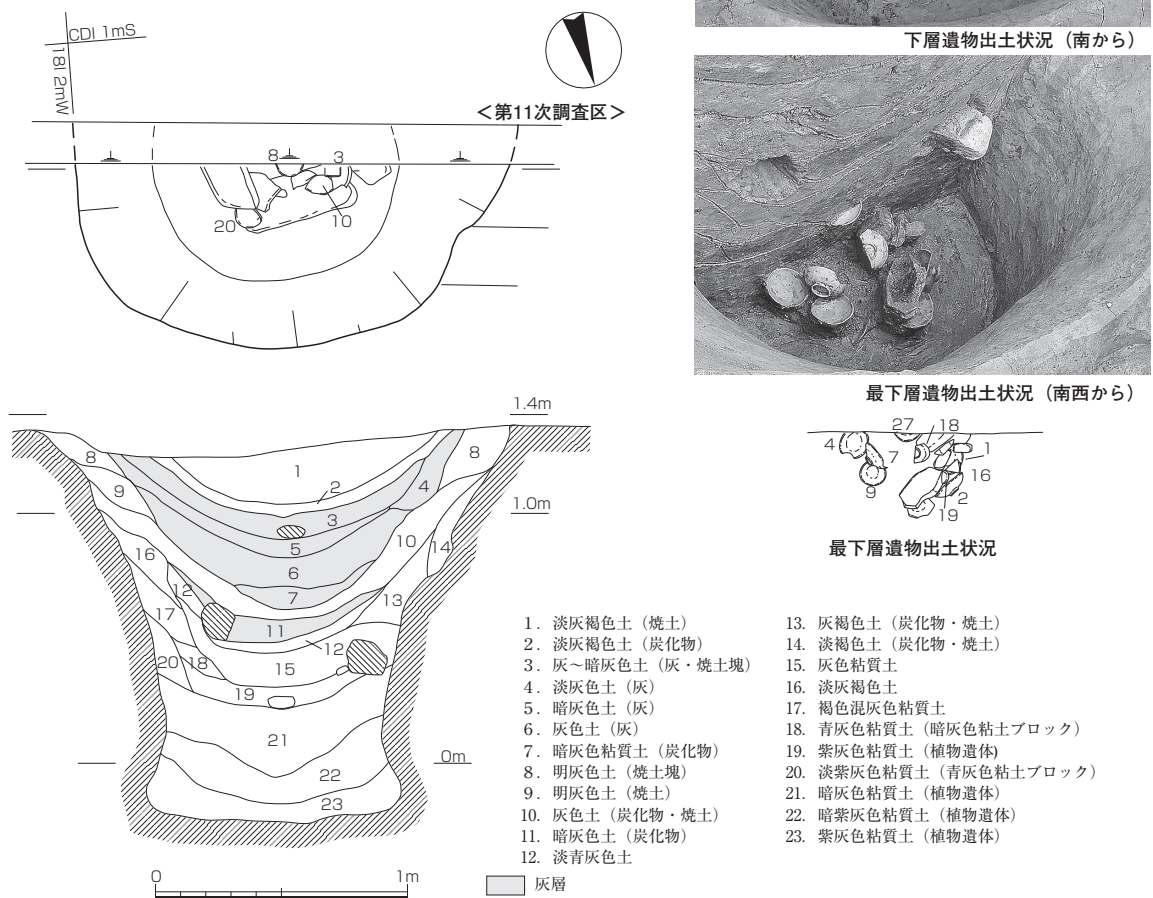


図36 井戸12（縮尺1/30）

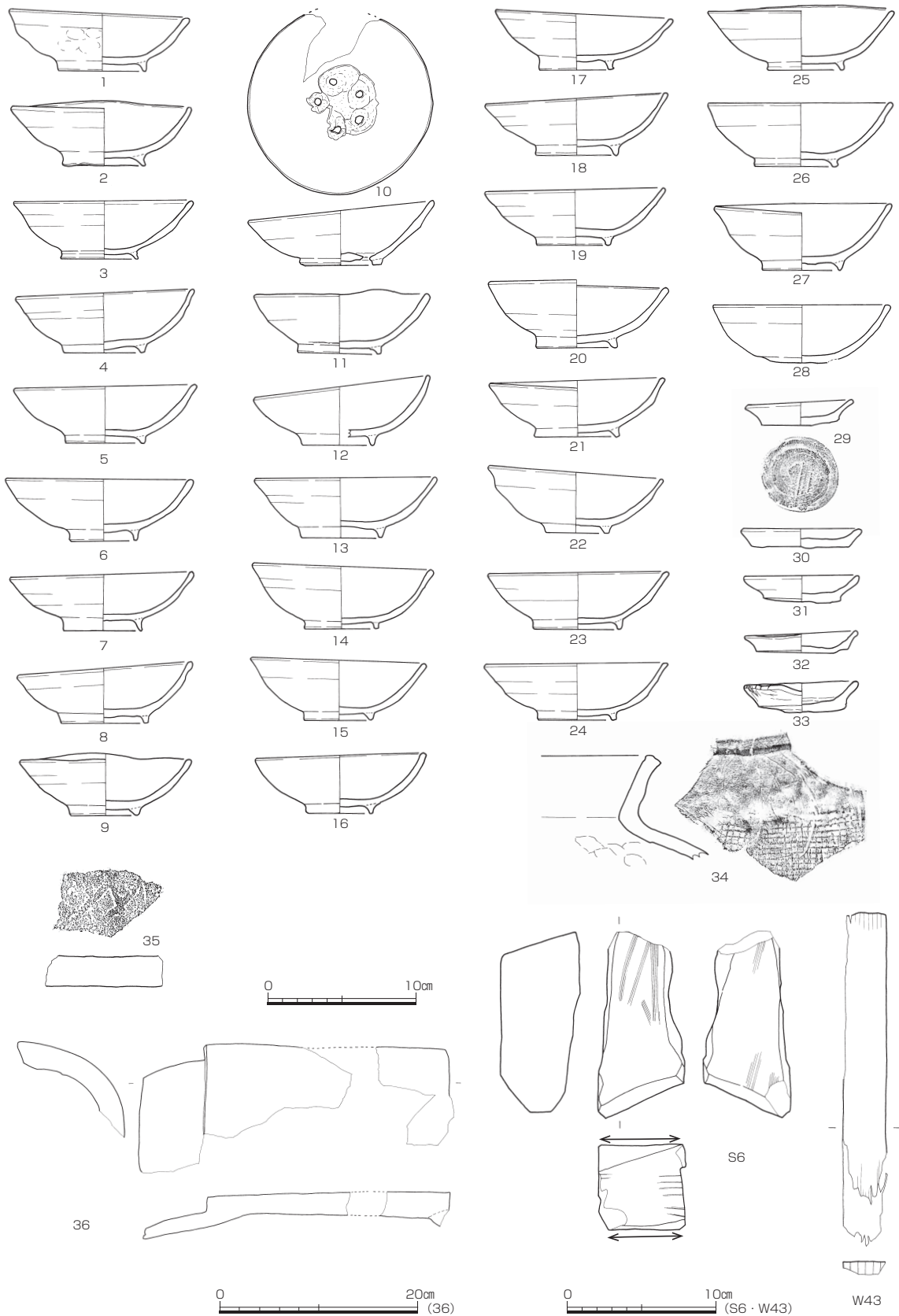
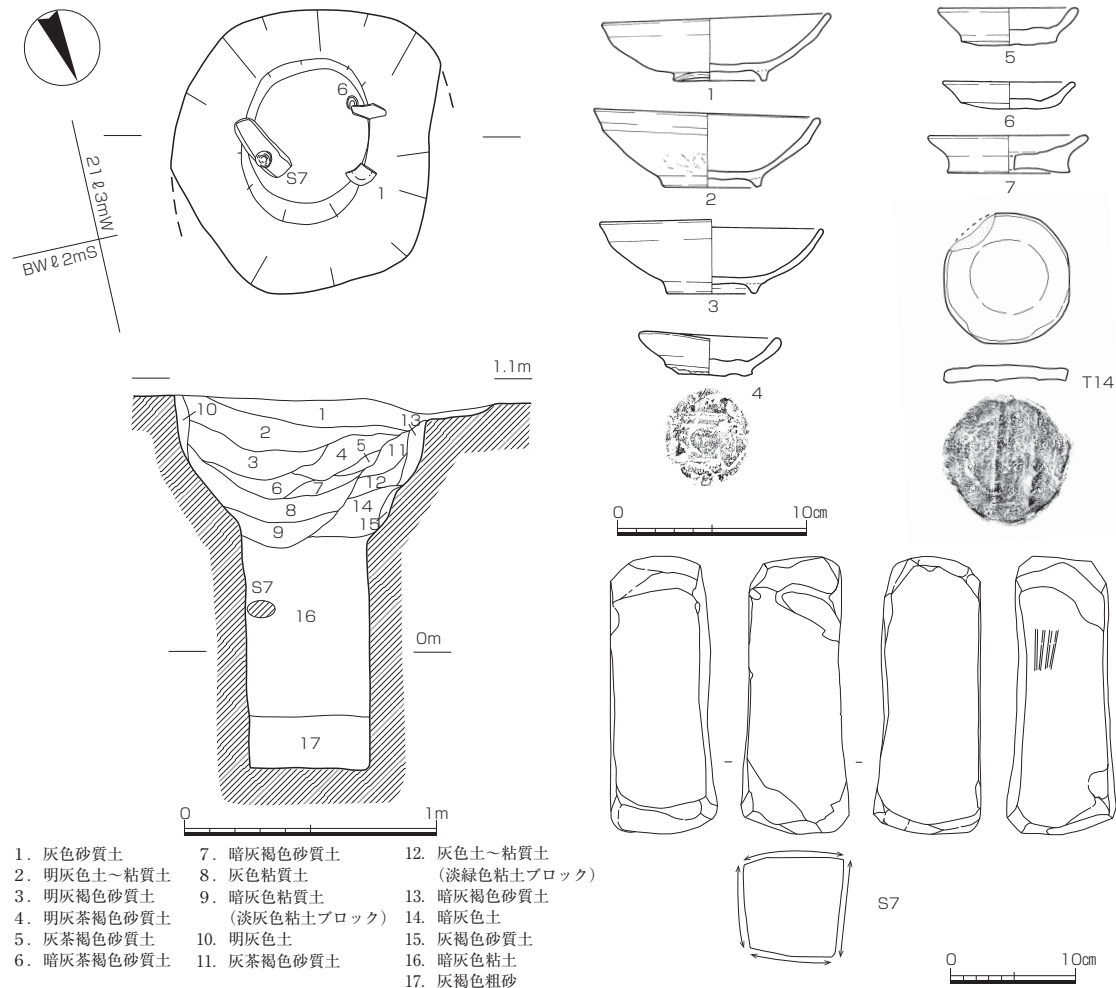


図37 井戸12出土遺物 (縮尺1/4・1/6)

井戸13 (図38、図版15)

北区南部、BW21区に位置する。検出面の標高1.0m、底面の標高-0.5mを測る。上面では径1.2mの円形、底面では径0.6mの円形を呈し、検出面からの深さは1.5mを測る。断面形は底面から標高0.5mまで筒状をなし、そこから上位は椀状に広がる。

埋土は17枚に分けた。17層は使用時の堆積層、1～16層は廃絶時の埋め土層である。遺物はコンテナ (28 $\frac{1}{2}$ ℓ)



- 1. 灰色砂質土
- 2. 明灰色土～粘質土
- 3. 明灰褐色砂質土
- 4. 明灰茶褐色砂質土
- 5. 灰茶褐色砂質土
- 6. 暗灰茶褐色砂質土
- 7. 暗灰褐色砂質土
- 8. 灰色粘質土
- 9. 暗灰色粘質土 (淡灰色粘土ブロック)
- 10. 明灰色土
- 11. 灰茶褐色砂質土
- 12. 灰色土～粘質土 (淡緑色粘土ブロック)
- 13. 暗灰褐色砂質土
- 14. 暗灰色土
- 15. 灰褐色砂質土
- 16. 暗灰色粘土
- 17. 灰褐色粗砂

番号	器種	口径:cm	底径 高台径:cm	器高:cm	残存 -:1/6以下	特徴	色調	胎土	
1	土師器 椀	12.1	4.9	3.2~3.6	□3/4 高台1/1	内:ナデ、外:押圧・ナデ、高台:端部に乾燥時の凹凸痕、高台の1/2は潰れ状態	灰白、一部浅黄橙 2.5Y8/1~2、10YR8/3	1~2mm砂礫 赤色粒少	
2	土師器 椀	12	5.25	3.7~4.2	□3/4 高台1/1	内:ナデ・重焼痕、外:押圧・ナデ・亀裂多、内外:斑点状に油煙痕跡多、厚手	灰白、一部鈍黄橙 2.5Y8/1、10YR7/3	1mm前後砂多	
3	土師器 椀	11.8	4.8	3.4~3.9	1/2	内:ナデ・重焼痕、外:押圧・ナデ、内外:斑点状に油煙痕跡多	灰白 10YR8/1~2	1mm砂	
4	土師器 皿	7.5	4.4×4.7	1.9~2.2	□5/6 高台1/1	回転ナデ、底外:粗い窺キリ+板目痕・未調整状態の凹凸残存、厚手	鈍黄橙 10YR7/2~3	きめ細かい 赤色粒多	
5	土師器 皿	7.5	5	2	1/3	回転ナデ、底内:中央押圧、底外:粗い窺キリ後ナデ+板目痕?厚手、全体磨滅	鈍黄橙 10YR7/2~3	きめ細かい 赤色粒多(3mm以下)	
6	土師器 皿	7.1	5.3	1.45	□3/4 高台1/1	回転ナデ、底内:中央押圧、底外:窺キリ後ナデ・板目痕?、薄手	鈍黄橙 10YR7/3~4	1mm砂多	
7	土師器 脚台	8.5	6.5	2	□1/5 底1/4	回転ナデ、底外:窺キリ・中央部に穿孔(径6mm)	鈍黄橙 10YR7/3	きめ細かい 赤色粒	
番号	器種	長:cm	幅:cm	厚:cm	重量:g	残存	特徴	色調	胎土
T14	土製円盤	7.9	6.6	0.6~0.8	34.6	一部欠	杯の転用:底部周縁を打ち欠き加工、上面:ナデ、下面:窺キリ+板目痕	鈍橙~橙 7.5YR7/3・6	1mm礫少、赤色粒少
番号	器種	残存長:cm	残存幅:cm	残存厚:cm	重量:g	残存	石材	特徴	
S7	砥石	23.0	6.0	9.0	2634.5	ほぼ完形	流紋岩?	底面4面	

図38 井戸13・出土遺物 (縮尺1/30・1/4)

箱) 1/3箱が出土した。土師器碗・杯・皿のほか、大形の砥石(図38-S7)が見られる。

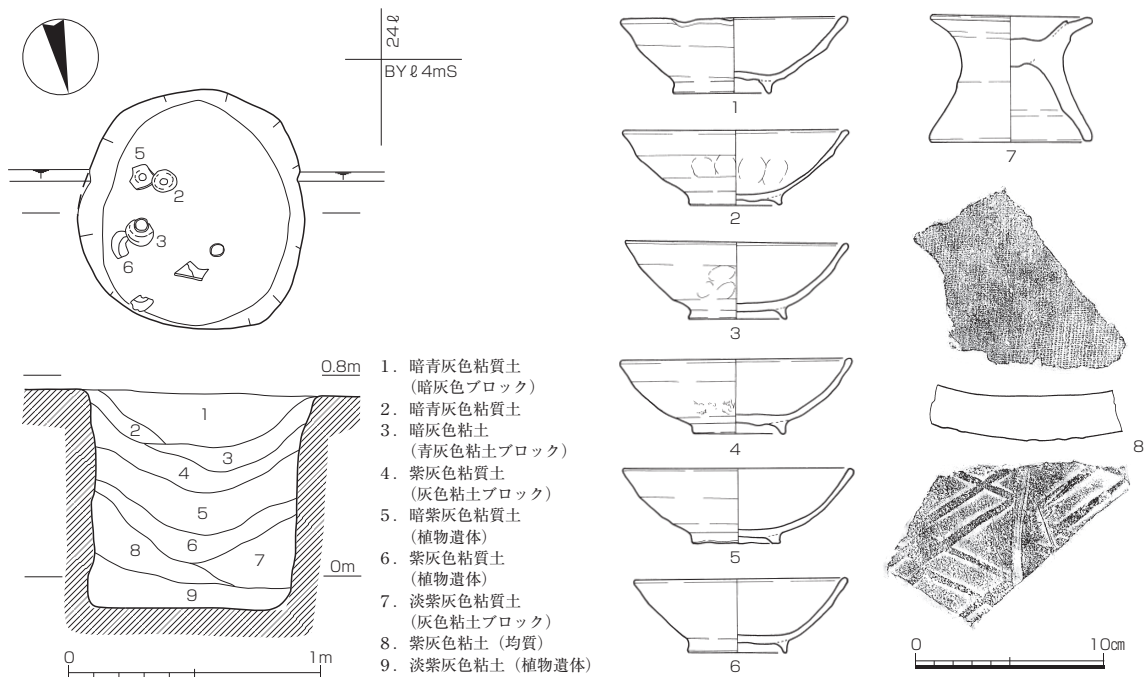
本遺構の時期は13世紀後半～後葉に比定される。

井戸14(図39、図版16)

西区西側、BY23区に位置する。基盤層まで破壊されており、検出面の標高0.75m、底面の標高-0.1mを測る。上面は径1.0mの円形、底面は径0.9mの円形を呈する。検出面からの深さは0.9mで、筒状にまっすぐ掘られている。

埋土は9枚に分けた。青灰色～紫灰色を呈する粘質土が主体で、1～7層にはブロックを多く混入する。8・9層は均質であり、9層に植物遺体が確認された。

遺物はコンテナ(28 $\frac{1}{2}$ 箱)に1/2箱が出土した。土師器碗のほか、皿・鍋・竈の小片、瓦等が認められる。図39に示した土器は最下層で確認したものである。本遺構の時期は13世紀後葉に位置付けられる。



番号	器種	口径:cm	底径 高台径:cm	器高:cm	残存 -:1/6以下	特徴	色調	胎土
1	土師器 碗	11.9×12.4	5.15	3.5~4.1	ほぼ完存	内:ナデ、外:押圧・ナデ、口縁:補修痕?+受け口状の押圧が2箇所近接してあり	灰白 2.5Y8/1	1~2mm砂礫多
2	土師器 碗	11.9	4.7×5	3.8~4.2	完存	内外:押圧・ナデ、口縁補修か? 薄手	灰白 2.5Y8/1	1mm砂
3	土師器 碗	11.7×12.1	5.15	4~4.3	口3/4 高台1/1	内:ナデ、外:押圧、底外:亀裂	灰白 2.5Y8/1~2	1mm砂
4	土師器 碗	12.2	5	3.6~4	口1/2 高台1/1	内外:押圧・ナデ、外:亀裂顕著、高台部に圧痕(種類不明)	灰白 2.5Y8/1~2	1~2mm砂礫
5	土師器 碗	12.2	4.6	3.8~4.2	口1/2 高台1/1	内:ナデ、外:押圧、高台:畳付部に乾燥時の凹凸、口縁内外:対角線上に煤・油煙痕顕著	灰白 2.5Y8/1~2	1~3mm砂礫
6	土師器 碗	11.4	5.3	3.95	口1/2 高台1/1	回転ナデ、体部内:ナデ、体部外:押圧、底内:重焼痕(変色)	灰白 2.5Y8/1~2	1~3mm砂礫
7	土師器 脚台付皿	8.5	8.8	6.6~6.8	口1/2 底3/4	回転ナデ、皿部内面剥離	鈍橙~灰白 7.5YR7/4、10YR8/1	赤色粒多

番号	器種	長:cm (残存値)	幅:cm (残存値)	厚:cm (残存値)	特徴	色調	胎土
8	須恵質 平瓦	(9.2)	(11)	2.4	上面:布目痕+軽いナデ、下面:格子目タタキ・中央に1条の工具痕?	灰白 5Y8/1	2mm礫多

図39 井戸14・出土遺物(縮尺1/30・1/4)

3. 土坑

土坑2(図40、図版17)

北区東端、BV20区に位置する。上面に後述する溝21が重複しており、調査時には溝21の下部にくぼみ構造があるものと考えた。調査中に土師器皿3点が重なって確認されたこと、また調査後遺物の時期の検討により、中世

後半以降の溝とは別遺構であると判断し、土坑として報告する。

検出面の標高0.35m、底面の最深部は標高-0.15mを測る。溝21に削平され本来の規模はわからない。また、本遺構の北東角は調査区外にあたり確認できていない。

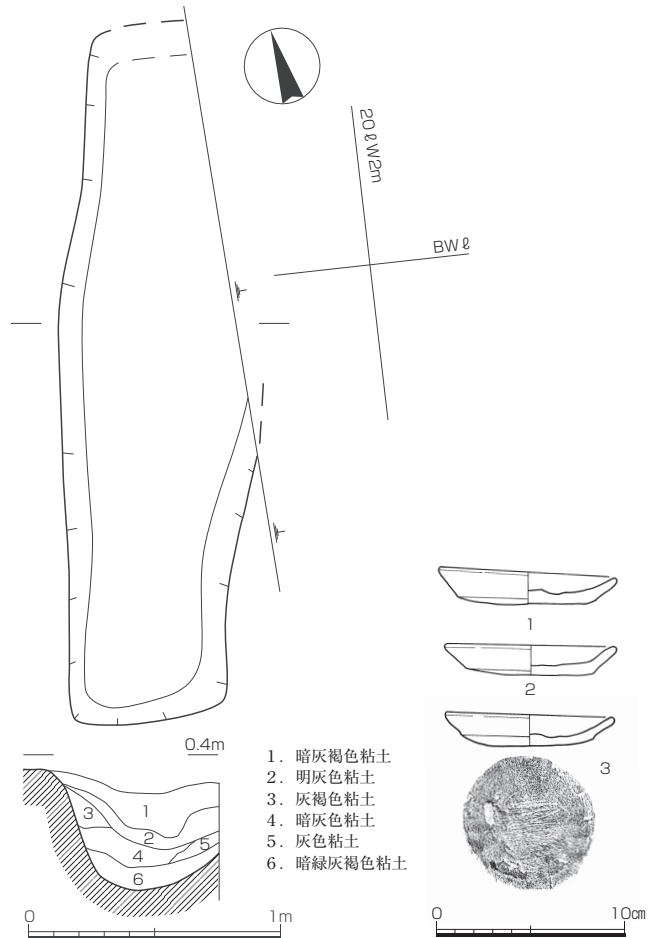
平面形は南北2.7m、東西0.9mの長方形を呈する。長軸方向はN-20°-Eを示す。

検出面からの深さは0.4mを測る。底面は中央より北側に若干傾斜する。埋土は5層に分けた。暗灰褐色～灰色を呈する粘質土が主体である。

出土遺物は前述したように、本遺構に確実に伴うものは図40-1～3の3点のみである。

いずれも口径9cmを超える大ぶりの皿である。

本遺構の時期は、皿のみの出土であり詳細な時期は決め難いが、直径の大きさから11世紀後葉～12世紀前半の幅の中で考えておきたい。



番号	器種	口径:cm	底径 高台径:cm	器高:cm	残存 -:1/6以下	特徴	色調	胎土
1	土師器 皿	9.5	7.4	1.4~2	□3/4 底1/1	回転ナデ、底内:仕上げナデ、底外:窺キリ(ロクロ回転左)、厚手	鈍黄橙 10YR7/4	0.5mm前後砂
2	土師器 皿	8.1×9.1	6.6	1.5~1.7	□3/4 底1/1	回転ナデ、底内:仕上げナデ、底外:窺キリ(ロクロ回転左)	鈍黄橙 10YR7/4	0.5mm前後砂
3	土師器 皿	8.7×9	6.7×7.1	1.5~1.85	完存	回転ナデ、底内:仕上げナデ、底外:窺キリ(ロクロ回転左)+板目痕	灰白～浅黄橙、一部鈍橙 10YR8/2~3、7.5YR7/4	0.5~1mm砂

図40 土坑2・出土遺物 (縮尺1/30・1/4)

土坑3 (図41・42、図版17)

西区中央、BX23・24区に位置する。検出面の標高0.6～0.8m、底面の標高は0.05mを測る。本遺構の南西角は基礎により破壊されている。上面は南北2.2m、東西1.05mの長方形を呈する。底面では南半で南北0.8m、東西0.45mの規模の平坦面をなしている。検出面からの深さ0.6mが残る。主軸はN-13°-Eを示す。埋土は5層に分けた。灰褐色～暗灰色を呈する粘質土を主体とする。

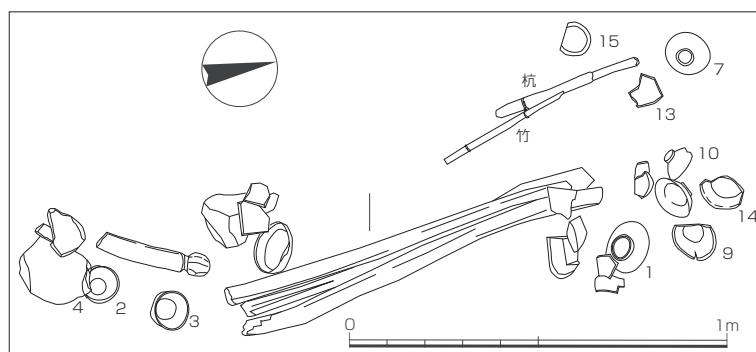
遺物はコンテナ (28ℓ/箱) で土器類2箱、砥石1点を含む礫1箱が出土した。完形の多数の土師器碗・杯・皿が認められた (図41出土状況参照)。また図示しているように木製品が出土している。これらは記録はできたが保存状態は悪く、実測することは難しかった。本遺構の中央に径10cm、長さ1.0mの丸木3本がまとめて置かれ、北西部には径5cm、長さ0.4mの杭1本、竹1本が置かれている。杭には先端近くに巻きつけられた紐状のものが確認された (図41左上)。

本遺構の時期は出土遺物から13世紀中葉～後葉に位置付けられる。井戸12・13にごく近く、若干古い可能性が残る。完形あるいは完形に近い状態の多数の碗のほかに杯・皿が出土する。底面の平坦面は狭小で、墓の可能性は低い。上部の破壊が大きく本来の形状を想定するのは難しいが、鹿田条里の方向を指した祭祀土坑として報告

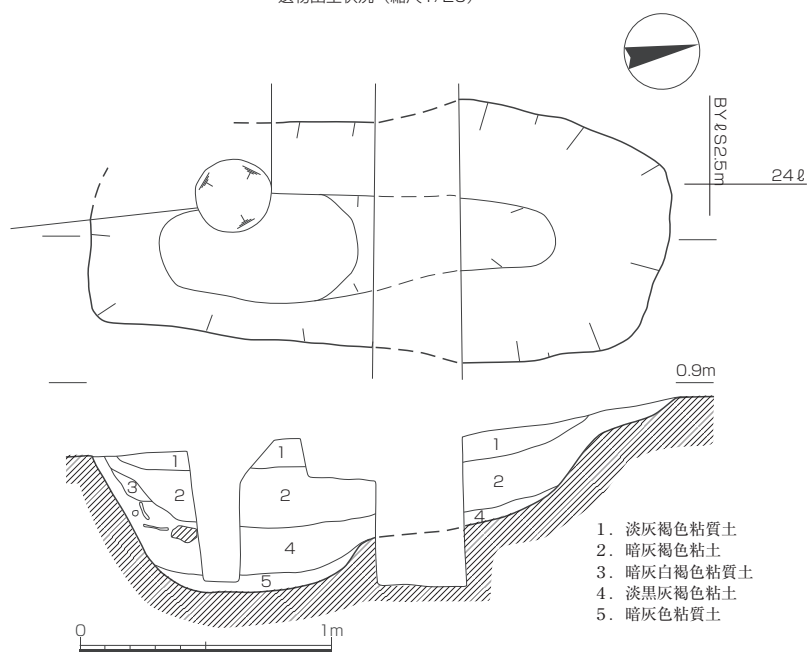


杭と竹 (西から)

遺物出土状況 (東から)

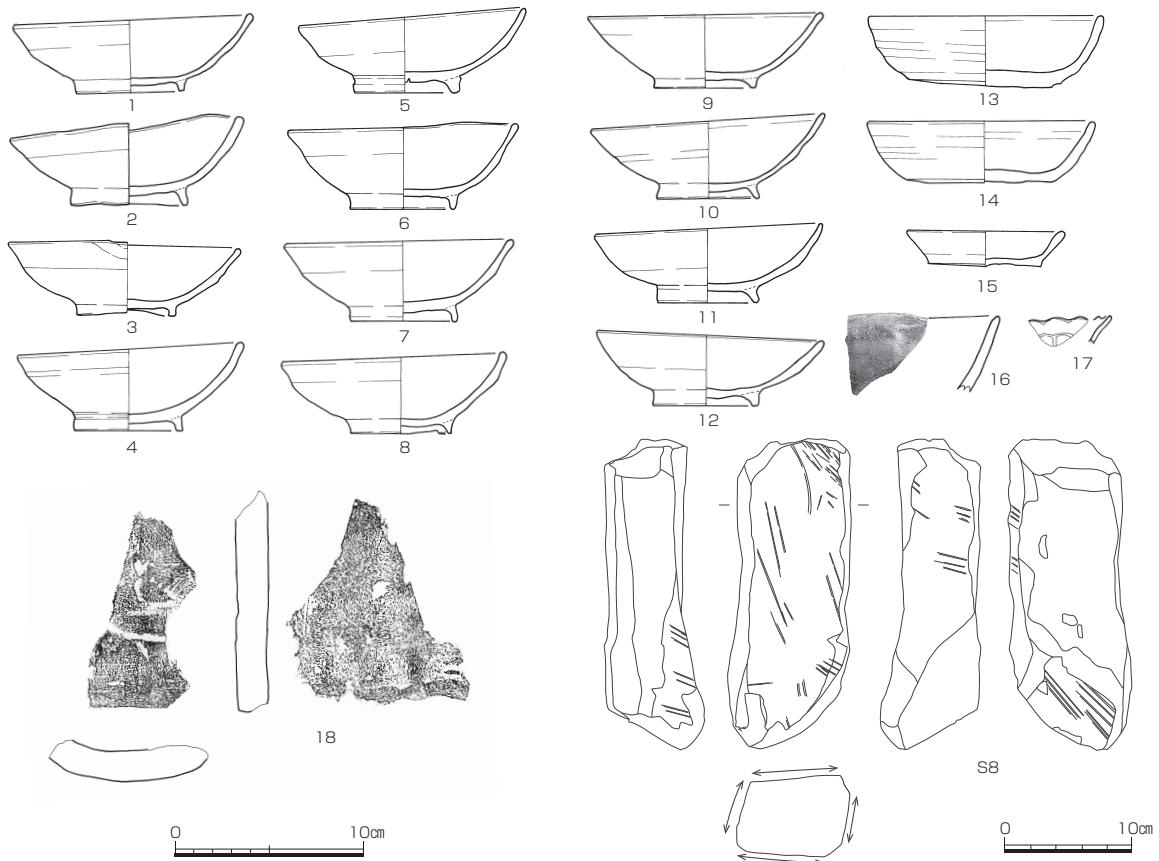


遺物出土状況 (縮尺1/20)



- 1. 淡灰褐色粘質土
- 2. 暗灰褐色粘土
- 3. 暗灰白褐色粘質土
- 4. 淡黒灰褐色粘土
- 5. 暗灰色粘質土

図41 土坑3 (縮尺1/30)



番号	器種	口径:cm	底径 高台径:cm	器高:cm	残存 -:1/6以下	特徴	色調	胎土
1	土師器 碗	12.4×12.7	5.7	3.7~4.2	完存	ナデ・押圧、底外:ナデ+板目痕、口縁部歪み	灰白 10YR8/2、2.5Y8/1	1mm以下砂
2	土師器 碗	12.3×12.6	6.15	3.6~4.7	完存	ナデ・押圧、口縁部歪み(口径値の中心は12.3cm)、重焼痕(一部橙色)	灰白 10YR8/2、2.5Y8/1	4mm以下砂礫多
3	土師器 碗	12.2	5.3×5.7	3.6~4	完存	ナデ・押圧、外:種子圧痕、口:1箇所が受け口状(端部を篋でカット)、高台の一部潰れ(置台痕跡)、高台径値の主体は5.3~5.4cm	灰白 2.5Y8/1~2	2mm以下砂礫
4	土師器 碗	12.05	5.7×6	4~4.7	完存	ナデ・押圧、丸みの強い底部形態	灰白 2.5Y8/1	3mm以下砂礫
5	土師器 碗	12.1	5.6	3.5~4.5	完存	ナデ・押圧、底外:中央に小円孔(直径2mm・深さ約2mm・断面台形)、内面煤、外面被熱(黒色・橙色化)	(内)灰白~黄灰(外)灰白 2.5Y7・6/1、2.5Y8/1~2	3mm以下砂礫
6	土師器 碗	11.7×12.2	5.6	4.2~4.6	完存	ナデ・押圧、高台径値:潰れ部で5.9cm	灰白 10YR8/1~2	4mm以下砂礫
7	土師器 碗	12.2×12.5	5.8	4.1~4.4	口1/1 高台1/2	ナデ・押圧、底内:重焼(変色)	灰白 2.5Y8/1~2	5mm以下砂礫多
8	土師器 碗	12.15	5.2×5.5	3.8~4.3	口7/8 高台1/1	ナデ・押圧、底外:大きな亀裂、高台:畳付部に段(対角線上に平坦面残存)=乾燥台痕跡か	灰白 2.5Y8/1	3mm以下砂礫
9	土師器 碗	12.5	5.4	3.95	口3/4 高台1/1	ナデ・押圧、高台の一部潰れ、底内:種子圧痕?	(淡)灰白 2.5Y8/1~2	5mm以下砂礫
10	土師器 碗	12.3×12.7	5.55	3.7~4.5	口3/4 高台1/1	ナデ・押圧、薄手・軽量・シャープなつくり、高台内:灰色	(灰)白 5Y8/1	1mm以下砂
11	土師器 碗	12×12.4	5.5	3.6~4.2	口3/4 高台1/1	ナデ・押圧、高台接合部に篋痕跡、重焼痕(高台部と底内の変色)	灰白 2.5Y8/1~2	5mm以下砂礫
12	土師器 碗	12.1	5.6	3.5~3.8	1/2	ナデ・押圧、高台:厚手、全体に粗雑なつくり、重焼痕(高台と底内の橙色化)	灰白 5Y8/1	1mm以下砂
13	土師器 杯	12.5	8.1	3.3~4	完存	回転ナデ、底内:仕上げナデ、底外:篋キリ(ロクロ回転左)・ナデ、14と類似	浅黄橙 10YR8/3~4	5mm以下赤色粒多
14	土師器 杯	12.2	8	3.3	1/2	回転ナデ、底内:仕上げナデ、底外:篋キリ(ロクロ回転左)+板目痕、磨減、被熱(内外煤・外面一部赤変)、13と類似	浅黄橙~灰褐 7.5YR8/4、7.5YR6/2	5mm以下赤色粒多
15	土師器 皿	8.35	6	1.8~2	完存	回転ナデ、底外:篋キリ、外:被熱(橙色化)、磨減、口縁端部肥厚、シャープな仕上がり	灰白~鈍橙 7.5YR8/2、7.5YR7/4	1mm以下砂
16	青磁 碗	-	-	-	-	内外:施釉、外:蓮弁文(甘い仕上がり、鍋未確認)	灰(釉)灰 N6/、10Y6/1	精緻
17	青白磁 皿	-	-	-	-	内外:施釉・文様、口縁:輪花、器厚は非常に薄い。	灰白(釉)明青灰(白) N8/、5BG7/1	精緻

番号	器種	長:cm (残存値)	幅:cm (残存値)	厚:cm (残存値)	残存	特徴	色調	胎土
18	須恵器 平瓦	(11.7)	(8.4)	1.7	-	上面:縄目・ケズリ、下面:ナデ、被熱痕:上~下面の軒先側に煤+上面側断面の変色	灰 N6/	2mm以下砂礫

番号	器種	残存長:cm	残存幅:cm	残存厚:cm	重量:g	残存	石材	特徴
S8	砥石	24.6	8.0	6.4	2266.3	ほぼ完存	流紋岩脈	底面4面、擦痕

図42 土坑3・出土遺物(縮尺1/4・1/6)

する。

土坑4 (図43、図版18)

北区北部、BS22区に位置する。検出面の標高1.0m、底面の標高0.5mを測る。上面では径1.15~1.2mの円形を呈する。検出面からの深さは0.5mである。断面形は緩やかに広がるU字形を呈している。

埋土は7層に分けた。1・2・4層には炭を含む。灰褐色~暗灰色の粘質土~粘土が主体である。湧水は見られず、井戸ではないと考えられる。

遺物はポリ袋(12号)1/3袋が出土した。土師器椀、瓦器などの小片がわずかに見られたが、図示できるものはなかった。

本遺構の時期は中世前半と考えられる。機能については判断する材料がない。

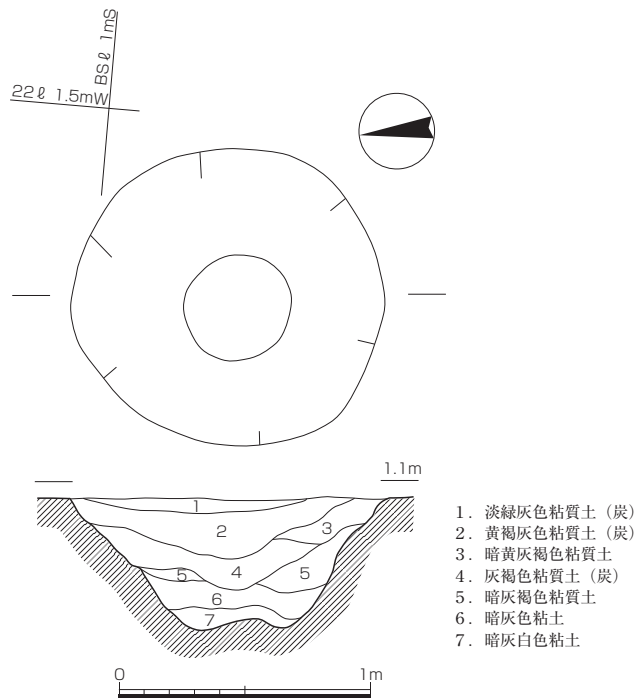


図43 土坑4 (縮尺1/30)

土坑5 (図44、図版18)

北区南端、BW/BX24区に位置する。検出面の標高1.0~1.05m、底面の標高0.6mを測る。上面は径1.0mの円形、底面では径0.35×0.45mの楕円形を呈する。検出面からの深さは0.4mが残る。

埋土は3層に分けた。灰色~灰黒色粘質土である。断面形はU字状を呈している。

遺物はポリ袋(12号)1/2袋が出土した。土師器椀・鍋・竈等の中世前半の土器小片を10点程度と石器1点が認められた。図44-S9は花崗岩の円礫を敲石・磨石として使用したものである。被熱痕跡が認められる。

本遺構の時期は、出土遺物から中世前半に位置付けられる。湧水はなく井戸ではないが、機能を特定できる材料はなく、判断できない。

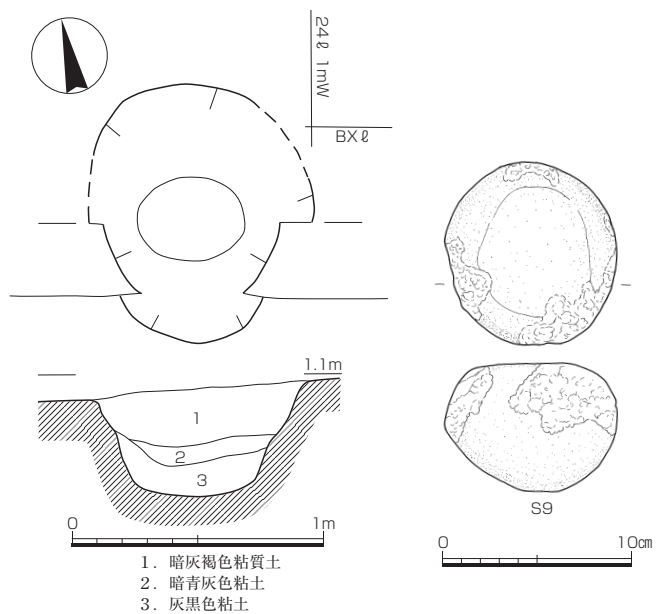


図44 土坑5・出土遺物 (縮尺1/30・1/4)

4. 溝

溝10・11 (図45~47、図版19)

北区北東角付近~西区北端BYライン付近にかけて、正方位の南北方向に主軸を取る2条の溝である。北端は溝24、井戸15・16等の後世の遺構に切られているうえ、BUライン以南は基盤層上面まで破壊された状況で検出した

番号	器種	残存長: cm	残存幅: cm	残存厚: cm	重量: g	残存	石材	特徴
S9	敲石・磨石	9.7	9.0	7.0	829.6	ほぼ完存	花崗岩	擦痕4箇所、被熱

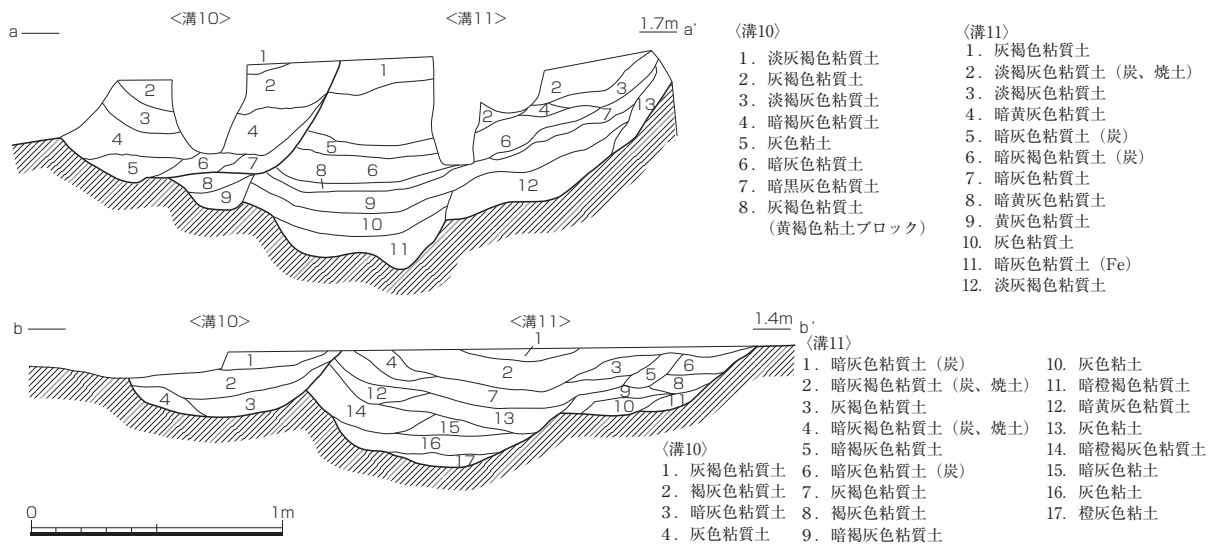
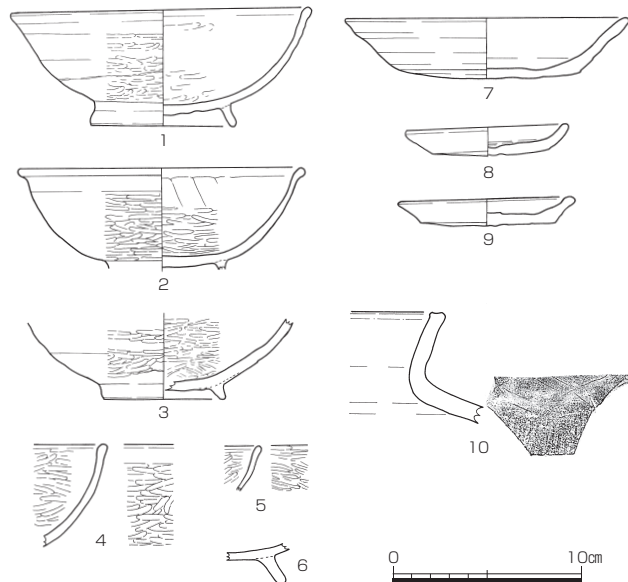


図45 溝10・11断面 (縮尺1/30)

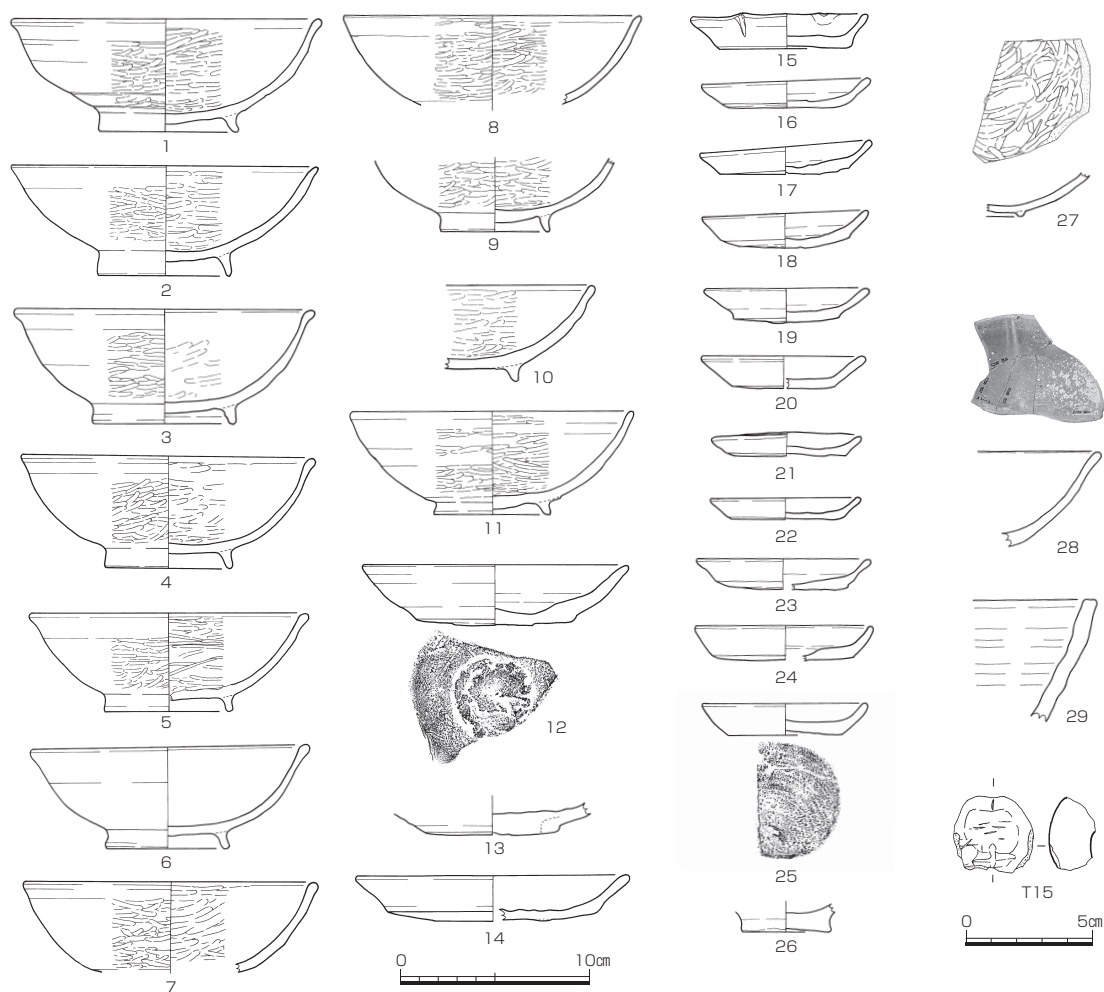
もので、長さ26.5m程度を確認できた。溝10・11は相前後して構築されている。最も残りのよいBUライン付近での検出面の標高は1.6mを測る。底面のレベルは溝10で標高1.05m~0.85m、溝11で標高0.75~0.85m、深さは溝10が0.5m、溝11が0.8mを測る。いずれの溝もBYライン付近で浅くなり、以南では確認されない。特に西区は後世の破壊の度合いが著しいため、BYライン以南に存在しないかどうかは確認できない。断面形はいずれも基本的にU字形を呈する。溝11は西側が深い段のある形状を示し、掘り返しの可能性がある。埋土は溝10で8層、溝11で12層に分層した。溝11の上半に炭・焼土を多く含む層(2・5・6層等)が特徴的に



番号	器種	口径: cm	底径 高台径: cm	器高: cm	残存 -: 1/6以下	特徴	色調	胎土
1	土師器 椀	16	7.65	6~6.3	□1/2 高台1/1	内外: 篋ミガキ密・内面磨減、口: 肥厚・横ナデ2段(体部上半)、体部下半: 篋痕跡、底部丸み、高台: 強い引き出・幅広い横ナデ仕上げ、器厚均一、丁寧な仕上げ	灰白~白 2.5Y8/1、N9/	2mm以下砂礫
2	土師器 椀	15.3	-	-	□1/2 高台-	口: 強い横ナデ・玉縁状、内: 篋ミガキ・上半部には工具ナデ痕、外: 篋ミガキ密、底外: ナデ、高台一部残存、高台径値は6.3cm程度か?	(灰)白 2.5Y8/1	1mm以下砂
3	土師器 椀	-	6.6	-	高台1/1	内外: 篋ミガキ密、口: 横ナデ2段で幅広、体部外面下半に薄く粘土が被る。高台: 厚手で低い・一部潰れ、重焼痕(底部変色)、厚手	灰白 2.5Y8/1~2	3~5mm礫多
4	土師器 椀	-	-	-	-	内外: 篋ミガキ密、口縁部肥厚、器厚均一、大振りな深碗、シャープな仕上げ	灰白 2.5Y8/1~2	1~4mm砂礫
5	土師器 椀	-	-	-	-	内外: 篋ミガキ密、口縁部肥厚、非常に薄く均一な器厚、シャープな仕上げ	(灰)白 10YR8/1~2	きめ細かい
6	土師器 椀	-	-	-	-	ナデ、足高高台	鈍黄橙 10YR7/3~4	きめ細かい
7	土師器 杯	15.05	9.5	3.2	3/4	回転ナデ、底内: 中央仕上げナデ、底外: 篋キリ(ロクロ回転右)、内外: 剥離痕顕著・うろこ状剥片の接合箇所あり(焼成時剥離の可能性)	(灰)白 2.5Y8/1~2	4mm以下砂礫多
8	土師器 皿	8.7	6.15	1.3~1.7	完存	回転ナデ、底外: 篋キリ・ナデ	鈍黄橙~鈍橙 10YR7/4、7.5YR7/4	きめ細かい 赤色粒多
9	土師器 皿	9.4	7.4	1.3~1.5	1/2	回転ナデ、底内: 中央仕上げナデ、底外: 篋キリ(ロクロ回転右)	灰黄 2.5Y7/2	0.5~1mm砂多
10	須恵器 甕	-	-	-	-	回転ナデ、体部内: ナデ、体部外: 平行タキ後横ナデ	灰 N5~4/	1~2mm砂礫多

図46 溝10出土遺物 (縮尺1/4)

調査の記録



番号	器種	口径: cm	底径 高台径: cm	器高: cm	残存 - : 1/6以下	特徴	色調	胎土
1	土師器 椀	16.2×16.6	7.4	6	□3/4 高台-	内外: 窰ミガキ密(硬質感)、内: 磨滅、口: 肥厚・横ナデ2段(体部上半)、体部下半に窰痕跡、大振りで均一な器厚、強く引き出した高台、高台と体部の色調異なる。	灰白(高台)灰白~淡黄 2.5Y8/1、2.5Y8/2~3	2~4mm礫多
2	土師器 椀	16.3	7.1	5.8	□- 高台1/1	内外: 窰ミガキ密、磨滅、口: 横ナデ1段、強く引き出した高台、口径値は残存率が低いため不安定	灰白 2.5Y8/1~2	1mm以下砂
3	土師器 椀	16	7.7	6.1	□- 高台1/1	内外: 窰ミガキ密(内面磨滅で残存一部)・被熱(暗~橙色化)、口: 肥厚・横ナデ2段(体部上半)、高台: 丸み、丁寧な仕上げ	灰白 7.5YR8/1~2、10YR7/1	1mm以下砂多
4	土師器 椀	15.6	6.85	5.8~6	□3/8 高台1/1	内外: 窰ミガキ密、底外: ナデ+板目痕、口: 肥厚・横ナデ1段、体部は丸く深く膨らむ。器厚均一、丁寧な仕上げ	灰白 2.5Y8/1	0.5mm以下砂
5	土師器 椀	14.8	7	5.2	□1/4 高台1/3	内外: 窰ミガキ密、底外: ナデ、口: 肥厚・横ナデ1段、重焼痕(底内外: 灰~黒色化)、内面変色部でうろこ状剥離顕著(焼成時剥離の可能性)、小形椀	浅黄橙~灰白 10YR8/3、2.5Y8/2	0.5mm以下砂少
6	土師器 椀	14.8	6.55	5.3~5.5	□1/3 高台3/4	内外: 窰ミガキ未確認・磨滅、重焼痕、内面暗色化、口: 肥厚・横ナデ1段、小形椀、均一な器厚、しっかりした高台	灰白 2.5Y8/1	1mm以下砂多
7	土師器 椀	15.8	-	-	□1/2	内外: ミガキ密、口: 横ナデ1段、丁寧な仕上げ	灰白 2.5Y8/1	3mm以下砂礫
8	土師器 椀	15.6	-	-	□3/4	内外: 窰ミガキ密、口: 肥厚・横ナデ2段(体部上半)	灰白 2.5Y8/1~2	2~4mm礫多
9	土師器 椀	-	5.9	-	高台1/1	内外: 窰ミガキ密、底外: 押圧・ナデ、高台径小形	灰白 2.5Y8/2	2~5mm礫多
10	土師器 椀	-	-	5.1	-	内: 窰ミガキ密、外: 押圧・ナデ・ミガキの有無不明、口: 肥厚・横ナデ2段(体部上半)、厚手、低い器高と高台=小形椀?、平滑な仕上げ	灰白~白 2.5Y8/1、N9/	1mm以下砂
11	黒色土器 椀	15	6.2	5.5	□1/2 高台1/5	内外: 窰ミガキ密、底外: ナデ・丸み、口: 横ナデ2段(体部上半)、厚手、黒色土器A類	(内)黒(外)灰白 2.5Y2/1、10YR8/1~2	2mm以下砂礫
12	土師器 杯	14	8.4	3.2	□- 底1/4	回転ナデ、底外: 窰キリ+板目痕+周縁部のみナデ、残存率が低く法量値は不安定	鈍褐 7.5YR7/4	1mm以下砂 赤色粒多
13	土師器 杯	-	7	-	底1/2	回転ナデ、底内: 仕上げの押圧、底外: ナデ+板目痕、底部厚手	(内)灰白(外)浅黄橙 10YR8/2、7.5YR8/3	0.5mm以下砂
14	土師器 皿	14.5	11.1	2.45	1/4	回転ナデ、底外: 窰キリ・ナデ、高台状の低平な小粘土帯が底部に巡る、全体磨滅で灰色が強い、器厚均一	灰白~灰黄 2.5Y8/1、2.5Y7/2	1~2mm砂礫 黒色粒多

図47 溝11出土遺物(縮尺1/4)

図47観察表続き

番号	器種	口径: cm	底径 高台径: cm	器高: cm	残存 - : 1/6以下	特徴	色調	胎土
15	土師器 皿	9.4	6.9	1.7~1.9	口1/3 底1/1	回転ナデ、底内: 中央仕上げナデ、底外: ナデ+板目痕、口: 輪花状をなす刻み2か所残存(本来4か所か)、丁寧な仕上がりに	灰白(底外)一部鈍橙 2.5YR8/1~2、7.5YR8/4	1mm以下砂
16	土師器 皿	9	6.8	1.3~1.6	完存	回転ナデ、底内: 仕上げナデ、底外: 窺キリ(ロクロ回転左)+板目痕、端正な仕上がりに、17・23に類似	灰白、一部鈍橙 10YR8/2、7.5YR7/4	0.5mm以下砂 赤色粒少
17	土師器 皿	9.1	6.65	1.1~1.8	口3/4 底1/1	回転ナデ、底内: 仕上げナデ、底外: 窺キリ(ロクロ回転左)、16・23に類似	(内)灰白(外)灰白~浅黄橙 10YR8/1~2、10YR8/2~3	0.5mm以下砂
18	土師器 皿	8.8	6.9	1.7~2	完存	回転ナデ、底外: 窺キリ(ロクロ回転左)、底部の一部橙色化	浅黄橙 10YR8/3	1mm以下砂 2~3mm赤色粒
19	土師器 皿	8.8	5.8	2	口3/4 底1/1	回転ナデ、底内: 中央押圧、底外: 窺キリ(ロクロ回転左)+板目痕、内: 磨滅、20に類似	鈍黄橙~鈍橙 10YR7/2~3、7.5YR7/3	0.5mm以下砂 赤色粒
20	土師器 皿	8.8	5.4	1.7	1/4	回転ナデ、底外: 窺キリ、19に類似	浅黄橙(底)鈍橙 7.5YR8/3~4、5YR7/4	0.5mm以下砂 赤色粒
21	土師器 皿	7.9	6.4	1~1.3	完存	回転ナデ、底内: 仕上げナデ、底外: 窺キリ(ロクロ回転左)・ナデ+板目痕、磨滅、口縁歪み、22に類似	灰白 2.5Y8/1	1~2mm砂礫多
22	土師器 皿	8.1	6	1.15	1/2	回転ナデ、底外: 窺キリ(ロクロ回転左)、底内: 中央押圧・礫の移動で穿孔有り(径3mm程度)、内: 煤付着、被熱変色(淡橙色化5YR8/2)、21に類似	灰白 10YR8/1	2~5mm礫多め
23	土師器 皿	9.2	7.2	1.55	口1/2 底3/4	回転ナデ、底外: 窺キリ(ロクロ回転左)、磨滅、16・17に類似	灰白 10YR8/1~2	0.5mm以下砂
24	土師器 皿	9.4	7.6	1.8	1/3	回転ナデ、底外: 窺キリ、底内: 中央仕上げナデの窪みが顕著	鈍黄橙 10YR7/3	0.5mm以下砂多 赤色粒
25	土師器?皿	8.8	6	1.7	1/2	回転ナデ、底外: 回転系キリ、全体磨滅、外: 被熱で橙色化、須恵器の可能性あり	(内)灰白(外)橙~灰白 2.5Y8/1、5YR7/6	1mm以下砂 赤色粒多
26	土師器 脚台	-	4.7	-	底1/1	回転ナデ、底外: 窺キリ	灰白 2.5Y8/1	3~5mm礫
27	瓦器 椀	-	-	-	-	内: 窺ミガキ密、外: 押圧・ナデ・窺ミガキ未確認、和泉型	(内)灰(外)灰白 N6~5/、7.5Y7/1	0.5mm以下砂
28	須恵器 椀	-	-	-	-	回転ナデ、内: 1か所に火襷・色調は外面と異なりオリーブ色を帯びてツヤ有り、高台部の詳細不明、丁寧な仕上がりに	(内)オリーブ灰(外)灰白 2.5GY6/1、N7/	1mm以下砂少 緻密
29	須恵器 かね鉢	-	-	-	-	回転ナデ、内: 下半に使用痕(摩耗)、東播系か	(内)灰(外)暗灰~灰 N6/、N5~4/	4mm以下砂礫多

番号	器種	長: cm (残存値)	幅: cm (残存値)	厚: cm (残存値)	重量: g	残存	特徴	色調	胎土
T15	不明土製品	-	-	-	13.6	一部	ナデ、残存面は1面のみ、同面表面に刻み確認、裏面には小さな窪み部の一部が残存、円筒状の先端部の可能性が考えられる。	橙(断面)鈍橙 5YR7/6、7.5YR7/4	0.5mm以下砂 赤色粒多

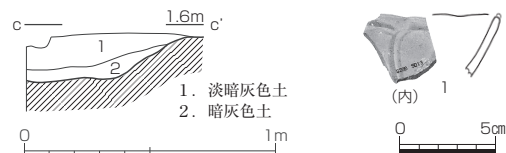
見られる。遺物は溝10・11併せてコンテナ (28 $\frac{1}{2}$ ℓ/箱) 4箱が出土した。特に溝の上半部においては調査時に分けられずに取り上げたものがあり、両溝の遺物が接合したものもある(図46-1・3)。遺物量は溝11が圧倒的に多く特に、土師器椀・皿が多量に出土し、完形資料も認められた。溝の廃絶に伴う祭祀行為が窺われる。また、本遺構から多数の動物遺存体が出土している(第4章第4節参照)。ニホンジカ・ウシが同定されており、ニホンジカの下顎骨のほか、ウシ大腿骨には食用のための解体痕が指摘される。こうした動物遺存体も祭祀に関連する可能性が考えられる。

溝10・11は、出土遺物から12世紀前半に埋没時期が求められる。掘削時期は不明だが、11世紀代に遡る可能性も残す。ひんばんな掘り返し状況から、日常的に管理されていたことが予想される。この時期は、本調査地点における中世集落の開始期にあたり、正方位の南北方向を示していることに注目したい。

溝12 (図48、図版20)

西区北東角、BY18区に位置する。西区北壁19ライン付近から南2mの地点で東に向きを変える溝として報告する。検出したのは溝の西側の肩のみで、東肩部は攪乱により失われている。北側は調査区外、東側は大規模な攪乱部にあたり未確認である。検出面の標高1.55m、幅0.6m、深さ0.2mを測る。遺物はコンテナ (28 $\frac{1}{2}$ ℓ/箱) 1/2箱が出土した。中世前半の土師器椀・杯・皿・鍋等の小片である。青磁碗1点を図示した。

本遺構の時期は、出土遺物から中世前半に比定される。



番号	器種	口径: cm	底径 高台径: cm	器高: cm	残存 - : 1/6以下	特徴	色調	胎土
1	青磁 碗	-	-	-	-	輪花口縁、内: 花卉紋、龍泉窯小碗I-2類か	灰白(断)灰オリーブ N8/、7.5Y6/2	緻密

図48 溝12断面・出土遺物 (縮尺1/30・1/4)

溝13 (図49、図版20)

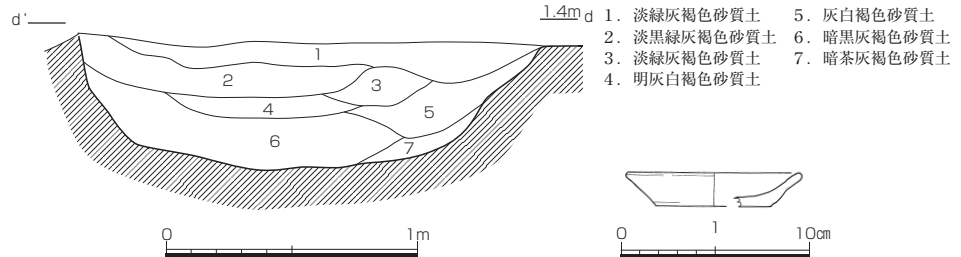
西区南端、CD21区に位置する。検出面の標高1.3m、底面の標高0.8mを測る。長さ1.0mの溝を検出した。北は攪乱に切られ、南は調査区外へ伸びる。南に隣接する第9次調査地点で溝24とした溝に接続する可能性がある。第9次調査溝24 (註) に続くことから12世紀前半に埋没したと考えられる。本溝の位置は前述の溝10・11の延長線上にあたり、溝10・11の時期に対応する。断面形はU字形、埋土は7層に分けた。

遺物はコンテナ (28 $\frac{2}{3}$ 箱) 1 / 3箱が出土し、中世前半の土師器椀・杯・皿・鍋等の小細片が見られた。

本遺構の時期は12世紀前半である⁽¹⁾。

註

(1) 報告時には12世紀中頃としたが、遺物を再検討し、12世紀前半と考えたい。



番号	器種	口径: cm	底径 高台径: cm	器高: cm	残存 - : 1/6以下	特徴	色調	胎土
1	土師器 皿	9.3	6.2	1.8	口- 底1/3	回転ナデ、底外: 笠キリ後丁寧なナデ、残存度低いため口径値は不安定	鈍黄橙 10YR7/3~4	0.5mm以下赤色粒

図49 溝13断面・出土遺物 (縮尺1/30・1/4)

溝14・14 a (図50、図版20)

東区BZライン～調査区南壁までの間で15ライン付近を南北方向に走行する溝で、CDライン以南では2条を検出した。溝14は、攪乱や溝22により分断されるが、BZライン～CBライン間ではN-11.5°-Eに主軸を、またCBラインから調査区南壁ではN-15°-Eに主軸を取るように走行する。CDライン以北は標高0.8m付近まで削平され、幅0.6mが残るのみで、CDライン以南では検出面の標高1.25m、幅2.35m、長さ1.0mを確認した。底面のレベルは0.6m前後を測る。

またCDライン以南のみ溝14の東側に幅1.0m、深さ0.3mの溝を検出し、これを溝14 aとする。これらの溝は、南に隣接する第14次調査地点で報告している溝10と同一であり、レベルも合致する。埋土は溝14で20層、溝14 aで3層に分けた。溝14の堆積状況から流路が少しずつ変化し、溝14 a→14の掘り返しが窺われる。遺物は中世前半の土器小片がポリ袋 (12号) 3袋出土した。本溝の時期は、第14次調査地点の成果を勘案すると溝14 aは12世紀中葉～後半、溝14は12世紀末に比定される。

溝15 (図51・52、図版)

北区に位置する、正方位の南北方向の溝である。2条の溝があり、溝15は調査区東壁、BUライン南2m付近からBXライン南2mまでの長さ12mを検出した。残りの良い北側で検出面のレベルは標高1.45m、底面のレベルは0.95mを測り、幅1.2

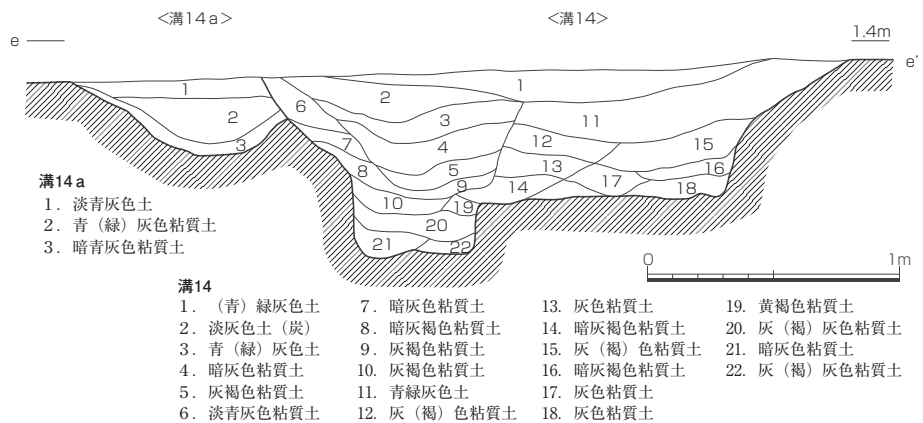


図50 溝14断面 (縮尺1/30)

m、深さ0.5mが残る。BVライン南2mより南では標高1.2mまで削平され幅0.7m、深さ0.15mが残る。溝15aは溝15の東側を走行し、BVライン南2mの地点より北側で検出した。西半は溝15により切られる。底面の標高は1.15mを測る。本溝の北側は調査区外にあたり、西側に隣接する第25次調査地点溝18と同一遺構である。

遺物はコンテナ（28 $\frac{1}{2}$ 箱）1箱が出土した。土師器碗・杯・皿・鍋のほか、白磁・青磁、瓦質の四耳壺等が見られる。

本遺構の時期は13世紀前半に比定される。溝の方向は、前述の溝10・11と並行するもので、正方位の南北方向であるこ

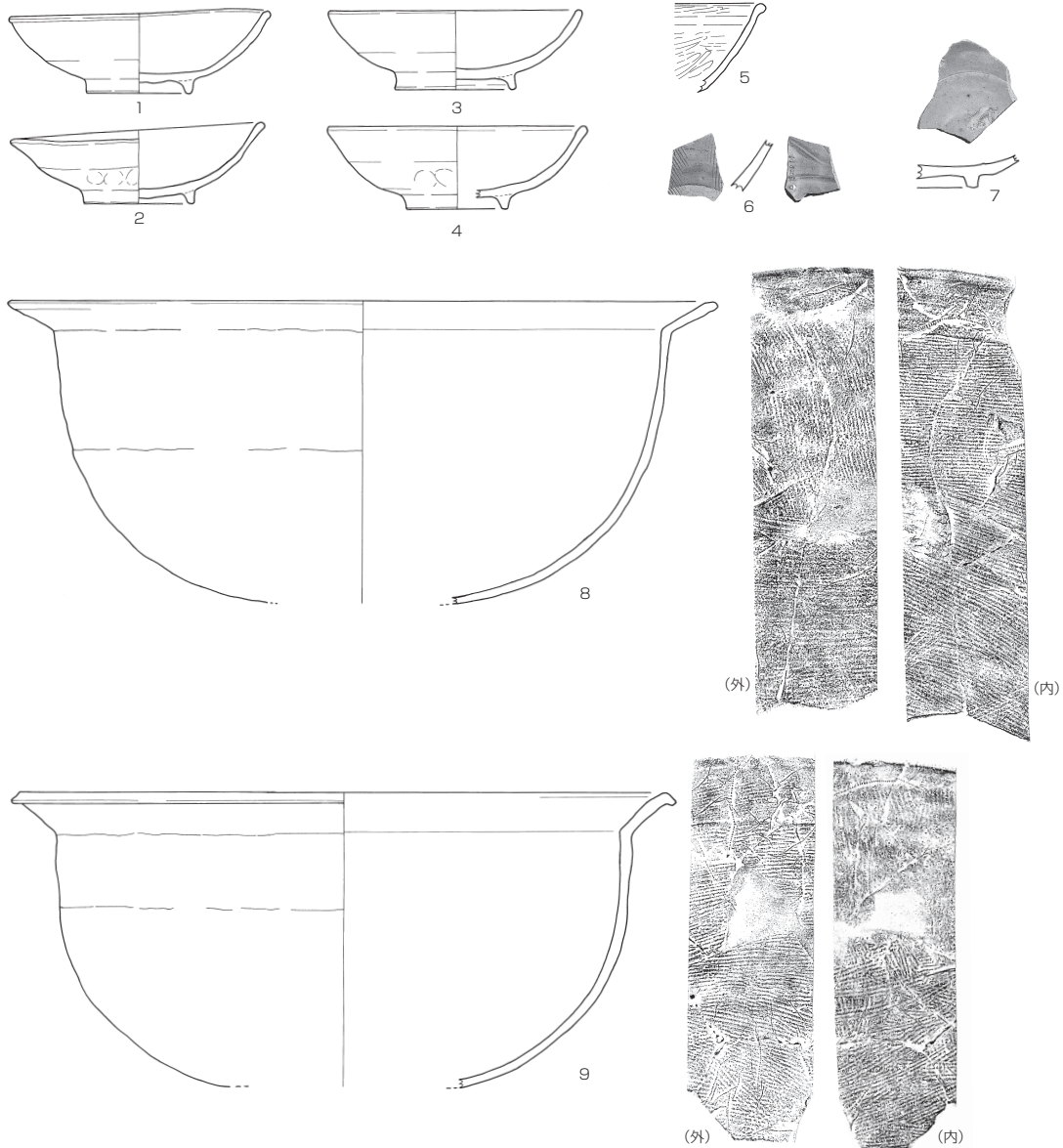
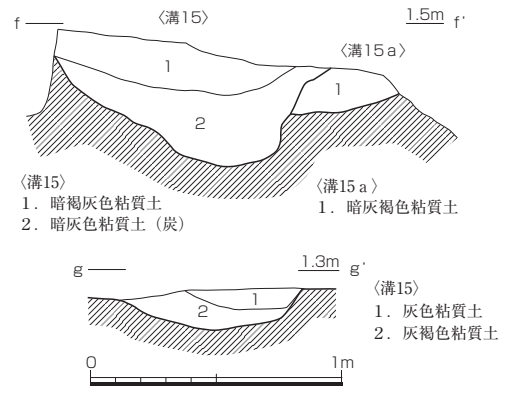
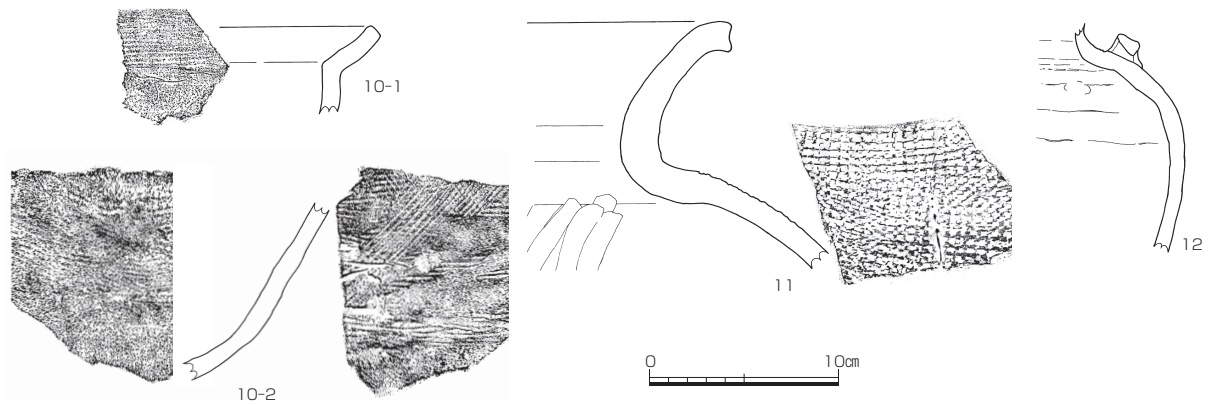


図51 溝15断面・出土遺物(1) (縮尺1/30・1/4)



番号	器種	口径: cm	底径 高台径: cm	器高: cm	残存 -: 1/6以下	特徴	色調	胎土
1	土師器 椀	14.1	5.8	4.1~4.6	□1/3 高台1/1	ナデ、口: 小さな玉縁状・煤付着、重焼痕	灰白 2.5Y8/1~2	2~5mm礫多
2	土師器 椀	13.8×14.2	5.95	3.4~4.4	完存	内: ナデ、外: 押圧、底内: ナデ・軽い押圧、底外: 亀裂、重焼痕、口: 横ナデ2段の痕跡	灰白~淡黄 2.5Y8/2~3	1~3mm砂礫少
3	土師器 椀	13.8	6.6	4.3	□- 高台3/4	ナデ、外: 浅い押圧、底外: 亀裂多、重焼痕、残存率低く口径・器高値は不安定	灰白~淡黄 2.5Y8/2~3	1~3mm砂礫
4	土師器 椀	14.1	5.6	4.5	□1/3 高台-	ナデ、底内・体部外: 押圧、残存率低いため高台径・器高値は不安定	灰白 2.5Y8/1~2	1mm以下砂
5	土師器 椀	-	-	-	-	内外: 筒ミガキ密、外: 押圧、口: 玉縁状、器厚均一、平滑で丁寧な仕上がり	(灰)白 2.5Y8/1	1mm以下砂少
6	青磁 碗	-	-	-	-	施釉: 外面下端以外、内外: 櫛目文・画花文、同安窯	灰白(釉)オリーブ黄 7.5Y7/1、7.5Y6/3	緻密
7	白磁 皿	-	-	-	-	削り出し高台、施釉: 体部内外~一部高台外面に及ぶ、内: 見込みに段	灰白 5Y7/1	緻密 黒色粒僅少
8	土師器 鍋	38.5	-	-	□1/5	内: ハケメ(横位)、外: ハケメ(横位の底部以外は縦位)+押圧、口: ハケメ後横ナデ、外面煤付着多、口縁垂みで口径値不安定(38~39cmの範囲)	鈍橙~鈍褐 7.5YR6/4・5/3	1mm前後砂多
9	土師器 鍋	36	-	-	□1/4	内: ハケメ(斜めの底部以外は横位)、外: ハケメ(上半は縦位・下半は横位)+押圧、口: 横ナデ、外: 煤付着顕著(口縁部まで)・一部橙色化	鈍褐 7.5YR5/3	1mm前後砂
10	土師器 鍋	-	-	-	-	口: 横ナデ(内面は下に横ハケ)、体部内外: 磨滅・煤で調整不明、底内: 横ハケ・押圧、磨滅、底外: 粗いハケメ(横位+斜位)・煤付着顕著、厚手	(内) 鈍黄橙(外) 黒褐~黒 10YR6/3、10YR3~2/1	1~2mm砂礫過多 雲母多
11	須恵器 甕	-	-	-	-	回転ナデ、体部外: 格子目タタキ、体部内: 縦位のナデ	灰白~灰 2.5Y7/1、N6/	1~3mm砂礫多
12	瓦質土器 四耳壺	-	-	-	-	内: ナデ・押圧・明瞭な粘土接合痕、頸部: 横ナデ、外: 肩部にタタキ上面・下半に横ケズリ痕、把手部は破片中2箇所確認、頸部下端に沈線1条	灰(断面)灰白 N5/、2.5Y8~7/1	2mm以下砂礫

図52 溝15出土遺物(2) (縮尺1/4)

とは注意したい。並行関係を積極的に評価すると道の側溝と考えられる。溝11と溝15とは芯間で5mを測る。また、西に隣接する第25次調査地点では、本溝の西に並行する溝19が確認されている。溝19との芯間距離は5mを測り、道の幅を示す可能性を考えたい。溝の方向や存続期間、屋敷地との関係を整理する必要があるだろう。

溝16 (図53・54、図版20)

北区、BSライン南3mを東西方向に走行する溝である。攪乱により分断されており、長さは調査区西壁から東へ1mと東壁から西3m分を検出した。主軸方向はE-10°-Sを示す。残りの良い東側で、検出面の標高1.5m、底面の標高0.95mを測り、溝の幅0.7m、深さ0.6mが残る。埋土は7層に分けた。東端は、隣接する第20次調査C地点(未報告)において接続する溝が確認されている。西は隣接の第25次調査地点内には認められておらず、調査地点境界付近で収束していると判断される。西側の検出部分は標高1.0mまで削平を受けており、溝の幅0.5m、深さ0.2mが残る。埋土は8層に分けた。堆積状況から掘り返しの可能性がある。

遺物はコンテナ(28 $\frac{1}{2}$ 箱)で1/3箱が出土した。土師器椀・杯・皿・鍋が主体で、須恵器、白磁を少量含む。

本遺構の時期は出土遺物から13世紀前半に位置付けられる。

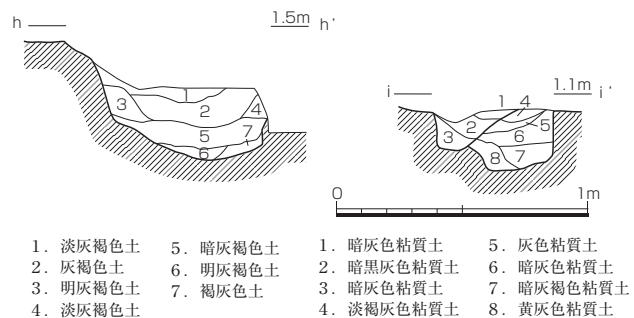
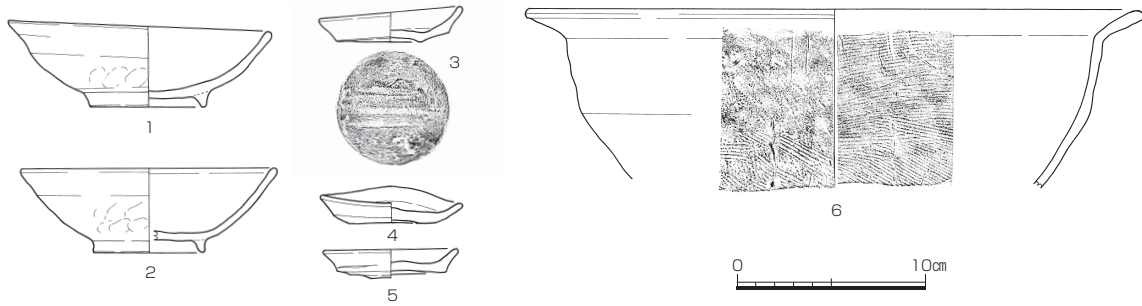


図53 溝16断面 (縮尺1/30)



番号	器種	口径: cm	底径 高台径: cm	器高: cm	残存 -: 1/6以下	特徴	色調	胎土
1	土師器 椀	14	6.2	4~4.6	□1/4 高台1/2	内: ナデ?、外: 押圧、内外: 剥離箇所有り(2次的被熱痕は未確認→焼成時剥離の可能性有)、全体磨滅	(灰)白 2.5Y8/1	2~3mm礫
2	土師器 椀	13.8	6	4.5	□1/4 高台1/3	内: ナデ・底部押圧・重焼痕、外: 押圧・ナデ	(灰)白 2.5Y8/1	1~2mm砂礫多
3	土師器 皿	7.7	6	1.7~1.9	完存	回転ナデ、底内: 仕上げナデ、底外: 篋キリ+板目痕、歪み、吉備系土師器椀と共通する胎土	灰白 2.5Y8/2	1~3mm砂礫
4	土師器 皿	7.2×7.5	4.6	1.1~2	□3/4 底1/1	回転ナデ、底内: 仕上げナデ、底外: 篋キリ後ナデ、歪み大	(灰)白 2.5Y8/1~2	1~2mm砂礫多
5	土師器 皿	7.2	5.9	1.2~1.5	1/2	回転ナデ、底内: 仕上げナデで一部深く窪む、底外: 篋キリ(ロクロ回転左)+板目痕、体部に篋キリ工具痕、歪み	(灰)白 2.5Y8/1	1~2mm砂礫
6	土師器 鍋	-	-	-	-	内: 口縁ナデ・体部ハケメ(上半横・下半斜め)、外: 口縁縦ハケ後押圧+ナデ・体部ハケメ(上半縦・下半斜め)後押圧顕著・煤付着多、口径は33cm前後~34cmの可能性	(内)浅黄橙(外)鈍黄橙 10YR8/3~4, 10YR7/4	1mm以下砂多

図54 溝16出土遺物 (縮尺1/4)

溝15と埋没時期が近いことを考えると、接続していた可能性が高い。

溝17 (図55)

西区南西端、CD24区に位置する。24ライン西2mに主軸を取る南北方向の溝である。CDライン以南の長さ1mほどを検出した。検出面は<5層>上面である。同ライン以北は大きな攪乱により確認できない。延長線上にあたる北区でも同方向の溝はないため、調査区北端には伸びない可能性が高く、西区のどこまで存在したかは確認できない。一方、南側については、南に隣接する第11次調査地点で溝41として報告した溝に接続する。

検出面の標高1.4m、底面の標高0.8mを測る。幅1.1m、深さ0.6mが残る。第11次調査地点-溝41も同規模であり、同一遺構として判断した。断面形は上部が開くU字形を呈する。埋土は7層に分けた。ブロックを多く含む灰褐色~暗灰色粘質土を主体とする。

遺物はポリ袋(12号)2袋、土師器椀・皿・杯・鍋等の小片40点が出土した。図示できるものはなかったが、既報告のものも併せ、本遺構の時期は13世紀末~14世紀初頭に位置づけられる。

溝18 (図56~61、図版21)

東区、14ライン~15ライン間を南北方向に走行する。攪乱により分断されるが、東区の北端~南端までで確認できた。北は第18次調査地点に同一遺構が確認されており(未報告)、南は第14次調査地点の溝15とした溝に繋がる。構内座標BSライン~CKラインまで90mの長さで確認される南北方向の溝であり、中世前半期の屋敷地の区画として重要な位置にある溝である。

検出面は<5層>で、その標高は残りのよい南端で1.15m、k・l断面では0.9mを測る。底面の標高は0.05m~-0.1mを測る。溝の幅は2.7~3.7m、深さは0.75~0.9mが残る。溝の主軸方向は南北でやや異なっており、調査

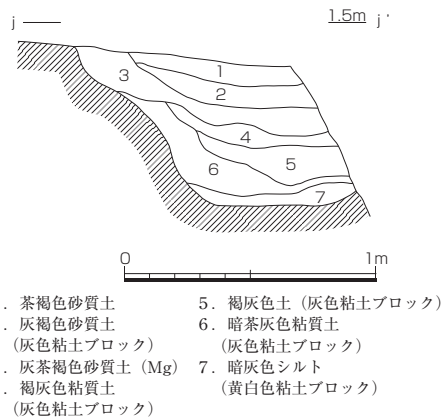


図55 溝17断面 (縮尺1/30)

- 1. 茶褐色砂質土
- 2. 灰褐色砂質土 (灰色粘土ブロック)
- 3. 灰茶褐色砂質土 (Mg)
- 4. 褐灰色粘質土 (灰色粘土ブロック)
- 5. 褐灰色土 (灰色粘土ブロック)
- 6. 暗茶灰色粘質土 (灰色粘土ブロック)
- 7. 暗灰色シルト (黄白色粘土ブロック)

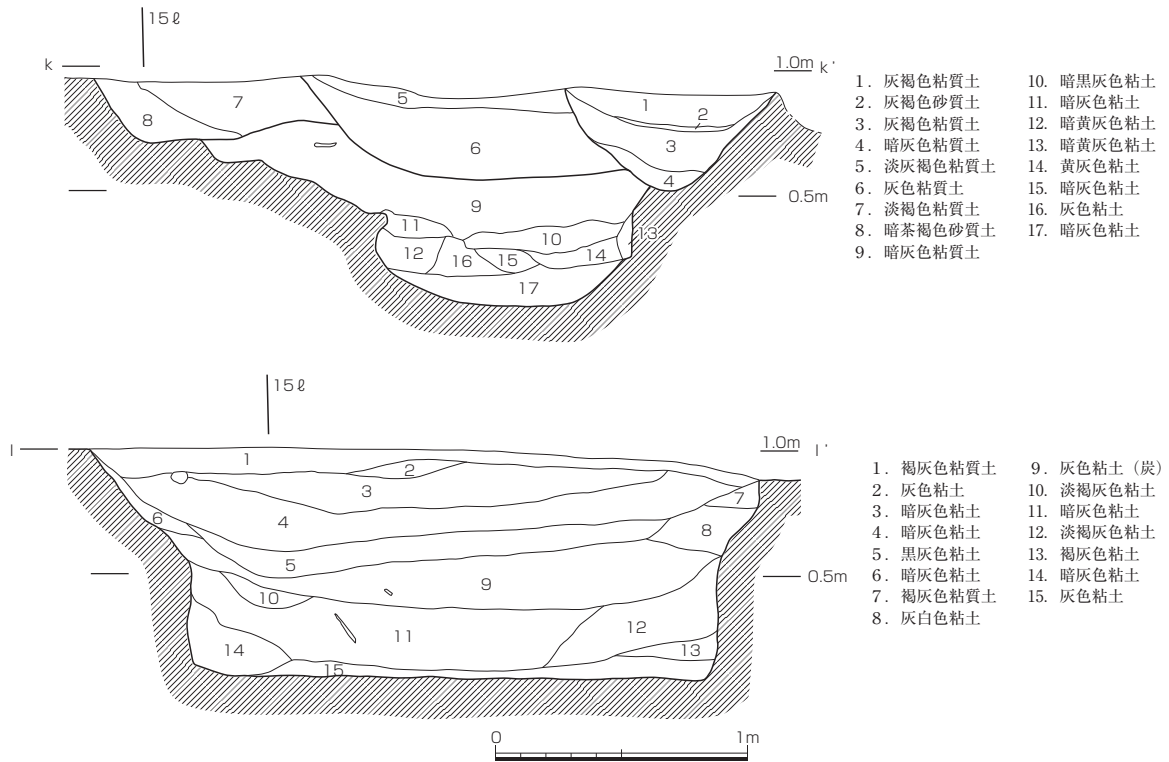


図56 溝18断面 (縮尺1/30)

区北端、BYライン～CBライン付近まではN-11.5°-Eを示し、CBライン以南ではN-24°-Eを示す。前述した溝14の方向もCBラインの南付近で方向を変えている。

埋土は15～17層に分けた。北端 k 断面では、1群：1～4層、2群：5～9層、3群：10～17層に分けた。これに対して i 断面では1群は該当なし、2群：1～9層、3群：10～15層に大別される。1群は小規模の溝等の別遺構である可能性があるが、調査時に平面的に捉えることはできなかった。断面の形状は、北端付近では下端の幅0.5mでやや丸みのあるU字状をなすのに対し、i 断面以南では底面の幅2.0mを測る箱型の形状を呈しており、形状が異なる。南の箱型の断面形は本調査地点南の第14次調査地点溝15でも認められる。こうした形状の違いは、管理者の違いを示す可能性が考えられる。

遺物はコンテナ (28 $\frac{1}{2}$ 箱) 7箱が出土した。吉備系土師器椀が3.7箱、皿が0.3箱、竈等が1箱、瓦質・土師質鍋が1箱、須恵器・備前焼1箱である。大量の土師器椀は70個体以上が出土し、完形資料が極めて高い比率で認められた。皿についても約20個体が数えられた。そのうち、図58には椀29個体、図59に土師器皿13個体を掲載している。椀・皿は口径で3/4以上、高台で完存～3/4以上残るものの一部を抽出しているが、そういった個体が極端に多いことが注意される。そのほかに土師器鍋、瓦質鍋・羽釜、須恵器こね鉢が認められる。また瓦も破片数で30点以上出土しており、うち1点を掲載した。CC・CD15区での出土状況を図57に示した。椀・皿類がまとめて廃棄された状況である。

上述した土器類のほか、多量の礫も出土している。礫は36個を数える。加工や被熱痕跡は見られず、石材は花崗岩・安山岩・流紋岩等が認められた。拳大のものから、20cm角大の大振りのもが含まれる。溝の廃絶時に周辺にあるものを廃棄したのであろう。木製品は6点を掲載した (図61)。曲物 (W44・45・48・49) のほか、角材・板材が出土している。こうした遺物量の多さは、出土量の多い本時期の溝の中でも際立っている。さらに同一溝にあたる南側の第14次調査地点の溝15と比較しても遺物量は多く、その背景が注目される。

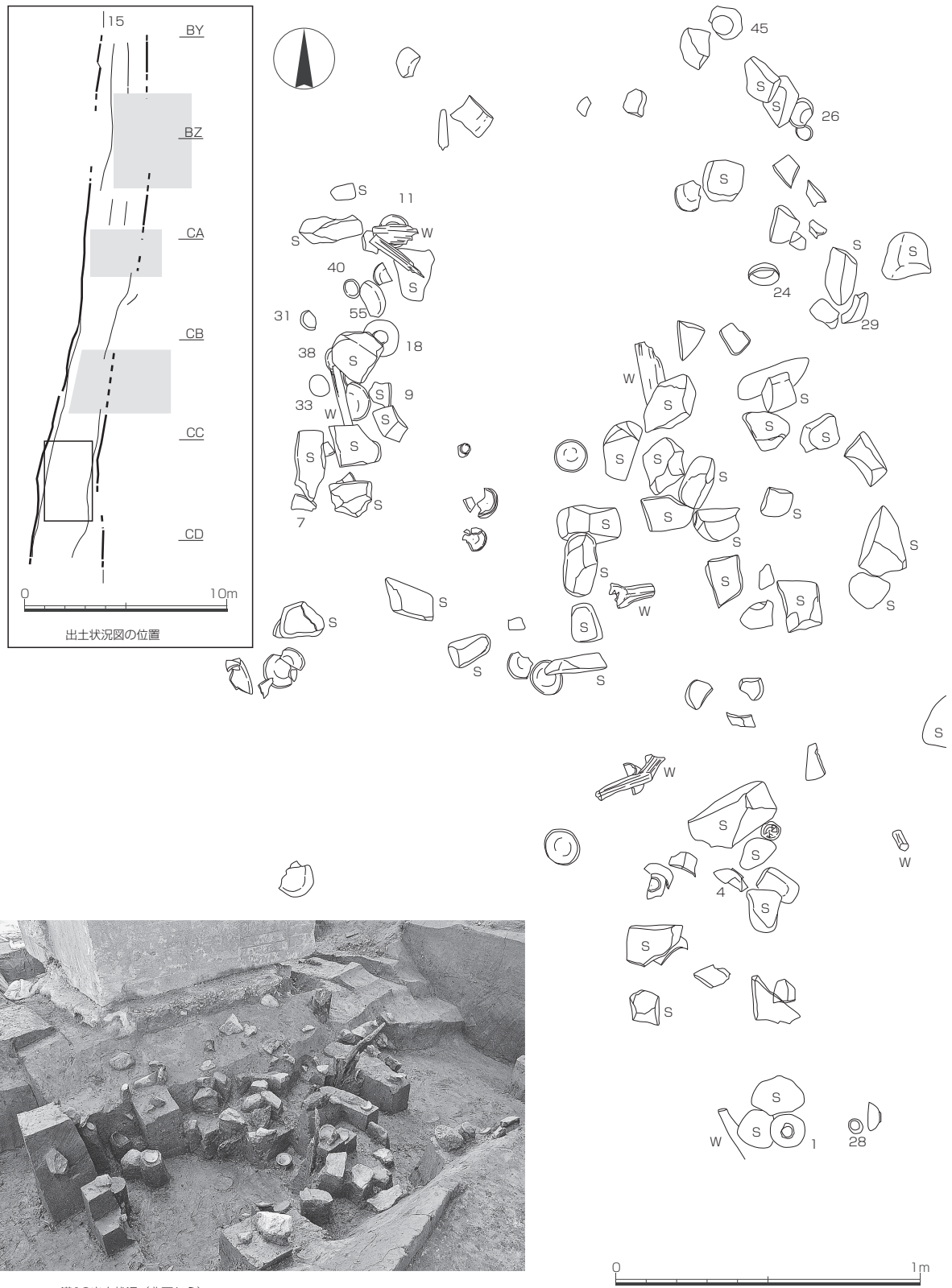
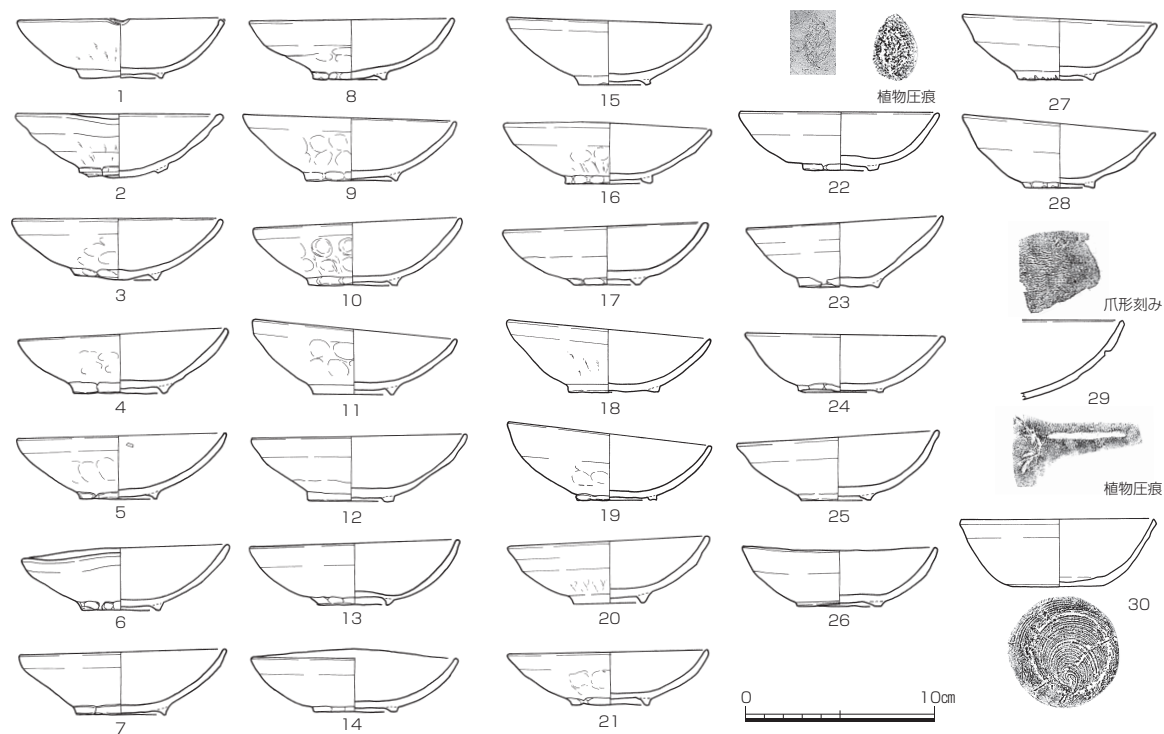


図57 溝18遺物出土状況（縮尺1/20）

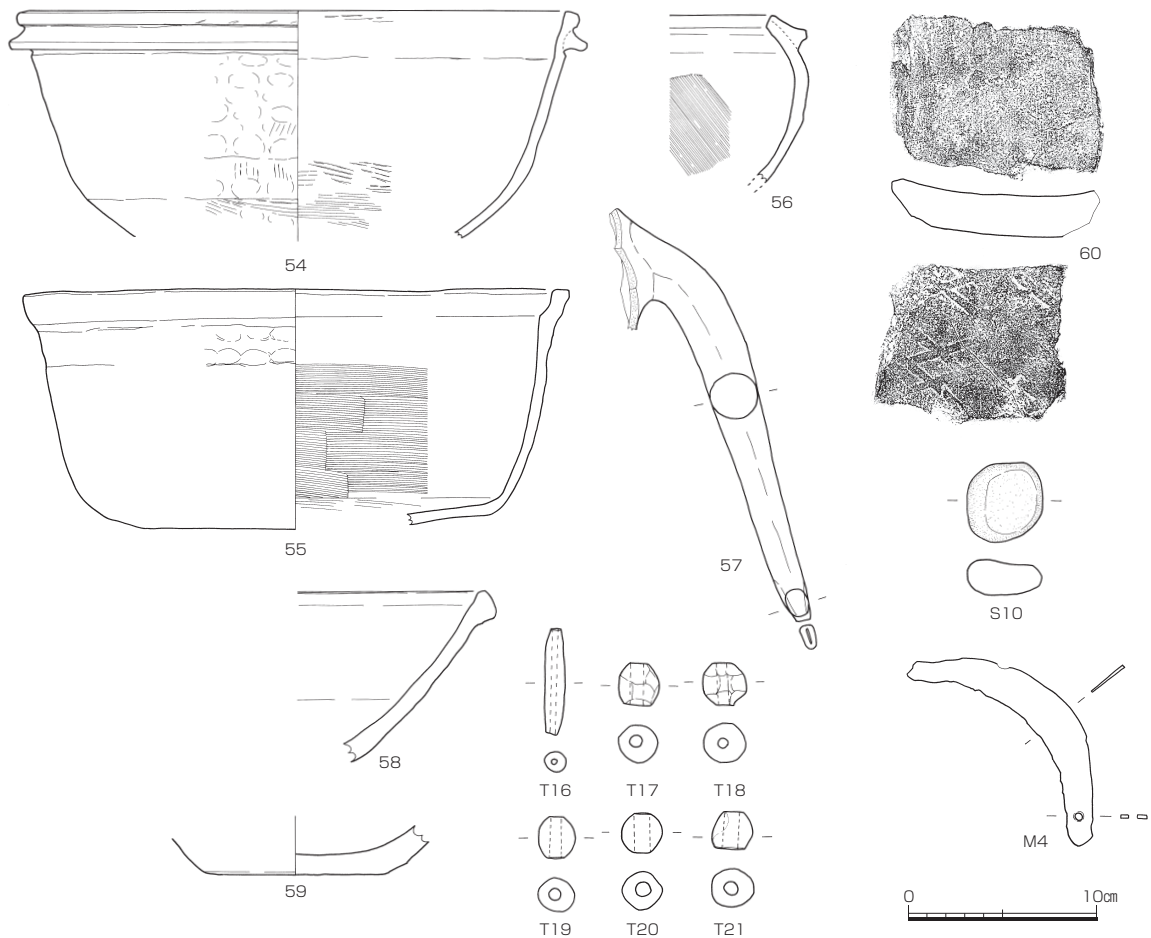
調査の記録



番号	器種	口径:cm	底径 高台径:cm	器高:cm	残存 -:1/6以下	特徴	色調	胎土
1	土師器 碗	11	4.5	3.15	完存	内:丁寧なナデ・底に重焼痕、外:ナデ・押圧少、高台:粗雑・断面形不安定、口縁4箇所に刻み(幅1cm前後、対角線上に3箇所は内側に打欠きで1か所は外向きの押圧)	灰白 2.5Y8/1-2	1mm以下砂
2	土師器 碗	11	4.5×4.8	3.4	完存	内:丁寧なナデ、外:ナデ・亀裂多、底:丸底・高台底面よりも突き出る。口縁の一部受け口状?、高台:粘土紐つなぎ目明瞭・押圧・端部未調整(植物繊維痕)・粗雑、内外稜	灰白 2.5Y8/1	1mm以下砂
3	土師器 碗	11.15	4.3	3.1~3.3	□3/4 高台1/1	内:丁寧なナデ、底内:押圧・重焼痕(暗色化)、外:押圧・ナデ、押し出で丸みを有す底部、高台:粘土紐のつなぎ目明瞭・押圧	灰白 5Y8/1	1mm以下砂
4	土師器 碗	11.1	5	2.9~3.6	□1/1 高台3/4	内:丁寧なナデ、外:ナデ・押圧、高台:粘土紐つなぎ目明瞭	灰白 2.5Y8/1-2	2mm以下砂礫
5	土師器 碗	11.05	4	3.2~3.5	完存	内:丁寧なナデ、外:押圧・ナデ、高台:粘土紐つなぎ目明瞭、底部丸み、重焼痕、内面にモミ圧痕	灰白 5Y8/1-2	2mm以下砂礫
6	土師器 碗	11	4.25	2.7~3.5	完存	内:丁寧なナデ、外:ナデ・軽い押圧、高台:粘土紐つなぎ目明瞭・押圧・断面潰れ有、口縁橙色化(重焼痕?)	灰白 5Y8/1	1mm以下砂
7	土師器 碗	11	4.85	3.2~3.5	□2/3 高台1/1	内:丁寧なナデ・重焼痕(灰色変)、外:ナデ・押圧、高台:粘土紐のつなぎ目明瞭・断面潰れ有	灰白 5Y8/1	1mm以下砂
8	土師器 碗	10.8×11.1	4	3.1~3.3	□3/4 高台1/1	内:丁寧なナデ・底部押圧、外:押圧・ナデ・体部中央付近に窪キリ痕、底部は丸みを有す形状、高台:粘土紐のつなぎ目明瞭・押圧	灰白 2.5Y8/2	5mm以下砂礫
9	土師器 碗	11.3	4.7	3.2~3.6	□1/1 高台3/4	内:丁寧なナデ・工具痕、外:押圧痕が2段に並ぶ(指紋明瞭)、高台:一部潰れ	灰白 5Y8/1	1~2mm砂礫
10	土師器 碗	10.8×11.1	4.7	3.1~3.6	ほぼ完存	内:丁寧なナデ・工具痕、外:押圧痕が指の間隔に合わせて2段に並ぶ(指紋明瞭)・亀裂多、底内:粘土貼り付け(幅1cm長2.5cm)、重焼痕(底部灰色化)	灰白 5Y8/1	1~3mm砂礫
11	土師器 碗	10.8	4.1	3~4	完存	内:丁寧なナデ・工具痕、外:押圧痕が並ぶ、高台:一部潰れ、重焼痕(口縁橙色化)	灰白 10YR・2.5Y8/1	1~3mm砂礫
12	土師器 碗	11.4	4.6	3.4~3.6	□5/6 高台1/1	内:丁寧なナデ、外:ナデ・押圧、高台:潰れ有り	灰白 5Y8/1	2mm以下砂礫
13	土師器 碗	11.15	3.8	3.1~3.5	□1/1 高台3/4	内:丁寧なナデ・工具痕(放射状)・底部は押圧、外:ナデ、高台:粗雑な作り・一部剥落・押圧、重焼痕(底部灰色化)・口縁部橙色化	灰白 5Y8/1	1mm以下砂
14	土師器 碗	10.2×11	4.4	2.9~3.4	完存	内:丁寧なナデ、外:ナデ・押圧、高台:潰れ有り・端部未調整(細かい繊維痕)、口縁歪みで楕円形、底部内外橙色化	浅黄橙~灰白 10YR8/3~2	1~3mm砂礫
15	土師器 碗	10.95	3.9×4.3	3.2~3.6	□3/4 高台1/1	内:丁寧なナデ、外:ナデ・押圧、体部外:窪キリ痕残存、重焼痕(底部黒色化)・口縁橙色化	灰白 2.5Y8/1	1mm以下砂
16	土師器 碗	10.95	4.3×4.6	2.8~3.3	□3/4 高台1/1	内:丁寧なナデ、外:押圧・ナデ・下半に亀裂、高台:押圧、重焼痕(底部・口縁部変色)	灰白 10YR8/2、2.5Y8/1	1~2mm砂礫
17	土師器 碗	10.9	3.45	2.9~3.3	□8/9 高台5/6	内:丁寧なナデ・工具痕、外:押圧・ナデ、底外:板目痕、高台:粗雑な作り・角張る形状、重焼痕(底内外暗色化)	灰白 5Y8/1	1mm以下砂
18	土師器 碗	10.8	4.7×5	3~3.8	完存	内:丁寧なナデ・工具痕、外:ナデ・押圧、高台:一部潰れ、重焼痕(底・口縁一部変色)	灰白 2.5Y8/1	1~2mm砂礫
19	土師器 碗	10.8	4.2×4.6	2.9~4.1	□3/4 底1/1	内:丁寧なナデ・工具痕・底に重焼痕、外:押圧、高台:粗雑な作り・端部は未調整で凹凸残	(内) 灰黄 (外) 灰白 2.5Y8/3、2.5Y8/2	2mm以下砂礫
20	土師器 碗	10.7	3.9	3.1~3.6	□3/4 高台1/1	内:丁寧なナデ、外:ナデ・押圧・下半~底に亀裂多、口:橙色化	灰白 10YR8/1-2	1~5mm灰白色粘土粒多、1mm前後砂多
21	土師器 碗	10.7	4	2.7~2.9	完存	内:丁寧なナデ、外:押圧・ナデ、高台:粘土紐つなぎ目明瞭	灰白 2.5Y8/1	4mm以下砂礫
22	土師器 碗	10.55	4	3.1	完存	内:丁寧なナデ、底内:押圧・植物葉の圧痕(1×2cm大)、外:押圧・ナデ、高台:押圧で花卉状の平面形に・粘土紐つなぎ目明瞭・碗の中心からズレた位置・粗雑な作り	(内) 浅黄橙 (外) 灰白 10YR8/3、10YR8/1	1mm以下砂赤色粒

図58 溝18出土遺物(1) (縮尺1/4)

調査の記録



番号	器種	口径: cm	底径 高台径: cm	器高: cm	残存 - : 1/6以下	特徴	色調	胎土
54	土師器 釜	29.8	-	-	口1/3	口: 横ナデ、体内: ハケメ(横位・細かい)+ナデ、体部下端~底部内: ハケメ(粗い横位)、外: ハケメ(体部は縦位・底部付近は横位)+押圧多、外面煤付着顕著	鈍黄橙 (内)10YR7/3(外)10YR7/4	4mm以下砂礫
55	瓦質 鍋	28.9	20	12.8	口7/8 底3/4	口縁: 横ナデ、体部~底部内面: ハケメ(横位・細かい)、頸部外面: 押圧、外面: 厚い煤付着で調整不明	暗灰~黒 3/、2/	1mm前後砂
56	瓦質 羽釜	-	-	-	-	口: 横ナデ、内・外面下半: ハケメ(横位・細かい)、外面上半: 押圧、外面煤付着顕著	(内)灰白(外)黒褐 8/、10YR3/1	3mm以下砂礫 0.5~1mm砂多
57	瓦質 羽釜脚	-	-	-	-	脚部、ナデ、鍋内: ハケメ(横位)、脚上半: 煤付着多、脚下端面には窪み有り	(脚下半)灰白(上半)暗灰 7/、3/	0.5mm以下砂
58	須恵器 こね鉢	-	-	-	-	回転ナデ、内: 下半に利用痕顕著、片口部が僅かに残る。口縁に重焼痕(黒色化)、東播系	灰 (内)N6/ (外)N5/	5mm以下砂礫 1mm前後砂多
59	須恵器 こね鉢	-	9.8	-	底1/1	外: 下端にケズリ痕、底外: 糸キリ痕若干残存、内: 使用痕顕著、黒色粒含む、東播系	褐灰 7.5YR5/1・4/1	2mm以下砂礫 1mm前後砂多

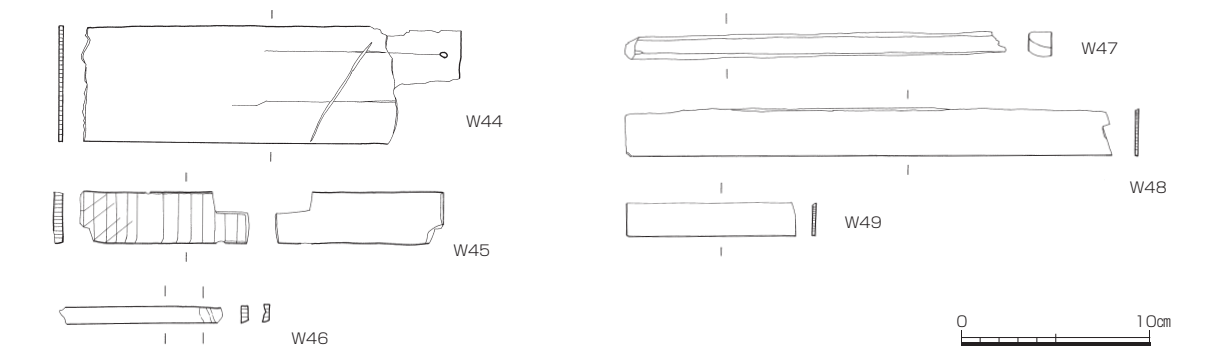
番号	器種	長: cm (残存値)	幅: cm (残存値)	厚: cm (残存値)	残存	特徴	色調	胎土
60	須恵質 平瓦	(9.5)	(11.4)	2.1	-	上面: 布目痕・ナデ、下面: 格子目タタキ、被熱痕: 煤付着・一部変色	灰白~灰 8~6/1	1mm前後砂多

番号	器種	長: cm	幅: cm	厚: cm	重量: g	残存	特徴	色調	胎土
T16	土錘	10.8	1.1	1	6.5	ほぼ完存	ナデ、穿孔: 直径0.3cm、磨滅	淡赤橙、鈍黄橙 2.5YR7/4、10YR7/2	0.5mm以下砂、赤色粒
T17	土玉	2.3	2.1	2	8.7	完存	ナデ、穿孔: 直径0.7cm、面を残す。	鈍黄橙 10YR7/2	0.5mm以下砂、赤色粒
T18	土玉	1.3	2.4	2.2	9.1	完存	ナデ、穿孔: 直径0.6cm、面を残す。	橙~鈍黄橙 7.5YR6/6、10YR7/3	0.5mm以下砂、赤色粒
T19	土玉	1.2	1.9	1.8	6.2	完存	ナデ、穿孔: 直径0.6cm、磨滅	灰白 10YR8/1~2	0.5mm以下砂
T20	土玉	2.1	2.2	2	7.4	完存	ナデ、穿孔: 直径0.7cm、面を残す。	鈍黄橙、一部橙 10YR7/3、7.5YR6/6	0.5mm以下砂、赤色粒
T21	土玉	2	2.3	2	7.4	完存	ナデ、穿孔: 直径0.7cm、面を残す。	鈍黄橙、~鈍橙 10YR7/2、7.5YR7/4	0.5mm以下砂

番号	器種	残存長: cm	残存幅: cm	残存厚: cm	重量: g	残存	石材	特徴
S10	滑石	4.0	4.1	1.9	51.5	完存	流紋岩	平滑

番号	器種	長: cm(残存値)	幅: cm(残存値)	厚さ: cm	重量: g	残存	特徴
M4	鉄鎌	12.9	2.2	0.2	18.2	ほぼ完存	端部に円孔1カ所、全体に錆付着

図60 溝18出土遺物(3) (縮尺1/4)



番号	器種	残存長 (cm)	残存幅 (cm)	厚 (cm)	樹種	木取り	特徴
W44	曲物 側板	5.2	20	0.2	-	柵目	目釘穴1か所、表裏面平滑
W45	曲物 側板	2.7	8.9	0.5	ヒノキ	柵目	表裏面平滑、縦・斜め方向のケビキ
W46	棒状加工材	9.6	0.9	0.4	-	-	表裏面平滑
W47	棒状加工材	20.2	1.3	1.2	-	-	表裏面平滑、両端欠損
W48	曲物 側板	3.6	25.8	0.2	-	柵目	表裏面平滑、上面欠損
W49	曲物 側板	1.8	8.9	0.2	-	柵目	表裏面平滑、上面欠損

図61 溝18出土遺物(4) (縮尺1/4)

本遺構は、大形の区画溝として機能し、出土遺物から13世紀末～14世紀初頭に埋没したものと位置付けられる。これまでの鹿田遺跡の既調査地点においても同時期に溝が埋められ、集落の再編成が行われたことが指摘される⁽¹⁾。

註

(1) 山本悦世・岩崎志保2017「鹿田遺跡における中世集落の土地区画とその構造」『鹿田遺跡10』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第32冊

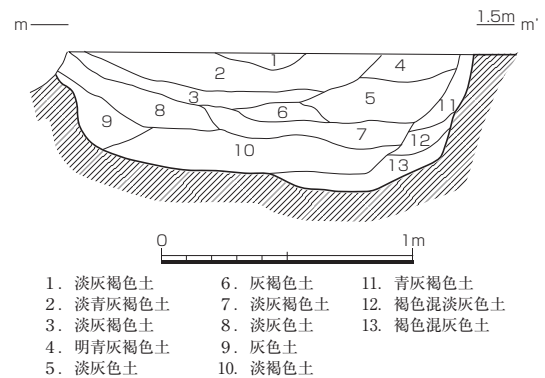


図62 溝19断面 (縮尺1/30)

溝19 (図62、図版21)

東区南端、CD17区で検出した。南北方向の溝として長さ1.0mを確認した。検出面は<5層>上面で、標高は1.35m、底面の標高は0.9mを測る。幅1.6m、深さ0.5mが残る。

埋土は10層に分けた。灰褐色～灰色の粘質土を主体とする。遺物はポリ袋 (12号) 1袋が出土した。中世前半の土師器椀・皿・鍋小片のほか、竈、須恵器、瓦器の小片も含まれる。

本遺構はCD17区のみで確認で、北側は攪乱により不明、南側の隣接調査地点にも該当する溝が認められない。溝として報告するが土坑の可能性も残す。

本遺構の時期は中世前半の範疇と考えられる。

溝20 (図63)

西区北東部、BZ19区で検出した。検出面の標高は0.45m、底面の標高0.32mを測る。検出面からの深さ0.12m、幅0.3mが残る東西方向の溝を長さ2m確認した。主軸方向はE-23°-Sを示す。埋土は灰色粘質土1層である。

遺物はポリ袋 (12号) 1/2袋が出土した。土師器椀・杯・皿・鍋・竈の小片が認められる。掲載できるものはないが、椀の特徴から、14世紀初頭頃に位置付けられる。

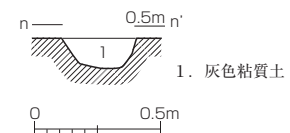


図63 溝20断面 (縮尺1/30)

第4節 中世後半～近世の遺構・遺物

本時期に属する遺構は井戸11基、土坑15基、溝5条である(図64)。本報告では室町時代・戦国時代を中世後半、1600年以降、江戸時代を近世とする。中世後半に井戸7基、土坑1基が属する。近世では井戸4基、土坑14基を検出した。溝は、中世後半1条、中世後半～近世に継続する溝4条が確認される。これらの遺構の検出面は<5>・<4>・<3>層にあたる。<5>・<4>層は中世後半以降の集落の基盤となる造成工層と考えられる。

中世後半の遺構の配置は、北区に井戸3基(井戸15～17)・土坑1基(土坑6)が確認され、井戸の時期と配置から少なくとも2つの屋敷地の存在が窺われる。西区で井戸3基(井戸18～20)、東区で井戸1基(井戸21)が検出され、詳細な時期は不明であるが、これらの井戸を有する屋敷地が想定される。南北方向の溝21・23、東西方向の溝22・24が屋敷地を区画する溝にあたる。

こうした屋敷地の存在は近世にも継続し、北区で4基の井戸(井戸22～25)が確認される。周辺で土坑多数が検出され近世の居住域の様相が示される。この時期には北区に遺構が集中することも注意される。4条の溝にある区画溝は近世にも機能していることが確認される。居住域としての利用は19世紀に入るまで継続する。本調査

地点で最も新しい遺構は土坑20(野壺)であり、19世紀前半には本地点が耕作地に変化したことが窺われる。

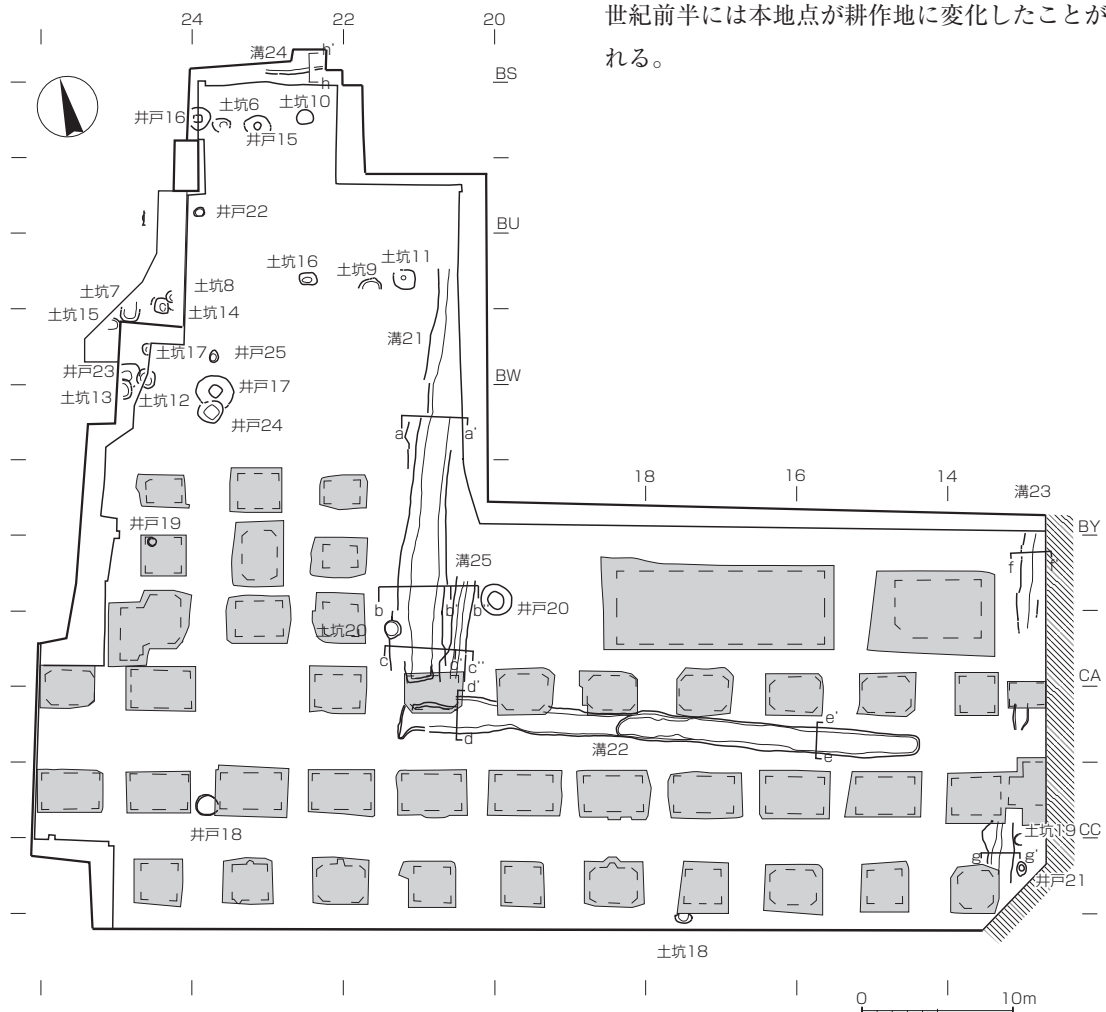


図64 中世後半～近世出土遺構全体図(縮尺1/500)

1. 井戸

井戸15 (図65～67、図版22)

北区、BS23区に位置する。検出面の標高1.4m、底面の標高-0.75mを測る。上面では東西1.8m×南北1.4mの楕円形、底面では径0.5mの円形を呈する。検出面からの深さ2.0mに達する。断面形は底面から標高0.4m付近まで筒状をなし、そこから標高1.1mまでは緩やかに開き、より上位は大きく開くY字状を呈する。

埋土は12層に分けた。10層以上には粘土ブロックや、混入物の多い土層が確認される。特に9層中には図に示したように大量の礫が含まれる。礫については後述するが、井戸の西側から中央に向かって流れ込んだように出土した。

遺物はコンテナ (28 $\frac{1}{2}$ 箱) 1/2箱の土器・瓦類と礫143点が出土した。瓦質すり鉢 (図66-1) は16世紀後半、備前焼すり鉢 (同5・6)・丸瓦 (同9) は15世紀後半～16世紀初頭のものである。S11は豊島石を加工した石臼の破片で全体の1/4が残る。S13は敲石の可能性ある。出土した礫の大半は図66-S12・14のように加工や使用痕が見られないものである。うち11点には被熱が認められた。重量で140g～8.4kgと大きさは様々で、

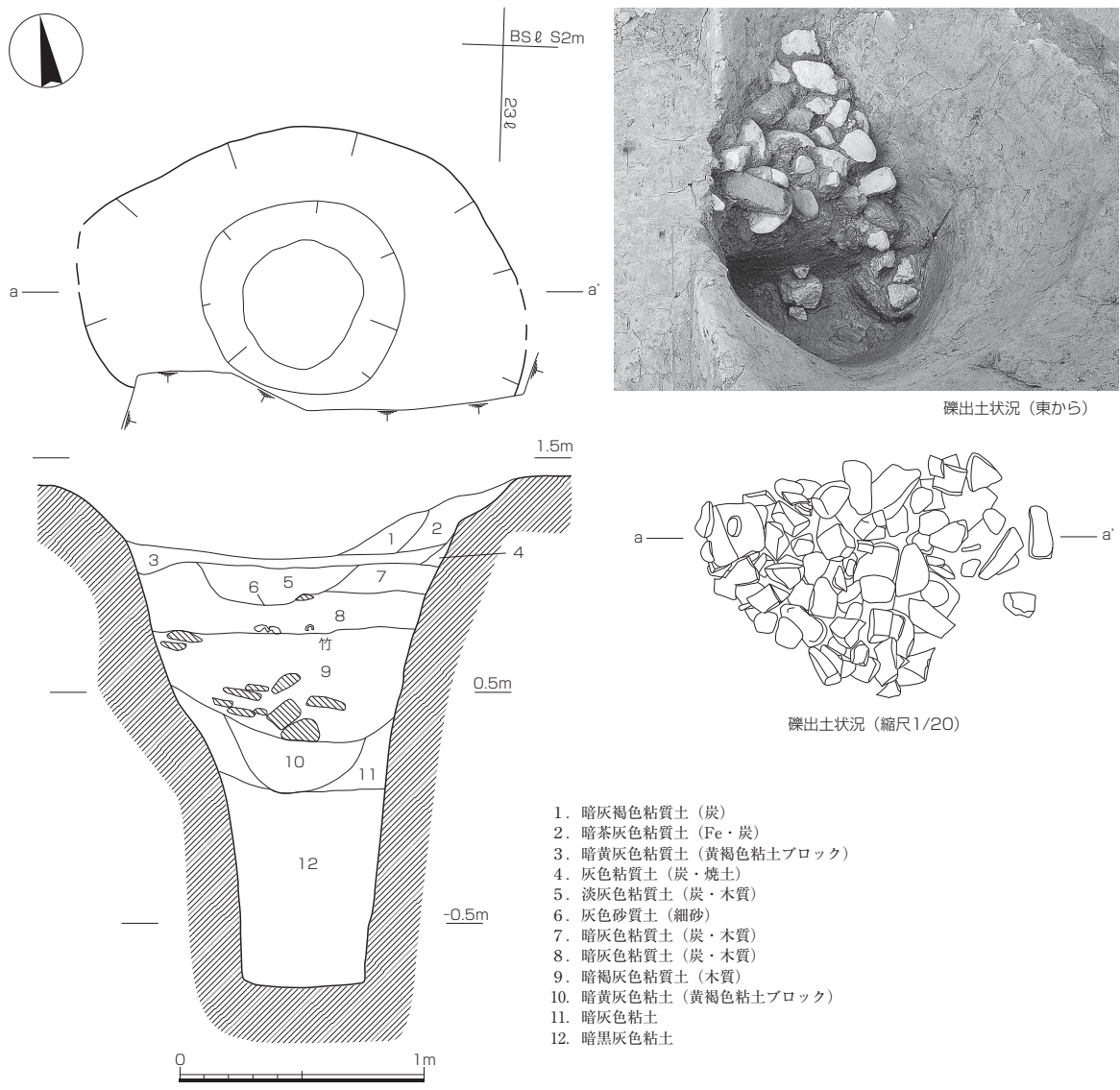
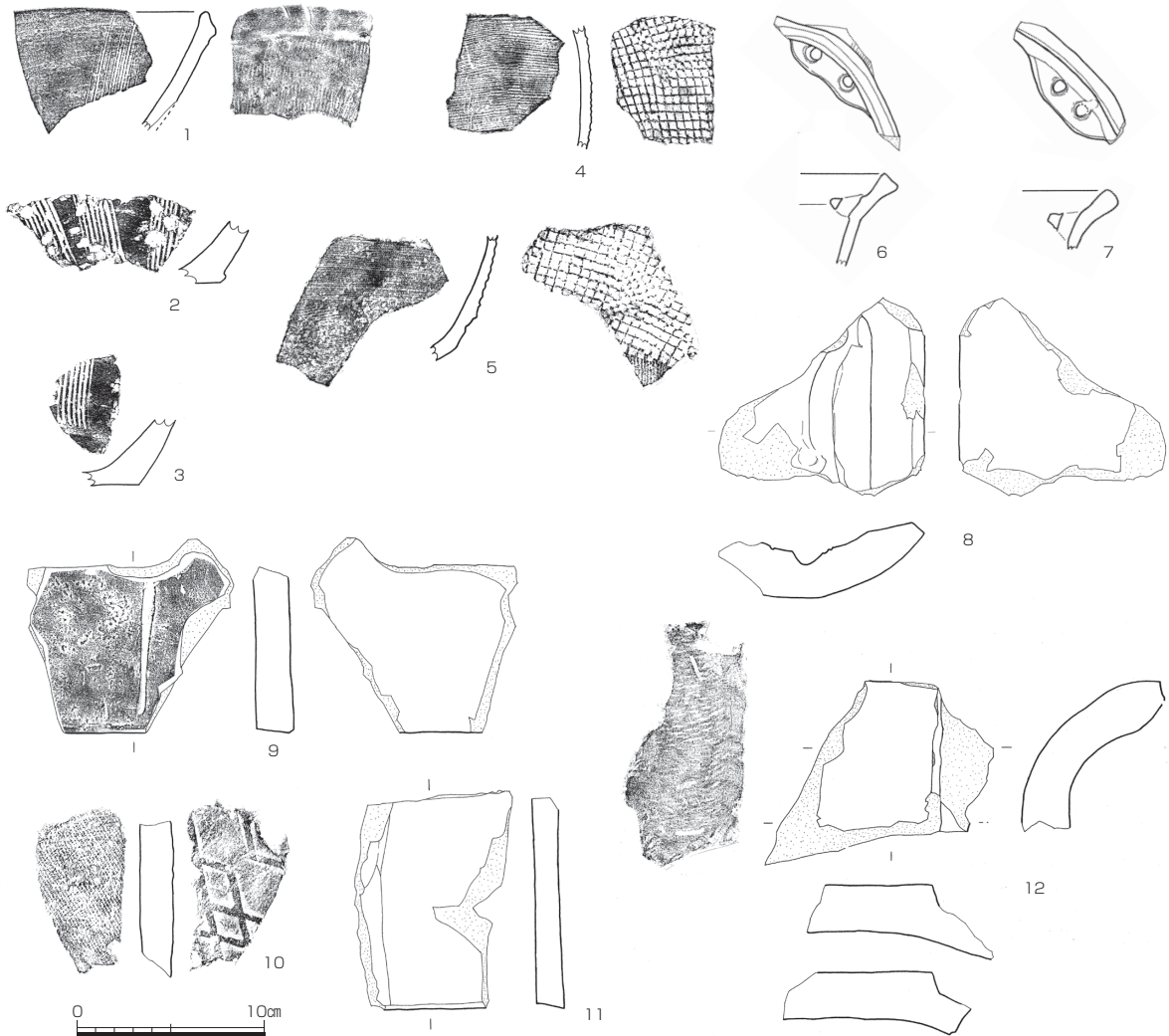


図65 井戸15 (縮尺1/30)

調査の記録

石材も多様で規則性は見られない。井戸の上部施設に石組み構造が在った可能性も考えられるが、確定的な材料は得られていない。9層上面では、井戸の中央に竹が立った状態で出土した。標高0.7m付近から長さ15cmが確認された。これは息抜きの竹として現在にも言い伝えが残る井戸を埋め戻す際の風習であろう。

本遺構の時期は16世紀代に比定される。



番号	器種	口径:cm	底径:cm	器高:cm	残存	特徴	色調	胎土
1	瓦質 すり鉢	-	-	-	-	回転ナデ、内:8本以上1組のスリ目、外:縦ハケ後ナデ	(内)黒 (外)橙、浅黄橙2/、2.5YR6/8、10YR8/4	1mm以下砂
2	備前焼 すり鉢	-	-	-	-	回転ナデ、内:8本1組のスリ目・使用痕	暗赤褐 7.5YR3/3	2mm以下砂礫
3	備前焼 すり鉢	-	-	-	-	回転ナデ、内:7本1組のスリ目・使用痕	鈍赤 7.5R5/3	4mm以下砂礫
4	瓦質 甕	-	-	-	-	内:細かい横ナデ、外:格子目タタキ	灰 5/	1mm以下砂
5	瓦質 甕	-	-	-	-	内:細かい横ナデ、底外:斜めハケ、外:格子目タタキ	(内)暗赤褐 (外)褐灰 5YR3/3 5YR4/1	1mm以下砂
6	瓦質 鍋	-	-	-	-	内耳(穿孔径0.6cm)、内:体部細かい横ハケ、外:横ハケ・煤	浅黄橙 7.5YR8/4	1mm以下砂
7	瓦質 鍋	-	-	-	-	内耳(穿孔径0.8cm)、外:厚い煤、釣り手部残存	暗灰 3/	1mm以下砂
番号	器種	長:cm (残存値)	幅:cm (残存値)	厚:cm (残存値)	残存	特徴	色調	胎土
9	瓦質 丸瓦	(11.1)	(11.7)	2.7	-	凹面:布目痕・コビキB、凸面:ナデ	灰 4/	きめ細かい
10	瓦質 平瓦	(10.6)	(12.2)	2.1	-	凹面:工具痕・煤、被熱	淡橙 5YR8/3	きめ細かい
11	須恵質 平瓦	(8.0)	(4.8)	1.8	-	凹面:布目痕、凸面:格子目タタキ	灰黄 2.5YR7/2	2mm以下砂
12	瓦質 丸瓦	(13.0)	(6.0)	3	-	凹面:布目痕、凸面:縄目痕	凹面:灰 凸面:灰 4/ 6/	1mm以下砂

図66 井戸15出土遺物(1) (縮尺1/4)

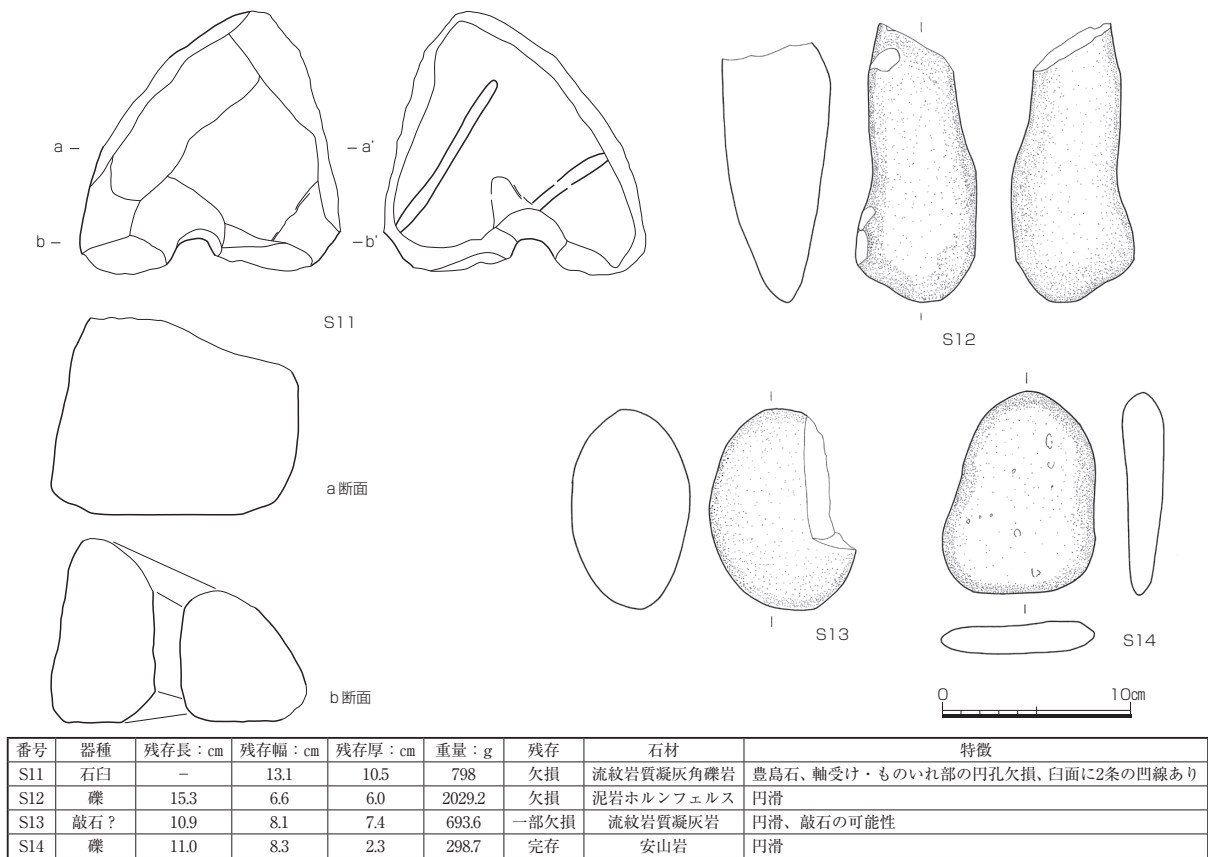


図67 井戸15出土遺物(2) (縮尺1/4)

井戸16 (図68～70、図版23)

北区西端、BS23・24区に位置する。本遺構の西端は調査区外にあたる。検出面の標高は1.0m、底面の標高は-1.0mを測る。上面形は径1.6m程の円形、底面では一辺0.5mの方形を呈する。検出面からの深さは2.2mを測る。断面の形状は底面から標高0.2mまで1.1mほどの高さで筒状に立ち上がり、それより上位は緩やかに開くY字状を呈する。

埋土は13層に分けた。下半の4層(10～13層)は均質性の高い暗灰～青灰色の粘土層である。1～9層には粘土ブロック・炭化物等の混入物が多い。遺物は13層上面～10層上面の間で多くが確認された。

遺物はコンテナ(28ℓ/箱)で2箱が出土した。備前焼、須恵器、瓦のほか、土師器椀・皿・鍋等の中世前半の土器小片多数と、曲物・板材等の木製品や礫6点が含まれる。備前焼甕(図69-4)は口縁～体部上半の大形破片が、壺底部片(同図-2)と折り重なって出土した。甕は15世紀末～16世紀初頭に位置付けられる。瓦片は8点出土し、うち1点を記載した。同図-7は厚みを有する須恵質の平瓦である。木製品は7点を掲載した(図70)。W50は漆椀の高台である。W52～54は桶の側板材の可能性がある。W51は蓋と考えられ、目釘穴の存在から把手がつくものと考えられる。W55は糸巻であろう。

出土状況の記録ができた遺物では、漆椀(図70-W50)が13層上面にあたる標高-0.2m地点で出土した。備前焼甕(図69-4)は12層上面、標高0.2m付近で確認された。また図70-W51・54・56の木製品は、調査区西端の矢板際で確認された。これらも標高0.2m付近の、11層中にあたる。備前焼甕の破片1点は前述の井戸15出土の破片が接合していることから、これらの2基の井戸が近接した時期に廃絶されたことを示す。

礫は5点が出土している。井戸15でみられたような極端な廃棄状況ではない。出土した礫は重量で300g～3.4

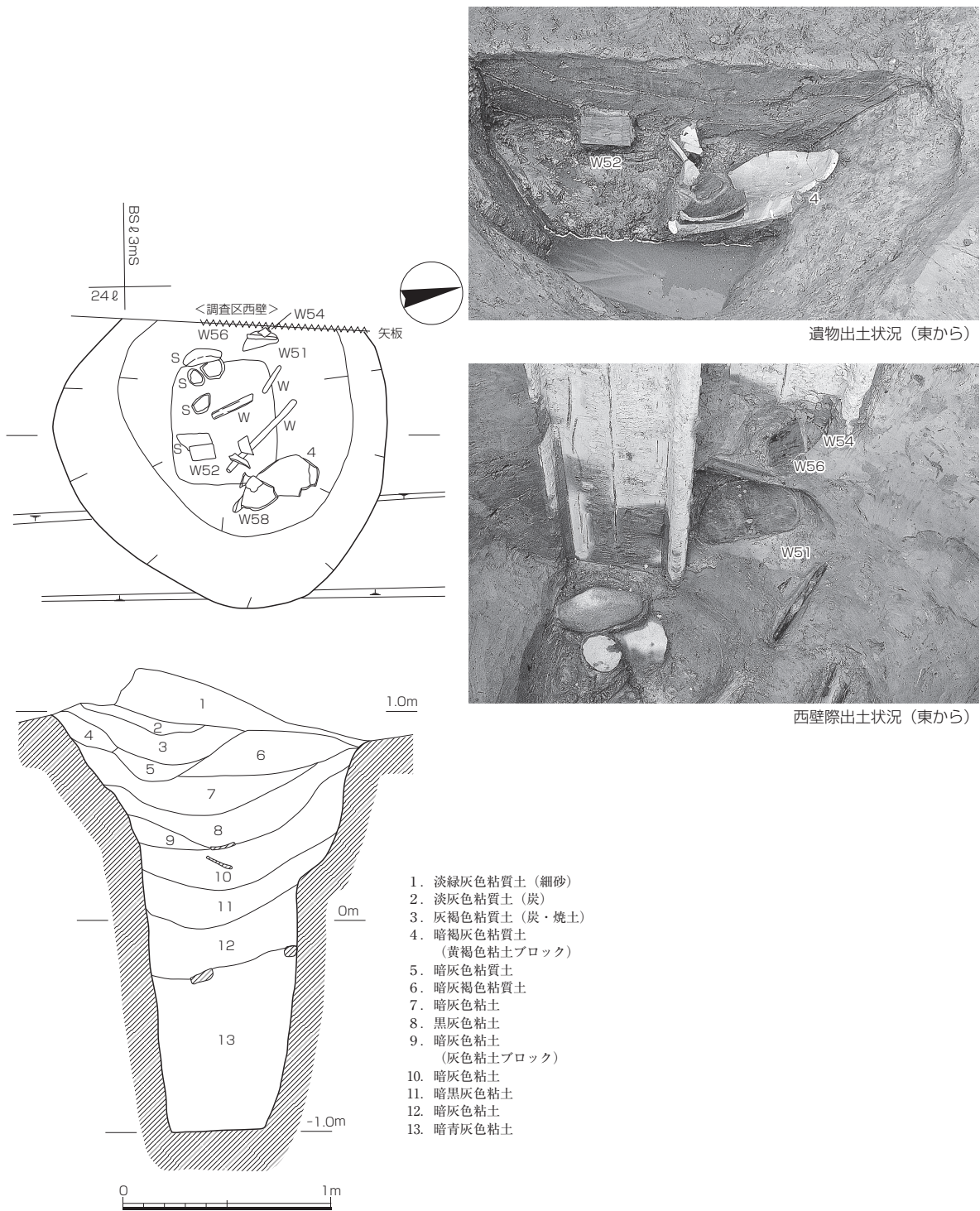
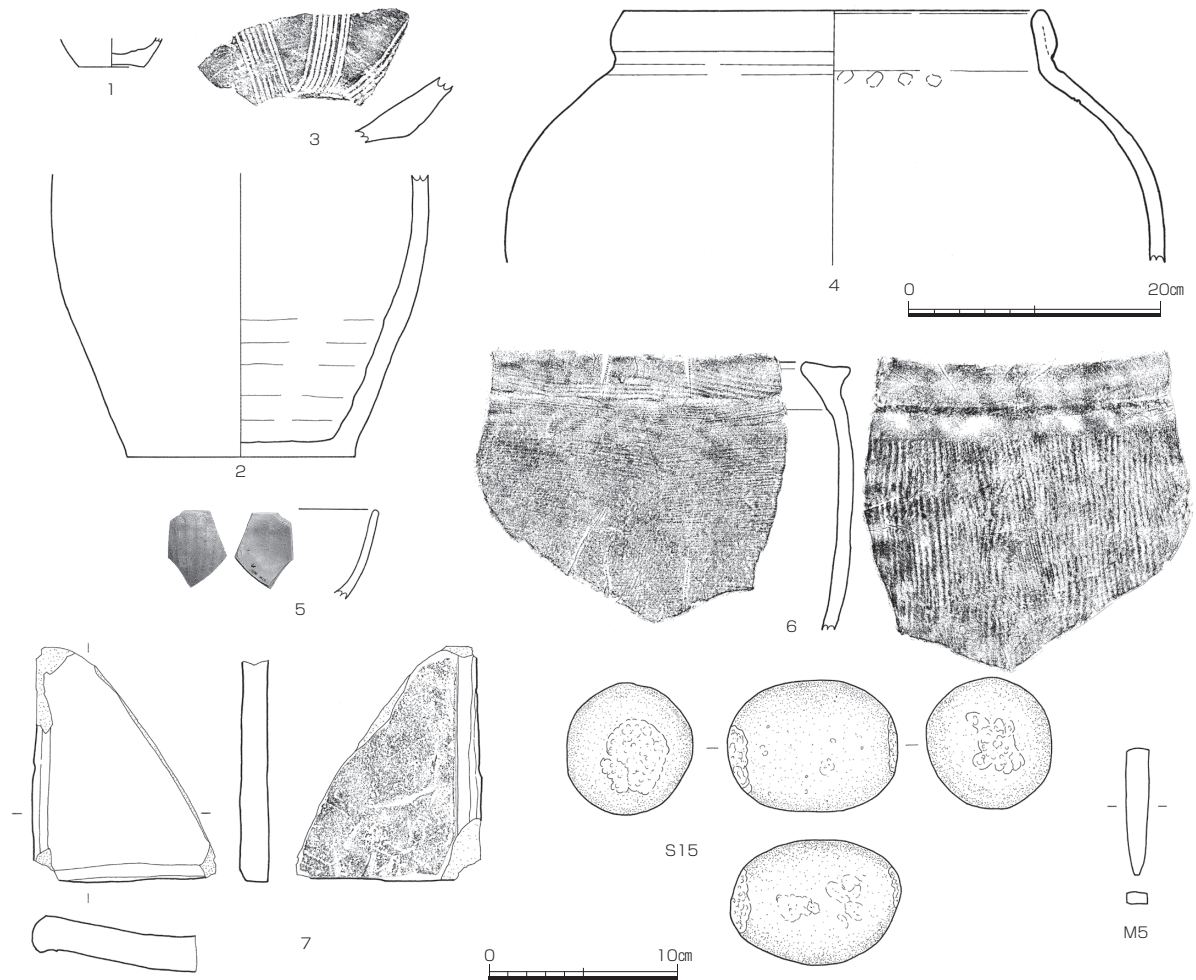


図68 井戸16 (縮尺1/30)

kgで、拳大かやや小さめの、様々な大きさの礫が出土している。いずれにも被熱はみられない。このようにみえてくると、本井戸では主に13層上面から11層が堆積する間に、甕や曲物等とともに井戸を埋め戻している。中世前半に認められる完形の食器 (椀・杯・皿) を置いて埋め戻すような行為は、中世後半には認められないと言えよう。埋め土層中にはブロックや炭が混入するが、炭層をなすような状況ではなく、火を使用した痕跡はみられな

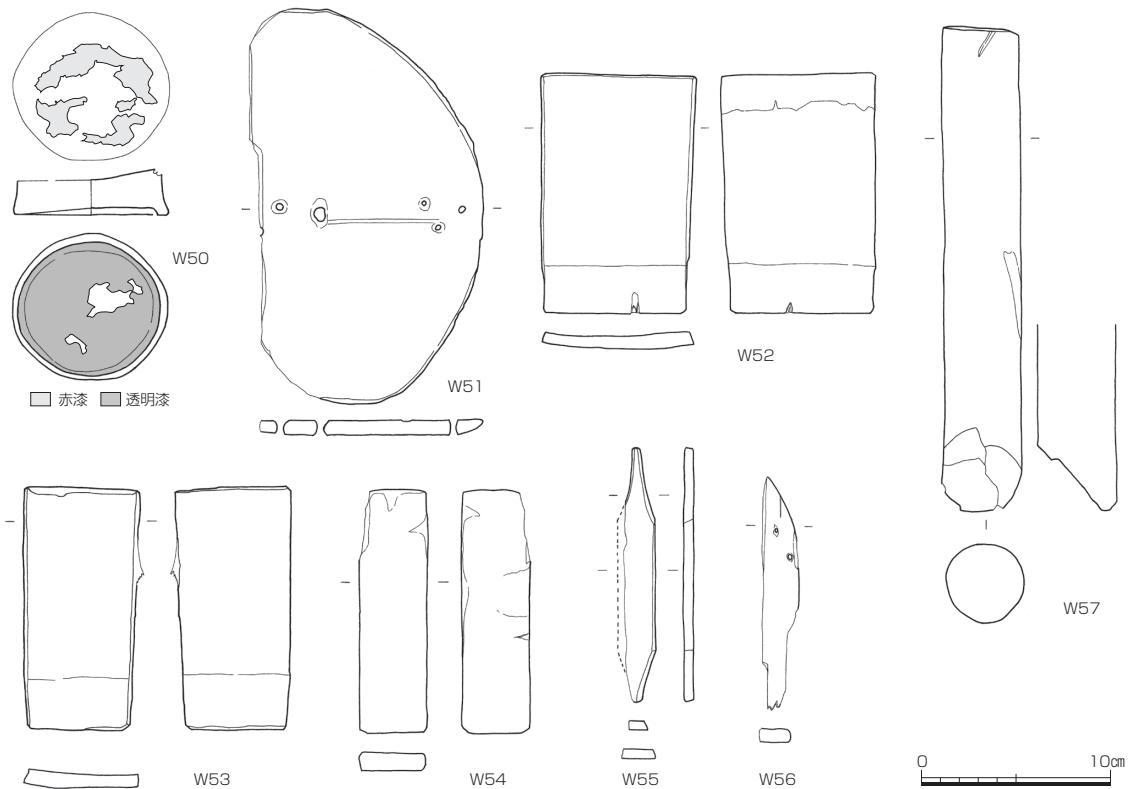


番号	器種	口径:cm	底径 高台径:cm	器高:cm	残存	特徴	色調	胎土
1	備前焼 小壺	-	3.8	-	-	内外面:ナデ、外底面:糸キリ	暗赤褐 7.5YR3/3	1mm以下の砂
2	備前焼 壺	-	12.8	-	1/6	内外面:ナデ、被熱	(内)暗褐 (外)暗灰 7.5YR3/3、 3/	2mm以下の砂礫
3	備前焼 すり鉢	-	-	-	-	内外面:ナデ、スリ目7本1組、磨滅	暗褐 7.5YR3/3	2mm以下の砂礫
4	備前焼 甕	33.0	-	-	1/2	内面:工具ナデ・ナデ、外面:ナデ、自然釉	極暗褐 暗褐 7.5YR2/3、7.5YR3/3	3mm以下の砂礫
5	青磁 碗	-	-	-	-	内面:貫入、外面:連弁文	(胎)灰 (釉)緑灰 6/、7.5GY6/1	緻密
6	土師器 鍋	-	-	-	1/6	内面:口縁部粗い横ハケメ・体部細かい横ハケメ 外面:横ナデ・体部縦ハケメ	(内)灰白 (外)褐灰 7/、5YR5/1	3mm以下の砂礫
番号	器種	長:cm (残存値)	幅:cm (残存値)	厚:cm (残存値)	残存	特徴	色調	胎土
7	須恵質 平瓦	(12.4)	(9.7)	1.8	-	凹面:布目痕・ナデ、凸面:格子目タタキ	灰白 10Y8/~5GY8/1	2mm以下砂礫
番号	器種	残存長:cm	残存幅:cm	残存厚:cm	重量:g	残存	石材	特徴
S15	敲石	9.0	7.0	6.6	610.8	完存	流紋岩質凝灰岩	両端に擦痕
番号	器種	長さ:cm	幅:cm	厚さ:cm	重量:g	特徴		
M5	鉄釘	7	1.2	0.7	29.7	上端欠損		

図69 井戸16出土遺物(1) (縮尺1/4・1/6)

い。また、瓦や礫が多く出土する特徴も指摘できる。周辺に瓦葺き建物や石積みの横造物が予想される。

本遺構の時期は、出土遺物から16世紀前半に位置付けられよう。



番号	器種	残存長(cm)	残存幅(cm)	厚(cm)	樹種	木取り	特徴
W50	漆塗椀	-	-	-	クリ	-	底径8.4cm、炭粉渋下地の上に透明漆と赤漆を施す、見込み部のみ赤漆残存
W51	蓋	20.8	12.3	0.8	-	-	目釘穴6か所(把手部分)
W52	板材	7.9	8.3	0.7	-	板目	表裏面平滑、桶の側板の可能性
W53	板材	7.8	0.6	0.8	-	板目	表裏面平滑、桶の側板の可能性
W54	板材	12.9	3.5	0.9	-	板目	表裏面平滑、桶の側板の可能性
W55	糸巻	13.5	1.6	0.5	-	柃目	両端を尖らすように加工、表裏面平滑
W56	円盤	7.6	1.8	0.7	-	-	表裏面平滑、目釘穴2か所
W57	杭	26.4	4.2	4.2	アカマツ	丸木	先端部片側の手斧痕

図70 井戸16出土遺物(2) (縮尺1/4)

井戸17 (図71・72、図版24)

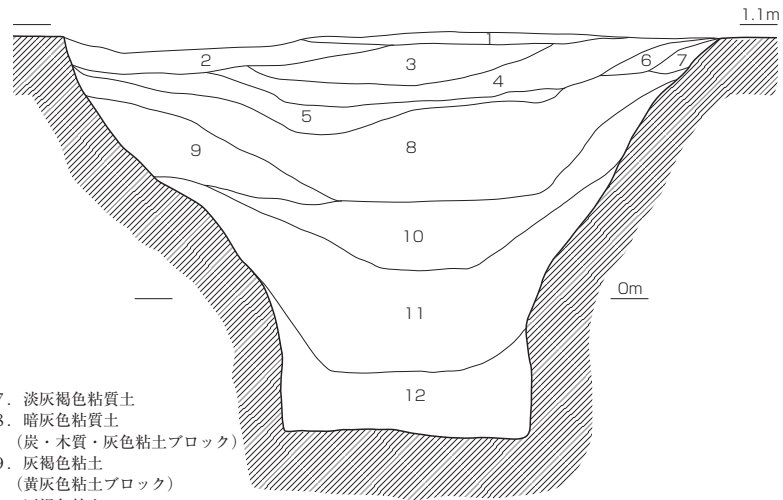
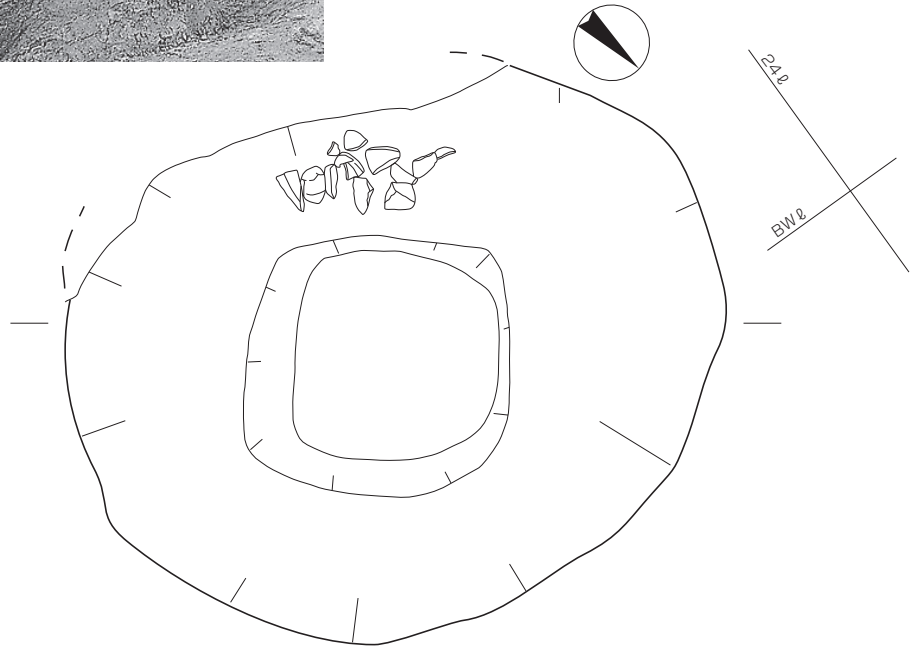
北区南部、BV・BW23区に位置する。南端を近世の井戸24に切られ、北側に位置する中世前半の井戸9を切って構築されている。検出面の標高は1.05m、底面の標高は-0.5mを測る。上面は東西2.4m、南北2.5mの歪な方形、底面は一辺1.0mの方形を呈する。上面形は方形の角を面取りし八角形を意識したようにも捉えられる。検出面からの深さは1.6mを測る。断面形は底面から標高0mまで筒状をなし、それより上位は緩やかに開くY字形を呈する。底面が方形を呈することから、使用時には枠が設置されていた可能性も考えられる。

埋土は12層に分けた。1～9層には炭や粘土ブロックなどの混入物が目立つ。10～12層は均質な粘土層である。炭の混入は見られるが、それほど顕著でない。11層中に当たるレベルで、多数の礫が確認された。井戸の南側からなだれ込むように検出された。

遺物はコンテナ(28ℓ/箱)1/2箱の土器類と礫17点が出土した。青磁碗、備前焼壺、瓦のほか、中世前半の土師器碗・皿・鍋・竈等の小片多数が出土した。中世前半の遺構を切っていることにも起因する。図72-2の備前焼壺は15世紀代に比定される。同図-3の軒平瓦・同図-4の丸瓦にはいずれも被熱が認められる。礫は南縁から中央に向かって流れ込むように出土した。これら17点の礫には被熱や加工は認められない。大きさ・石材ともばらばらであり規則性は認められない。



石出土状況（西から）



- | | |
|------------------------------|------------------------------|
| 1. 褐灰色粘質土 | 7. 淡灰褐色粘質土 |
| 2. 暗黄灰色粘質土
(黄褐色粘土ブロック・炭) | 8. 暗灰色粘質土
(炭・木質・灰色粘土ブロック) |
| 3. 灰褐色粘質土 (炭) | 9. 灰褐色粘土
(黄灰色粘土ブロック) |
| 4. 暗灰色粘質土 (炭) | 10. 灰褐色粘土 |
| 5. 暗灰色粘質土
(炭・木質・灰色粘土ブロック) | 11. 暗褐色粘質土 |
| 6. 暗黄褐色粘質土 (炭・Fe) | 12. 暗灰色粘土 |

0 1m

図71 井戸17 (縮尺1/30)

本遺構の時期は、出土遺物から、15世紀末～16世紀前半に位置づけられよう。



番号	器種	口径: cm	底径 高台径: cm	器高: cm	残存	特徴	色調	胎土
1	青磁・碗	-	5.8	-	1/4	内:貫入、外:連弁文、全釉疊付高台端部のみ釉剥ぎ	(胎)灰白 (釉)鈍黄2.5Y7/1 2.5YR4/6	緻密
2	備前焼 壺	-	-	-	-	回転ナデ、内:自然釉	(内)赤黒 (外)赤黒7.5YR2/1 7.5YR1.7/1	1mm以下砂
番号	器種	残存長 (cm)	残存幅 (cm)	厚 (cm)	樹種	木取り 板目	特徴	
W58	板材	9.6	6.2	0.9	-	-	表裏面平滑、桶の側板の可能性	
番号	器種	長: cm (残存値)	幅: cm (残存値)	厚: cm (残存値)	残存	特徴	色調	胎土
3	須恵質 軒平瓦	(8.2)	(15.2)	4.9	-	凹面:布目痕・ナデ、凸面ナデ、唐草文、被熱、厚手	灰白 7.5YR8/2	2mm以下砂礫
4	瓦質 丸瓦	(10.4)	(10.8)	3.7	-	凹面:布目痕、凸面ナデ、被熱、厚手	凹面:灰褐 凸面:鈍黄橙 7.5YR6/2、 10YR7/2	2mm以下砂礫
5	瓦質 平瓦	(10.9)	(8.9)	1.6	-	ナデ	灰 6/	1mm以下砂

図72 井戸17出土遺物 (縮尺1/4)

井戸18 (図73・74、図版25)

西区南部、CB23区に位置する。上部は攪乱により破壊されており、検出面の標高は0.65~0.7m、底面の標高は0.08mを測る。上面では径1.3mの円形、底面で径1.2mの円形を呈する。検出面からの深さ0.5mが残る。東縁はコンクリート基礎の下で確認した。

埋土は5層に分けた。暗褐色粘土を主体とし、いずれにも粘土ブロックを含む。

遺物はポリ袋 (12号) 2袋が出土した。中世前半の土師器 椀・杯・皿・鍋等の小片を多数含み、須恵器、備前焼の小片が認められる。土器類はいずれも

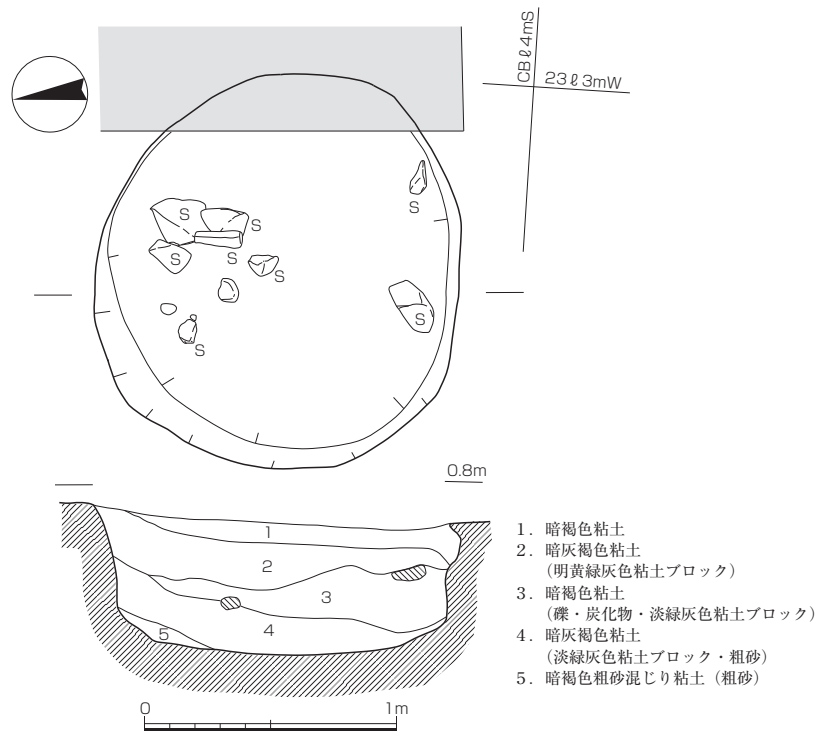


図73 井戸18 (縮尺1/30)

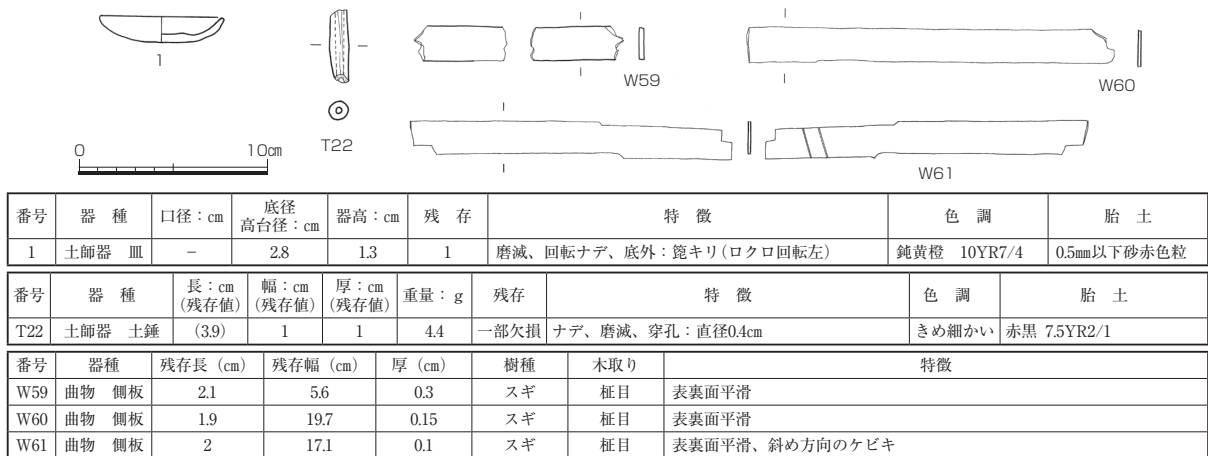


図74 井戸18出土遺物 (縮尺1/4)

小片で時期の決め手にかけることから、出土したマツボックリについて年代測定を実施した(第4章第5節参照)。そのほかに、土錘1点・曲物の側板の一部と考えられる木製品等が出土している(図74-W59~61)。

本遺構の時期は、年代測定結果から、15世紀後半に位置付けられる。

井戸19 (図75)

西区北端、BY24区に位置する。西区の北西端の基礎の下で確認した。本遺構の東側は基礎下に打ち込まれているパイル杭の下にあたる。

検出面の標高は0.5m、底面の標高は-0.3mを測る。上面では径0.6mの円形、底面では径0.5mの円形を呈する。検出面からの深さ0.8mが残る。筒状をなす井戸の下部構造のみが確認された状況である。

埋土は6層に分けた。3層は暗灰色を呈する粘質土で植物質を含む。そのほかは灰色を基調とする粘質土が堆積する。湧水砂層に達しており、湧水が確認された。出土遺物は認められなかった。

本遺構の時期については遺物や検出面からは判断できる材料がないため弥生時代～近世に位置付けておくこととする。

井戸20 (図76、図版26)

西区北西部、BY・BZ19・20区に位置する。<4層>で検出した。検出面の標高は1.6m、底面の標高は-0.3mを測る。上面は径2.2mの円形、底面では東西1.1m、南北1.2mの楕円形を呈する。検出面からの深さは1.8mを測る。断面形は底面から標高0.25m付近まで内側にやや傾斜して立ち上がり、その地点から上位は緩やかに広がるY字状をなしている。

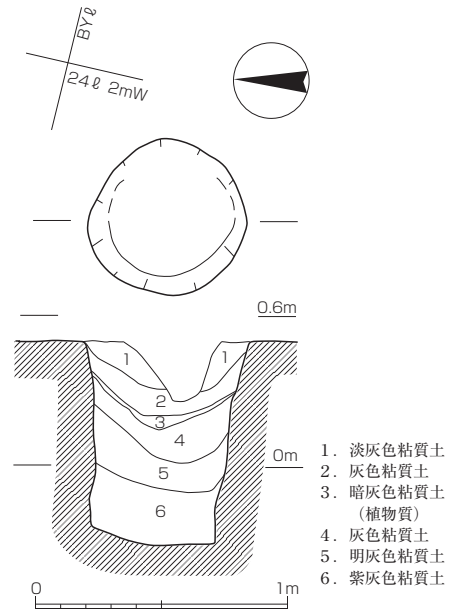


図75 井戸19 (縮尺1/30)

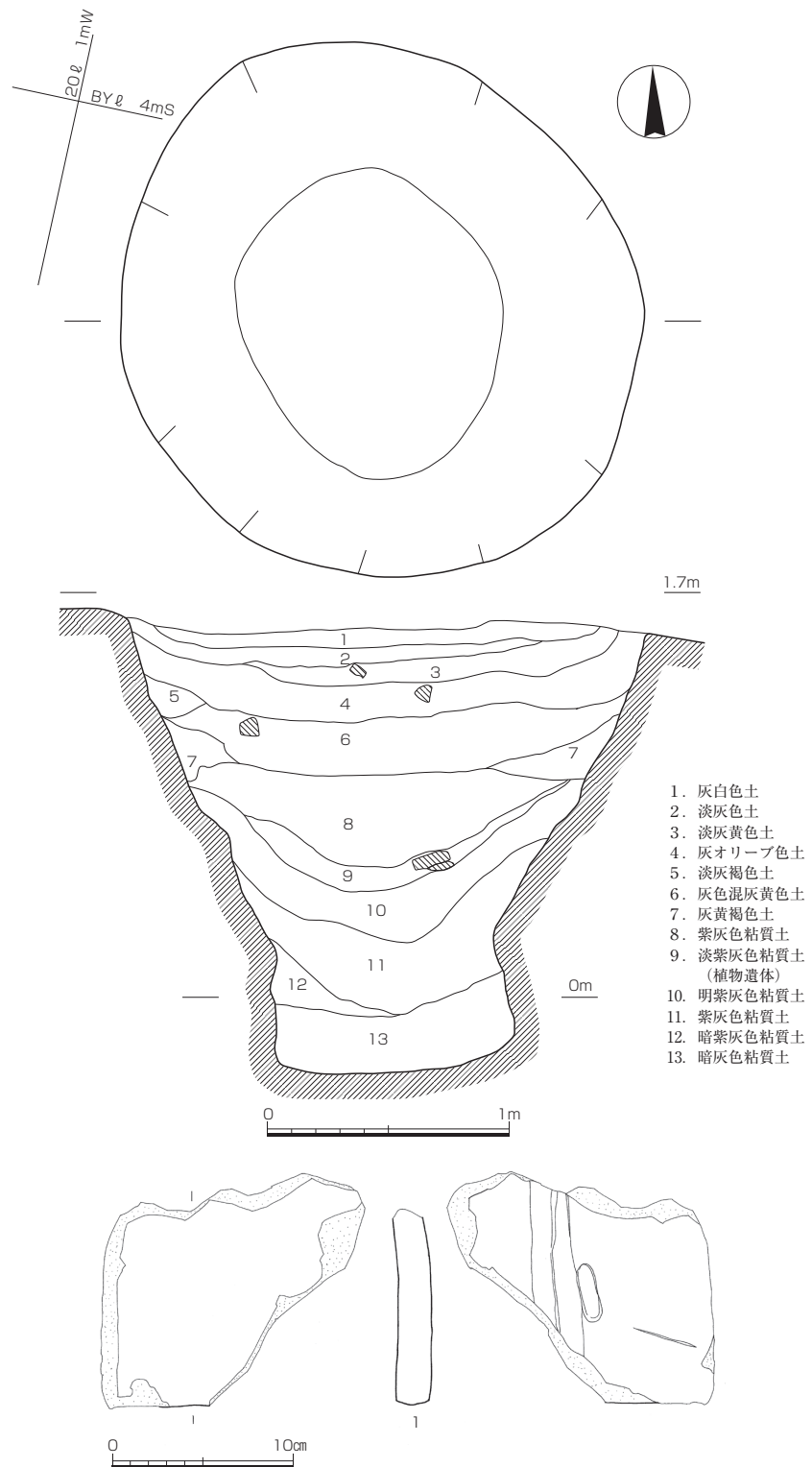
調査の記録

埋土は13層に分けた。1群：1～3層、2群：4～9層、3群：10～13層の3群に大別できる。3群は紫灰色～暗灰色を呈する粘質土が主体である。10層には青灰色粘土ブロックを混入し、9層には植物遺体が認められた。2群はいずれも粘土ブロックを多く含む土層である。灰色土が主体となる1群は流入土と考えられる。

遺物はコンテナ（28 $\frac{1}{2}$ 箱）で1/2箱が出土した。わずかな備前焼甕・すり鉢の小片のほか、中世前半の土師質土器碗・杯・皿・鍋等の小・細片多数が認められる。図76-1は須恵質の平瓦で、被熱している。

このほかに礫50点が出土した。礫は2群中から出土しており、井戸を埋め戻す際に多数の礫が廃棄されていることがわかる。重量100g～2.8kgのものまで大小あり、規則性はない。加工、被熱は認められない。

本遺構の時期は検土面から中世後半と考えられる。



番号	器種	長：cm (残存値)	幅：cm (残存値)	厚：cm (残存値)	残存	特徴	色調	胎土
1	須恵質 平瓦	(12.6)	(14.5)	1.7	-	ナデ、被熱	凹面：橙 2.5YR6/8、凸面：橙 2.5YR6/6	1mm以下砂

図76 井戸20・出土遺物（縮尺1/30・1/4）

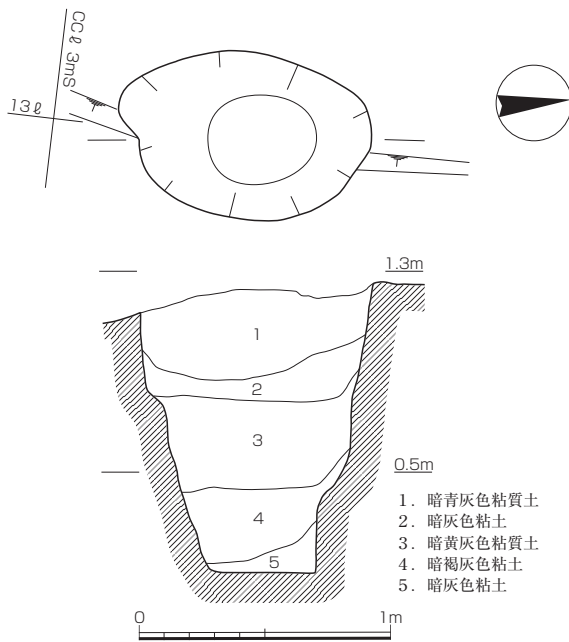


図77 井戸21 (縮尺1/30)

井戸21 (図77、図版27)

東区南東端、CC13区に位置する。検出面の標高は1.25m、底面の標高は0.1mを測る。上面では1.0m×0.7mの南北に主軸を持つ楕円形を、底面では径0.4mの円形を呈する。検出面からの深さは1.1mが残る。

埋土は5層に分けた。暗灰色粘質土を主体とする。特徴的な混入物は見られない。

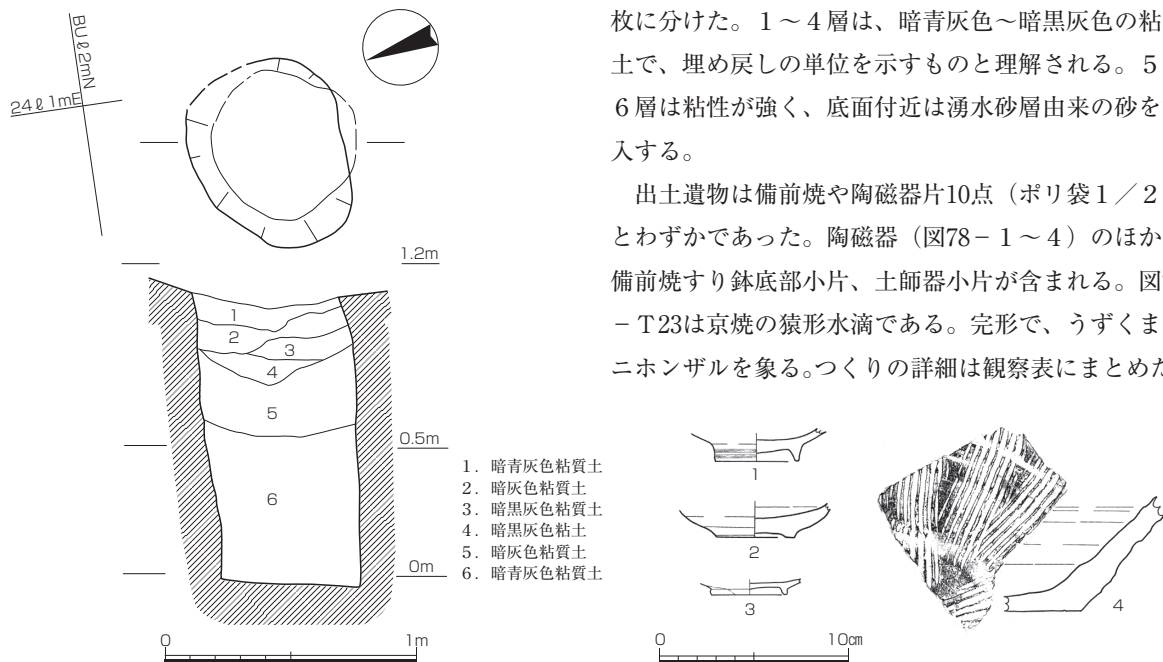
遺物はわずかに中世前半の土師器の小片2点が出土したのみである。

本遺構については湧水は確認されず、底面レベルもそれほど低くない。後述する井戸22・24など中世後半～近世にかけて、小規模な井戸の例を参考に、井戸として報告することとする。時期については、遺物が希薄であり不明であるが、中世の範疇でとらえておく。

井戸22 (図78・79、図版28、カラー図版1・2)

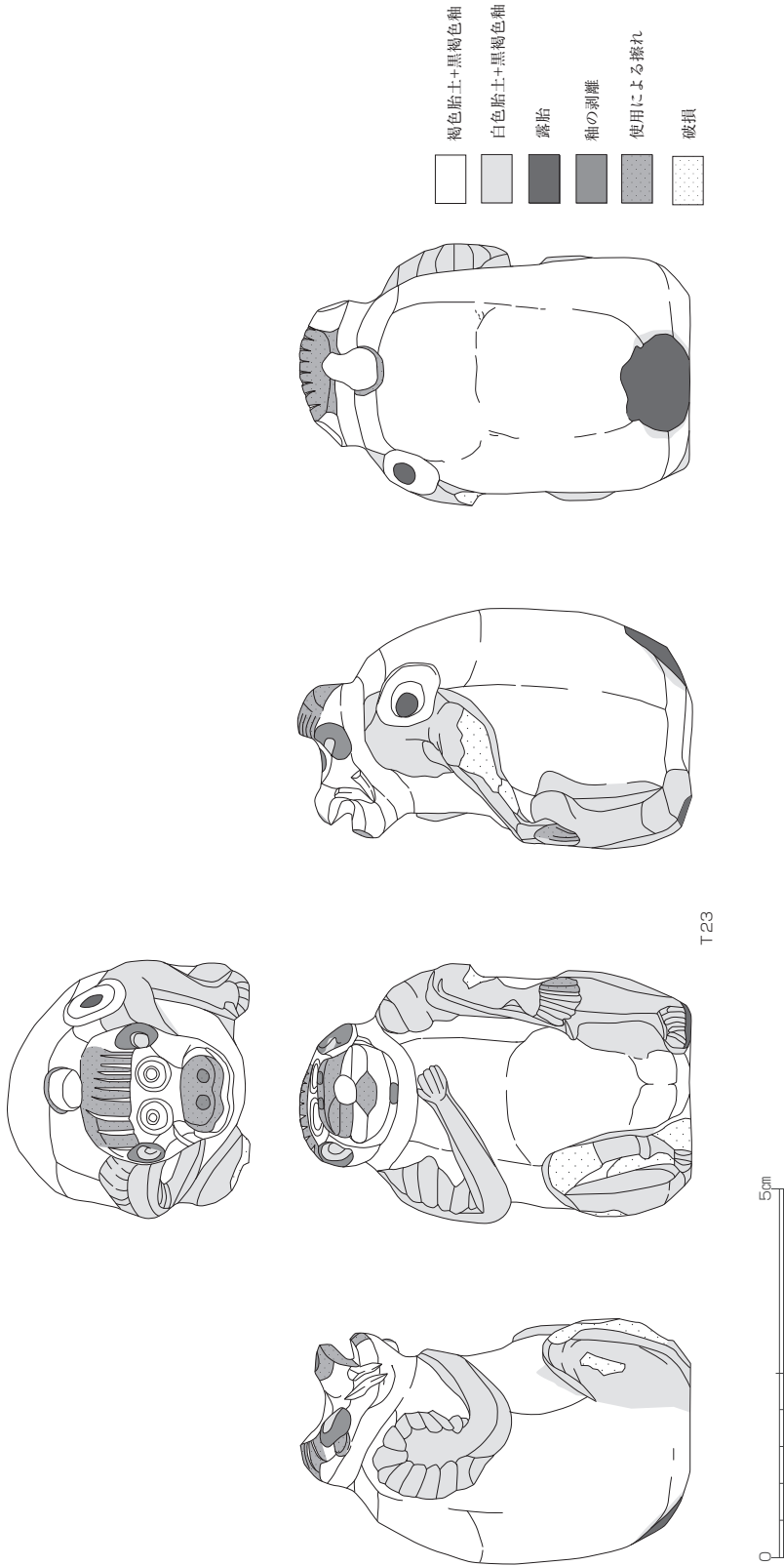
北区北西部、BT23区に位置する。検出レベルは標高1.05mを測る。平面形は概ね円形を呈する。上面では0.7×0.75m、下面では径0.55～0.6mの規模である。底面レベルは標高-0.1m、深さは1.1mを測る。埋土は6枚に分けた。1～4層は、暗青灰色～暗黒灰色の粘質土で、埋め戻しの単位を示すものと理解される。5・6層は粘性が強く、底面付近は湧水砂層由来の砂を混入する。

出土遺物は備前焼や陶磁器片10点(ポリ袋1/2)とわずかであった。陶磁器(図78-1～4)のほか、備前焼すり鉢底部小片、土師器小片が含まれる。図79-T23は京焼の猿形水滴である。完形で、うずくまるニホンザルを象る。つくりの詳細は観察表にまとめた。



番号	器種	口径: cm	底径 高台径: cm	器高: cm	残存	特徴	色調	胎土
1	中国産磁器 碗	-	4.9	-	完存	漳州窯、内外面全釉、畳付のみ釉ケズリ、畳付砂付着、17世紀初頭	(胎)白9/ (釉)灰白8/	緻密
2	肥前陶器 皿	-	4.4	-	完存	内: 胎土目痕3か所、施釉、外: 露胎、17世紀前半	(胎)明赤褐5 YR/5/6(釉)灰白 5 YR 8	緻密
3	京焼系陶器 碗	-	5.3	-	1/2	内: 施釉、高台・高台内露胎	(胎)灰白 10YR8/2(釉)灰白 10YR8/1	1mm砂
4	備前焼 すり鉢	-	-	-	-	回転ナデ、内: スリ目8本1組	鈍い赤7.5R4/4	1mm以下砂

図78 井戸22・出土遺物(1) (縮尺1/30・1/4)



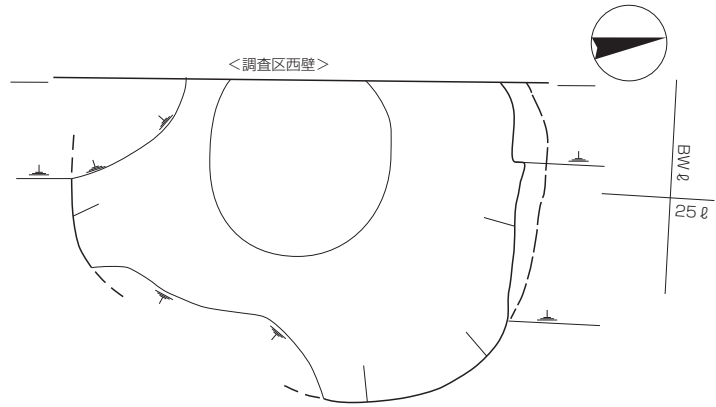
番号	器種	高さ：cm	幅：cm	奥行：cm	残存	特徴	色調	胎土
1	陶器 水滴	5.3	3.5	3.2	ほぼ完存	<p>猿形、細く丁寧に仕上げられる。完形のため器壁厚さは不明、上方を見上げ、膝をおってしゃがんだ猿の形状を呈す。左手は左膝上に、右手は左胸上にあててる。注水口：背中部の頸部に直径6mmの円孔、注き口：開口中央部に直径約4mmの円孔、顔～頭部：目と鼻は竹管状と刺突によって描かれる。頭髪状の線刻が10条(1～2mm間隔)、口元の両側に各2条の小さな刻み目が顔の表情を際立たせる。小さな両耳と手足部分はボデイとは異なる胎土で形成し貼付けられる。耳部では耳の穴も表現される。手のボデイへの貼り付けに際しては、肩部～二の腕部分に細かな腕調整集が巡る。手足の指は沈線で細かく描かれる。軸葉の剥がれ落ちから剥落の可能性が高いのが頸下の小さな部分(髭?)と尻尾であり手足などと同様の胎土で貼付けられていた可能性が高い。胴部は腹部がやや膨れ気味となる。底面は中央部が円形に若干窪む(直径約1cm)。側面は肘の下部がやや直線的で面を有しており使用時の指が当てやすい。注水口、注き口周囲(頭髪部・鼻・唇周辺)には使用痕が明確に残る(明らかに軸葉の剥落)。</p> <p>注水口等内部～底面を含む全面施軸で色調はボデイと貼付け部位で異なる。全体に厚みをもつ軸葉によってボデイは濃い褐色にそれ以外は薄い褐色～黄白色を帯びたオリーブ色の艶やかな仕上げを呈す。左肩部の腕との残目に直径3mmの円形部が露胎となり周囲直径8mmに軸葉の厚さが増す。</p>	<p>(胎土)ボデイ：鈍褐色 5YR5/3 その他：白 9/ (軸葉)ボデイ：黒褐 10YR2/2 その他：淡黄～鈍黄～褐 2.5Y8/3.2.5Y6/4, 10YR4/6</p>	<p>胎土 きめ細かい</p>

図79 井戸22出土遺物(2) (縮尺1/1)

本資料は軟質施釉陶器と称される初期の京焼にあたるもので、体部と腕の胎土を作り分ける技法は16世紀末、鉛釉を施す例も同時期から新たに発展するものである。本資料はそうした技法で製作されており、その年代は1610年頃である⁽¹⁾。いわば当時の最新技術による優品といえよう。

また猿形水滴の出土例は灰釉猿形水滴（愛知県小牧山城⁽²⁾出土：戦国時代）、鉄釉猿形水滴（岐阜県元屋敷陶器窯跡⁽³⁾出土：16世紀後半）等数例が認められる。水滴の存在から文字を操る人物、また類例の出土傾向から武士に好まれる意匠であることが窺える。

図78-1は中国漳州窯の碗、同2は唐津焼の胎土目の皿であり、ともに17世紀前葉に比定される。本遺構は17世紀前半に埋没したものと考えられる。



註

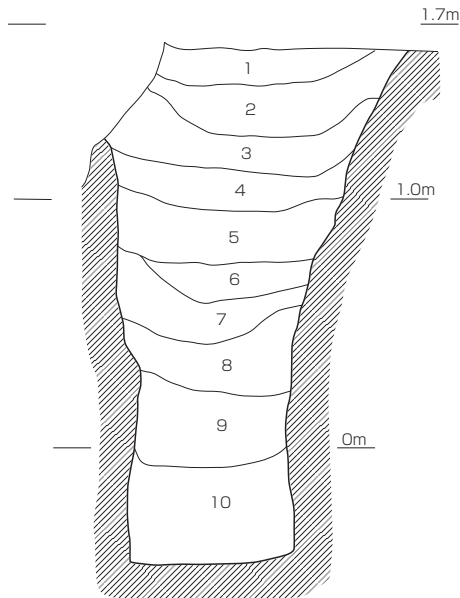
- (1) 尾野善裕氏のご教示を得た
- (2) 小牧市教育委員会 2015『史跡小牧山 主郭地区第6次発掘調査概要報告書』
- (3) 土岐市教育委員会 2014『元屋敷陶器窯跡出土遺物整理報告書 [2014]』

井戸23 (図80、図版29)

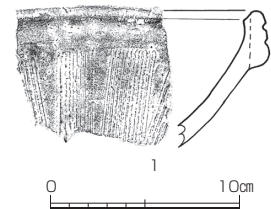
北区西端、BV24区に位置する。検出面の標高は1.6m、底面の標高は-0.45mを測る。本遺構の西端は調査区外にあたり確認できていない。南側に土坑13が重複する。上面では径1.9m程の隅丸方形になるものと考えられる。底面では径0.7mの円形を呈する。検出面からの深さは2.05mを測る。断面形は底面から標高0.6mまで筒状に立ち上がり、それより上位は緩やかに開くY字状をなす。標高0.4m付近に挟れがあり、水面の影響が考えられる。

埋土は10層に分けた。いずれの層にも粘土ブロックを多く混入する。また5・7層では植物遺体が確認された。

遺物はポリ袋(12号)4袋が出土した。備前焼、須恵器、瓦のほか、中世前半の土師器碗・杯・皿・鍋等の小片、礫4点が認められた。備前焼すり鉢(図80-1)は17世紀後半～18世紀前半に位置付けられる。



- 1. 淡緑灰色砂質土
- 2. 暗緑灰色砂質土
- 3. 明灰色砂質土
- 4. 灰色粘質土
- 5. 暗灰色粘質土 (植物遺体)
- 6. 暗淡灰色粘質土
- 7. 黒灰色粘土 (植物遺体)
- 8. 暗淡黒灰色粘質土
- 9. 淡黒灰色粘質土
- 10. 暗灰色粘質土



番号	器種	口径: cm	底径 高台径: cm	器高: cm	残存	特徴	色調	胎土
1	備前焼 すり鉢	-	-	-	-	回転ナデ、内: 11条1組のスリ目、外: 重焼痕	赤 10R4/8	2mm以下砂礫

図80 井戸23・出土遺物 (縮尺1/30・1/4)

本遺構の土壌を持ち帰り、種子の抽出・同定を実施した（第4章第2節参照）。抽出できたのは36個体であり、32種の植物種子を同定した。シソ（シソ科）・セリ（セリ科）・ササゲ類（マメ科）等の食利用できるもののほか、エノコログサ科やカヤツリグサ科など田畑雑草の種子が認められた。

本遺構は西壁断面観察から<4層>上面の検出であり、出土遺物から18世紀前半に位置付けられよう。

井戸24 (図81・82、図版30)

北区南端、BW23区に位置する。井戸17の南端に一部重複する。検出面の標高は1.0m、底面の標高-0.55mを測る。上面は1.6×1.65mの隅丸方形を呈し、底面では一辺0.7mの方形を呈する。断面形は底面から標高0.5m付近までは筒状に立ち上がり、それより上位は緩やかに開くY字状をなす。方形を呈している点から枠が設置されていた可能性も考えられる。

埋土は10層に分けた。1～7層は灰褐色粘質土を主体とする埋め土層で粘土ブロックや炭化物を混入する。8～10層は均質性の高い粘質土～シルト層である。

遺物はコンテナ（28ℓ/箱）で1／3箱が出土した。瓦質火鉢、瓦、備前焼等のほか、土師器碗・皿・鍋等中世

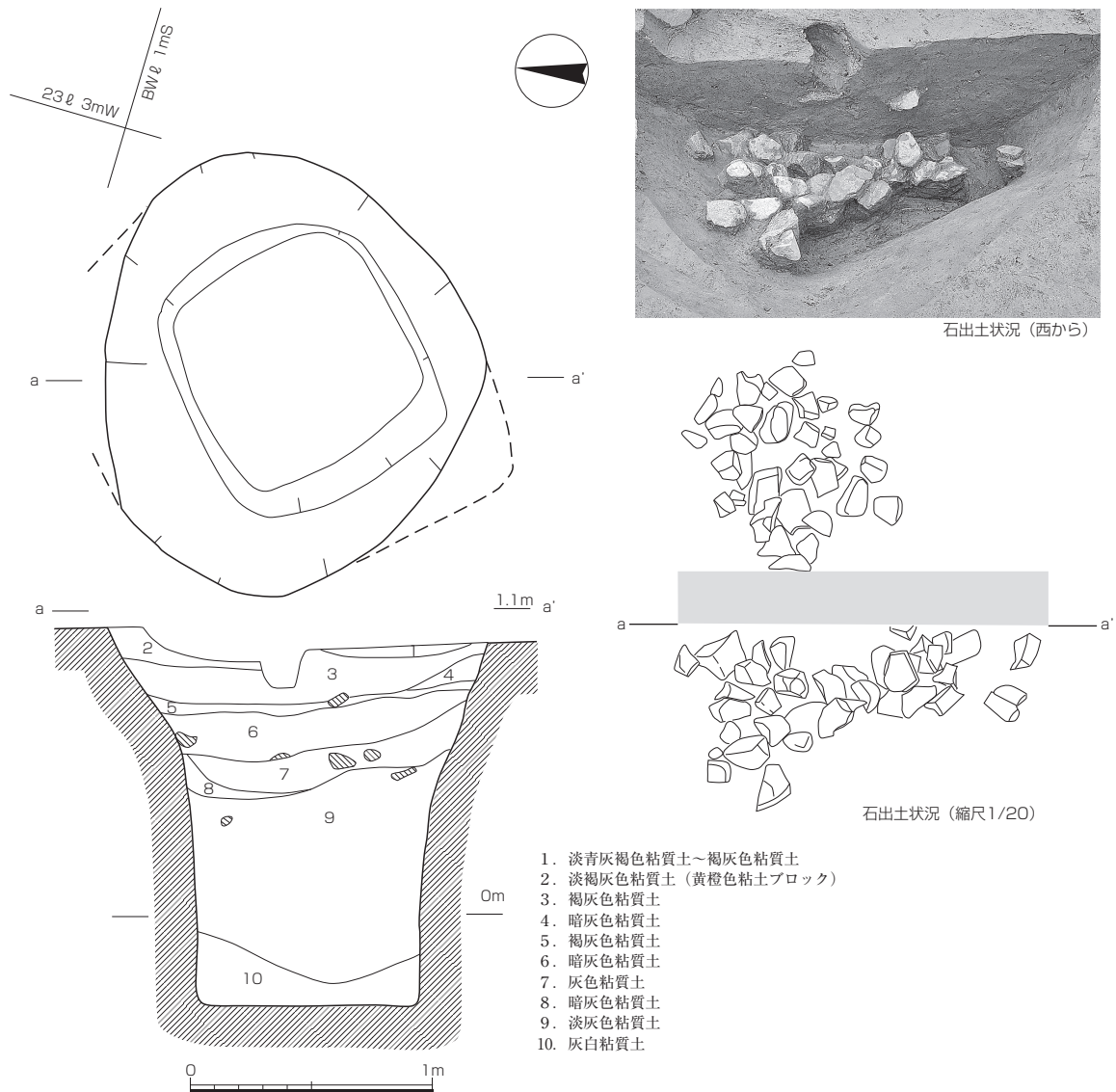
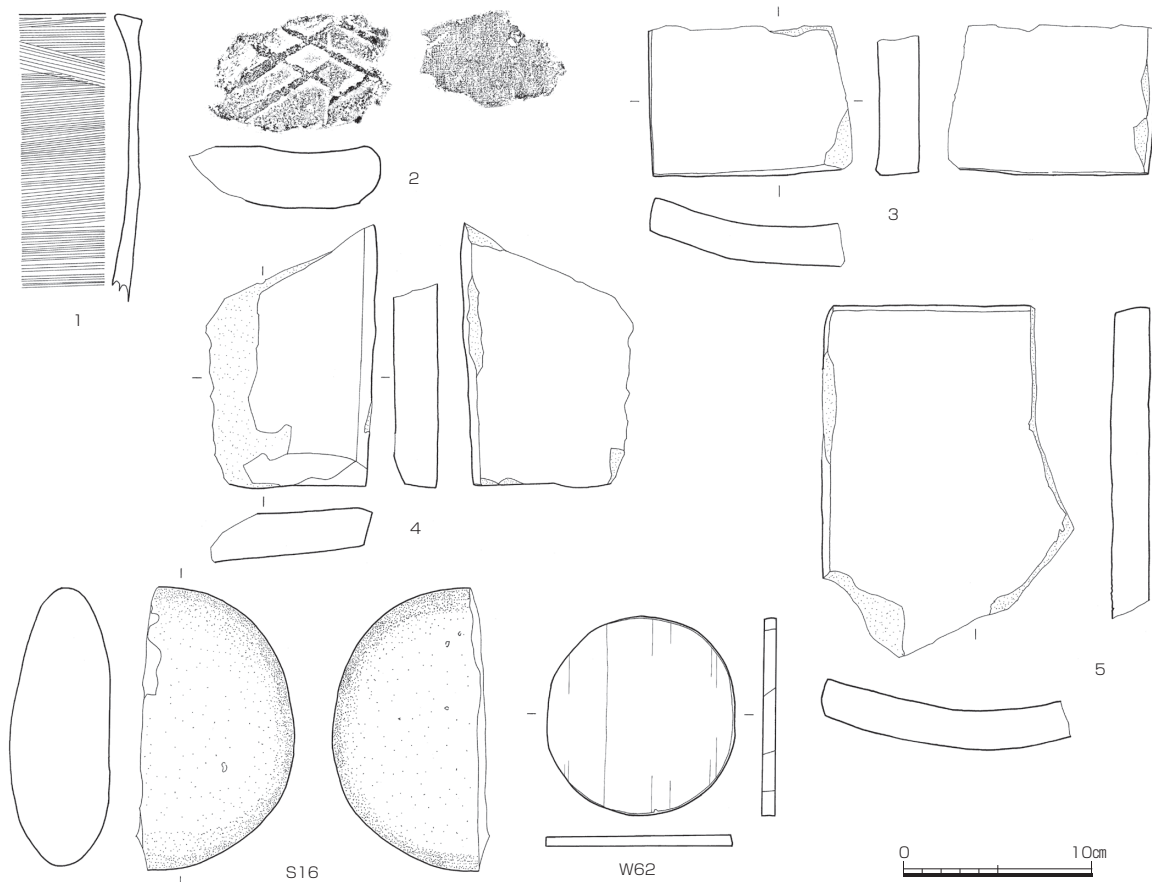


図81 井戸24 (縮尺1/30)



番号	器種	口径: cm	底径 高台径: cm	器高: cm	残存	特徴	色調	胎土
1	瓦質 火鉢	-	-	-	口1/6	内:横ハケ、外:縦ハケ後ナデ・煤、口縁端部ハケ状痕	灰 5/	1mm以下砂
番号	器種	長: cm (残存値)	幅: cm (残存値)	厚: cm (残存値)	残存	特徴	色調	胎土
2	須恵質 平瓦	-	-	-	-	凹面:布目・ナデ、凸面:格子目タタキ、被熱	凹面:灰白 5 Y8/1 凸面:灰白8/1	5mm以下砂礫
3	瓦質 平瓦	8.0	10.7	2.1	-	凹面:ナデ、被熱	灰 5/	2mm以下砂礫
4	瓦質 平瓦	14.2	9.1	2.3	-	ナデ	灰 5/	2mm以下砂礫
5	瓦質 軒平瓦	18.3	13.1	2.2	-	ナデ、被熱	暗灰 3/	2mm以下砂礫
番号	器種	残存長: cm	残存幅: cm	残存厚: cm	重量: g	残存	石材	特徴
S16	すり石	14.9	8.3	5.2	787	欠損	細粒花崗岩	上下面平滑
番号	器種	残存長 (cm)	残存幅 (cm)	厚 (cm)	樹種	木取り	特徴	
W62	円盤	10.8	10.2	0.7	-	柁目	表裏面平滑	

図82 井戸24出土遺物 (縮尺1/4)

前半の土器小片多数が認められた。図82-W62は曲物の底板で、9層中、標高0mの地点で出土した。また本遺構からは141点もの大量の礫が出土した。石器は1点のみ(図82-S16)で、残りは加工の見られない円礫・角礫である。19点に被熱が認められる。大きさは、重量で100g弱～3.5kgをはかり、大小様々で規則性は認められない。図81に示したように、9層上面付近、標高0.4～0.75mの辺りに集中して廃棄されている。被熱礫がまとまることはなかった。井戸周辺に礫を利用した構造物があることが想定されるが、それ以上の判断材料はない。井戸の廃絶時には周辺構造物も解体し、廃棄したような状況が窺える。

本遺構の時期は、瓦質の火鉢(図82-1)の時期が18世紀に属することから、同時期に位置付けられる。

井戸25 (図83、図版31)

北区南部、BV23区に位置する。中世前半の井戸9を切っている。前述の井戸22の南10m、井戸23の東6mにあたる。

検出面は標高0.9mを測る。平面形は、長径0.86m、短径0.6mの楕円形を、底面は径0.5mの円形を呈する。底面

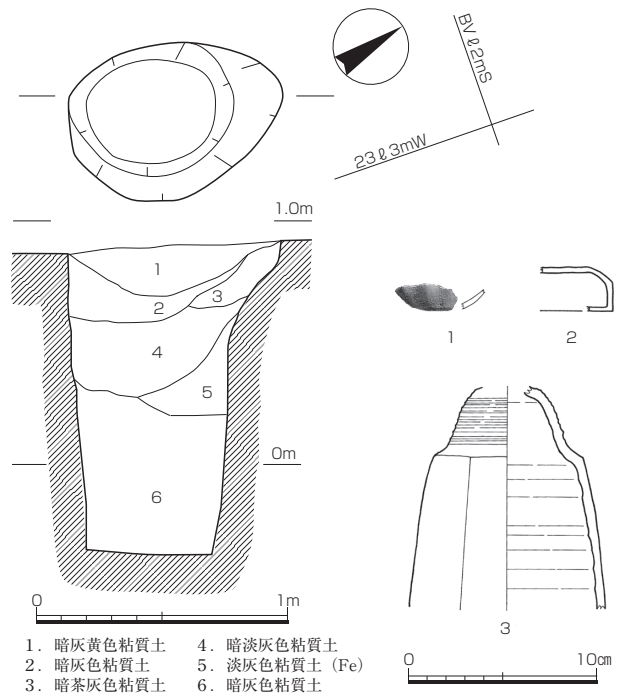
の標高は-0.36mを測り、検出面からの深さ1.2mが残る。掘り方の断面形では標高0.6m以下は筒状を呈すが、北側上部が開いている。上面はかなりの削平を受けているため本来の形状は窺いしれないが、同時期の井戸の形状から上部が開く形をなすことも予想される。

埋土は6層に分層した。1～5層は暗灰色粘質土を主体とし、粘土ブロックや微砂を混入する埋め土であろう。

遺物はポリ袋（12号）1袋が出土した。遺物は少ないが、型押しのある肥前磁器青磁皿（図83-1）と、同じく肥前磁器水滴（同-2）は17世紀半ば～18世紀のものである。また同-3の角徳利は備前焼天保窯の産で19世紀前半に位置付けられる。これらの所有者には一般庶民ではなく、裕福な層が想定される。

本遺構の土壌を持ち帰り、種子の抽出・同定を実施した（第4章第2節参照）。本遺構では23個体を抽出し、19種類の植物種子を同定できた。ナズナ（アブラナ科）・ホオズキ（ホオズキ科）等馴染みある植物のほかタカザブロウ・コゴメガヤツリ等の田畑雑草が見られる。

本遺構は、出土遺物から19世紀前半に埋まったといえる。本調査地点で確認される最も新しい時期の屋敷地がこの時期まで存在したことが窺われる。



- 1. 暗灰黄色粘質土
- 2. 暗灰色粘質土
- 3. 暗茶灰色粘質土
- 4. 暗淡灰色粘質土
- 5. 淡灰色粘質土 (Fe)
- 6. 暗灰色粘質土

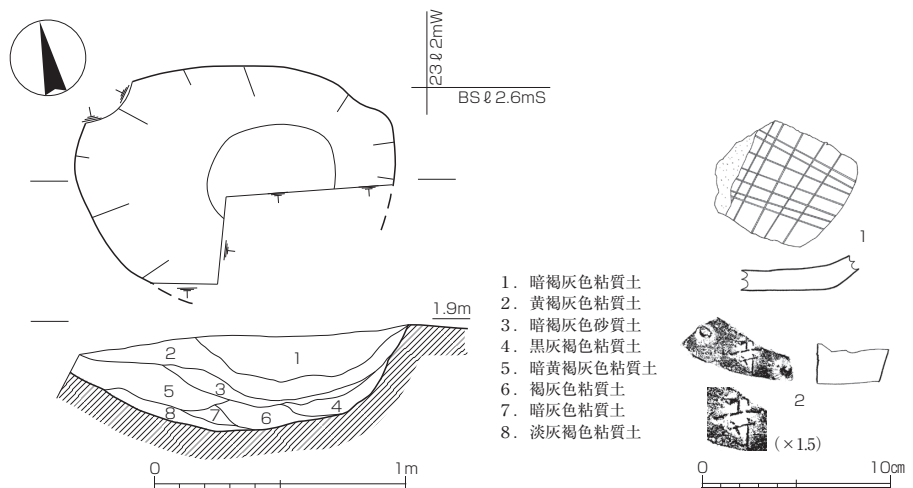
番号	器種	口径:cm	底径:cm	器高:cm	残存	特徴	色調	胎土
1	肥前磁器 青磁皿	-	-	-	-	内外:貫入、内外面施釉	(胎)白 9/ (釉)明緑灰 10YR7/1	緻密
2	肥前磁器 水滴染付	-	-	-	-	外:施釉、外底:露胎	(胎)灰白 N8/ (釉)透明	緻密
3	備前焼 六角徳利	-	-	-	-	回転ナデ、外:カキメ・化粧土・一部自然釉、19世紀	(内)赤褐 10R5/4 (外)赤黒 10R5/4	きめ細かい

図83 井戸25・出土遺物（縮尺1/30・1/4）

2. 土坑

土坑6（図84、図版32）

北区北部、BS23区に位置する。西側に近接して井戸16が位置する。南東側1/4は攪乱によって失われる。検出面の標高1.85m、底面の標高1.45mを測る。上面では1.2×1.0mの東西に長い楕円形を



- 1. 暗褐色粘質土
- 2. 黄褐色粘質土
- 3. 暗褐色砂質土
- 4. 黒灰褐色粘質土
- 5. 暗黄褐色粘質土
- 6. 褐色粘質土
- 7. 暗灰色粘質土
- 8. 淡灰褐色粘質土

番号	器種	口径:cm	底径高台径:cm	器高:cm	残存	特徴	色調	胎土
1	須恵器 鈿し皿	-	-	-	-	底部内面に格子状のおろし目	灰 6/	1mm以下砂
番号	器種	長:cm	幅:cm	厚:cm	残存	特徴	色調	胎土
2	瓦質 軒丸瓦	-	-	-	-	瓦当に「寺」遺存・珠文・16世紀代	灰 4/	細かい

図84 土坑6・出土遺物（縮尺1/30・1/4）

呈する。断面形は浅いU字状をなす。埋土は8層に分けた。3層には砂を含む。遺物はポリ袋(12号)で2袋が出土した。図84-1は須恵質土器卸皿、同2は軒丸瓦で2の瓦当には径0.7cmの珠文2つの間に「寺」の文字が陽刻される。近くに寺の存在を示す重要な遺物と言えよう。

16世紀末葉と比定される。

土坑7 (図85、図版32)

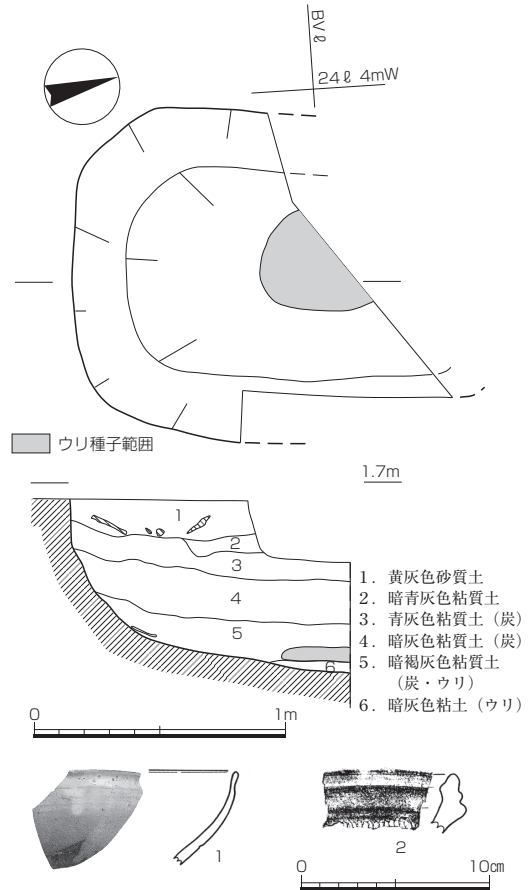
北区東端、BU24区に位置する。D地点調査範囲の北端にあたり、本遺構の北半は調査区外にあたり未確認である。<3層>上面で検出した。検出面の標高は1.6m、底面の標高は0.95mを測る。上面では東西1.3m、南北1.5mが残り、本来は隅丸長方形をなすものである。断面形はU字状で、埋土は6層を確認した。5層下面と6層中から多量のウリ種子が出土している。ウリ種子については形態分析・DNA分析とともに年代測定を実施しており、補正14C年代(cal y.B.P.)で、200±30の値が得られている⁽¹⁾。

遺物はポリ袋(12号)1袋が出土した。備前焼すり鉢・肥前陶器のほか、中世前半の土師器椀・杯・皿・鍋等の小片が含まれる。図85-1は肥前陶器(天目)碗で、17世紀半ばに位置付けられる。ほかに17世紀後半の内野山系も認められる。同2は備前焼すり鉢で、17世紀代であろう。

本遺構は17世紀後半～18世紀前半に位置付けられよう。機能としては野壺ではなく、貯蔵庫等の可能性がある。

註

(1) 田中克典・加藤謙司 2013「メロン仲間の種子遺存体における形態分析とDNA分析」『紀要2012』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター



番号	器種	口径:cm	底径 高台径:cm	器高:cm	残存	特徴	色調	胎土
1	肥前陶器 天目形茶碗	-	-	-	-	内面全釉、外面ほぼ全釉、17世紀半ば	(胎)灰 6/ (釉)灰 7/	緻密
2	備前 すり鉢	-	-	-	-	回転ナデ、スリ目の上端が残存、17世紀代	(内)鈍赤褐、(外)明赤褐 2.5YR4/4、2.5YR5/6	1mm砂

図85 土坑7・出土遺物(縮尺1/30・1/4)

土坑8 (図86、図版32)

北区西部、BV24区に位置する。検出面の標高1.6m、底面の標高1.0mを測る。東半は調査区東側溝で切られ、南端は土坑14に切られる。上面は東西0.5m、南北1.4mの半円形が残り、底面は本来径0.4mの円形を呈すると考えられる。検出面からの深さは0.6mを測る。底面の平坦面は狭く、野壺とは考えられない。

埋土は3層に分けた。灰色粘質土を主体とする。遺物はポリ袋(12号)1袋が出土した。瓦、肥前陶磁器、備前焼灯明皿のほか、中世前半の土師器椀・皿・鍋等の小片が認められる。陶磁器には17世紀後半～18世紀初頭に位置付けられるものが含まれ、本遺構の時期を示す。

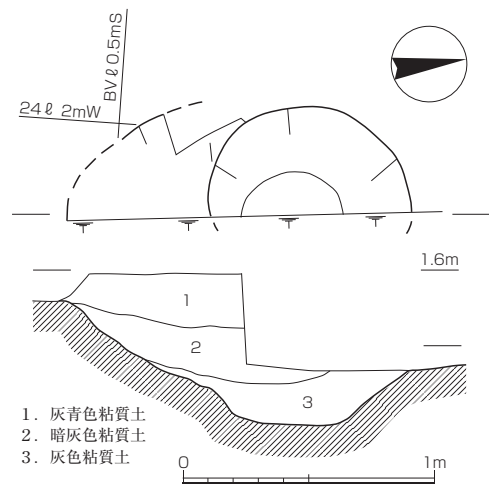


図86 土坑8(縮尺1/30)

土坑9 (図87、図版32)

北区中央、BU21区に位置する。<3層>上面で検出した。検出面の標高は1.75m、底面の標高は1.4mを測る。南半は攪乱に拠って破壊され、上面では径1.5mの半円、底面では径1.2mで半円が残る。検出面からの深さは0.35mを測る。平底で、断面形は逆台形をなす。埋土は3枚に分けた。

遺物はポリ袋(12号)2袋が出土した。肥前陶磁器、備前焼灯明皿、瓦の小片のほか、中世前半の土師器椀・皿・鍋や瓦器の小細片が含まれる。17世紀後半の肥前陶器(内野山系)・天目碗、18世紀前半に入る備前焼水屋甕・肥前陶器等が見られる。

本遺構の時期は18世紀前半に位置付けられる。

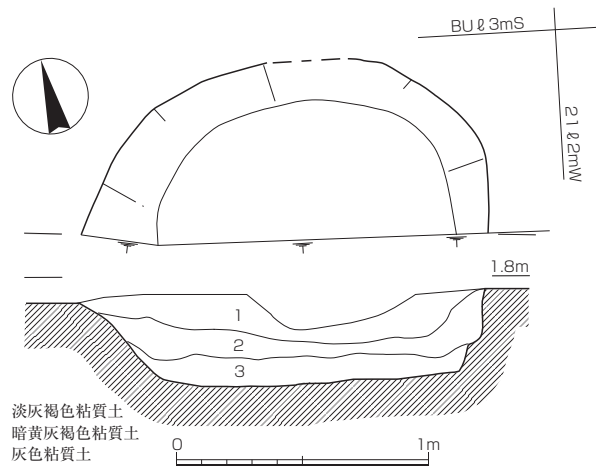


図87 土坑9 (縮尺1/30)

土坑10 (図88、図版33)

北区北部、BS22区に位置する。検出レベルは1.55mを測る。平面形は概ね円形を呈し、上面で1.16×1.18mが残る。底面のレベルは1.2mで、深さは0.35mである。埋土は4層に分けた。1～3層は暗灰褐色～暗青灰褐色の粘質土で、炭化物を含む。4層は暗灰色粘質土で、細砂を混入する。

遺物はポリ袋2袋が出土した。土師器椀・竈・鍋、須恵器皿、瓦の小片と肥前磁器染付、備前焼灯明皿の小片が含まれる。図88-2は肥前磁器小型鉢で、外面に呉須で紋様が施される。18世紀前半に属する。

本土坑は出土遺物から18世紀前半と考えられる。

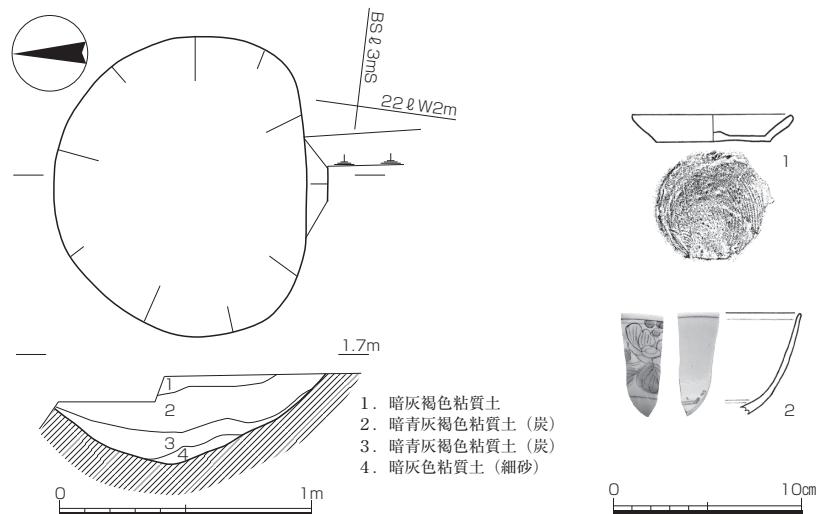


図88 土坑10・出土遺物 (縮尺1/30・1/4)

土坑11 (図89、図版33)

北区東部、BU21区に位置する。検出面の標高は1.7m、底面の標高は1.25mを測る。上面では1.5m×1.4mの隅丸方形を呈し、底面は一辺0.7mの方形をなす。検出面からの深さは0.45mが残る。断面形は緩やかに開くU字形で丸底に近い。埋土は2層に分けた。灰色粘質土が主体で、両層とも砂を混入する。

遺物はポリ袋(12号)1袋が出土した。棧瓦、肥前陶磁器の小片のほか、中世前半の土師器椀・皿・鍋等の小

番号	器種	口径:cm	底径 高台径:cm	器高:cm	残存	特徴	色調	胎土
1	土師器 皿	9.2	6.2	1.55	口1/2 底1/1	回転ナデ、底内:中央仕上げナデ、底外:糸キリ、口縁・体部:煤	浅黄橙 7.5YR8/4	きめ細かい 赤色粒
2	肥前磁器 小型鉢	-	-	-	-	染付、呉須、外花・葉の意匠	(胎)白 9/ (釉)透明	緻密

片が認められる。掲載できる大きさが残るものはなかった。陶磁器はいずれも18世紀代のものである。

本遺構は、出土遺物から18世紀後半に位置付けられる。

土坑12 (図90、図版33)

北区西端、BV・BW24区に位置する。＜3層＞上面で検出した。検出面の標高1.7m、底面の標高1.15mを測る。本遺構は調査時の側溝により中央部を分断されている。概ね円形をなし、上面では径1.5mを測る。断面形はU字状をなし、底面は平坦ではない。検出面からの深さ0.85mが残る。埋土は7層に分けた。下層の6・7層には粘質土に砂を含み、水が溜まっていた状況が窺われる。2～5層には炭が含まれる。

遺物はポリ袋（12号）で4袋が出土した。瓦、肥前陶磁器、備前焼、瓦質土器のほかに、中世前半の土師器椀・皿・鍋等の小片が認められる。図90-1は肥前磁器碗で、18世紀代に比定される。同-2は瓦質の軒平瓦で、中心に3つの巴文を配し唐草文を施す。岡山城1式にあたり、18世紀後半に属するもので本遺構の時期を示す。

本遺構の土壌を持ち帰り、種子の抽出・同定を行った（第4章第2節参照）。本遺構では31個体を抽出、22種類の植物種子を同定した。イネ・ヒョウタン等の栽培植物のほか、田畑雑草の種子が含まれる。

本遺構は出土遺物から18世紀後半に位置付けられる。遺構の機能として水貯め等の可能性が挙げられる。

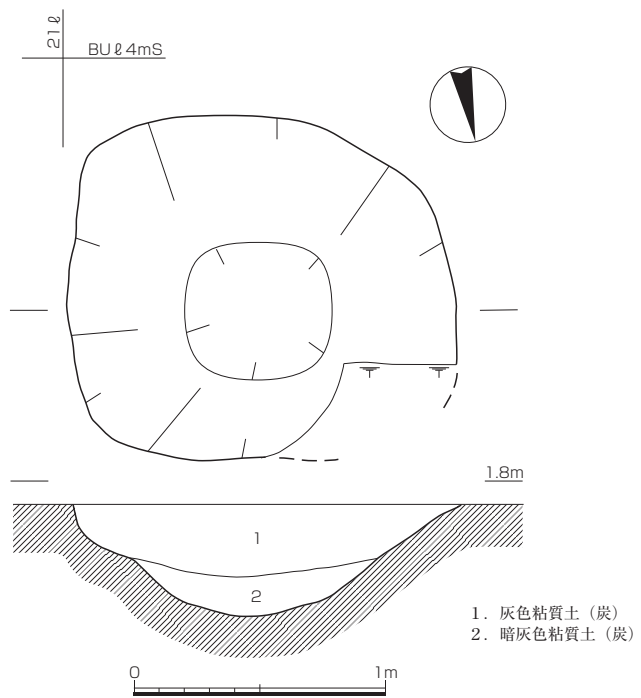


図89 土坑11 (縮尺1/30)

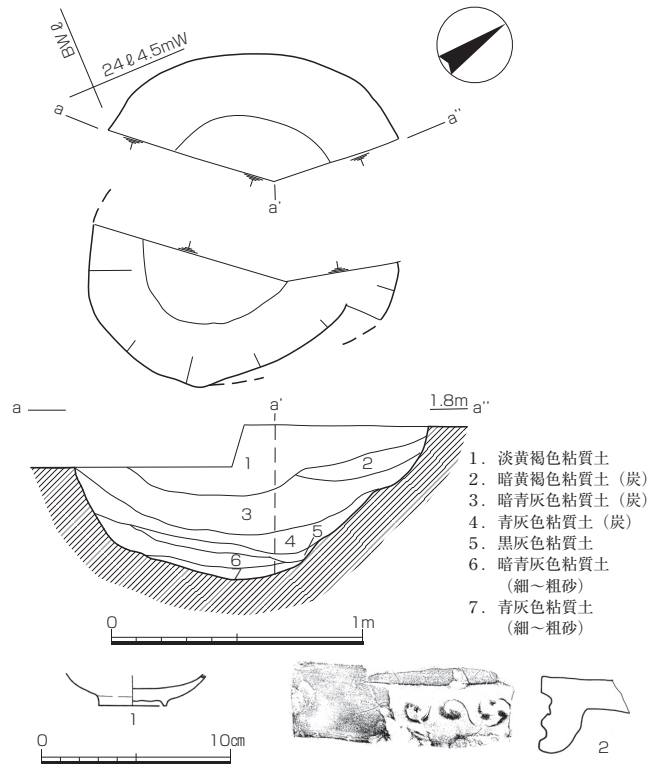


図90 土坑12・出土遺物 (縮尺1/30・1/4)

番号	器種	口径: cm	底径 高台径: cm	器高: cm	残存	特徴	色調	胎土
1	肥前磁器 碗	-	-	-	-	蛇の目高台、外面:全釉登付けのみ釉剥ぎ	(胎)灰白8/ (釉)白9/	緻密
番号	器種	長: cm (残存値)	幅: cm (残存値)	厚: cm (残存値)	残存	特徴	色調	胎土
2	瓦質 軒平瓦	-	-	3.5	-	ナデ、唐草文、18世紀後半	暗灰 /3/	1mm以下砂

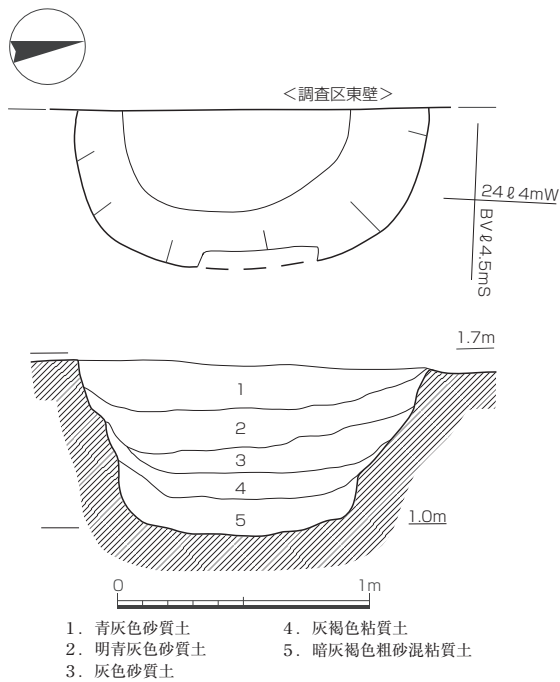


図91 土坑13 (縮尺1/30)

土坑13 (図91、図版33)

北区西部、BV24区に位置する。<3層>上面で検出した。検出面の標高は1.65m、底面の標高0.95mを測る。本遺構はD地点東端に位置し、西半は調査区外にあたり確認できない。また前述の井戸23の南端を切って構築されている。

平面形は上面で南北1.4m、東西0.6mの半円状を確認した。検出面からの深さは0.7mで、断面形は逆台形を呈する。埋土は5層に分けた。最下層には粗砂が混じる。

遺物はポリ袋(12号)1袋が出土した。肥前陶磁器、瓦質土器片のほか、土師器碗・皿・鍋等の小片が見られる。掲載できるものはなかったが、肥前陶磁器類の特徴は18世紀代に位置付けられるものである。

本遺構の時期は、18世紀前半に埋まる井戸23との切りあい関係と出土遺物から、18世紀後半以降に比定される。

土坑14 (図92、図版34)

北区西部、BU・BV24区に位置する。<3層>上面で検出した。検出面の標高は1.58m、底面の標高は0.95mを測る。平面形は隅丸方形を呈し、径1.5m以上の規模が想定される。断面形はU字状をなし、標高1.4m以上では大きく開く形状が予想される。

埋土は6層に分けた。下半の4～6層には粗砂が混じる。1～3層は粘質土ブロックを混入する。

遺物はポリ袋(12号)1/2袋が出土した。備前焼、瓦、青磁碗小片のほか、中世前半の土師質土器碗・皿・鍋等の小片が認められる。

本遺構の時期は、遺物では決めがたいが、遺構の切り合い等から、18世紀後半代に位置付けておく。

土坑15 (図93、図版34)

北区西端、BV24・25区に位置する。D地点の北西壁際にあたり、本遺構の北西および西端は調査区外となり確認できていない。<3層>上面で検出した。

検出面の標高は1.5m、底面の標高は1.0mを測る。検出できた部分から、平面形としては1辺1.5

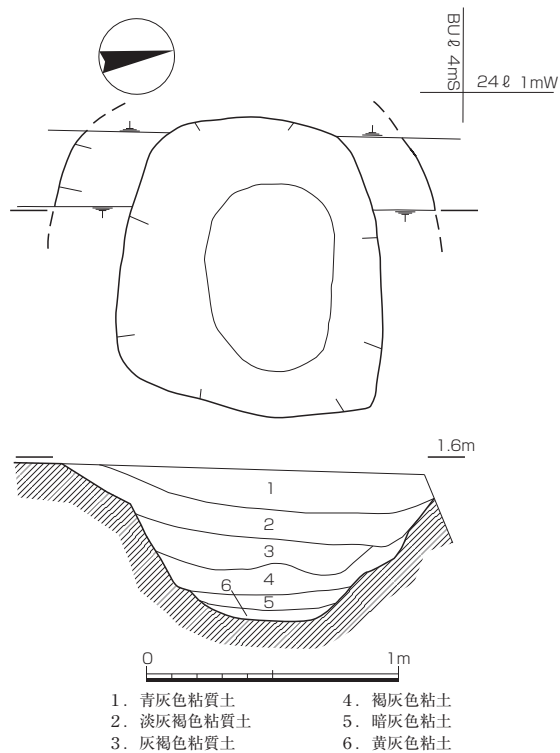


図92 土坑14 (縮尺1/30)

m程度の隅丸方形が想定される。断面形はU字状になるものと考えられ、検出面からの深さは0.45mが残る。

埋土は5層に分けた。最下層の5層には鉄分が沈着する。3・4層には砂が混じる。遺物はポリ袋(12号)1/2袋が出土した。時期を示すものとして備前焼灯明皿、陶磁器の小片があるが、掲載できるものはなかった。そのほかに中世前半の土師器椀・皿・鍋等の小片多数が認められる。

本遺構の時期は18世紀代に位置付けられる。

土坑16 (図94、図版34)

北区中央、BU22区に位置する。南北両端を攪乱により失う。検出面の標高は1.7m、底面の標高は1.4mを測る。東西1.2m、南北0.8mの規模で検出し、平面形はおそらく楕円形を呈するものと考えられる。断面形はU字状をなし、検出面からの深さは0.3mを測る。埋土は3層に分けた。遺物はポリ袋(12号)1/3袋がわずかに出土した。肥前磁器の可能性のある小片と土師器椀・皿・鍋等の小片40点が認められる。

本遺構の時期は他の土坑の状況も併せ検討し、18世紀代と位置付けておくこととする。

土坑17 (図95、図版34)

北区西部、BV24区に位置する。本遺構の東半は攪乱により失われている。<3層>上面で検出した。検出面の標高1.7m、底面の標高1.5mを測る。平面形は上面で南北0.8m、東西0.3mの半円状を確認した。断面形は浅いU字状をなす。埋土は3層に分けた。最下層の3層の底面には白色砂が認められ、水の影響が窺える。遺物は見られなかった。

本遺構の時期については、遺構・遺物の特徴からは決め難く、検出面から近世の範疇に位置付けておくこととする。

土坑18 (図96、図版35)

東区南端、CC・CD17区に位置する。本遺構の北半は攪乱により失われている。検出面の標高は1.5m、底面の標高は0.9mを測る。平面形は上面で1.2m×0.6mの半円形状が残る。断面形はU字状を呈し、検出面からの深さは0.6mが残る。

埋土は4層に分けた。1・3層には炭化物の混入

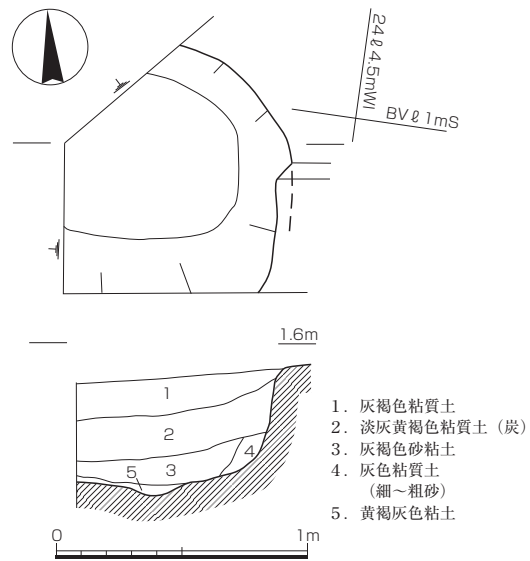


図93 土坑15 (縮尺1/30)

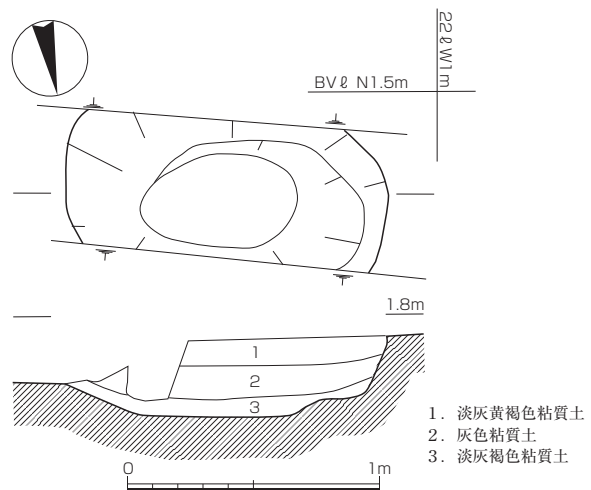


図94 土坑16 (縮尺1/30)

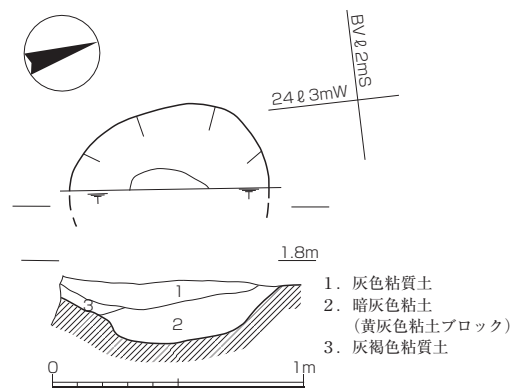


図95 土坑17 (縮尺1/30)

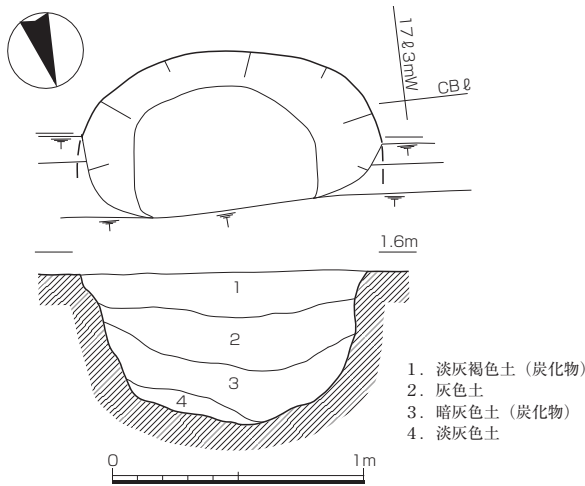


図96 土坑18 (縮尺1/30)

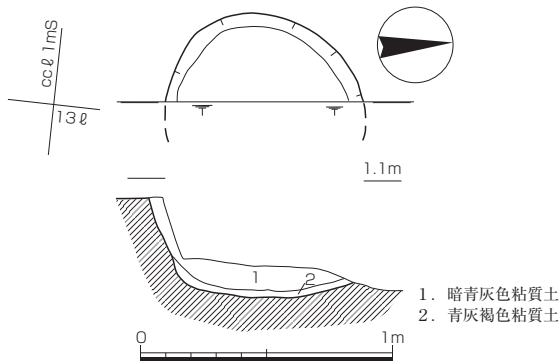


図97 土坑19 (縮尺1/30)

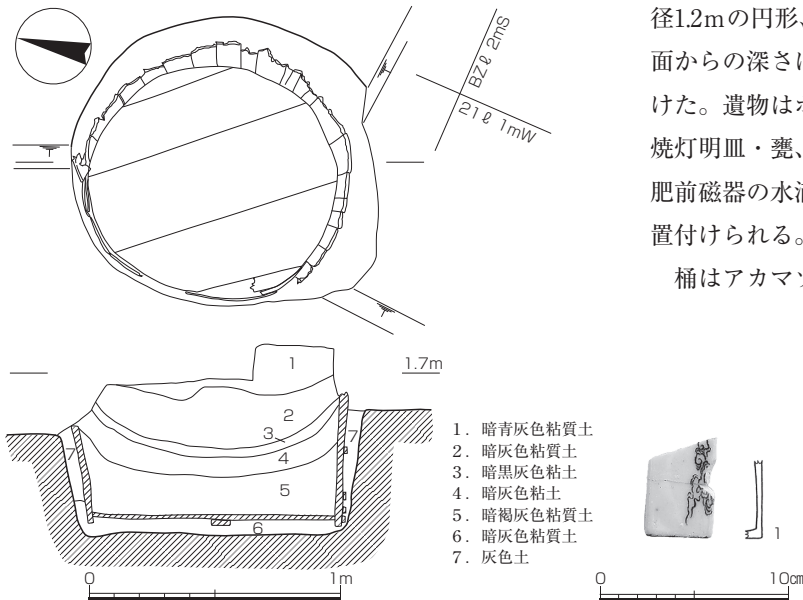


図98 土坑20・出土遺物 (縮尺1/30・1/4)

番号	器種	口径:cm	底径 高台径:cm	器高:cm	残存	特徴	色調	胎土
1	肥前磁器 染付水滴	-	-	-	-	外:葉・雲の意匠・施釉	(胎)灰白 8/ (釉)透明	緻密

が見られる。出土遺物は認められなかった。

本遺構の時期は断定し難く、近世の可能性を考えておく。

土坑19 (図97、図版35)

東区南東端、CB・CC13区に位置する。本遺構の東半は調査区東端の側溝により失われている。検出面の標高1.0m、底面の標高は0.65mを測る。平面形は上面で0.8m×0.3mの規模の半円形状を検出した。断面形はU字状を呈する。検出面からの深さは0.3mを測る。埋土は2層に分けた。遺物はわずかに土師器の小片1点のみが出土した。

本遺構は前述の井戸21の北2m程に位置する。この位置は南北方向の区画溝となる溝24の東肩に接する。これまで記述してきた本時期の井戸・土坑とは離れた地点の屋敷地の存在を示すものと評価した。本遺構の時期は、18世紀代と位置付けておくこととする。

土坑20 (図98、図版35)

西区北部、BZ21区に位置する。後述する溝21に重複して構築されており、同溝が埋まった後に機能した野壺である。上面は攪乱で失われているが中に設置された桶を原位置で検出した。検出面の標高は1.75m、底面の標高は1.1mを測る。平面形は上面で径1.2mの円形、下面で径1.0mの円形を呈する。検出面からの深さは0.8mが残る。桶内の埋土は5層に分けた。遺物はポリ袋(12号)1袋が出土した。備前焼灯明皿・甕、肥前磁器が認められる。図99-1は肥前磁器の水滴である。17世紀末~18世紀半ばに位置付けられる。

桶はアカマツ材を4枚連ねて円形の底板とし、側板にはスギ板を連ね、上下2段をタケ垂科の材を用いたタガで締めたものである。底板の下面には板材に直交する角材を渡し、補強としている。底板と角材および底板同士は竹釘で繋ぐ構造である。

本遺構は、形状と桶の設置から野壺としての機能が想定される。19世紀前半に溝21が廃絶した後、本調査地点も耕作地へと変化したことを示すものであろう。

3. 溝

溝5条を検出した。このうち溝21～24は中世後半～近世まで継続した屋敷地の区画溝である。

溝21 (図99～102、図版36)

北区東端、20～21ライン間を南北方向に走行する。最大幅3.8m、深さ1.0m以上の規模の大形溝である。本溝の北および北半の東は調査区外にあたり、第20次調査C地点および第18次調査地点で確認される(未報告)。本調査地点ではBTライン南2m～CAライン南2mの間で長さ35mを検出した。主軸方向はN-20°-Eを示し、いわゆる鹿田条里に沿う。検出面の標高は1.55mを測り、<4層>上面に対応する。底面の標高はa断面で0.5m、b断面で0.3m、c断面で0.45mを測る。本遺構はCAライン南0.5mの地点で収束傾向をもって検出され、基礎解体下の調査でその端部を確認した。同位置のすぐ南を起点に東に向かう溝22が走行する。両溝端部の距離は0.5mである。BXライン以南では標高0.7m付近まで攪乱により失われて下部構造しか残っていないため、両溝は接続していないが、上部構造での関係はわからない。また本溝は、12世紀代の土坑2の上に重複している。

断面形は逆台形～U字状をなす。検出面からの深さは1.0mが残る。埋土はa断面11層、b断面10層、c断面14層に分けたが、上下2群に大別できる。上層群と下層群との境はいずれの断面でも概ね標高1.0m付近である。a断面1～8層、b断面1～3層、c断面1～4層が上層群で、灰色粘土～粘質土を主体とし、灰色粘土ブロックの混入が見られる。下層群はa断面9～11層、b断面4～10層、c断面5～14層で、灰色～暗灰色粘質土が主体である。

遺物はコンテナ(28ℓ/箱)6箱と多量に出土した。土師器、陶磁器、瓦、土製品が含まれる。このほか杭・角材等の木製品と礫が出土しており、礫はコンテナ(28ℓ/箱)9箱、100点が出土した。遺物は12世紀代～19世紀初頭の時期幅をもって認められる。備前焼は15世紀末～16世紀初頭のすり鉢(図100-4)のほか、16世紀前半のものが目立つ。中国明代の景德鎮の碗(図101-25)は16世紀後半～末、須恵質の平瓦(図102-36・37)は中世の特徴が認められる。同-39の切隅瓦は16世紀後半以前のものである。一方、土師器碗(図100-17)・土師器皿(同-18)は13世紀後半～14世紀前半に比定される。この2点が完形資料であることは注目される。ほかに12世紀代に位置付けられる土師器、瓦器等が認められるが、いずれも小細片である。また本溝は近世にも継続して利用されており、陶磁器類は肥前磁器碗(図101-24)・瀬戸美濃焼の筒形碗(同-26)等は18世紀後半～19世紀、軒丸瓦(図102-38)は17世紀～18世紀、瓦質平瓦(同-40・41)は18世紀後半というように、近世の全般にわたって遺物が確認される。本遺構で最も新しい時期のまとまりとして、図101-28～34に掲載した一群の遺物がある。調査時には本溝を切る土坑として取り上げたものだが、断面の精査や遺物の特徴を検討し、本遺構が埋まる過程の最後にたわみとなったところへ一括廃棄された一群の遺物と判断した。備前焼灯明皿(同-28)・肥前磁器碗(同-29)・瀬戸美濃焼碗(同-30)・灯明皿(同-32)・関西系焙烙(同-34)等の食器・調理器はいずれも19世紀初頭のものである。キセル(同-M6)も同時期のものであろう。

石器として豊島石を加工した石臼(図102-S18)や砥石(同-S19～20)が出土している。砥石は流紋岩や粘板岩を用いたどれもよく使い込まれたものである。

こうした遺物に混じって、多数の礫が出土している。石器として抽出したもの以外には加工・被熱は認められなかった。大きさ・石材に規則性も特に見られない。出土レベルを記録した礫の多くは上層底にあたる標高1.0～1.1mの値を示す。本遺構廃絶時の埋め土とともに、周辺にあった礫も廃棄したことが考えられ、礫を用いる構造物の存在が窺える。このほか鉄滓の出土が見られる。ポリ袋(12号)1/4袋の出土だが、注目しておきたい。

こうした遺物の状況から、本溝は14世紀中頃～19世紀初頭まで機能していたと考えられる。14世紀以前の古い

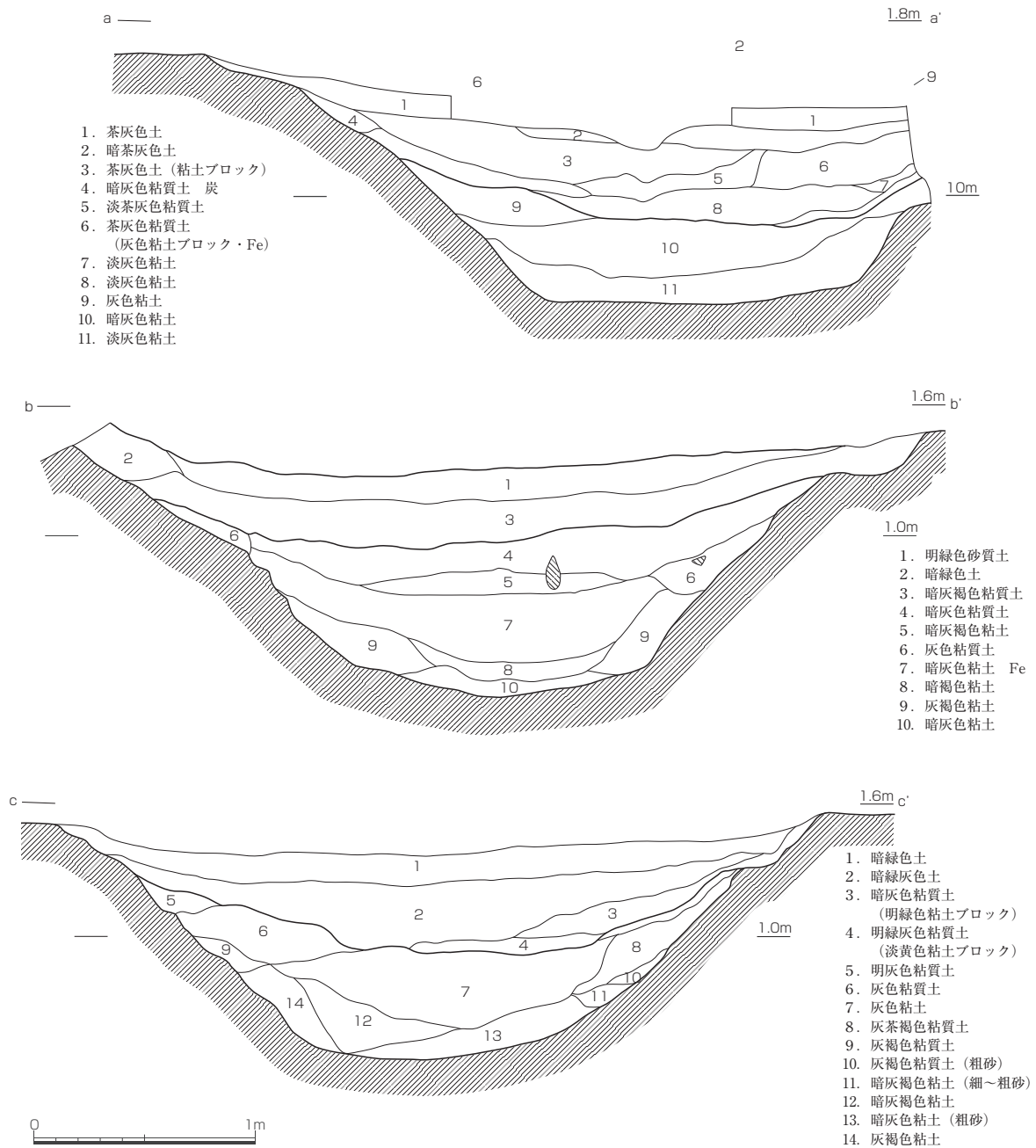
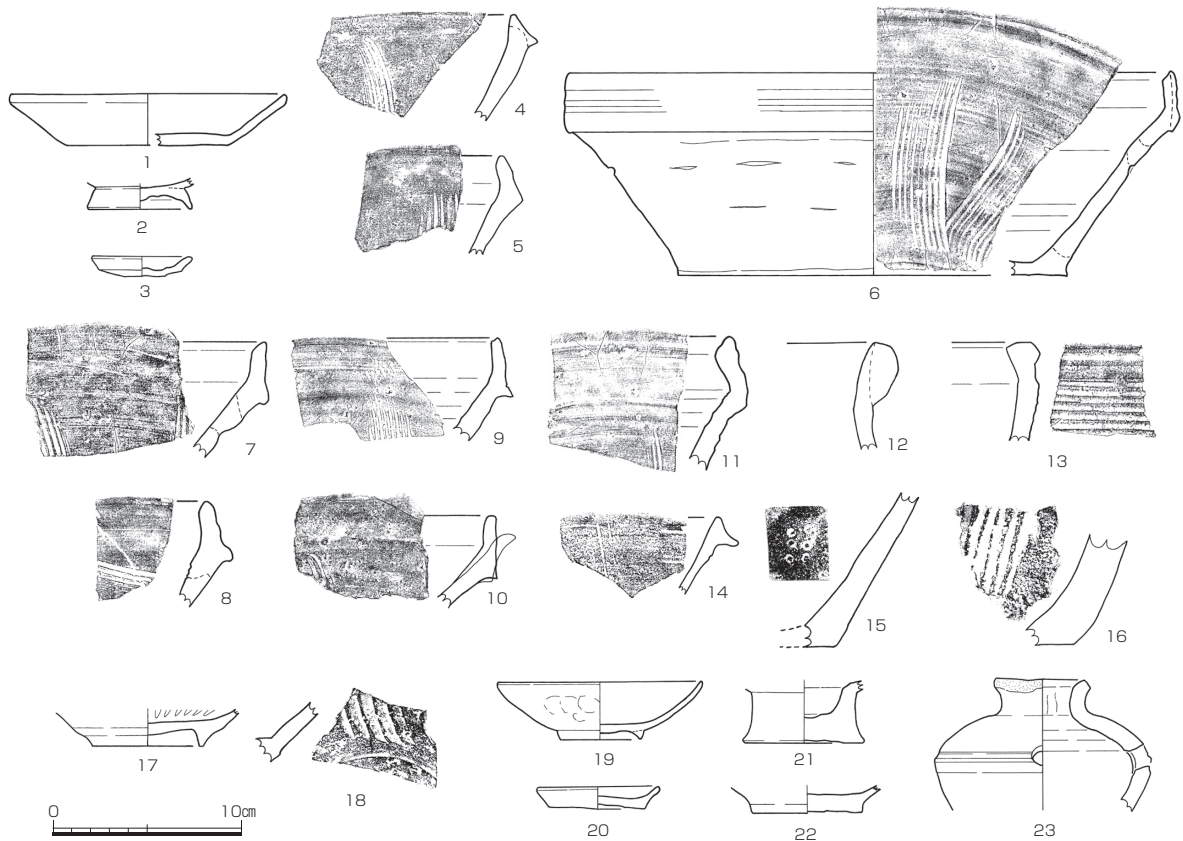


図99 溝21断面 (縮尺1/30)

時期のものは混入と判断した。掘削時期は確定的ではないが、13世紀後半～14世紀前半の土師器碗・皿 (図100-17・18) の存在を積極的に捉えたい。一方終焉の時期は、19世紀初頭の一括資料を証左とする。

このほかにヒトの頭蓋骨片の出土が認められる (第4章第4節参照)。4点の資料に焼けた痕跡が見られ、火葬骨の可能性が指摘されている。

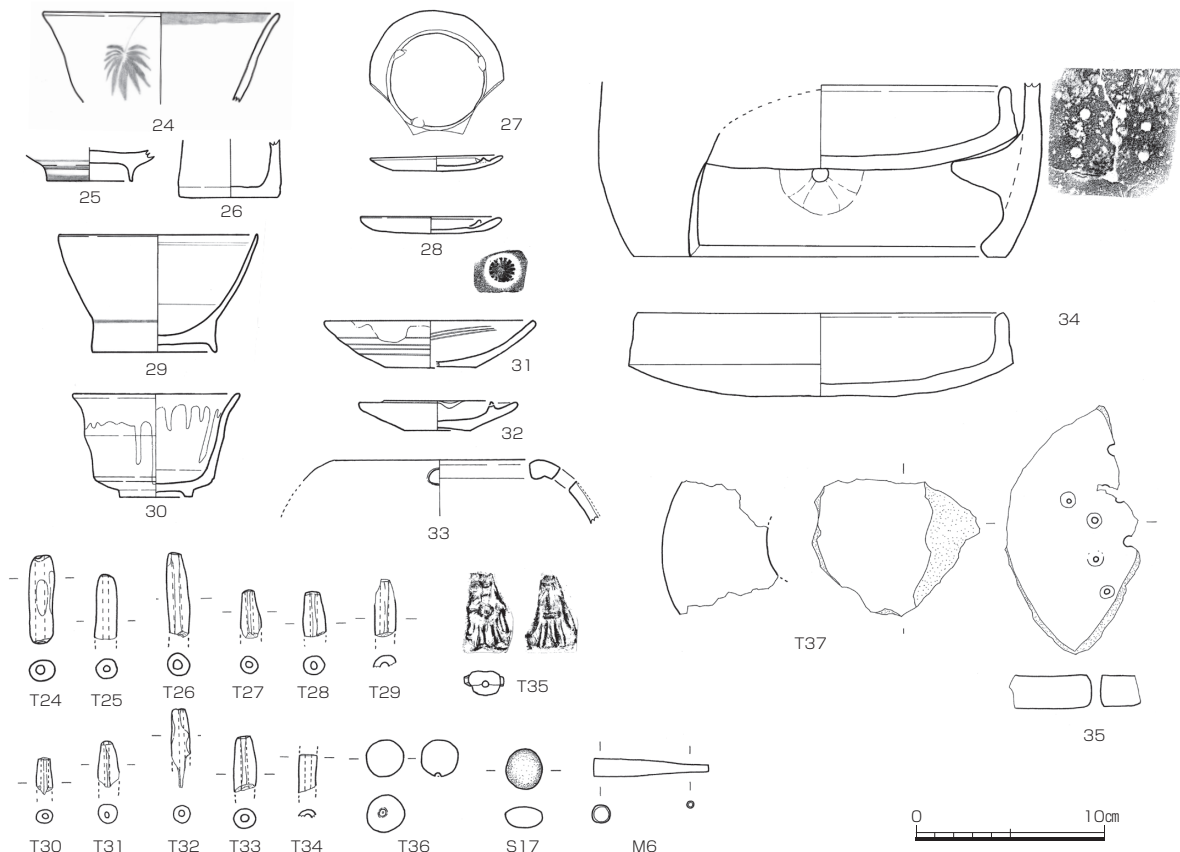
本遺構は14世紀中頃～19世紀初頭の長期に機能した、屋敷地を区画する大形の溝である。その方向は南北方向で、鹿田条里に近似する方向を示す。これより前代の大形区画溝としては13世紀末～14世紀初頭に埋まった溝18があり、同溝の廃絶後、溝21が構築され、19世紀初頭まで機能したことになる。出土遺物の構成と量はこれに合



番号	器種	口径:cm	底径 高台径:cm	器高:cm	残存	特徴	色調	胎土
1	土師器 皿	13.8	8	2.5	1/4	回転ナデ、底内:押圧、底外:ナデ・工具痕、外:布目痕	鈍黄橙 10YR7/4	きめ細かい 赤色粒少
2	土師器 椀	-	5.6	-	高台1/1	ナデ、煤付着、高台部は小皿を逆転して貼り付けた状態で3と類似、溝22の3と同形態	鈍赤褐 2.5YR5/3	0.5mm以下砂
3	土師器 皿	5.8	4.8	1.15	1/3	回転ナデ、底外:笥キリ後中央部押圧、内外の一部に煤、2の高台部形態と同一形態	鈍橙 7.5YR7/3~4	約0.5mm砂 赤色粒少
4	備前焼 すり鉢	-	-	-	-	回転ナデ、内:7本1組のスリ目	暗赤褐 2.5YR3/3	5mm以下砂礫
5	備前焼 すり鉢	-	-	-	-	回転ナデ、内:6本以上1組のスリ目	(内) 灰赤 7.5R4/2 (外) 暗赤褐 7.5R3/2	1mm以下砂
6	備前焼 すり鉢	31.0	-	-	口1/6	回転ナデ、内:9本1組のスリ目、粘土積み上げ痕顕著	暗赤褐 10R3/3	4mm以下砂礫
7	備前焼 すり鉢	-	-	-	-	回転ナデ、内:5本以上1組のスリ目	赤橙 10R6/8	4mm以下砂礫
8	備前焼 すり鉢	-	-	-	-	回転ナデ、内:6本1組の斜めスリ目	(内) 暗赤褐 2.5YR3/2 (外) 赤褐 2.5YR4/6	1mm以下砂
9	備前焼 すり鉢	-	-	-	-	回転ナデ、内:8本1組のスリ目	(内) 暗赤 10R3/4 (外) 極暗赤 10R2/3	3mm以下砂礫
10	備前焼 すり鉢	-	-	-	-	回転ナデ、内:3本1組のスリ目、口縁部自然釉	鈍い赤褐 7.5YR4/3	1~3mmの砂礫
11	備前焼 すり鉢	-	-	-	-	回転ナデ、内:3本以上1組のスリ目	鈍い黄橙 10YR7/3	1mm以下砂
12	備前焼 甕	-	-	-	-	回転ナデ、口縁端部自然釉	(内) 暗赤褐 2.5YR3/3 (外) 黒褐 10YR3/2	2mm以下砂礫
13	備前焼 水屋甕	-	-	-	-	回転ナデ、外:6条以上の条線	(内) 暗赤褐 10R3/2 (外) 鈍い赤褐 2.5YR3/4	1mm以下砂
14	瓦質 すり鉢	-	-	-	-	回転ナデ、内:3条以上のスリ目、工具ナデ	灰5/	1mm以下砂
15	備前焼 壺	-	-	-	-	ナデ、内:自然釉、窯印あり	暗赤褐 5YR3/3~3/6	2mm以下の砂礫
16	土師質 すり鉢	-	-	-	-	内:6本以上1組のスリ目、磨滅	(内) 鈍い橙 5YR7/3 (外) 灰白 5YR8/2	3mm以下の砂礫多
17	青磁 皿	-	6.0	-	1/4	全釉、畳付けのみ釉かきとり、連弁文	(胎) 白 10/ (釉) 濃いオリーブ	緻密
18	青磁 椀	-	-	-	-	外:5条の工具痕	(胎) 灰白7/ (釉) オリーブ灰 5GY5/1	緻密
19	土師器 椀	11.4	4.7	3~3.2	口1/3 底3/4	ナデ・押圧、底外:亀裂	灰白 10YR8/2	2mm以下砂礫
20	土師器 皿	7	5.45	1.2~1.4	完存	磨滅、回転ナデ、底外:笥キリ(ロクロ回転左)	鈍黄橙 10YR7/4	0.5mm以下砂 赤色粒
21	土師器 器台	-	6.8	-	底1/4	回転ナデ、底内:ナデ・押圧、底外:笥キリ(ロクロ回転左)	灰白~浅黄橙 10YR8/2~3	5mm以下砂礫 1mm前後中心
22	土師器 杯or椀	-	6.3	-	底1/1	磨滅、回転ナデ、底外:笥キリ(ロクロ回転左)	鈍橙 7.5YR7/4	0.5mm以砂 赤色粒多
23	須恵器 はそう	-	-	-	体部1/4	口縁部二次加工の可能性、円孔直径1×1.2cm、寒風窯産か、口~肩部に自然釉	灰白 7/	1~2mm砂礫

図100 溝21出土遺物(1) (縮尺1/4)

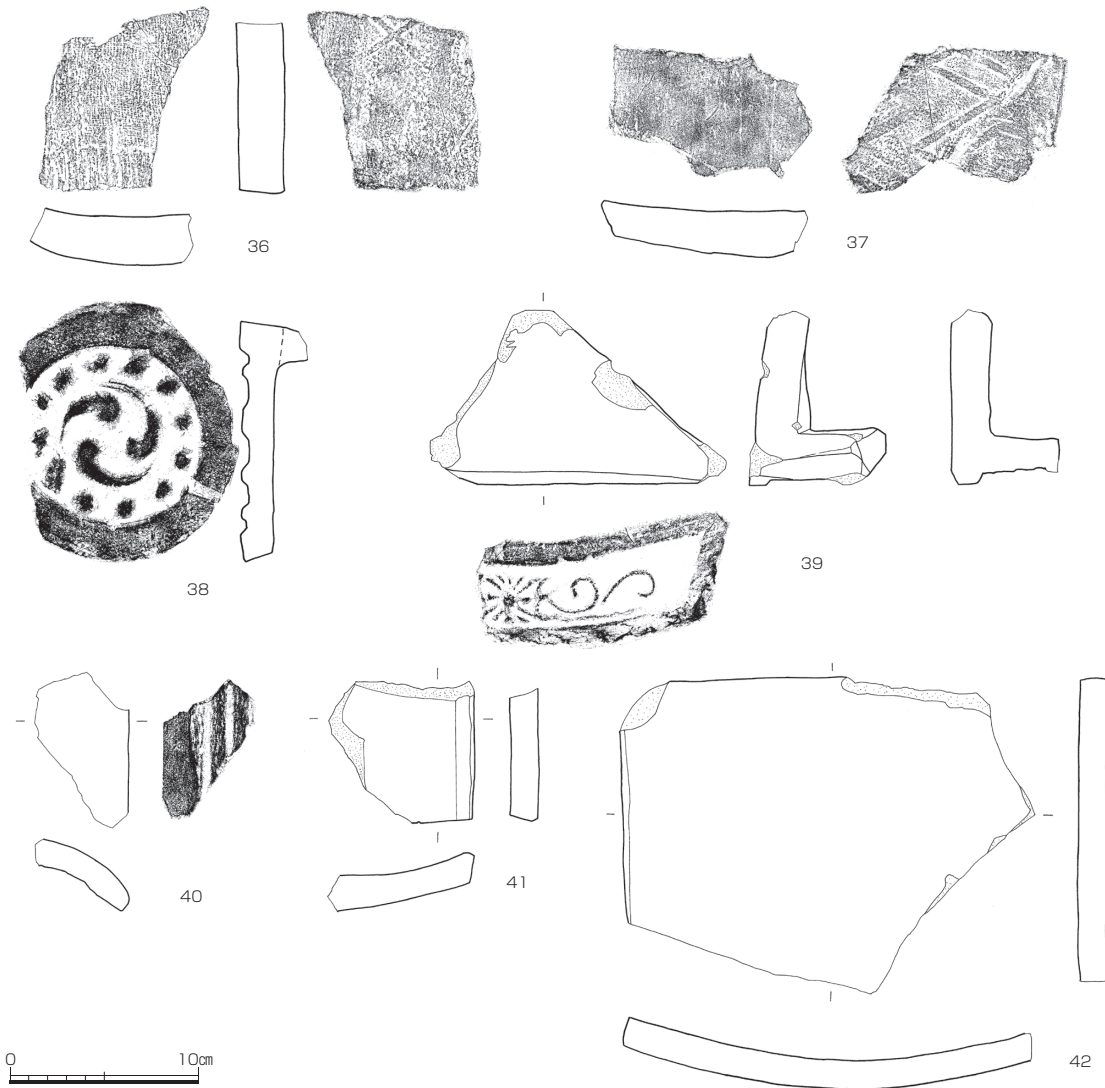
調査の記録



番号	器種	口径: cm	底径 高台径: cm	器高: cm	残存	特徴	色調	胎土
24	肥前磁器 碗	12.5	-	-	1/6	全釉、外:葉の意匠、18世紀末~19世紀	(胎)白9/ (釉)透明	緻密
25	中国産磁器 碗	-	4.4	-	1/1	明景德鎮、染付、全釉畳付のみ釉剥ぎ、見込み:草花の意匠、高台内:「天下太平」、16世紀末	(胎)白9/ (釉)透明	緻密
26	瀬戸美濃陶器 筒形碗	-	5.1	-	1/2	底部以外全釉、外底:糸キリ、江戸末期	(胎)灰白 7.5YR8/2 (釉)濃い緑	細かい
27	備前焼 灯明皿	7.5	4.4	0.8	口1/2 底1/1	外底:回転ヘラケズリ、かえり有り、挟り3か所	鈍い赤褐 7.5R4/3	細かい
28	備前焼 灯明皿	7.8	3.8	0.9	完存	外底:回転ヘラケズリ、かえり有り、挟り3か所、一部煤	暗赤 7.5YR3/6	細かい
29	肥前磁器 碗	10.6	6.6	6.2	口1/2 高台完存	外鳥・草木の意匠全釉畳付けのみ釉剥ぎ、高高台、19世紀	(胎)白9/ (釉)透明	緻密
30	瀬戸美濃磁器 碗	9.0	4.0	5.6	ほぼ完存	内貫入・施釉、外底部下部・高台露胎ほか全釉	(胎)灰白 5Y8/1 (釉)オリープ灰 10Y/5/2	緻密
31	瀬戸美濃陶器 灯明皿	5.6	4.7	1.4	口3/4 底1/3	内施釉・貫入・菊花文貼り付け・胎土目3か所・外回転ヘラケズリ・口縁部のみ施釉・18世紀後半	(胎)浅黄橙 7.5YR8/3 (釉)灰白 5Y8/1	緻密
32	瀬戸美濃陶器 灯明皿	8.75	3.5×3.6	1.7	ほぼ完存	内:施釉・受部に挟り1か所外口縁端部の施釉灰釉、19世紀	(胎)灰白 2.5Y8/2 (釉)灰白 5Y8/1	緻密
33	瓦質 壺	-	-	-	-	回転ナデ、円孔4カ所以上、被熱・煤	橙 7.5YR6/6	細かい
34	土師器 関西系焙烙	皿19.8	台20.0 皿20.8	皿4.5	台1/2弱 皿1/3	皿 回転ナデ、底部型押、煤 台 外:回転ナデ、内:ナデ、突起状の受け部3か所、内煤、円孔7カ所径6mm 18世紀後半~19世紀	皿 鈍い橙 7.5YR3/7 台 (内)鈍い橙 7.5YR2/7 (外)橙 7.5YR6/7	2mm以下 砂礫・雲母少
35	土師器・不明	15.6	-	1.8	-	8カ所の円孔径7mm前後、周縁は欠損、一部煤	灰白 10YR7/1	細かい

番号	器種	長: cm (残存値)	幅: cm (残存値)	厚: cm (残存値)	重量: g	残存	特徴	色調	胎土
T24	土師器 土鍾	4.8	1.3	1.2	10.3	完存	ナデ、磨滅、穿孔:直径0.5cm	灰黄 2.5YR7/2	きめ細かい
T25	土師器 土鍾	(3.5)	1.7	1.1	5.5	一部	ナデ、磨滅、穿孔:直径0.3cm	灰白 2.5Y8/2	1mm以下砂
T26	土師器 土鍾	(4.4)	1.2	1.1	6.4	一部	ナデ、磨滅、穿孔:直径0.5cm	橙 2.5YR5/8	1mm以下砂
T27	土師器 土鍾	(2.75)	1.6	1	2.0	一部	ナデ、磨滅、穿孔:直径0.3cm	灰白 2.5Y8/2	1mm以下砂
T28	土師器 土鍾	(2.5)	1.2	1.1	3.3	一部	ナデ、磨滅、穿孔:直径0.4×0.3cm	橙 2.5YR5/8	1mm以下砂
T29	土師器 土鍾	(3.1)	1.2	-	2.6	一部	ナデ、磨滅、穿孔:直径0.4cm	淡赤橙 2.5YR7/3	きめ細かい
T30	土師器 土鍾	-	0.9	0.8	1.5	一部	ナデ、磨滅、穿孔:直径0.4×0.2cm	明赤褐 2.5YR5/6	きめ細かい
T31	土師器 土鍾	(2.7)	1.1	1.2	3.6	一部	ナデ、磨滅、穿孔:直径0.4×0.3cm	橙 2.5YR5/8	1mm以下砂
T32	土師器 土鍾	(4.5)	1.1	1	3.5	一部	ナデ、磨滅、穿孔:直径0.4cm	鈍赤褐 2.5YR4/4	きめ細かい
T33	土師器 土鍾	(3.3)	1.3	1.1	4.7	一部	ナデ、磨滅、穿孔:直径0.3cm	灰白 2.5YR8/1	1mm以下砂
T34	土師器 土鍾	-	-	-	0.7	一部	ナデ、磨滅、穿孔:直径0.3cm	赤褐 2.5YR4/8	1mm以下砂
T35	土師器 人形	4.2	2.1	1.2	6.2	ほぼ完存	型物、ミニチュア製品、底部に穿孔	橙 5YR6/6	きめ細かい
T36	土師器 土鍾	2	2	2	8.5	完形	円孔1カ所(貫通しない)	鈍橙 5YR6/4	きめ細かい
T37	土師器 ふいご	(9.2)	(7.6)	6.2	373.4	一部	被熱、胎土内にスサ痕	鈍橙 5YR6/4	1mm以下砂

図101 溝21出土遺物(2) (縮尺1/4)

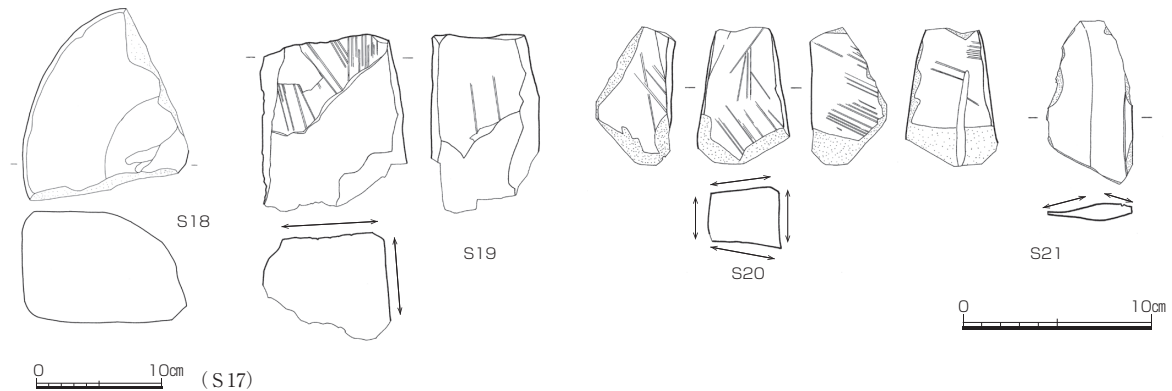


番号	器種	長：cm (残存値)	幅：cm (残存値)	厚：cm (残存値)	残存	特徴	色調	胎土
36	須恵器 平瓦	(9.5)	(8.5)	2.6	-	凹面：布目痕、凸面：格子目タタキ・ナデ	灰 5/	1mm以下砂
37	須恵質 平瓦	(11.0)	(6.8)	2.5	-	凹面：布目痕・ナデ、凸面：格子目タタキ、被熱	灰白 10YR8/1-8/2	1mm以下砂
38	須恵質 軒丸瓦	(12.7)	7.2	1.5	-	左巻三巴文	灰白 7/~8/	1mm以下砂
39	須恵質 切隅瓦	(9.4)	(16.0)	5.8	-	瓦当：、凹面：縄目、凸面：工具ナデ、中心飾：花の意匠：中二転の唐草天正期より古い	灰白 7/~8/	2mm以下砂
40	瓦質 平瓦	(8.4)	(5.1)	1.4	-	凹面：内板タタキ、凸面：ナデ、18世紀後半	暗灰 3/	1mm以下砂
41	瓦質 平瓦	(7.2)	(7.9)	0.9	-	キラコ、被熱	鈍い橙 5YR7/3	1mm以下砂
42	瓦質 平瓦	(18.6)	(21.5)	1.5	-	ナデ	凹面：灰白 8/ 凸面：灰白 2.5YR8/1	2mm以下砂礫

番号	器種	長さ：cm	幅：cm	厚さ：cm	重量：g	特徴
M6	キセル	6.4	1.0	1.0	4.0	吸い口、青銅、ほぼ完形

図102 溝21出土遺物(3) (縮尺1/4)

致する内容である。溝の主軸方向は、前代の溝18でもやや東に傾いており、おそらく本地点の自然地形の影響があるものと考えられる。本遺構の北側は第20次調査C地点・第18次調査で確認されているが、南については、CAライン以南の本調査地点内では確認されない。南に隣接する第9次調査地点では溝64の存在が報告されており、直接は繋がらないもののこのラインが土地区画のうえで重要な位置であることに留意したい。



番号	器種	残存長: cm	残存幅: cm	残存厚: cm	重量: g	残存	石材	特徴
S17	基石(白)	2.2	2	1.1	7.3	完形	石英脈	平滑
S18	石臼	15.8	13.6	9.1	2101.9	一部	流紋岩質凝灰角礫岩	豊島石、中央の軸受け円孔欠損
S19	砥石	9.7	7.9	5.8	493.3	一部	流紋岩	砥面2面
S20	砥石	7.3	4.9	4	149.6	一部	流紋岩	砥面4面
S21	砥石	13.5	4.4	0.9	38.7	一部	粘板岩	砥面2面

(S17のみ図101)

図103 溝21出土遺物(4) (縮尺1/4・1/6)

溝22 (図104・105、図版37)

西区～東区のCAライン南3m付近を東西に走行する。本調査地点南半は大規模な攪乱が及んでおり、検出面の標高は0.65～0.85mを測る。前述の南北方向の大形溝である溝21とセットとなる東西方向の大形溝である。主軸方向はE-20°-Sを示す。本溝の東西両端とも収束した形で検出した。東端は14ライン、西端は21ラインにあたり、その間で長さ33mを確認した。幅は1.3～1.65m、検出面からの深さ0.4mが残る。底面のレベルは標高0.2mである。埋土は9層～12層に分けた。

遺物はコンテナ(28%箱)2箱が出土した。遺物の構成は前述の溝21に近似する。中世前半～19世紀代の時期幅が見られる主な遺物としては14世紀前葉～中葉の土師器碗(図105-1)・皿(同図-11)、16世紀初頭の備前焼すり鉢(図104-8)・壺(同-6)が認められる。次いで、16世紀末～17世紀初頭の中国明代の磁器碗(同-5)や備前焼杯(同-2)、19世紀に入る肥前磁器皿(同-4)が出土している。一方、瓦器碗(同-12)や土師器碗(同-9～11)は中世前半の所産である。

溝の形状は上半部が失われており明らかでないところが多いが、下部構造としては、西端部は溝21の南端と接する位置である。また18、17ラインの2地点で、平面的に掘り返した状況が見られることが注意される。本溝が収束する東端から5mの位置に、後述する溝23が同時期に南北方向に走行して

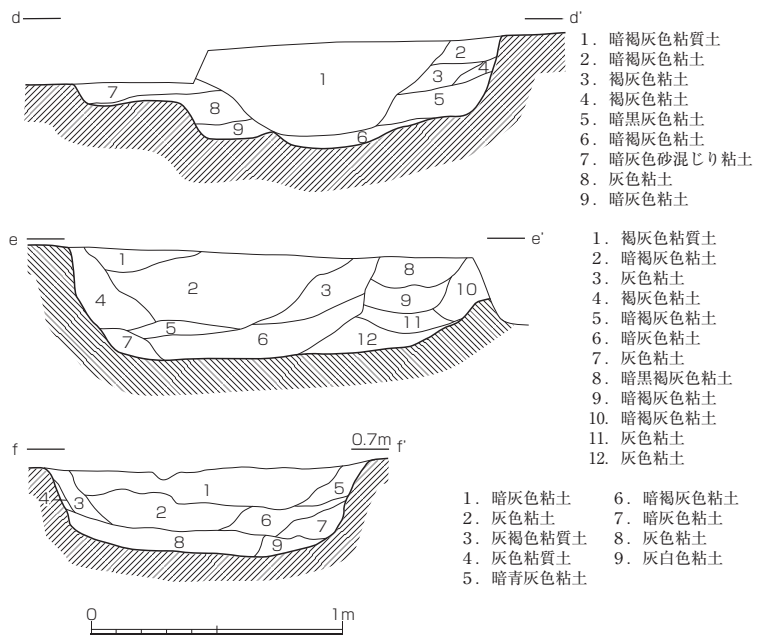
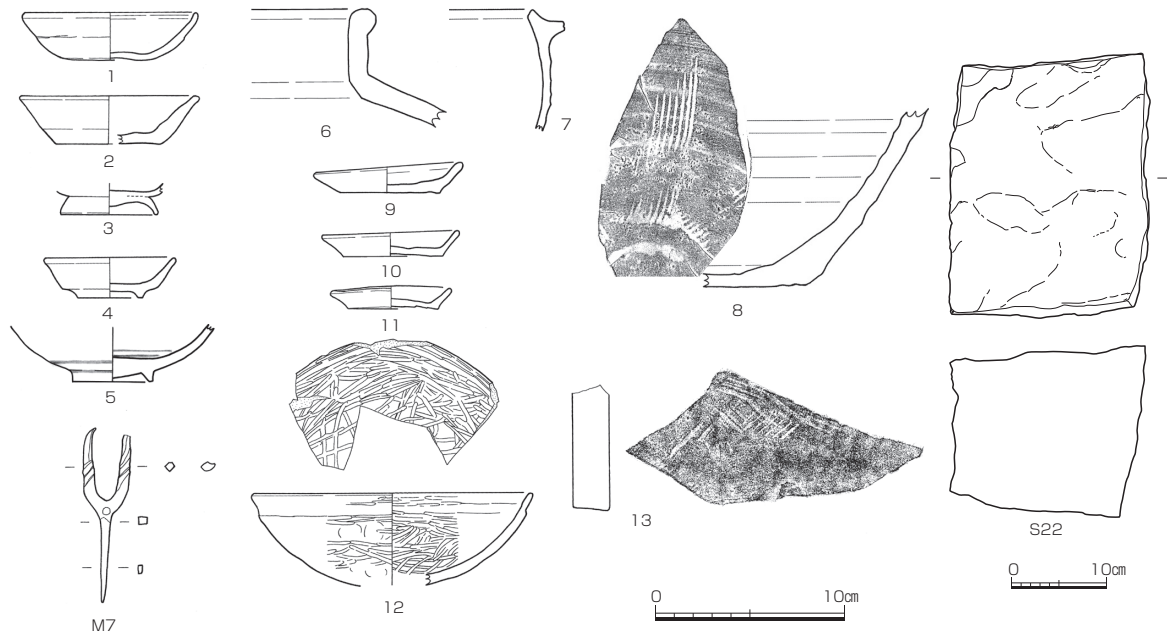


図104 溝22断面 (縮尺1/30)



番号	器種	口径：cm	底径 高台径：cm	器高：cm	残存	特徴	色調	胎土
1	土師器 椀	9.6	約5	2.6	□1/4 底3/4	内：丁寧なナデ・口縁部付近に工具痕、外：ナデ・押圧（指紋と布目痕）・表面の一部に薄い剥離（焼成時？）、底部形態は丸みを有して小窪み（ヘソ）を形成	鈍橙～鈍黄橙 7.5YR7/3～10YR7/2	0.5mm以下砂
2	備前焼 杯	10.2	6.1	1.8	1/4	回転ナデ、底外：糸キリ、16世紀末～17世紀	赤 10R4/6	1mm以下砂
3	土師器 椀	-	5.4	-	高台3/4	椀内：丁寧なナデ、外～高台内：強い回転ナデ、小皿を逆転した状態の高台形、溝21に類似椀あり(2)	鈍黄橙（高台内）鈍橙 10YR6/3、7.5YR6/4	0.5mm以下砂
4	肥前磁器 皿	7.3	3.8	2.3	□1/8 底1/1	全釉畳付けのみ釉剥ぎ、花の意匠、19世紀	(胎)白 9/(釉)透明	緻密
5	中国産磁器 碗	-	4.2	-	底1/1	染付、明漳州窯、全釉畳付けのみ釉剥ぎ	(胎)白 9/(釉)透明	緻密
6	備前焼 壺	-	-	-	-	回転ナデ、外：肩部波状文、口縁端部・体部自然釉	暗赤褐 2.5YR3/3	1mm以下砂
7	瓦質 鍋	-	-	-	-	回転ナデ、外：篋ケズリ	灰白 5Y7/1	1mm以下砂
8	備前焼 すり鉢	-	-	-	-	回転ナデ、7本1組のスリ目、使用痕顕著	(内)灰褐 7.5YR6/2 (外)浅黄橙 7.5YR8/4	1mm以下砂
9	土師器 皿	8.35	5.45	1.1～1.7	□3/4 底1/1	磨減顕著、回転ナデ、底内：仕上げの押圧、底外：篋キリ（ロクロ回転左）+板目痕	灰白 2.5Y8/1～2	1mm以下砂少
10	土師器 皿	7.6	5.5	1.2～1.45	□1/1 底3/4	回転ナデ、底外：篋キリ（ロクロ回転左）+板目痕若干残存	鈍橙（底内）褐灰 7.5YR7/4、10YR6/1	4mm以下砂礫 1mm前後中心
11	土師器 皿	7.1	5.35	1～1.4	完存	磨減、回転ナデ、底外：篋キリ（ロクロ回転左）、底内：押圧、一部内外に被熱痕、外：小さな表面剥離痕（焼成時？）、薄手	白～灰白 9/～2.5Y8/1	1mm以下砂
12	瓦器 椀	14.8	-	-	□1/4	内：篋ミガキ密、外：押圧・篋ミガキ粗	暗灰(胎)灰白 3/、8/	0.5mm以下砂少
番号	器種	長：cm (残存値)	幅：cm (残存値)	厚：cm (残存値)	残存	特徴	色調	胎土
13	瓦質 平瓦	(7.7)	(15.9)	2.0	-	ナデ、凸面：カキヤブリ、キラ粉、被熱	浅黄橙7.5YR8/4	1mm以下砂
番号	器種	残存長：cm	残存幅：cm	残存厚：cm	重量：g	残存	石材	特徴
S22	礎石	28.1	18.1	18.2	1904	完存	花崗岩	4面平滑に加工
番号	器種	長さ：cm	幅：cm	厚さ：cm	重量：g	特徴		
M7	ヤス	9.6	2.6	0.5	12.0	鉄、基部木質一部残存・矩形、先端をねじってあり鋭利		

図105 溝22出土遺物（縮尺1/4・1/6）

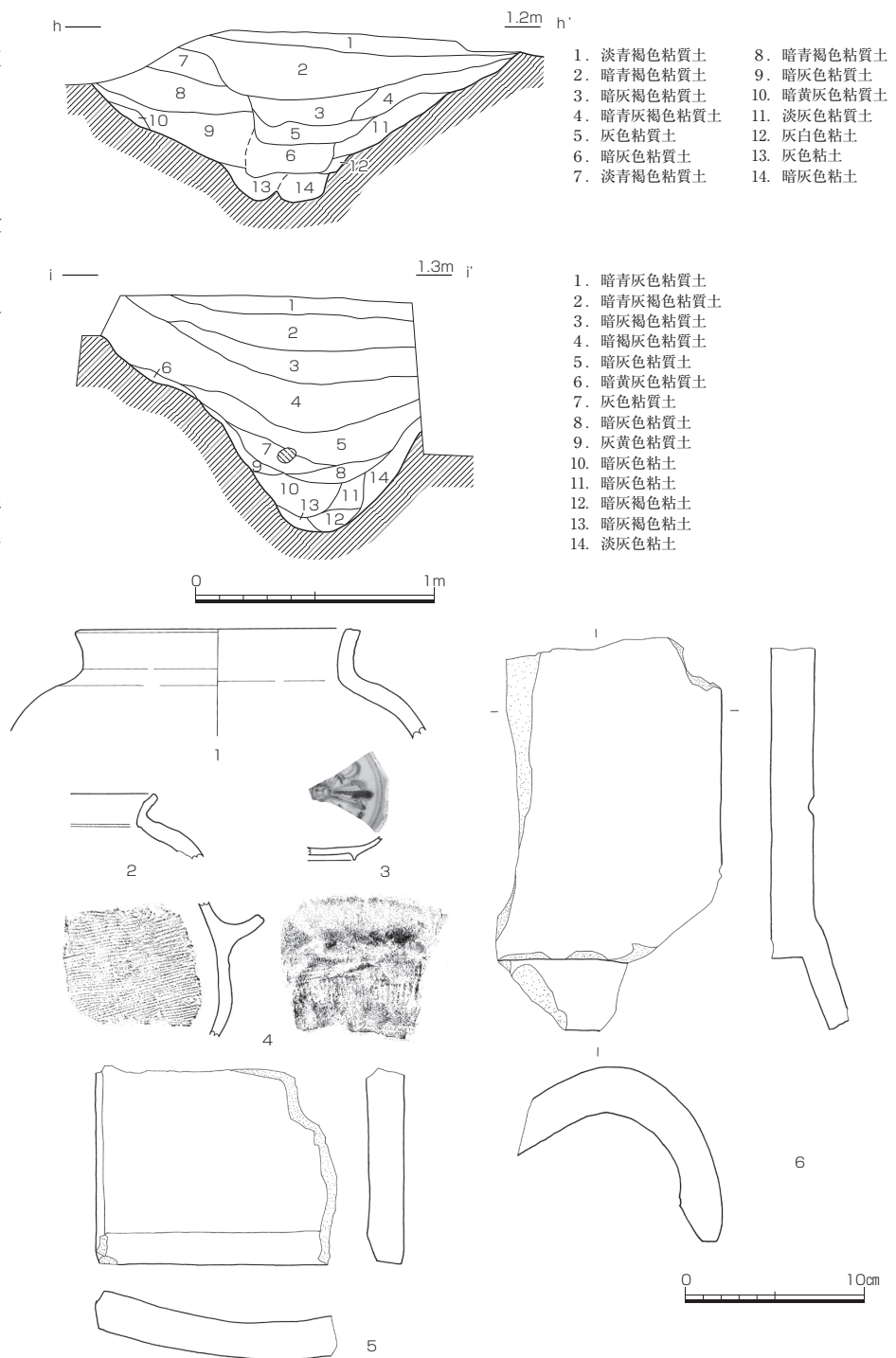
いる。上部でどのような関係にあったのかは明らかでないが、接続はしていないと考えられる。

本溝の時期は、14世紀中葉～19世紀初頭であり、溝21と同じく区画溝として機能していたものである。

溝23 (図106、図版38)

東区東端、13ライン東側を南北方向に走行する。調査区北壁～CBラインまでの13mと、CC～CDライン間の5mを検出した。本遺構の北側は第18次調査地点(未報告)、南は第14次調査地点溝17として検出されているものである。検出面の標高は1.2m、底面の標高はh断面で0.45m、i断面で0.2mを測る。検出面からの深さは0.7～1.0mが残る。断面形は底面が狭小なV字状を呈する。攪乱やコンクリート基礎により分断されるが、幅は最大1.8mが残る。主軸方向はN-20°-Eを示す。埋土は14層に分けた。

遺物はコンテナ(28^{リットル}/箱)1箱が出土した。中世前半の土師器碗・杯・皿類の小片のほか備前焼、瓦、陶磁器類が認められる。備前焼壺(図106-1)・小壺(同-2)は16世



番号	器種	口径: cm	底径 高台径: cm	器高: cm	残存	特徴	色調	胎土
1	備前焼 壺	16.4	-	-	-	回転ナデ、外: 肩部波状文、口縁端部・体部自然釉	暗赤褐 3/3	3mm以下砂
2	備前焼 小壺	-	-	-	-	回転ナデ、口縁部自然釉	黒褐 7.5YR2/2	細かい
3	中国産磁器 皿	-	-	-	-	景德鎮、見込み: 花の意匠	(胎)灰 8/(釉)透明	緻密
4	土師器 鍋	-	-	-	-	回転ナデ、内: 横ハケ、外: 縦ハケ・煤付着	灰 5/	細かい
番号	器種	長: cm (残存値)	幅: cm (残存値)	厚: cm (残存値)	残存	特徴	色調	胎土
5	須恵質 平瓦	(10.4)	(13.7)	2.1	-	ナデ	灰 N5/	1mm以下砂
6	須恵質 丸瓦	(17.1)	(12.0)	2.6	-	凹面: 布目痕、凸面: 縄目・ナデ、厚手、16世紀	灰白~灰 8/、4/	1mm以下砂

図106 溝23断面・出土遺物(縮尺1/30)

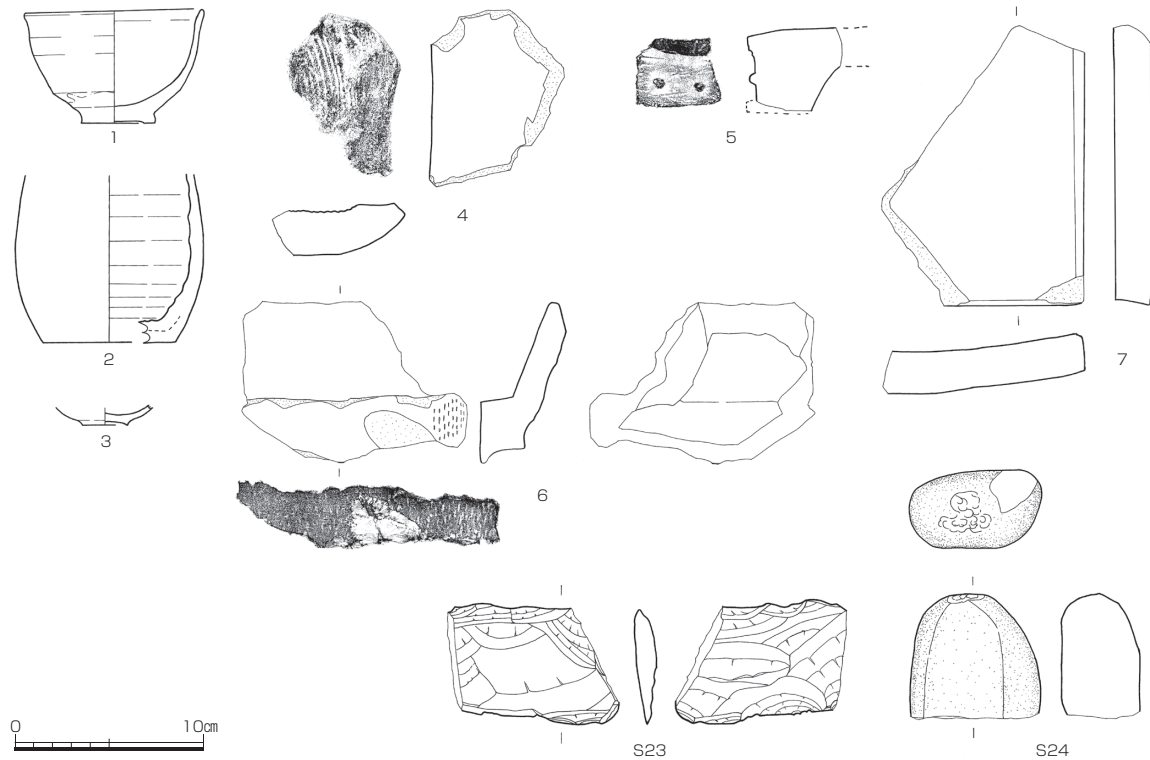
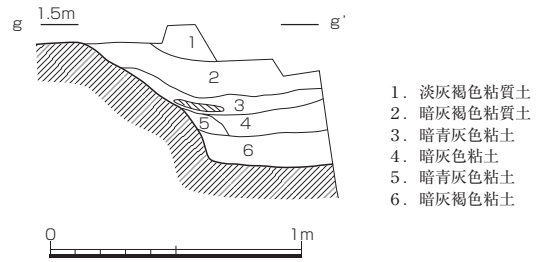
紀初頭に、また軒丸瓦（同-6）は16世紀代に位置付けられる。肥前磁器皿（同-3）は19世紀初頭に比定される。こうした遺物の構成・内容は溝21・22と近似する。

本溝は遺物内容から14世紀中頃に掘削され、その後近世を通じて機能したものと考えられる。時期および方向を同じくすることからも、溝21・22とセットになる区画溝と評価できる。これらの溝で区画された敷地は1辺40mの方形となる。

溝24 (図107、図版38)

北区北端を東西方向に走行する。溝の北側の方は調査区外にあたる。主軸はE-11.5°-Sを示す、鹿田条里に沿うものである。検出面の標高1.4m、底面の標高は0.9mを測る。幅0.9m、検出面からの深さ0.5mが残る。断面形は逆台形を呈し、埋土は6層に分けた。

遺物はコンテナ (28 $\frac{1}{2}$ 箱) 1箱が出土した。備前焼、



番号	器種	口径: cm	底径 高台径: cm	器高: cm	残存	特徴	色調	胎土
1	肥前陶器 碗	9.7	4.1	6.3	□1/2 高台1/1	唐津焼、内:施釉、外:回転窠ケズリ、施釉体 部下半~底部露胎	(胎)灰 6/ (釉)灰黄 2.5Y7/2	1mm以下
2	備前焼 芋德利	-	7.0	-	1/3	回転ナデ、17世紀	(内)明赤褐(外)極暗赤褐 5YR5/6 5YR2/4	2mm以下砂礫
3	肥前磁器 碗	-	2.6	-	1	内外:施釉、外底:露胎	(胎)白 9/ (釉)内:透明・ 外:明青灰5BG7/1	緻密
番号	器種	長: cm (残存値)	幅: cm (残存値)	厚: cm (残存値)	残存	特徴	色調	胎土
4	須恵質 丸瓦	(9.8)	(7.4)	2.5	-	凹面:コビキA、凸面:ナデ	黒 5/	2mm以下砂礫
5	瓦質 軒平瓦	(5.0)	(4.3)	(4.3)	-	連珠文、内:ナデ	灰 4/	1mm以下砂
6	瓦質 丸瓦	(8.9)	(12.4)	3.3	-	凹面:布目痕、凸面:縄目、被熱、中世	橙 6/6	1mm以下砂
7	須恵質 平瓦	(14.8)	(10.7)	2.2	-	凹面:ナデ、凸面:ナデ、18世紀	灰 6/	2mm以下砂礫
番号	器種	残存長: cm	残存幅: cm	残存厚: cm	重量: g	残存	石材	特徴
S23	剥片	6.4	9.0	1.1	96.4	一部	粘板岩	全体的に剥離
S24	石錘	6.8	7.1	4.2	287.5	一部	花崗岩	端部に擦痕

図107 溝24断面・出土遺物 (縮尺1/30・1/4)

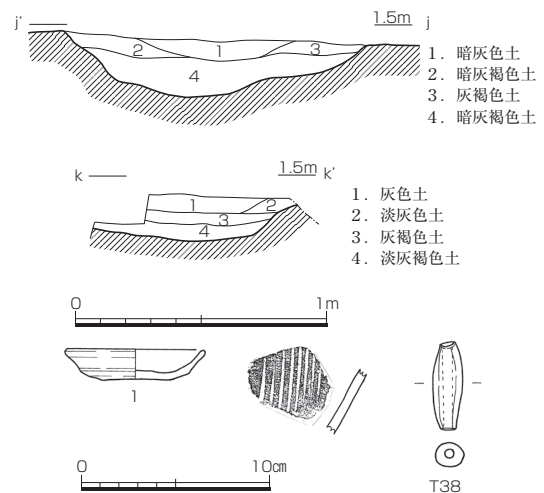
陶磁器、瓦のほか、中世前半の土師器類の小片や弥生土器の小片・石器が含まれる。肥前陶器碗（図107-1）、備前焼芋徳利（同-2）は17世紀初頭、肥前磁器碗（同-3）は17世紀後半～18世紀のものである。瓦には16世紀中頃（同-4）と18世紀代に入るもの（同-7）が見られる。石錘・剥片石器は本遺構の下位に重複する弥生時代の落ちに由来するものであろう。本溝は出土遺物からは16世紀中頃～18世紀のものが認められるが、溝の方向と、溝22から北に約40mという位置から考えて、溝21～23とセットで主要な区画溝として機能したものと考えられる。溝の時期は14世紀中頃～19世紀初頭と比定される。

溝25（図108、図版39）

西区北東部、BY・BZ20区に位置する。北壁20ラインに沿うように南北方向に走行する溝である。検出面の標高1.4m、底面の標高は1.2mを測る。調査区北壁から6mの長さを検出した。幅1.2m、検出面からの深さは0.2mが残る。埋土は4層に分けた。断面形は浅いU字状を呈する。

遺物はポリ袋（12号）2袋が出土した。土師器碗・杯・皿・鍋・竈の小細片多数のほか、白磁小片が見られた。図107-1は土師器皿であり、13世紀後半～14世紀前半のものである。

本遺構は前述の溝21の東側に並行して走行する小規模な溝であり、区画の中を仕切る機能が想定される、本遺構の北・南とも接続するものが確認されていない。本溝南端は溝21が重複していることから中世前半に遡る可能性も残す。



番号	器種	口径：cm	底径 高台径：cm	器高：cm	残存	特徴	色調	胎土
1	土師器 皿	7.4	5.8	1.6	口1/3 底1/2	回転ナデ、底外：篋キリ(ロクロ回転左)+板目痕、磨減	鈍黄橙 10YR7/3	きめ細かい 赤色粒
2	瓦質 すり鉢	-	-	-	-	内：横ハケ後スリ目、外：煤付着多	黒 N2/	0.5～1mm砂

番号	器種	長：cm (残存値)	幅：cm (残存値)	厚：cm (残存値)	重量：g	残存	特徴	色調	胎土
T38	土師器 土錘	4.6	1.5	1.3	7.5	ほぼ完存	ナデ、穿孔直径0.6cm×0.5cm、全面被熱変色	鈍橙 2.5YR6/3～4	0.5mm以下砂

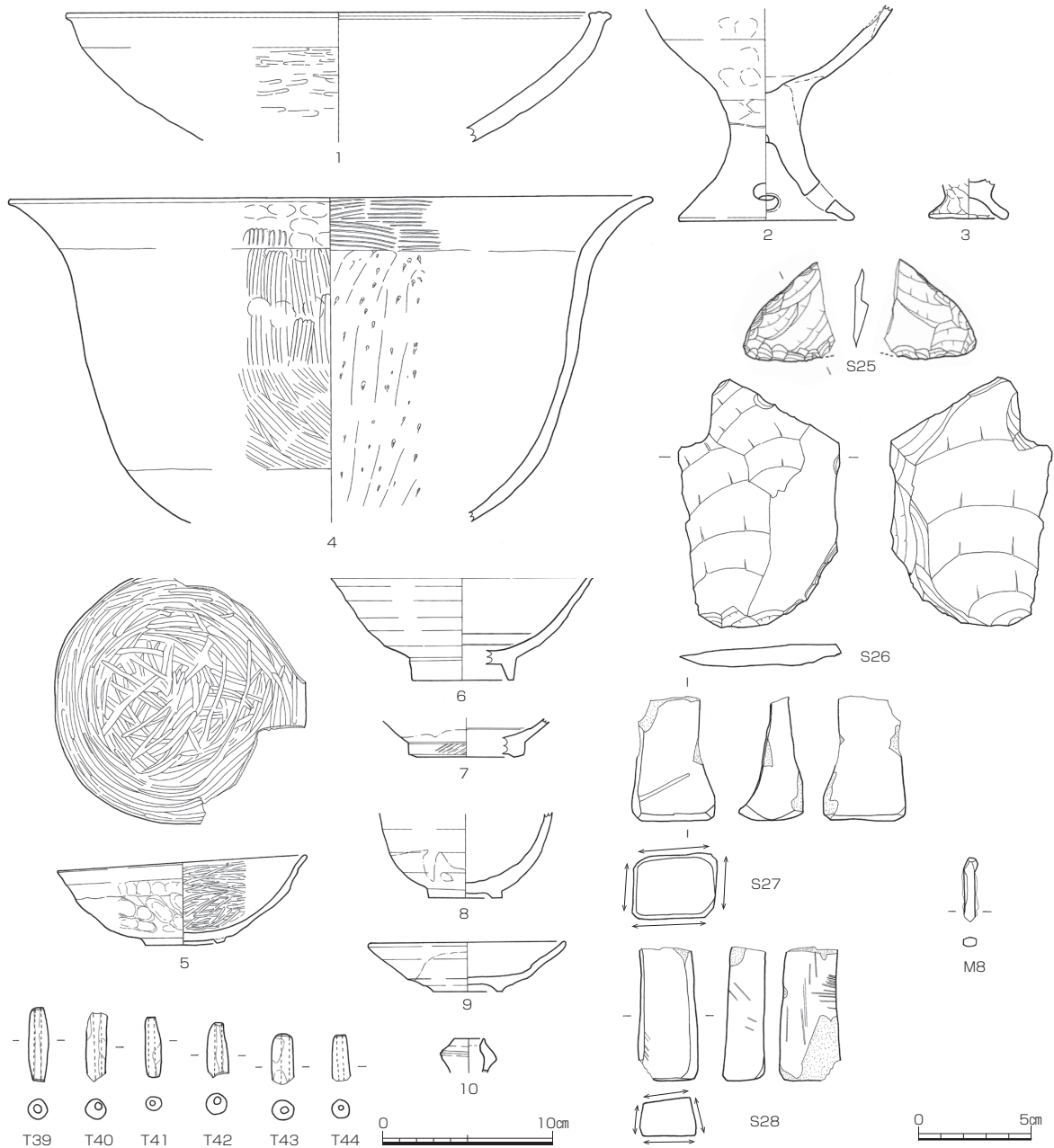
図108 溝25断面・出土遺物（縮尺1/30・1/4）

第5節 包含層ほかの出土遺物

遺構に伴わない遺物あるいは包含層から出土した遺物は全体でコンテナ（28個/箱）16箱を数える。その中で注目される遺物を図109に掲載した。土器・陶磁器類10点、土製品6点、石器4点、金属製品1点である。

図109-1は溝18、同-2の高杯は<8層>中、同-3の製塩土器は<8>～<10層>中の出土である。同-4は西区北東部、<8層>出土の土師器鍋で、その形状から古代に属する可能性がある。同-5は和泉型瓦器碗で完形に近い。北部北西角付近で出土したもので、遺構としては確認できなかったが、柱穴に入れられていた可能性が考えられる。同-6・7はいずれも<5層>中から出土した白磁碗である。6は白磁碗V類の特徴を示す。7は白磁碗IV類の高台である。同-8は肥前陶器碗、同-9は肥前陶器皿で、唐津焼である。同-10は備前焼の算盤玉である。直径1.9cmを測り、特徴的な形状に仕上げられる。土錘は6点を掲載した（同-T39～T44）。T39・42は<4層>、T41は<5層>の出土である。T40・43・44は<1層>および攪乱出土である。

石器・剥片を4点掲載した（同-S25～S28）。S25は打製石包丁の破片である。粘板岩製である。図の上端は刃を付けた後に潰したことが看守され、例えば石戈の再利用が想定される。S26は粘板岩の剥片で、溝18から出



番号	器種	口径: cm	底径 高台径: cm	器高: cm	残存	特徴	色調	胎土
1	弥生土器 高杯	-	32	-	口1/6強	磨滅顕著、外: 篋ミガキ痕残存、口縁端面に3条の凹線痕	鈍黄橙 10YR7/2, 0YR7/4	1mm前後砂
2	土師器 高坏	-	20.2	-	底1/2	坏部: 押圧、脚裾部: 径1.4cmの透かし孔4カ所、全体磨滅	鈍黄橙 10YR7/4	0.5~1mm砂
3	製塩土器	-	4.6	-	底3/4	磨滅、脚台内: ナデ、脚台外: 押圧、全体被熱顕著	鈍赤褐 2.5YR5/3~5/6	1~3mm砂礫多
4	土師器 鍋	38	-	-	1/2弱	口: 内面ハケメ・外面押圧とナデ、体部: 内面篋ケズリ・外面ハケメと押圧、底外: 被熱による表面劣化で調整不明、外面全体に煤付着	明赤褐 2.5YR5/6	1~3mm砂礫多
5	瓦器 椀	15.5	4.6×4.9	4.6~5.6	ほぼ完存	内: 篋ミガキ密、外: 押圧(全体を6分割した状態で2~3本の指オサエの列が残る)、高台部径は一部の潰れて径は4.9cmに拡大、和泉型	灰~暗灰 4~3/	0.5mm以下砂
6	白磁 碗	15.2	6.2	6.5	高台1/3	内: 施釉、外: 回転ヘラケズリ・施釉・底部から高台内露胎	(胎)灰白 2.5Y7/ (釉)灰黄 2.5Y6/2	緻密

図109 包含層出土遺物

図109観察表

番号	器種	口径：cm	底径 高台径：cm	器高：cm	残存	特徴	色調	胎土
7	白磁 碗	-	7.1	-	高台1/4	内：施釉、外：回転ヘラケズリ・施釉・底部から高台内露胎	(胎)灰白 (釉)浅黄 8/ 5Y7/2	緻密
8	肥前陶器 碗	-	4.6	-	高台1/1	唐津焼、内：施釉・トメ痕、外：回転篋ケズリ・施釉・体部下半から高台露胎	(胎)灰 (釉)灰白 7/ 5Y7/2	緻密
9	肥前陶器 皿	11.9	4.3	3	口3/4 底1/1	唐津焼、回転ナデ、内：トメ痕3か所、外：回転篋ケズリ、体部下半から高台露胎	(胎)淡橙 (釉)灰白 5YR8/3	緻密
10	備前焼 算盤玉	1.9	-	-	口1/1	ナデ、一部欠損	暗赤褐 3/3	3mm以下砂

番号	器種	長：cm (残存値)	幅：cm (残存値)	厚：cm (残存値)	重量：g	残存	特徴	色調	胎土
T39	土師器 土錘	4.5	1.1	1.2	7.3	ほぼ完存	ナデ、磨滅、穿孔：直径0.3cm	橙 2.5YR6/8	細かい
T40	土師器 土錘	-	1.2	1.2	6.4	一部欠	ナデ、穿孔：直径0.4cm	橙 2.5YR6/8	細かい
T41	土師器 土錘	3.8	1	0.9	3.9	ほぼ完存	ナデ、オサエ、穿孔：直径0.4×0.3cm	赤黒 2.5YR1.7/1	細かい
T42	土師器 土錘	(3.4)	1.4	1.2	5.1	一部欠	ナデ、穿孔：直径0.5cm	赤橙 2.5YR4/6	細かい
T43	土師器 土錘	(3.1)	1.3	1.2	4.5	一部	ナデ、穿孔：直径0.4cm	橙 7.5T6/8	細かい
T44	土師器 土錘	(1.8)	1	1.1	3.5	一部	ナデ、穿孔：直径0.4cm	橙 2.5YR7/8	細かい

番号	器種	残存長：cm	残存幅：cm	残存厚：cm	重量：g	残存	石材	特徴
S25	石包丁	5.5	5.5	0.8	22.6	一部	粘板岩	尖頭部、両側縁を連続剥離による調整
S26	剥片	14.7	9.4	1.2	244.9	-	粘板岩	連続した剥離
S27	砥石	7.3	4.8	3.8	121.0	一部欠損	流紋岩	砥面4面
S28	砥石	8.2	3.7	2.6	138.9	一部欠損	泥岩ホルンフェルス	砥面4面

番号	器種	長さ：cm	幅：cm	厚さ：cm	重量：g	特徴
M8	鉄釘	4.2	0.7	0.5	4.5	両端欠損

土している。このように比較的大型の剥片の出土は鹿田遺跡では稀であり、同-1の高杯とともに弥生時代後期前半頃に集落に持ち込まれていたことが窺える。同-S27・28は砥石である。S27は流紋岩、S28は泥岩ホルンフェルスを用いる。いずれも4面に顕著に使用痕が認められ、よく使い込んだ様子が見られる。同-M8は鉄釘で、〈6層〉〜〈7層〉の出土である。

第4章 自然科学的分析

1. 鹿田遺跡第20次調査出土木製品類の樹種同定

能城 修一（明治大学黒耀石研究センター）

1. はじめに

鹿田遺跡第20次調査B地点で出土した中世前半から近世の木製品類の樹種を報告する。主な遺構のうち土坑20は桶が据えられた野壺、井戸5～7は縦板組井戸枠を据えた方形の井戸、土坑3は長方形の祭祀土坑である。

2. 方 法

樹種同定用のプレパラート標本は、木製品類および自然木から横断面、接線断面、放射断面の切片を片刃カミソリで切りとり、ガムクロラル（抱水クロラル50g、アラビアゴム粉末40g、グリセリン20ml、蒸留水50mlの混合物）で封入して作製した。プレパラートには、OKUF-1936～2156の番号を付して標本番号とした。プレパラート標本は明治大学黒耀石研究センターに保管されている。

3. 結 果

資料221点には針葉樹6分類群、広葉樹13分類群、タケ亜科1分類群が認められた（表1、図1～3）。以下には、木材組織学的な記載を行い、光学顕微鏡写真を提示して同定の根拠を記す。

1. モミ属 枝・幹材 *Abies* 図1：1a-1c（マツ科、OKUF-2095）

垂直・水平樹脂道をともに欠く針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかやや急で、晩材の量は多い。放射組織は柔細胞のみからなり、柔細胞には単壁孔が著しく、垂直壁は結節状。分野壁孔はごく小型のヒノキ型～スギ型で1分野に2～3個。

2. ツガ属 枝・幹材 *Tsuga* 図1：2c（マツ科、OKUF-2107）

垂直・水平樹脂道をともに欠く針葉樹材。早材から晩材への移行はやや急で、晩材の量は多い。放射組織は柔細胞と仮道管からなり、柔細胞には単壁孔が著しく垂直壁は結節状。分野壁孔はごく小型のヒノキ型～スギ型で1分野に2～4個。

3. アカマツ 枝・幹材 *Pinus densiflora* Siebold et Zucc. 図1：3a-3c（マツ科、OKUF-1937）

垂直・水平樹脂道をともに持つ針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材の量は多い。放射組織は柔細胞と仮道管からなり、放射仮道管の水平壁には重鋸歯がある。分野壁孔はごく大型の窓状で1分野に1個。

4. コウヤマキ 枝・幹材 *Sciadopitys verticillata* (Thunb.) Siebold et Zucc. 図1：4c（コウヤマキ科、OKUF-2057）

垂直・水平樹脂道をともに欠く針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材の量は多い。放射組織は柔細胞のみからなり、細胞壁は平滑。分野壁孔は中型の窓状で1分野に1～2個。

5. スギ 枝・幹材 *Cryptomeria japonica* (L.f.) D. Don 図1：5a-5c（ヒノキ科、OKUF-1941）

垂直・水平樹脂道をともに欠く針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材の量は多い。早材の終わりから晩材には木部柔細胞が散在する。放射組織は柔細胞のみからなり、細胞壁は平滑。分野壁孔は大型のスギ型で1分野に1～2個。

6. ヒノキ 枝・幹材 *Chamaecyparis obtusa* (Siebold et Zucc.) Endl. 図1：6c（ヒノキ科、OKUF-2002）

垂直・水平樹脂道をともに欠く針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材の量は少ない。早材の終わ

りから晩材には木部柔細胞が散在する。放射組織は柔細胞のみからなり、細胞壁は平滑。分野壁孔は中型のトウヒ型で1分野に1~2個。

7. シキミ 枝・幹材 *Illicium anisatum* L. 図1: 7a-7c (マツブサ科、OKUF-2101)

小型で角張った孤立道管が散在する散孔材。年輪のはじめには1列に道管が並ぶ傾向をもつ。道管の穿孔は40段ほどの階段状。放射組織は上下端の3列が背の高い直立細胞で構成される異性で2細胞幅位。

8. モクレン属 枝・幹材 *Magnolia* 図1、2: 8a-8c (モクレン科、OKUF-2137)

小型でやや角張った道管が単独あるいは2~3個放射方向に複合してやや疎らに散在する散孔材。道管の穿孔は単一で、内壁にはらせん肥厚をもち、道管相互壁孔は階段状。放射組織は2~3細胞幅。

9. タケ亜科 枝・幹材 Subfam. *Bambusoideae* 図2: 9a (イネ科、OKUF-1963)

原生木部と節部に直行するように1対の大径の後生木部道管が配列し、それらを厚膜の繊維細胞が取り囲んで維管束を形成し、そうした維管束が散在する不整中心柱をもつ。

10. ニレ属 枝・幹材 *Ulmus* 図2: 10a-10c (ニレ科、OKUF-2148)

やや大型で丸い道管が年輪のはじめに3列ほど配列し、晩材では徐々に小型化した道管が単独あるいは2~3個複合して斜めに連なる傾向をみせて散在する環孔材。道管の穿孔は単一で、小道管の内壁にはらせん肥厚がある。放射組織は同性で7細胞幅位。

11. エノキ属 枝・幹材 *Celtis* 図2: 11a-11c (アサ科、OKUF-2143)

大型で丸い道管が年輪のはじめに数列配列し、晩材では徐々に小型化した道管が単独あるいは2~3個複合して斜め~接線方向に連なって散在する環孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は上下端の1~3列ほどが直立する異性で16細胞幅位、不完全な鞘細胞をもつ。

12. クリ 枝・幹材 *Castanea crenata* Siebold et Zucc. 図2: 12a-12c (ブナ科、OKUF-2131)

ごく大型で丸い孤立道管が年輪のはじめに数列配列し、晩材では徐々に小型化した丸い孤立道管が火炎状に配列する環孔材。道管の穿孔は単一。木部柔組織は晩材でいびつな接線状。放射組織は単列同性。

13. スタジイ 枝・幹材 *Castanopsis sieboldii* (Makino) Hatus. ex T. Yamaz. et Mashiba 図2: 13a-13c (ブナ科、OKUF-2145)

やや大型で丸い孤立道管が年輪のはじめに数~10数個放射方向に伸びる塊をないして断続的に配列し、晩材では徐々に小型化した丸い孤立道管が火炎状に配列する環孔材。道管の穿孔は単一。木部柔組織はいびつな接線状。放射組織は単列同性。

14. ツブラジイ 枝・幹材 *Castanopsis cuspidata* (Thunb.) Schottky 図2: 14a (ブナ科、OKUF-1990)

スタジイに似た環孔材。放射組織は単列で小型のものと複合状で大型のものとなる。

15. コナラ属アカガシ亜属 枝・幹材 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* 図3: 15a-15c (ブナ科、OKUF-2150)

やや大型~中型で丸い孤立道管が放射方向に連なって配列する放射孔材。道管の穿孔は単一。木部柔組織はいびつな接線状。放射組織は同性で、単列で小型のものと複合状で大型のものとなる。

16. コナラ属クスギ節 枝・幹材 *Quercus* sect. *Aegilops* 図3: 16a (ブナ科、OKUF-1989)

大型で丸い孤立道管が年輪のはじめに2列ほど配列し、晩材ではやや急に小型化した丸い厚壁の孤立道管が火炎状~放射状に配列する環孔材。道管の穿孔は単一。木部柔組織は晩材でいびつな接線状。放射組織は同性で、単列で小型のものと複合状で大型のものとなる。

17. カエデ属 枝・幹材 *Acer* 図3: 17a-17c (ムクロジ科、OKUF-2100)

中型で丸い道管が単独あるいは2~3個放射方向に複合して疎らに散在する散孔材。道管の穿孔は単一で、内壁にはらせん肥厚がある。木繊維は横断面で雲紋状を呈する。年輪界付近の柔細胞に鎖状に菱形結晶をもつ。放

射組織は同性で10細胞幅位。

18. サカキ 枝・幹材 *Cleyera japonica* Thunb. 図3：18a-18c (モッコク科、OKUF-2141)

小型で角張った孤立道管が均一に散在する散孔材。道管の穿孔は30~40段ほどの階段状。木部柔組織は短接線状。放射組織は上下端の1~数列が直立する異性で単列。

19. ヒサカキ 枝・幹材 *Eurya japonica* Thunb. 図3：19a-19c (モッコク科、OKUF-2109)

小型で角張った孤立道管が均一に散在する散孔材。道管の穿孔は50段ほどの階段状。木部柔組織は短接線状。放射組織は上下端の数列が直立する異性で3細胞幅位。

20. エゴノキ属 枝・幹材 *Styrax* 図3：20a-20c (エゴノキ科、OKUF-1972)

小型~ごく小型で丸い道管が単独あるいは2~3個放射方向に複合して年輪内で徐々に小型化しながら散在する散孔材。道管の穿孔は10段ほどの階段状。木部柔組織は晩材で接線状。放射組織は上下端の1~数列が直立する異性で4細胞幅位。

4. 考 察

鹿田遺跡第20次調査B地点では、中世から近世までスギを中心とした樹種選択が行われていた(表1)。とくに12世紀初め~12世紀前半の縦板組井戸枠をすえた方形の井戸である井戸6・7および18世紀後半以降の桶を据えた野壺である土坑20では全体の70~80%をスギが占めていた。また11世紀後葉~12世紀前葉の方形井戸である井戸5ではスギの比率がやや低く50%であった。11世紀後葉~12世紀前半の方形井戸でスギについて使われていたのは、井戸5と井戸6ではモミ属であり、井戸7ではコウヤマキとヒノキであった。こうしたスギの多用は鹿田遺跡第26次調査で報告した樹種選択に近いが、第26次調査では井戸枠のほか杭や部材、その他木製品も多く、スギは60%であった(能城2019)。第20次調査の結果は、中世前半の鹿田遺跡では井戸枠材には基本的にスギを選択するという傾向を明瞭に示している。コウヤマキとヒノキ、モミ属の選択については、今後、井戸枠内での位置付けなども加味して検討する。

引用文献

能城修一 2019「鹿田遺跡第17・26次調査出土木製品類と自然木の樹種」『鹿田遺跡13-第26次調査-』、65-73. 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター。

表1 鹿田遺跡第20次調査で出土した木製品類の樹種

樹種名	遺構	中世前半				中世後半				中世後半~近世		近世	総計			
		11c後葉~12c前半		13c中葉~後葉		13c末~14c初		15c後半~16c初		15c後半		19c前半				
		井戸4	井戸5	井戸6	井戸7	土坑3	井戸12	溝18	P212	P221	井戸16	井戸18	溝21	溝22	土坑20	
モミ属		9	9							1					1	20
ツガ属				1		1										2
アカマツ											3					4
コウヤマキ					11											11
スギ		13	32	78	2	1					1	1			18	146
ヒノキ					5			3								8
シキミ				1												1
モクレン属													2			2
タケ亜科															1	1
ニレ属								2								2
エノキ属								3								3
クリ									1				3			4
スタジイ			2					1								3
ツブラジイ			1													1
コナラ属アカガシ亜属						2										2
コナラ属クヌギ節		1	1			1										3
カエデ属				1												1
サカキ								1								1
ヒサカキ				1												1
エゴノキ属			1													1
同定不能								1								3
総計		1	27	45	94	6	1	11	1	1	3	1	6	1	23	221

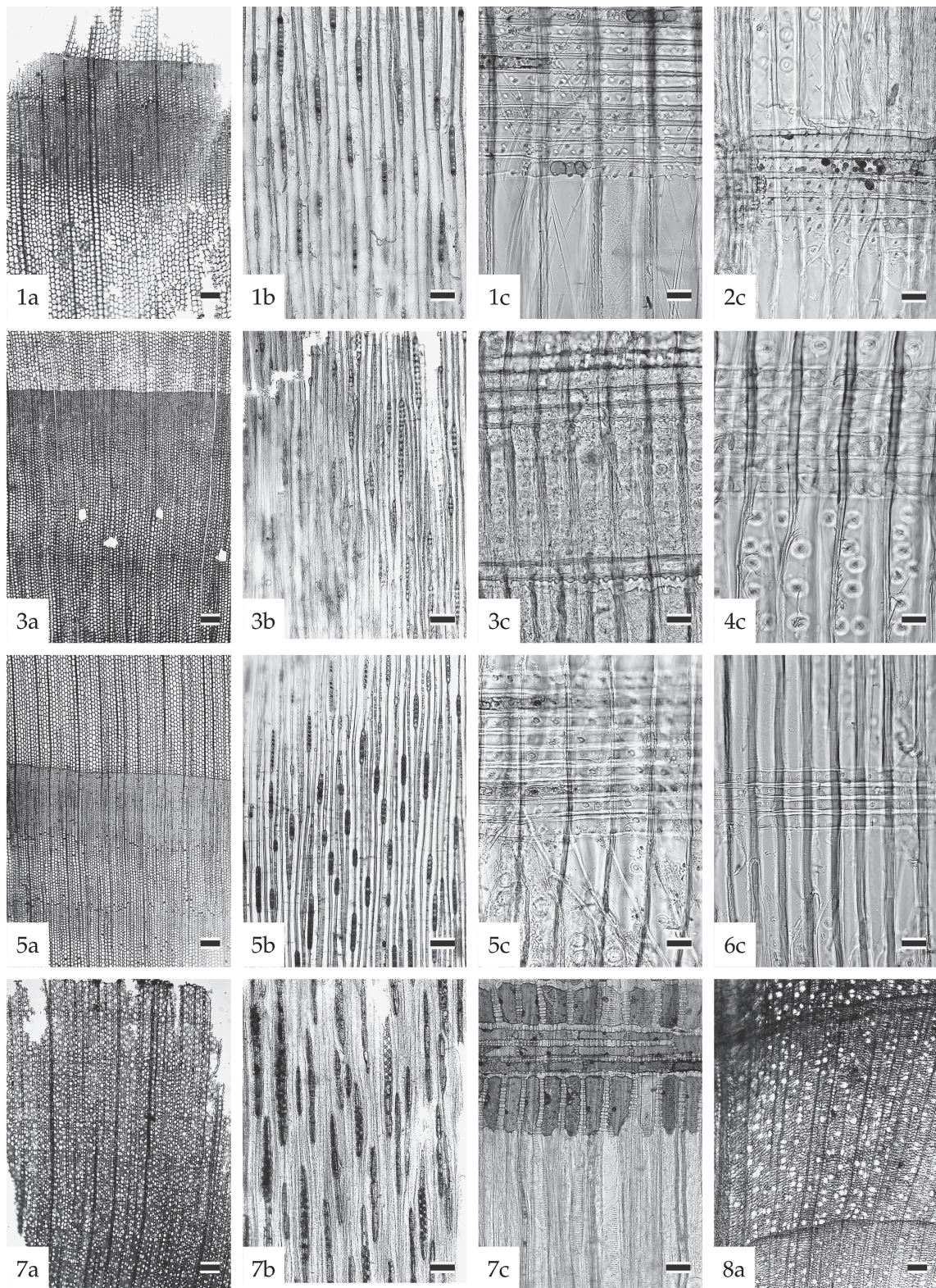


図1 鹿田遺跡第20次調査出土木製品類の顕微鏡写真(1)

1a-1c: モミ属 (マツ科, OKUF-2095)、2c: ツガ属 (マツ科, OKUF-2107)、3a-3c: アカマツ (マツ科, OKUF-1937)、4c: コウヤマキ (コウヤマキ科, OKUF-2057)、5a-5c: スギ (ヒノキ科, OKUF-1941)、6c: ヒノキ (ヒノキ科, OKUF-2002)、7a-7c: シキミ (マツサ科, OKUF-2101)、8a: モクレン属 (モクレン科, OKUF-2137). a: 横断面 (スケール=200 μ m)、b: 接線断面 (スケール=100 μ m)、c: 放射断面 (スケール=25 (1c, 2c 3c, 4c 5c, 6c)、50 (7c) μ m).

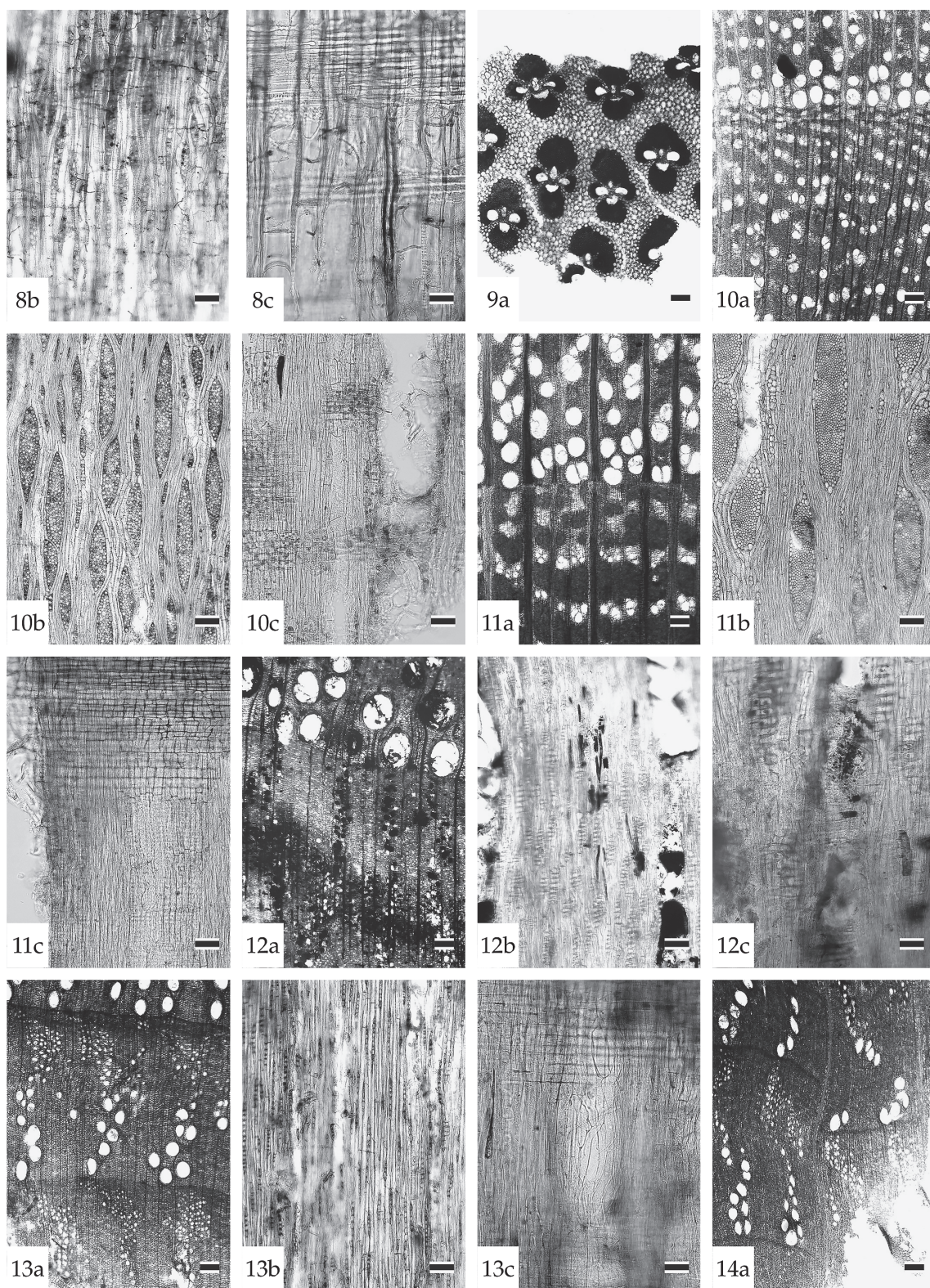


図2 鹿田遺跡第20次調査出土木製品類の顕微鏡写真(2)

8b-8c：モクレン属（モクレン科、OKUF-2137）、9a：タケ亜科（イネ科、OKUF-1963）、10a-10c：ニレ属（ニレ科、OKUF-2148）、11a-11c：エノキ属（アサ科、OKUF-2143）、12a-12c：クリ（ブナ科、OKUF-2131）、13a-13c：スタジイ（ブナ科、OKUF-2145）、14a：ツブラジイ（ブナ科、OKUF-1990）。a：横断面（スケール=200 μ m）、b：接線断面（スケール=100 μ m）、c：放射断面（スケール=50 μ m）。

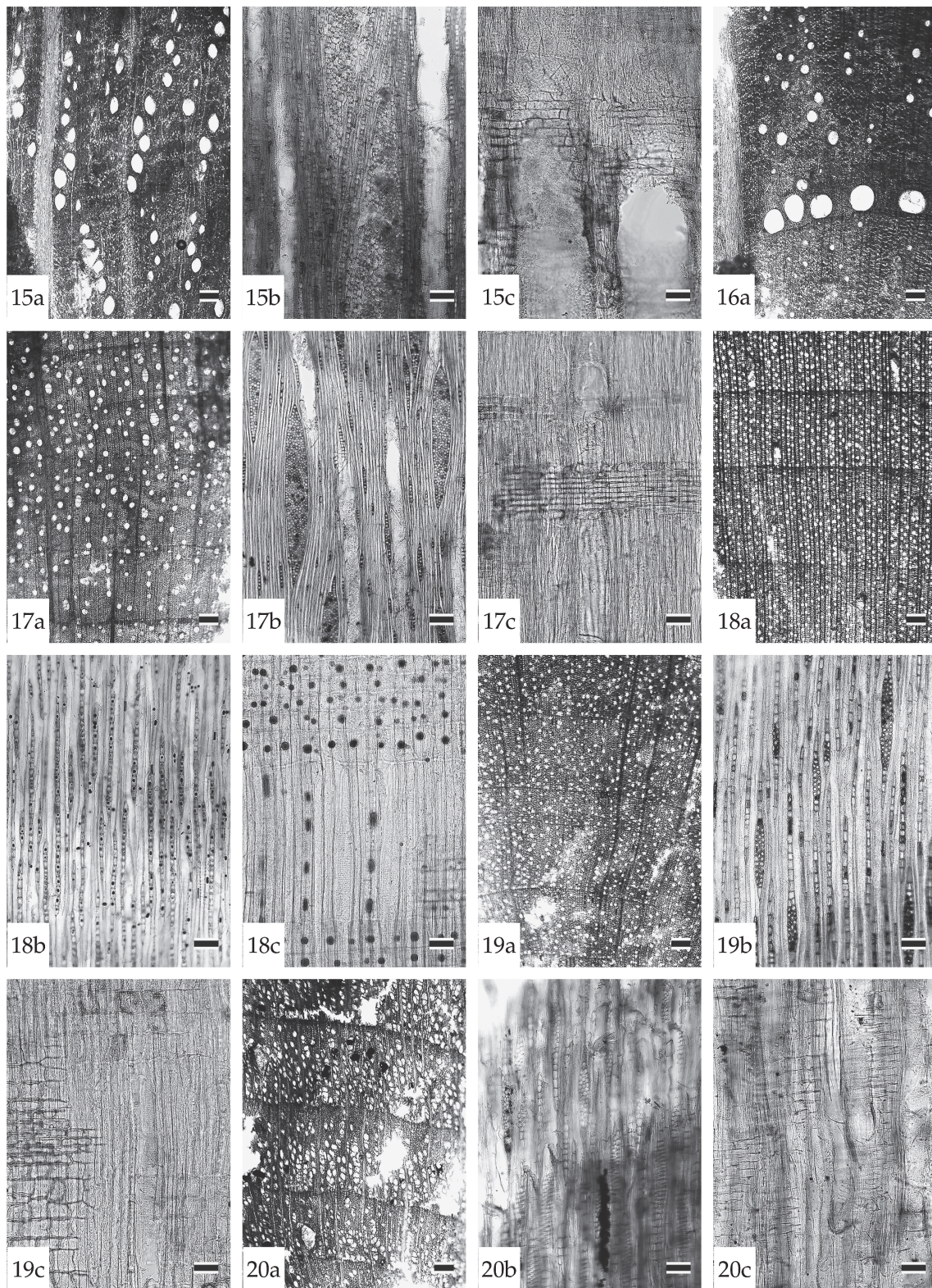


図3 鹿田遺跡第20次調査出土木製品類の顕微鏡写真(3)

15a-15c: コナラ属アカガシ亜属 (ブナ科, OKUF-2150)、16a: コナラ属クスギ節 (ブナ科, OKUF-1989)、17a-17c: カエデ属 (ムクロジ科, OKUF-2100)、18a-18c: サカキ (モッコク科, OKUF-2141)、19a-19c: ヒサカキ (モッコク科, OKUF-2109)、20a-20c: エゴノキ属 (エゴノキ科, OKUF-1972). a: 横断面 (スケール=200 μ m), b: 接線断面 (スケール=100 μ m), c: 放射断面 (スケール=50 μ m).

表2 鹿田遺跡第20次調査出土木製品類一覧

標本	No	樹種名	SR	製品名	遺構	掲載番号	時期
OKUF-	1936	コナラ属クスギ節	S	角材	井戸4	W1	11世紀後葉～12世紀前葉
OKUF-	1937	アカマツ	S	丸木状	井戸16	W56	16世紀前半
OKUF-	1938	アカマツ	S	丸木状			
OKUF-	1939	アカマツ	S	丸木状			
OKUF-	1940	スギ	S	薄板材	井戸18	W59	15世紀後半
OKUF-	1941	スギ	S	桶側板	土坑20		19世紀前半
OKUF-	1942	スギ	S	桶側板			
OKUF-	1943	スギ	S	桶側板			
OKUF-	1944	アカマツ	S	底板1			
OKUF-	1945	スギ	S	桶側板			
OKUF-	1946	スギ	S	桶側板			
OKUF-	1947	スギ	S	桶側板			
OKUF-	1948	×		桶側板			
OKUF-	1949	スギ	S	桶側板			
OKUF-	1950	スギ	S	桶側板			
OKUF-	1951	スギ	S	桶側板			
OKUF-	1952	スギ	S	桶側板			
OKUF-	1953	スギ	S	桶側板			
OKUF-	1954	スギ	S	桶側板			
OKUF-	1955	スギ	S	桶側板			
OKUF-	1956	スギ	S	桶側板			
OKUF-	1957	スギ	S	桶側板			
OKUF-	1958	スギ	S	桶側板			
OKUF-	1959	×		桶側板			
OKUF-	1960	スギ	S	桶側板		井戸5	
OKUF-	1961	×		桶側板			
OKUF-	1962	スギ	S	桶側板			
OKUF-	1963	タケ亜科	稈	枠タガ			
OKUF-	1964	モミ属	S	板材			
OKUF-	1965	スギ	S	板材	W8		
OKUF-	1966	モミ属	S	板材	W9		
OKUF-	1967	スギ	S	板材			
OKUF-	1968	スギ	S	板材			
OKUF-	1969	モミ属	S	板材			
OKUF-	1970	モミ属	S	板材			
OKUF-	1971	モミ属	S	板材	W10		
OKUF-	1972	エゴノキ属	S	板材			
OKUF-	1973	スギ	S	箸?			
OKUF-	1974	モミ属	S	板材			
OKUF-	1975	モミ属	S	板材			
OKUF-	1976	モミ属	S	板材			
OKUF-	1977	スギ	S	板材			
OKUF-	1978	スダジイ	S	丸木状			
OKUF-	1979	モミ属	S	杭			
OKUF-	1980	スギ	S	井戸枠側板			
OKUF-	1981	スギ	S	井戸枠側板			
OKUF-	1982	スギ	S	井戸枠側板			
OKUF-	1983	スギ	S	井戸枠側板			
OKUF-	1984	スギ	S	井戸枠側板			
OKUF-	1985	スギ	S	井戸枠側板(南)	W11		
OKUF-	1986	スダジイ	S	丸木			
OKUF-	1987	スギ	S	井戸枠側板			
OKUF-	1988	スギ	S	井戸枠側板			
OKUF-	1989	コナラ属クスギ節	S	角材			
OKUF-	1990	ツブラジイ	S	丸木			
OKUF-	1991	スギ	S	板材	井戸7	W41	12世紀前半
OKUF-	1992	スギ	S	板材			
OKUF-	1993	ヒノキ	S	薄板材			
OKUF-	1994	スギ	S	井戸枠側板		O-80	
OKUF-	1995	スギ	S	井戸枠側板			
OKUF-	1996	ヒノキ	S	井戸枠側板			
OKUF-	1997	スギ	S	N支木1			
OKUF-	1998	スギ	S	N支木			
OKUF-	1999	スギ	S	井戸枠側板			
OKUF-	2000	コウヤマキ	S	井戸枠側板		O-77	
OKUF-	2001	ヒノキ	S	井戸枠側板			
OKUF-	2002	ヒノキ	S	棧木			
OKUF-	2003	ヒノキ	S	井戸枠側板			
OKUF-	2004	スギ	S	井戸枠側板		O-79	
OKUF-	2005	コウヤマキ	S	井戸枠側板		O-7	
OKUF-	2006	スギ	S	井戸枠側板		O-70	
OKUF-	2007	スギ	S	井戸枠側板		O-78	
OKUF-	2008	コウヤマキ	S	井戸枠側板		O-8	

自然科学的分析

標本	No	樹種名	SR	製品名	遺構	掲載番号	時期
OKUF-	2009	スギ	S	井戸枠側板	井戸 7		12世紀前半
OKUF-	2010	スギ	S	井戸枠側板		O-9	
OKUF-	2011	スギ	S	井戸枠側板		O-75	
OKUF-	2012	スギ	S	井戸枠側板		O-23	
OKUF-	2013	スギ	S	井戸枠側板		O-53	
OKUF-	2014	スギ	S	井戸枠側板		O-62	
OKUF-	2015	コウヤマキ	S	井戸枠側板		O-3	
OKUF-	2016	コウヤマキ	S	井戸枠側板		O-35	
OKUF-	2017	スギ	S	井戸枠側板		O-58	
OKUF-	2018	コウヤマキ	S	井戸枠側板		O-30	
OKUF-	2019	スギ	S	井戸枠側板		O-5	
OKUF-	2020	スギ	S	井戸枠側板		O-74	
OKUF-	2021	コウヤマキ	S	井戸枠側板		O-19	
OKUF-	2022	スギ	S	井戸枠側板		O-12	
OKUF-	2023	コウヤマキ	S	井戸枠側板		O-34	
OKUF-	2024	スギ	S	井戸枠側板		O-54	
OKUF-	2025	スギ	S	井戸枠側板		O-60	
OKUF-	2026	スギ	S	井戸枠側板		O-56	
OKUF-	2027	スギ	S	井戸枠側板		O-61	
OKUF-	2028	スギ	S	井戸枠側板		O-63	
OKUF-	2029	スギ	S	井戸枠側板		O-37	
OKUF-	2030	スギ	S	井戸枠側板		O-10	
OKUF-	2031	スギ	S	井戸枠側板		O-14	
OKUF-	2032	スギ	S	井戸枠側板		O-17	
OKUF-	2033	スギ	S	井戸枠側板		O-50	
OKUF-	2034	スギ	S	井戸枠側板		O-43	
OKUF-	2035	スギ	S	井戸枠側板		O-47	
OKUF-	2036	スギ	S	井戸枠側板		O-46	
OKUF-	2037	スギ	S	井戸枠側板		O-40	
OKUF-	2038	スギ	S	井戸枠側板		O-26	
OKUF-	2039	スギ	S	井戸枠側板		O-25	
OKUF-	2040	スギ	S	井戸枠側板		O-2	
OKUF-	2041	スギ	S	井戸枠側板 (南6)		O-67	
OKUF-	2042	スギ	S	井戸枠側板 (南1)		O-68	
OKUF-	2043	スギ	S	井戸枠側板		O-4	
OKUF-	2044	スギ	S	井戸枠側板		O-6	
OKUF-	2045	スギ	S	井戸枠側板			
OKUF-	2046	スギ	S	井戸枠側板		O-71	
OKUF-	2047	スギ	S	井戸枠側板 (南4)		O-73	
OKUF-	2048	スギ	S	井戸枠側板 (南5)		O-72	
OKUF-	2049	スギ	S	井戸枠側板 (南2)		O-69	
OKUF-	2050	スギ	S	井戸枠側板		O-51	
OKUF-	2051	スギ	S	井戸枠側板		O-52	
OKUF-	2052	スギ	S	井戸枠側板		O-76	
OKUF-	2053	スギ	S	井戸枠側板			
OKUF-	2054	スギ	S	井戸枠側板		O-15	
OKUF-	2055	スギ	S	井戸枠側板		O-41	
OKUF-	2056	コウヤマキ	S	井戸枠側板		O-28	
OKUF-	2057	コウヤマキ	S	井戸枠側板	O-18		
OKUF-	2058	スギ	S	井戸枠側板	O-55		
OKUF-	2059	スギ	S	井戸枠側板	O-36		
OKUF-	2060	スギ	S	井戸枠側板	O-1		
OKUF-	2061	スギ	S	井戸枠側板	O-27		
OKUF-	2062	スギ	S	井戸枠側板	O-32		
OKUF-	2063	スギ	S	井戸枠側板	O-24		
OKUF-	2064	スギ	S	井戸枠側板	O-13		
OKUF-	2065	スギ	S	井戸枠側板	O-44		
OKUF-	2066	スギ	S	井戸枠側板	O-22		
OKUF-	2067	スギ	S	井戸枠側板	O-39		
OKUF-	2068	スギ	S	井戸枠側板	O-42		
OKUF-	2069	コウヤマキ	S	井戸枠側板	O-11		
OKUF-	2070	スギ	S	井戸枠側板	O-48		
OKUF-	2071	スギ	S	井戸枠側板	O-65		
OKUF-	2072	スギ	S	井戸枠側板	O-16		
OKUF-	2073	スギ	S	井戸枠側板	O-31		
OKUF-	2074	スギ	S	井戸枠側板	O-20		
OKUF-	2075	スギ	S	井戸枠側板	O-49		
OKUF-	2076	スギ	S	井戸枠側板	O-21		
OKUF-	2077	スギ	S	井戸枠側板	O-38		
OKUF-	2078	スギ	S	井戸枠側板	O-64		
OKUF-	2079	スギ	S	井戸枠側板	O-59		
OKUF-	2080	スギ	S	井戸枠側板 (角)	O-66		
OKUF-	2081	スギ	S	井戸枠側板	O-57		
OKUF-	2082	スギ	S	井戸枠側板	O-45		
OKUF-	2083	スギ	S	井戸枠側板	O-33		

2. 鹿田遺跡第20次調査出土種子同定

岩崎志保・沖陽子（岡山県立大学）

はじめに

本節では、鹿田遺跡第20次調査B地点出土種子の同定結果について報告する。

1. 方法

同地点の井戸6基、土坑1基について土壌を持ち帰り、フローテーション法（0.5mmメッシュ）を行い種子の抽出を行った。種子の抽出・洗浄後に選別を行い、写真撮影と同定作業を実施した。

2. 対象遺構

対象とした遺構は表1に示した7基である。内訳は中世前半の井戸4基と、近世の井戸2基・土坑1基である。前者のうち、井戸4においては細分した層毎に取り上げを実施しており、同定点数が多かった。井戸の埋土中の個体は炭化の著しいものが含まれ、これら443個体中385個体について同定することができた。昆虫や冬芽等を除いた376個体の植物種子について、結果を表2に示した。

表1 種子出土遺構と同定個体数

種子出土遺構	時期	同定数
井戸4	11世紀後葉～12世紀前葉	46
井戸5	11世紀後葉～12世紀前葉	215
井戸7	12世紀前半	38
井戸10	13世紀初め～前葉	54
井戸23	18世紀前半	36
井戸25	19世紀前半	23
土坑12	18世紀後半	31

3. 同定結果

46科113属159種の植物種子を同定した。種の点数では、井戸4：27種、井戸5：103種、井戸7：25種、井戸10：36種、井戸23：32種、井戸25：19種、土坑12：22種である。特に中世前半の井戸から多くの植物種子を道程した。これらの多くは井戸廃絶時の祭祀痕跡と考えられる炭層に含まれていたものである。こうした祭祀の状況は、近世の井戸では見られない。

4. 若干の考察

同定した種子のうち、利用法が想定されるものを表2に挙げた⁽¹⁾。食利用と考えられる種子は9科16属17種を確認している。いずれも実食用であろう。栽培種としては、イネ・コムギ・雑草メロン・ヒョウタン・ササゲがみられる。このほか

水田・田畑雑草とされるものは、ムツオレグサ(イネ科)・カンガレイ・ホタルイ(カヤツリグサ科)・タカサブロウ(キク科)が認められる。近世遺構からはそもそも絶対種数が少ないが、中世前半と近世とで種の構成が大きく変わる点は看守されない。

表2 用途別種子一覧

番号	種子			遺構							利用法ほか
	科	属	種	井戸4	井戸5	井戸7	井戸10	井戸23	井戸25	土坑12	
1	アカザ	アカザ	アカザ				○		○		実食用
20	イネ	イネ	イネ	○	○		○			○	
25	イネ	コムギ	コムギ	○	○						
40	ウリ	ウリ	雑草メロン	○	○	○					
41	ウリ	ヒョウタン	ヒョウタン		○					○	
88	クワ	コウゾ	カジノキ		○						
90	クワ	クワ	ヤマグワ		○						
105	スイカズラ	ニワトコ	ニワトコ							○	
142	ニレ	エノキ	エノキ		○						
146	バラ	キイチゴ	クロイチゴ		○						
148	バラ	キイチゴ	フユイチゴ					○			
155	ブドウ	ブドウ	エビヅル		○						
157	ブドウ	ノブドウ	ノブドウ		○		○				
158	マメ	ササゲ	ササゲ				○				
160	マメ	ダイズ	ツルマメ	○							
35	イネ	ドジョウツナギ	ムツオレグサ		○						
57	カヤツリグサ	ホタルイ	カンガレイ		○						
66	カヤツリグサ	ホタルイ	ホタルイ	○	○		○			○	
76	キク	タカサブロウ	タカサブロウ		○	○			○		

番号	種子			遺構						
	科	属	種	井戸4	井戸5	井戸7	井戸10	井戸23	井戸25	土坑12
123	ツユクサ	ツユクサ	マルバツユクサ					○		
124	トウダイグサ	アカメガシワ	アカメガシワ	○						
125	トウダイグサ	エノキグサ	エノキグサ		○				○	
126	ドクダミ	ドクダミ	ドクダミ				○			
127	トチカガミ	イバラモ	ホッスモ			○	○	○	○	
128	トチカガミ	スプタ	マルミスプタ						○	
129	トチカガミ	ミズオオバコ	ミズオオバコ				○			
130	ナス	イガホオズキ	イガホオズキ		○	○				○
131	ナス	ナス	イヌホオズキ			○				
132	ナス	ホオズキ	センナリホオズキ		○			○		
133	ナス	ハダカホオズキ	ハダカホオズキ				○			○
134	ナス	ホオズキ	ホオズキ		○		○	○	○	○
135	ナデシコ	ハコベ	コハコベ					○		
136	ナデシコ	ツメクサ	ツメクサ		○	○				
137	ナデシコ	ハコベ	ノミノフスマ		○	○	○		○	○
138	ナデシコ	ハコベ	ミドリハコベ		○			○	○	○
139	ナデシコ	ミミナグサ	ミミナグサ		○			○		
140	ナデシコ	ハコベ	ミヤマハコベ		○					
141	ナデシコ	ワチガイソウ	ワチガイソウ	○	○		○			
142	ニレ	エノキ	エノキ		○					
143	ハイノキ	ハイノキ	クロキ		○					
144	ハイノキ	ハイノキ	ハイノキ	○						
145	バラ	キイチゴ	キイチゴ属		○					
146	バラ	キイチゴ	クロイチゴ		○					
147	バラ	サクラ	バクチノキ		○					
148	バラ	キイチゴ	フユイチゴ					○		
149	ヒノキ	ヒノキ	ヒノキ		○					
150	ヒユ	ヒユ	アオビユ				○			
151	ヒユ	ヒユ	イヌビユ	○	○	○				
152	ヒユ	イノコツチ	イノコツチ				○			
153	ヒユ	ヒユ	ハリビユ				○			
154	ヒルムシロ	カワツルモ	カワツルモ	○	○			○		
155	ブドウ	ブドウ	エビツル		○					
156	ブドウ	ツタ	ツタ		○					
157	ブドウ	ノブドウ	ノブドウ		○		○			
158	マメ	ササゲ	ササゲ				○			
159	マメ	ササゲ	ササゲ類					○		
160	マメ	ダイズ	ツルマメ	○						
161	マメ	ネムノキ	ネムノキ	○						
162	マメ	ミヤコグサ	ミヤコグサ		○					
163	ムラサキ	ハナイバナ	ハナイバナ					○		
164	リンドウ	センブリ	イヌセンブリ		○					

これまでも鹿田遺跡既調査地点で植物種子の抽出・同定を実施してきた²⁾。主に井戸の埋土を対象としており、弥生時代中期・中世前半期の井戸から種子が得られている。近世の遺構の資料はきわめて少なく、今回2基の井戸と1基の土坑から比較的多くの植物種子の出土が明らかとなったことは、近世の周辺植生や植物利用に関する新たな情報を得る機会が増えたという点で興味深い。今後隣接地点で近世の資料が増加する予定であり、稿を改めて検討することとしたい。

註

1. 沖陽子・山本悦世 1994「貯蔵穴の種子」『津島岡大遺跡4』岡山大学埋蔵文化財発掘調査報告第7冊
2. 沖陽子 1997「鹿田遺跡第6次調査出土種子の分析」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター年報14』1996年度
 沖陽子・岩崎志保 2019「鹿田遺跡第26次調査の種子と種子圧痕」『鹿田遺跡13』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第35冊
 岩崎志保・沖陽子 2020「鹿田遺跡第17次調査出土種子と土器圧痕の種子同定」『鹿田遺跡14』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第36冊

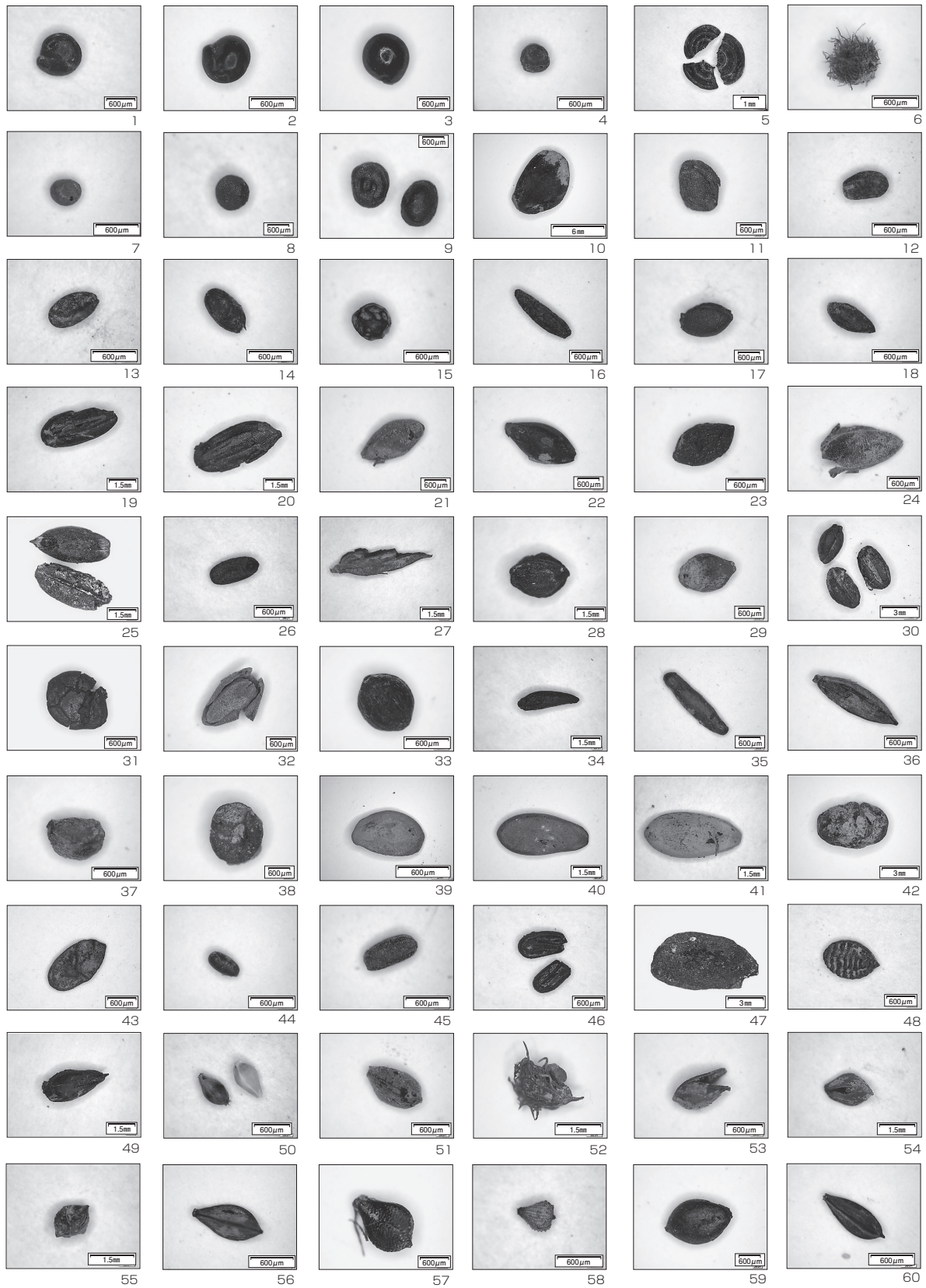


图1 出土種子写真1~60

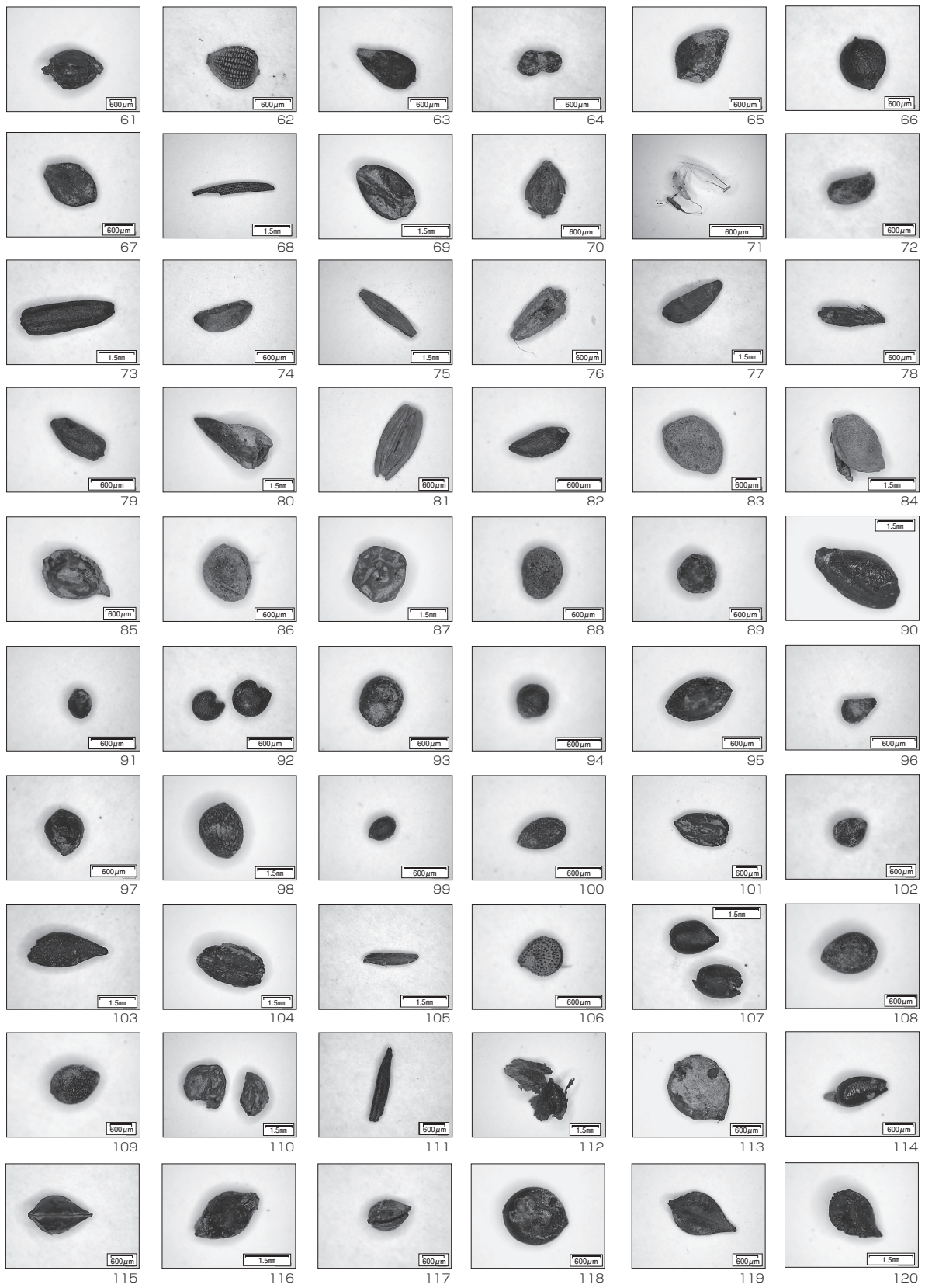


図2 出土種子写真61～120

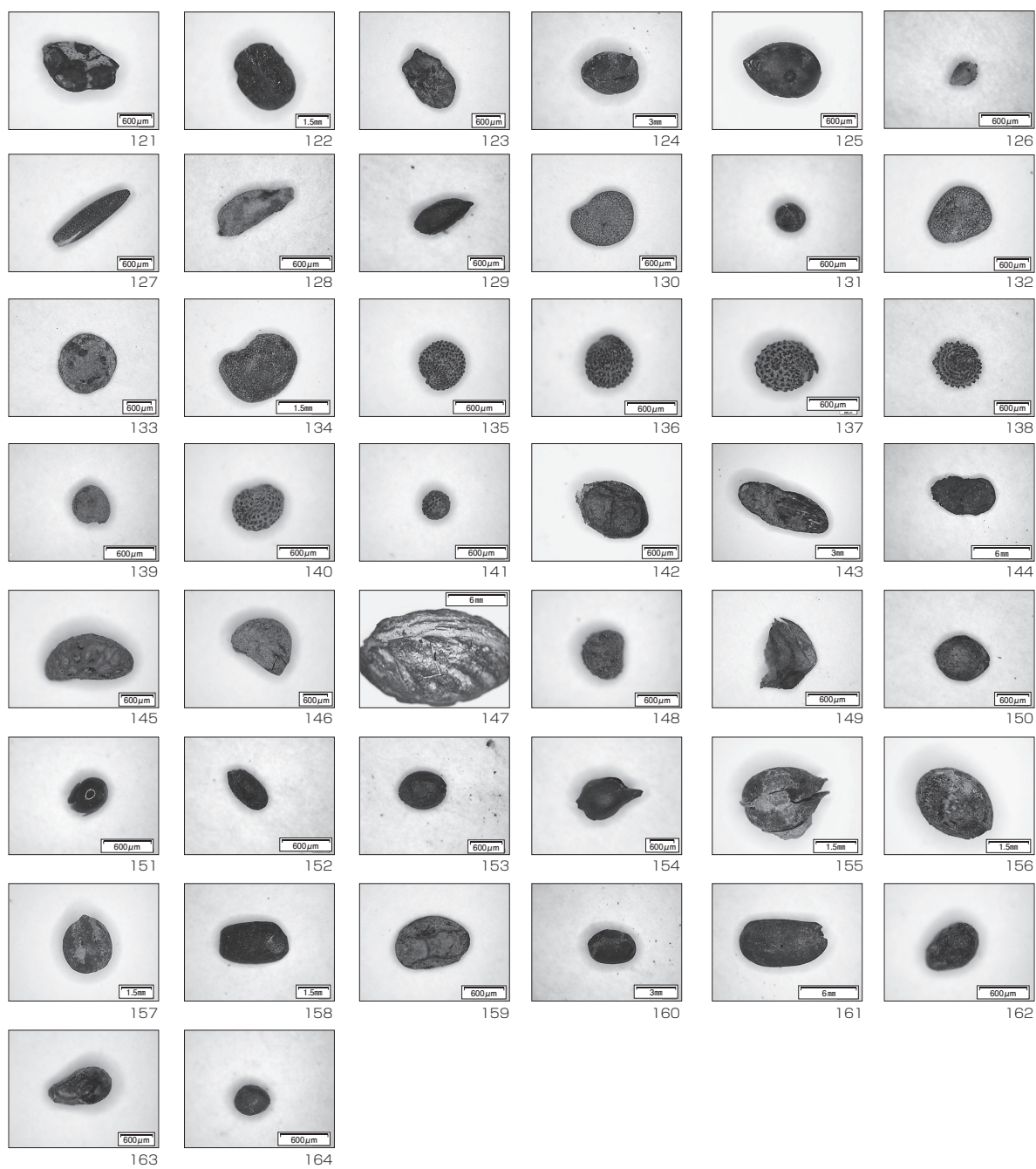


图3 出土種子写真121~164

3. 鹿田遺跡第20次調査出土漆製品分析

(株)吉田生物研究所

鹿田遺跡第20次調査B地点井戸16出土の漆塗り碗(W50)について、樹種同定並びに塗膜構造分析を実施した。

a. 樹種同定

1. 試料

試料は岡山県鹿田遺跡第20次調査B地点から出土した容器である。

2. 観察方法

剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

3. 結果

樹種同定結果と顕微鏡写真（図1）を示し、以下に主な解剖学的特徴を記す。

ブナ科クリ属クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.）

環孔材である。木口では円形ないし楕円形で大体単独の大道管（ $\sim 500\mu\text{m}$ ）が年輪にそって幅のかなり広い孔圏部を形成している。孔圏外は急に大きさを減じ薄壁で角張った小道管が単独あるいは2～3個集まって火炎状に配列している。柾目では道管は単穿孔と多数の有縁壁孔を有する。放射組織は大体において平伏細胞からなり同性である。板目では多数の単列放射組織が見られ、軸方向要素として道管、それを取り囲む短冊型柔細胞の連なり（ストランド）、軸方向要素の大部分を占める木繊維が見られる。クリは北海道（西南部）、本州、四国、九州に分布する。

◆参考文献◆

- 島地 謙・伊東隆夫 「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版（1988）
 島地 謙・伊東隆夫 「図説木材組織」地球社（1982）
 伊東隆夫 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅴ」京都大学木質科学研究所（1999）
 北村四郎・村田 源 「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」保育社（1979）
 深澤和三 「樹体の解剖」海青社（1997）
 奈良国立文化財研究所 「奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇」（1985）
 奈良国立文化財研究所 「奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇」（1993）

◆使用顕微鏡◆

Nikon DS-Fi1

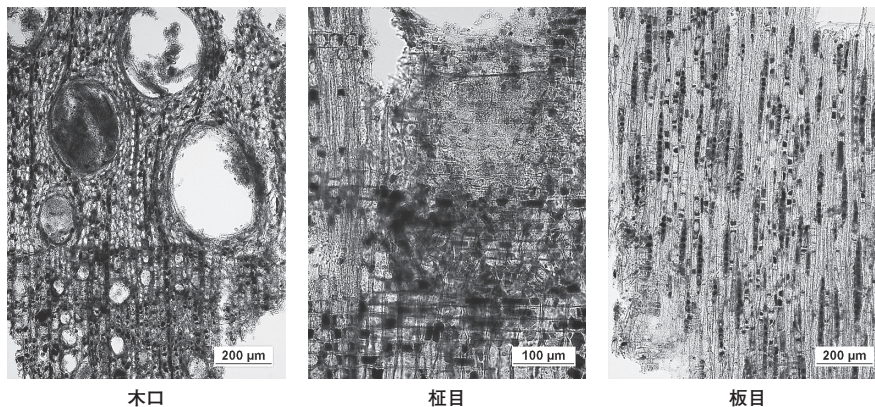


図1 断面写真

b. 塗膜構造調査

1. はじめに

岡山大学構内に所在する鹿田遺跡群から出土した漆器について、その製作技法を明らかにする目的で塗膜構造調査を行ったので、以下にその結果を報告する。

2. 調査資料

調査した資料は、表1に示す近世の漆器1点である。

表1 調査資料

No.	品名	樹種	図No.	概要
1	漆塗り椀（高台部）	クリ	2、3	内面赤色で外面は黒色の椀の高台部分。

3. 調査方法

資料本体の内外面から数mm四方の破片を採取してエポキシ樹脂に包埋し、塗膜断面の薄片プレパラートを作製した。これを落射光ならびに透過光の下で検鏡した。また、蒔絵が施された資料については、プレパラート上で日本電子製EPMA（JXA-8200）を使用して元素分析を行った。

4. 調査結果

塗膜断面の観察結果を表2に示す。

表2 断面観察結果表

No.	器種	部位	図No.	塗膜構造（下層から）			
				下地		漆層構造	顔料
				膠着剤	混和材		
1	椀	内面	4	柿渋	木炭粉	透明漆1層／赤色漆1層	朱？
		外面	5	柿渋	木炭粉	透明漆1層	—

塗膜構造：木胎の上に、下層から下地、漆層と重なる様子が観察された。

下地：濃褐色を呈する柿渋に木炭粉を混和した炭粉渋下地がみられた。

漆層：外面には下地の上に1層のみ漆層が施されている。外面の透明漆層の上層部は褐色を呈しているが、これらは本来黄褐色を呈する透明漆層が劣化により変色したものである。

また内面には2層の漆層が認められた。これらは全て、黄褐色を呈する透明漆層の上に赤色漆層が重ねられていた。このことから、内面は、一見した資料の色は赤色であるが、実際には透明漆を塗布した後、赤色漆を塗布している、とわかる。

顔料：内面には赤色漆の中に、明瞭な粒子形状が判別される透明度の高い朱を混和したものが認められた。

5. 摘要

岡山大学構内に所在する鹿田遺跡から出土した、漆器椀について塗膜構造調査を行った。本資料は炭粉渋下地が施されたものであった。複数層の漆層の塗り重ねが認められ、赤色漆層には朱が混和されていた。

また、塗膜分析結果と木胎の樹種とをあわせてみると、塗り重ねで朱が混和された炭粉渋下地の1点の木胎地はクリであった。

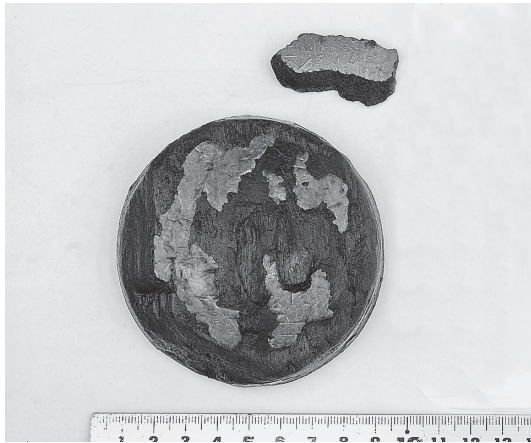


図2 W50内面写真

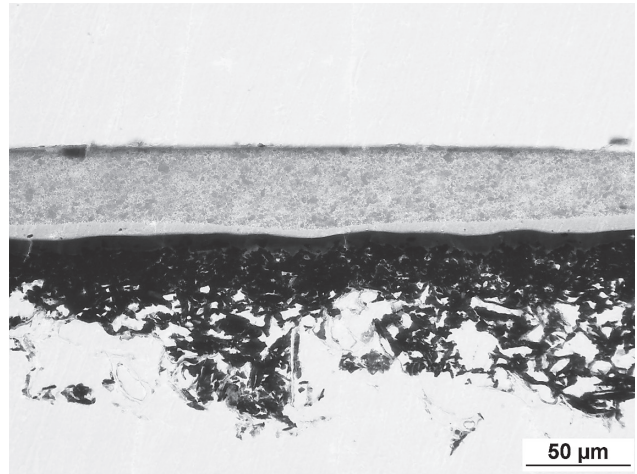


図4 W50内面の塗膜断面



図3 W50外面写真

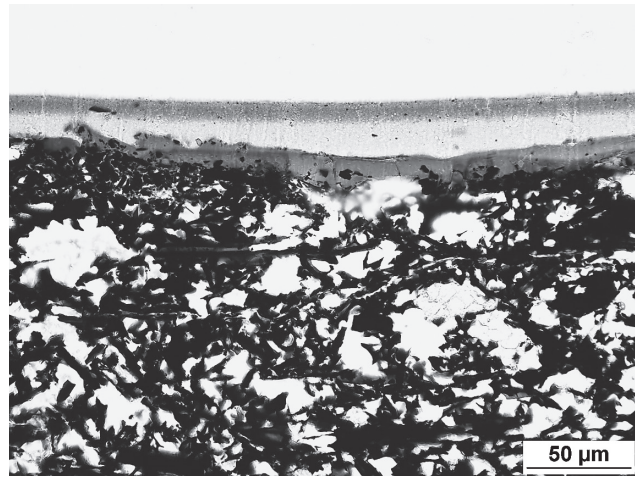


図5 W50外面の塗膜断面

4. 鹿田遺跡第20次調査出土動物遺存体の分析

富岡直人（岡山理科大学）

出土した動物遺存体は、脊索動物門以下の目が同定できなかったものを含め36点に及んだ、多くは中世、一部は近世初頭迄の帰属と推定された。そのうち種が特定できたものはニホンジカ13点（全て中世前半帰属）、ウシ2点（中世前半帰属）、ヒト1点（中世後半～近世初頭）であった。

概要は表1を参照頂きたい。特記すべきであるもののみを以下に記述する。

1. ニホンジカ *Cervus nippon*

ニホンジカは、今回の調査では最も多く出土したものであるが、特に頭蓋、角の出土が多くみられた。

中でも井戸5から出土したNo.1資料である鹿角は、遺構底部より出土したもので、角の枝を釣瓶に利用する等して廃絶直前に偶然に落ちた可能性と、井戸の廃絶祭祀の様な井戸に伴う祭祀の為に入れられた可能性が考えられる。本資料は穿孔や切断、擦痕を伴う角製品であった。中世に帰属するもので、第1小枝に穿孔があり、主幹と先端に使用に伴う搔傷、角冠基部が鋸様の道具によって切断されていることから、角製品と推定した。素材の鹿角は、3尖以上の小枝がある事とその第1枝～第2枝間の主幹（第2主幹）の長さが約9cmである事から、3歳程度小型のニホンジカと考えられた。また、角冠最大径は、4cmであった。この大きさは別に出土しているNo.20資料の角冠最大径42mmと近い数値であるもののやや小型である。

現代の岡山県では、島嶼に隔離され、小型化していると想定される備前市鹿久居島産の鹿角第2主幹長でも15cmであることから、本資料は6cmも小さく、角冠最大径は鹿久居島産より8mm小さい。なお、備前市の島嶼以外では第2主幹長18cm、角冠最大径5.8cmに達する場合がある。草戸千軒町遺跡出土ニホンジカ角（中世）では、かなり大型の角破片もみられる一方、第2主幹長は同じ9cm、角冠最大径は5.1cmと、角冠は異なるものの第2主幹長が類似した例がある事が把握された。

2. ウシ *Bos taurus*

No.10資料として小型のウシ上腕骨が出土した。この遠位端関節部に1mmを超す深さの切創で線状に延びた痕跡を有し形成された溝片面が破断している状況であることから、富岡の切創の分類ではC1bタイプとなるものであった。この部分の切創は、上腕骨を橈骨・尺骨から分離する目的でつけられたものであり、主に食用に伴う解体が推定される。

3. ヒト *Homo sapiens*

No.7資料としてラムダ縫合を有する後頭骨の可能性のある焼けた頭蓋骨破片が出土した。

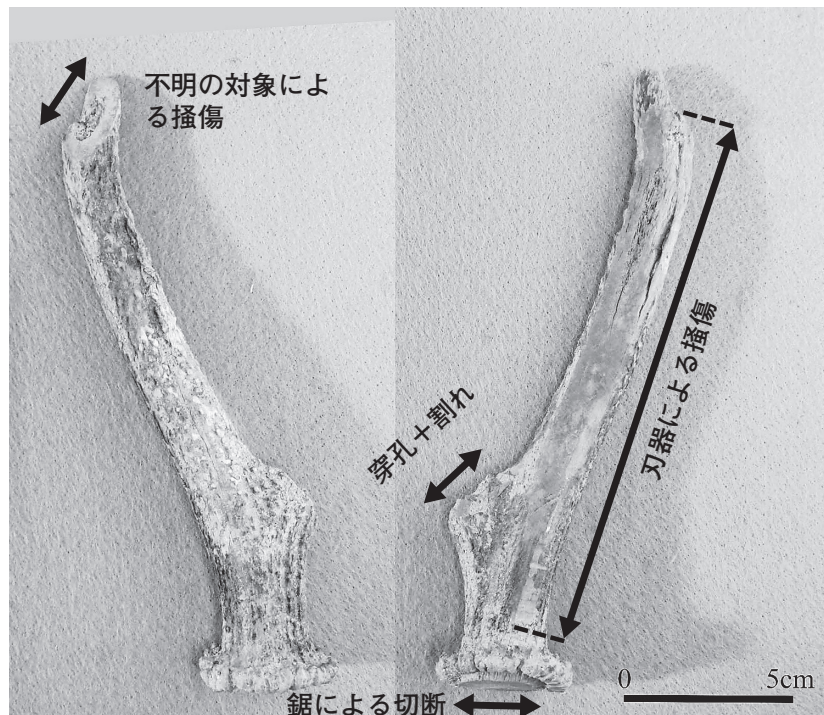


図1 No.1角製品（井戸5-B1）

5. 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボAMS年代測定グループ
伊藤 茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・Zaur Lomtadze・辻 康男

1. はじめに

岡山県岡山市の鹿田遺跡第20次調査井戸18より出土した試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表1のとおりである。測定試料を写真1、2に示す。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

表1 測定試料および処理料

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-44308	調査区：W区-44 遺構：井戸18 試料No.S20（本体） 遺物No.4	種類：生の種実（マツ属種子） 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2mol/L、水酸化ナトリウム：1.0mol/L、塩酸：1.2mol/L）



図1 送付試料

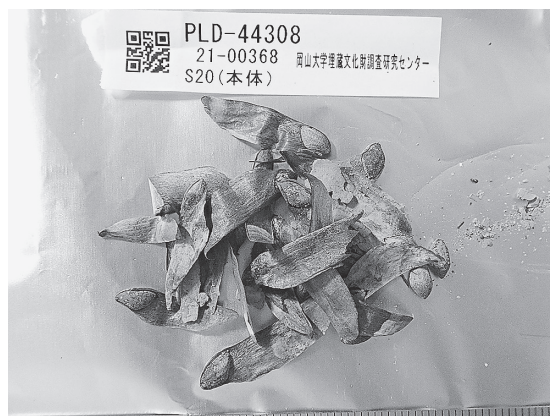


図2 測定試料

3. 結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代、図1に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

表2 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	¹⁴ C年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	¹⁴ C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-44308 試料No.S20（本体） 遺物No.4	-27.34 \pm 0.21	368 \pm 19	370 \pm 20	1471-1510 cal AD (40.79%) 1592-1619 cal AD (27.48%)	1456-1523 cal AD (56.75%) 1573-1630 cal AD (38.70%)

^{14}C 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が68.27%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い (^{14}C の半減期 5730 ± 40 年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正にはOxCal4.4 (較正曲線データ: IntCal20) を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する68.27%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.45%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

4. 考察

測定の結果 (以下の較正年代は 2σ の値)、SK20の試料No.S20 (PLD-44283: 遺物No.4) は、 ^{14}C 年代が $370 \pm 20\text{BP}$ 、較正年代が1456–1523 cal AD (56.75%) および1573–1630 cal AD (38.70%) で、15世紀中頃～17世紀前半の暦年代を示した。

参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51 (1), 337–360.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」: 3–20, 日本第四紀学会.
- Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0–55 cal kBP). *Radiocarbon*, 62(4), 725–757, doi:10.1017/RDC.2020.41. <https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41> (cited 12 August 2020)

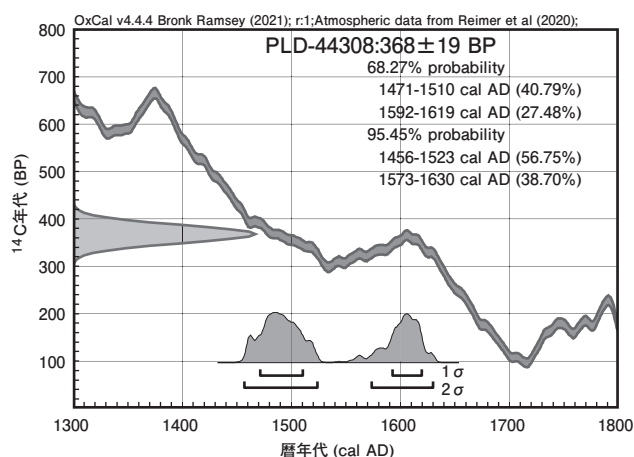


図3 暦年較正結果

第5章 結 語

本報告の調査地点は鹿田遺跡の中央部に位置する。周辺では2013年に第18次調査B地点、2014年に第14次調査地点、2017年に第9・11次調査地点、2018年に第20次A地点・第25次調査地点の発掘調査報告書を刊行している。これらの調査面積は9400㎡を超え、本報告の第20次調査B・D地点を加えると、鹿田遺跡の中央部の状況がひろく明らかとなってきたといえる。特に本地点と南に隣接する第9・11・14次調査地点を貫いて、屋敷地を区画するいくつかの主要な溝が走行しており、中世から近世にかけての集落構造を検討するうえで重要な知見を得ることができた。

中世以降の集落構造

本調査地点では25基の井戸を検出し、その埋没時期には11世紀前半～19世紀前半までの幅が認められた。これらの井戸の時期と配置および溝との対応関係を整理しよう。

中世前半の13基の井戸は、①11世紀前半～12世紀初頭（井戸2・3）、②11世紀後葉～12世紀前半（井戸4・5・6・7）、③12世紀中葉～後葉（井戸8・9）、④13世紀前葉～中葉（井戸10・11）、⑤13世紀中頃～後半（井戸12～14）である。一時期には2基ずつが認められ、屋敷としては2つの単位が見出せる。溝との対応をみると、①②の時期に対応する溝は溝10～13であり、12世紀前半に埋まるものである。掘削時期を確定しえないが、①の時期になかったことも断定はできない。③の時期には12世紀後半～末に埋まる溝14・14aが、④には13世紀前半に埋まる溝15・16が、⑤には13世紀末～14世紀初頭に埋まる溝18～20が、それぞれ対応すると考えられる。

中世後半～近世の11基の井戸のうち時期が押さえられるものは⑥15世紀後半～16世紀前半（井戸15～18）、⑦16世紀末～17世紀前半（井戸22）、⑧18世紀前半～後半（井戸23・24）、⑨19世紀前半（井戸25）である。屋敷としては同時期には1～2つが想定される。これら⑥～⑨期を通じて、区画溝である溝21～24が機能している。また前述の中世前半期では、調査地点内の北区・西区・東区全域で井戸があることから屋敷の存在が予想されるのに対し、15世紀後半以降は北区に集中している。中世後半～近世にかけて屋敷は北区一帯にまとまる傾向が認められ、西区・東区は耕作地に変わっている。

このようにみても、本調査地点の溝の埋没時期を手掛かりにA：12世紀前半、B：12世紀末～13世紀初頭、C：13世紀前半、D：13世紀末～14世紀初頭、E：19世紀前半の各時期に溝の掘削や土地造成といった改変が行われたことが想定される。A・C期の溝については後述するが、B・D・E期に埋まる溝は、鹿田条里に沿うもので区画溝である。B期とD期では溝の規模（幅・深さ）が拡大しており、溝14の幅2.3m、深さ0.7mに対し、溝18は幅3.7m、深さ0.9mと大型化する。さらにD期とE期の溝においても規模感はさらに拡大傾向にあることが指摘されている（山本・岩崎2017）。こうした区画溝で仕切られた屋敷地の規模と構造についても再検討する知見が得られたが、稿を改めて考えることとしたい。

12世紀前半の溝10・11および13世紀前半の溝15については正方位の方向が注目される。溝10・11の北の延長線上には敷地北端に位置する第21次調査A・B地点-溝1、南の延長線上には第11次調査-溝24があり、12世紀前半に埋まる点でも一致するものである。このラインの西5mに並行して本調査-溝15・第25次調査-溝18、さらに西5mの位置に並行して第25次調査-溝19が認められる。これらは13世紀代に比定されるが、並行関係を積極的にとらえると、12世紀代、13世紀代に正方位の南北方向の道の存在が浮かび上がる。本遺跡では奈良時代後半以降、建物軸方向や区画溝の方向は鹿田条里に沿っていることが確認される。屋敷地の状況は断絶と再編が認められ、10世紀代～11世紀初めには空白期が指摘される。正方位の溝は、この空白期の後に作られ、12世紀前半に埋没する段階（A期）およびB期からD期への画期となる13世紀前半に埋没する段階（C期）にあたるもので、それぞれ集落の画期にあたる段階に正方位の基準ラインの意識が認められるものと考えられる。その意義について

てはまだ検討の余地が多分にあり明らかにできていない。

溝21～24のいずれも、D期の溝の廃絶と入れ替わるように14世紀中頃に掘削され、19世紀前半まで機能したものである。これらの溝により区画された屋敷地が確認された。その規模は一辺40mの方形となる。中世後半以降、鹿田遺跡の既調査地点では、第9次調査の北西部を除いて、耕作地への変化が見られる状況であった。本地点北区では、15世紀後半以降19世紀前半まで井戸が継続的に確認され、1～2つの屋敷の存在が想定される。近世末まで屋敷地としての利用されたことが明らかとなったのは、本調査地点が初めてである。井戸周辺で多数検出された土坑についても、耕作地で多く認められる野壺とは形状が異なり、その機能としては貯蔵穴やトイレ等を検討すべきであろう。また本調査地点では<4層>・<3層>段階に造成が繰り返し行われたことが窺える堆積状況が見られる。同時期には耕作域が広がると判断された南側の第9・11次調査地点よりも遺構検出面が高いことが指摘できる。

特徴的な遺物

北区では16世紀末の土坑6が検出され、出土した文字瓦が目立つ。「寺」の一文字が陽刻されるもので、形状から獅子口等の鬼瓦類の可能性はある。1点の確認であるが、この瓦の存在は重要である。これまでの調査では銅鏡（第6次調査出土）や、碁石（第7次・17次調査ほか）等から宗教施設の存在を想定していた。本調査地点の文字瓦と、周辺の中世後半の遺構から瓦の出土が目立つ点は「寺」の存在を強力に示すものと考えられる。やや想像をたくましくするならば、中世後半以降、寺を中心に居住地点が集中していくようすを、本調査地点の遺構状況は示しているのかもしれない。土坑6周辺では井戸15・16等、大量の礫が廃棄される井戸のほか、多数の瓦が出土しており、瓦葺建物や石組の構造物が想定される。

集落内での手工業生産を示す資料として、井戸・溝から出土した轆の羽口、鉄滓が目立つ。第9・11次調査地点でも指摘されていたが、本地点周辺で、土器生産、鉄器・石器ほかの加工などの作業が行われた証となる可能性がある。そのほか焼けた粘土甕が多見される。井戸12の埋土中から出土した粘土甕には平坦面が観察されるほか、スサのようなものが混入しており、住居の土壁片が想起される。同井戸および溝22の埋土中に焼けた瓦が多く認められ、火災があった可能性も考えられる。

京焼の猿形水滴については報告中で述べたが、屋敷地内の出土品としてはほかにも漢詩の文様を有する肥前磁器（井戸23）、肥前磁器水滴（土坑20）等、一定の教養ある人物を想起させる品が目立つ。その他の食器等についても一般庶民ではなく裕福な層が想定される内容である。鹿田遺跡内では第22次調査地点付近に大正時代の大庄屋が居住していたことがわかっているが、本地点で19世紀前半まで存在した屋敷の主としては大庄屋というような層が考えられよう。

以上のように、本調査地点では特に南半に大規模な攪乱がありながらも重要な成果を得ることができた。本地点で初確認された近世集落については今後第18次調査地点の成果を整理したうえで再検討したい。残された第は多々あり、遺構・遺物に関する分析・検討はこれからも継続する。岡山大学構内の鹿田遺跡のみならず周辺遺跡の調査状況および文献史料の分析も加味して、鹿田遺跡の実態解明をすすめていきたい。

主要参考文献

- 岡山県古代吉備文化財センター2007『鹿田遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告207
- 山本悦世2007「中世の集落構造と推移」『鹿田遺跡5』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第23冊
- 山本悦世・岩崎志保2017「鹿田遺跡南東部における中世集落の土地区画とその構造」『鹿田遺跡10』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第32冊

遺構一覧表

番号	長さ	幅	厚さ	重量	石材	石材記号	場所記号	遺構名	備考
628	13.5	4.4	0.9	38.7	粘板岩		f	溝21	S21
629	2.2	2	1.1	7.3	石英脈			溝21	S17
630	7.3	4.9	4	149.6	流紋岩	A		溝21	S20
632	13.2	8.6	5.3	914.5	石英斑岩	A		溝15	
637	10	9	3.6	467.5	泥岩ホルンフェルス	E		溝23	
643	24.5	11.5	80.5	2961.7	砂岩ホルンフェルス	E	e	p 371	d? S2
644	6	4.1	3.5	89.6	流紋岩	A		10層下げ	
645	8	7.2	2.6	132.7	砂岩	E		10層下げ	
648	11.2	8	6.4	812.7	花崗岩	B		10層	
649	5.6	5	3.8	163.9	砂岩ホルンフェルス	E		落ち	
650	9.6	8	3.4	258.2	細粒花崗岩	B		落ち	
651	8.6	7	3.5	168.6	流紋岩	A		落ち	
652	13.5	6.6	5.5	558.3	細粒花崗岩	B		落ち	
653	9.3	8.8	4.2	592.3	泥岩ホルンフェルス	E		落ち	
654	15	8	4.4	494.9	流紋岩質凝灰岩	D		落ち	
655	7.2	4.4	2	64.5	泥岩ホルンフェルス	E		8層落ち	
656	6	5.1	2.2	93	泥岩ホルンフェルス	E		8層落ち	
657	9.3	4.5	4.3	255.7	花崗岩	B		8層落ち	
658	12.7	7.2	4	612.5	泥岩ホルンフェルス	E		落ち	
659	9.5	6.6	3.8	270.5	泥岩ホルンフェルス	E		落ち	
660	7	5	2.9	95.8	石英斑岩	A		落ち	
661	6.5	6.1	3.2	138.8	泥岩ホルンフェルス	E		落ち	

番号	長さ	幅	厚さ	重量	石材	石材記号	場所記号	遺構名	備考
662	8.6	3.8	2.3	70.2	泥岩ホルンフェルス	E		落ち	
663	8.5	6.7	5.3	275.1	石英脈			落ち	
664	16.1	14	5	1679.7	砂岩	E		落ち	
665	14.7	9.4	1.2	244.9	緑色岩の粘板岩 遺物		e	溝18	S26
666	7.3	4.8	3.8	121.1				造成土中	S27
667	8	6	3.8	250.2	細粒花崗岩	B		7層	
668	11.7	7.1	7.7	618	砂岩	E		井戸8	
669	11.1	5.7	4.5	304.6	流紋岩	A		井戸10	
670	12.4	6.2	3.8	263.1	泥岩ホルンフェルス	E		井戸4	
672	13.2	17.5	7.3	1889.1	安山岩	C		P148	S3
673	15.6	10.2	7.4	1265.9	流紋岩			P205	地域外
674	12.5	8.2	4	469.7	細粒砂岩ホルンフェルス	E		P173	
675	11.8	6.6	6.2	408.5	泥岩ホルンフェルス	E		P242	
676	10	7.8	3.8	398.8	泥岩ホルンフェルス	E		P212	
677	13.3	6.6	5	443.5	流紋岩	D		P266	
678	10.3	9.1	4.8	447.8	安山岩	C		P163	
679	7.6	6.1	3	125.3	流紋岩質凝灰岩	D		P158	
680	9.7	7.3	4.9	534.1	石灰岩と緑色岩 礎石			P155	
実測番号150	9.7	9	7	829.6	花崗岩	B			S9
実測番号408	5.5	5.5		22.6					S25

< 礫同定一覧表註 >

表中の記号凡例は下記の通りである。

< 石材記号 >

A	流紋岩岩脈、石英斑岩岩脈
B	花崗岩
C	安山岩岩脈
D	流紋岩、流紋岩質凝灰岩、凝灰角礫岩
E	砂岩・泥岩
F	圧砕花崗岩、輝緑岩、斑れい岩、断層岩

・可能性を示す場合は（ ）を付している。

< 場所記号 >

a	関門層群 脇野亜層群相当層
b	金川層
c	大野層
d	舞鶴層群
e	万富層
f	江尻層
g	津高層

・ a～gは岡山県南部の場所を示すもので、県北や県外のものは地域外として備考欄に記した。

礫の同定は鈴木茂之氏（岡山大学学術研究院自然科学学域）による。

参考 岡山県内地质図作成プロジェクトチーム 2009 『岡山県内地质図』

報告書抄録

ふりがな	しかたいせき							
書名	鹿田遺跡16－第20次調査B・D地点－							
副書名	岡山大学病院中央診療棟新営に伴う発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岡山大学構内遺跡発掘調査報告							
シリーズ番号	第38冊							
編著者名	岩崎志保（編著）・能城修一・沖陽子・富岡直人							
編集機関	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター							
所在地	〒700－8530 岡山県岡山市北区津島中3丁目1番1号 TEL 086-251-7290							
発行年月日	2022年3月28日							
ふりがな	ふりがな	コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村		(世界測地系)	(世界測地系)			
しかたいせき 鹿田遺跡	おかもけんおかもまし 岡山県岡山市 きたくしかたちょう 北区鹿田町2 ちようめほんごう 丁目5番1号	33201	県2208	34°39'1"	133°55'15"	20090907～ 20100308、 20110218～ 20110302	2497㎡	岡大病院中 央診療棟新 営
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺溝		主な遺物		特記事項	
鹿田遺跡第20 次調査B・D 地点	田畑	弥生時代～ 古墳時代	井戸1基、土坑1基、 溝9条、ピット		弥生土器、土師器、石器			
	集落	古代末～ 中世前半	建物1棟、井戸13基、 土坑4基、溝11条、 ピット		中世土器・陶磁器・ 備前焼・瓦・木製品・ 鉄器・石器・鹿角製品			
	集落	中世後半～近世	井戸11基、土坑15基、 溝5条、ピット				猿形水滴 (京焼)	

2022年3月28日発行

岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第38冊

鹿田遺跡16

編集・発行 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
岡山市北区津島中3丁目1番1号
(086) 251-7290

印刷 西尾総合印刷株式会社
岡山市北区津高651
(086) 254-1111(代)